

日本近代における『三国志演義』の改作と研究  
について

二〇一七年十二月

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

陳卓然

## 目次

序章	1
第一節 研究動機	1
第二節 本論の研究範囲	3
第三節 研究内容	4
一、『三国志演義』に関する改作	4
二、『三国志演義』に関する研究	7
第四節 研究目的	9
第一章 吉川英治の『三国志』	10
第一節 吉川英治の略年譜	10
第二節 『三国志』を執筆する動機	12
第三節 吉川英治『三国志』の特別な人物配置	13
第四節 吉川英治の曹操像	15
一、曹操の容姿：白面郎	15
二、曹操の初登場：赤い姿をしていた英雄	16
三、曹操の出自：相国の後裔	18
四、曹操の性格	19
(一)「悪」知恵に長ける	19
(二) 率直な曹操	20
(三) 温雅典麗な曹操	21
五、恋をする曹操：士を愛する	22
六、二つの顔：詩人であり軍事家でもある	28
七、曹操の精神：挫けない強靱な精神	32
八、曹操の死：蒼天に感動を与える	33
九、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における曹操像の相違	36
第五節 吉川英治の関羽像	39
一、関羽初登場：張飛との対比	39
二、関羽の容姿：智恵を有する容貌	40
三、関羽の出身：寺子屋の先生	41

四、関羽の人間像	42
(一) 儒将関羽：経・史に通暁する	42
(二) 武士関羽：「忠」・「仁」の士	50
五、関羽の最期：洗練された一般人	55
六、関羽の死因：天命に帰す	61
七、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における関羽像の相違	63
第六節 吉川英治の諸葛亮像	67
一、諸葛亮の位置づけ：物語のターミネーター	67
二、諸葛亮の家系：流浪する少年時代	70
三、諸葛亮の容姿：婦人好女の如く	72
四、諸葛亮の人間像	74
(一) 繊細な心を持つ科学家	74
(二) 重厚な名宰相	76
(三) 人道主義精神を備えた軍師	77
五、諸葛亮の死：忠誠いちずの名宰相	82
六、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における諸葛亮像の相違	85
まとめ	90
第二章 北方謙三の『三国志』	92
第一節 北方謙三の小説著作	92
第二節 『三国志』を改作する経緯	94
第三節 吉川英治『三国志』への違和感：『三国志』人物描写を改めるきっかけ	95
第四節 北方謙三の関羽像	97
一、関羽の初登場：三人の狭気ある男の出会い	97
二、関羽の人間像	107
(一) 仁者関羽	107
(二) 情の深い関羽	110
三、関羽の夢：劉備を王者にする	117
四、関羽の死：安らかな死	119
五、毛本、吉川本と北方本における関羽像の相違	121

第五節 北方謙三の曹操像	124
一、曹操の初登場：心が燃えた戦士	124
二、曹操の出自：卑しい血筋から這い上がる激動の人生	125
三、曹操の人間像	130
(一) 戦士曹操	130
(二) 名君曹操	137
(三) 孤高な覇者曹操	150
(四) 君主より男の友情を重視する曹操	155
四、曹操の夢：天下の覇者になる	161
五、曹操の死：名君らしい見事な最期	162
六、毛本、吉川本と北方本における曹操像の相違	166
第六節 北方謙三の諸葛亮像	169
一、諸葛亮の初登場：知識の豊富な「無精者」	169
二、諸葛亮の人間像	171
(一) 煩惱な男	171
(二) 不幸不運の戦略家	177
(三) 人材を見抜けない孔明	179
(四) 知略と武力とを兼備する智将	181
三、諸葛亮の夢：「天下三分の計」を実現する	183
四、諸葛亮の最期：夢を追い求める三国時代最後のカリスマ	184
五、毛本、吉川本と北方本における諸葛亮像の相違	186
まとめ	190
第三章 陳舜臣の『秘本三国志』	195
第一節「秘本」と名付けた理由：私的な三国志物語	195
第二節 宗教的な描写：五斗米教の人間救済の重視	196
第三節 推理小説の視線：合理的な解釈を加える	201
第四節 批判的な人物描写：少容と「三絶」を主として	207
一、少容：虚構の主人公	207
二、不徳な関羽	209

三、善良な曹操	212
四、縦横家である諸葛亮	215
まとめ	220
第四章 日本近代における『三国志演義』の研究—「三絶」を中心に	224
第一節 曹操の人物像について	224
一、渡辺義浩の曹操像	224
(一)『三国志演義』の曹操像について	224
(二)『三国志』の曹操像について	226
(三)渡辺義浩の曹操像の特質	236
二、金文京の曹操像	237
(一)曹操の「悪」	237
(二)呂伯奢事件の真偽	238
(三)金文京の曹操像の特質	241
三、井波律子の曹操像	242
(一)曹操奸雄伝説のルーツ	242
(二)魅力的な憎まれ役	249
(三)井波律子の曹操像の特質	252
第二節 関羽の人物像について	253
一、渡辺義浩の関羽像	254
(一)関羽像の変遷	254
(二)関羽信仰の形成	263
(三)渡辺義浩の関羽像の特質	273
二、金文京の関羽像	273
(一)神になる所以	273
(二)日本の関羽ブーム	277
(三)金文京の関羽像の特質	280
三、井波律子の関羽像	281
(一)関羽はいかに描かれたか	281
(二)神と化した関羽	286

(三) 民間伝承を取り込む	288
(四) 井波律子の関羽像の特質	289
第三節 諸葛亮の人物像について	290
一、井波律子の諸葛亮像	291
(一) 第二世代の中心人物	291
(二) 全知全能の魔術師	292
(三) 井波律子の諸葛亮像の特質	299
二、金文京の諸葛亮像	299
(一) 史家の評価	299
(二) 科学者としての孔明	300
(三) 異なる諸葛亮像	303
(四) 金文京の諸葛亮像の特質	303
三、渡辺義浩の諸葛亮像	304
(一) 権謀家としての諸葛亮	304
(二) 忠臣としての諸葛亮	310
(三) 魔術物語の真偽	311
(四) 名宰相の終焉	315
(五) 渡辺義浩の諸葛亮像の特質	318
第四節 日中近代における「三絶」評価の比較	319
一、日本近代における「三絶」の人物像	319
二、中国における「三絶」に関する研究	322
まとめ	327
終章：日本近代における『三国志演義』に関する改作と研究の特色	330
第一節 『三国志演義』の文芸理論の再構築	330
一、特色ある構図	330
(一) 物語構造の核の変化	331
1、吉川英治『三国志』：二大英雄—曹操と諸葛亮	331
2、北方謙三『三国志』：英雄曹操	332
3、陳舜臣『秘本三国志』：主人公とする少容	332

(二) 諸葛亮の死を物語の完結とする	333
1、吉川英治『三国志』：原動力の喪失	334
2、北方謙三『三国志』：夢の終わり	334
3、陳舜臣『秘本三国志』：平和な世界の実現	335
二、特別な創作視点	335
(一) 吉川英治『三国志』：長編叙事詩	335
(二) 北方謙三『三国志』：夢を追う凶	338
(三) 陳舜臣『秘本三国志』：宗教の慈悲を貫く物語	339
三、特殊な叙述方法	340
(一) 吉川英治『三国志』：風雅の重視	340
(二) 北方謙三『三国志』：心理描写の強調	341
(三) 陳舜臣『秘本三国志』：推理性の強調	342
第二節 「三絶」人物像の再構成	343
一、『三国志演義』の「三絶」の人物像	343
二、近代日本における「三絶」の人物像	345
(一) 曹操：英雄像の確立	345
(二) 関羽・諸葛亮：神格化から人格化へ	346
第三節 本論の究明したことと今後の課題	348
一、究明したこと	348
(一) 日中の国民性の相違	349
1、人格化された諸葛亮・関羽	350
2、曹操の名誉回復を企てる	350
(二) 独創性	351
1、作者の思いを取り入れた物語	351
2、諸葛亮が死んで終わるパターン	351
3、心理描写の重視	352
4、怪力乱神を語らず	352
二、研究成果	353
三、今後の課題	353

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 355

図表リスト

表一、『三国志演義』に関する翻訳・改作年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5  
表二、毛本と吉川本における曹操の人物像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36  
表三、毛本と吉川本における関羽の人物像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64  
表四、毛本と吉川本における諸葛亮の人物像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86  
表五、北方謙三の小説創作略表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93  
表六、毛本、吉川本と北方本における関羽像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121  
表七、毛本、吉川本と北方本における曹操像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166  
表八、毛本、吉川本と北方本における諸葛亮像の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187  
表九 関羽の神号・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266



## 序章

### 第一節 研究動機

「三国志」と言えば、次の二種類がある。一つは、西晋の史官である陳寿が、三世紀後半に著し、のちに正史と位置付けられた『三国志』である。もう一つは、元末から明初の小説家とされる羅貫中が、十四世紀後半にまとめた『三国志演義』という小説である。この二つの「三国志」のうち、中国においても一般的な知識の源になっているのは、『三国志演義』の方である。

国家図書館所蔵の清康熙 18 年（1679 年）醉耕堂大字刊本毛宗崗批評『四大奇書第一種』は、毛宗崗本『三国志演義』の最も古い版本である。巻頭に明朝後期から清朝初期の文芸評論家李漁の序文が掲載され、「冯梦龙亦有四大奇书之目・曰《三国》也・《水浒》也・《西游》与《金瓶梅》也。」と書いた。序文の中、「四大奇書」に挙げられているのは『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』の四作品である。四大奇書とは、中国で元代から明代にかけ、口語体で書かれた四つの長編小説の総称。「奇書」とは「世に稀なほど卓越した書物」という意味である。以上のように、『三国志演義』は四大奇書の一つと数えられ、中国白話小説の傑作と見なされた。さらに、この後漢末・三国時代（魏、蜀、呉）を舞台とする歴史は、本場の中国に限らず、一衣帯水の隣国日本においても、津々浦々に知れわたる。

日本人が『三国志』に触れた時代は早く、平安時代に遡ることができる。江戸時代に入ると、『三国志』ではなく『三国志演義』が、日本人にとっての新しい鑑となった。1689 年～1691 年に、日本初文語体の『三国志演義』の完訳として刊行され、湖南文山『通俗三国志』の普及がある。それ以来、数多くの訳本が刊行された。例えば、立間祥介訳『三国志演義』（毛宗岡本、平凡社、1972 年）、村上知行訳『全訳三国志』（毛宗岡本、社会思想社、1980～1981 年）、小川環樹、金田純一郎訳『全訳三国志』（毛宗岡本を主に弘治本を参照、岩波書店、1982～1983 年）などがある。こうして、『三国志演義』の正統観に基づき、正義でありながら滅んでいく蜀漢に判官びいきをしながら「三国志」を讀んでいく、という日本における「三国志」受容の基本型が成立したのである。

しかし、この文学作品は日本で広く受け入れられていると同時に、取捨選択が行われ、日本流にアレンジして、日本的文化に変容させてきた。遂に、昭和に入ると、日本人の「三国志」像に大きな影響を与えた傑作が誕生する。吉川英治『三国志』である。第二次世界大戦中に執筆された歴史小説でありながら、吉川英治『三国志』は、忠君思想一色ではな

い。序文に、「三国志は曹操に始まって孔明に終わる二大英雄の成敗争奪の跡を叙したもの」という自らの「三国志」への捉え方を吐露しているように、吉川英治は、曹操のスケールの大きな人間像と、諸葛亮の抜群の才智と忠誠心を描き出した。曹操と諸葛亮を中心に三国時代を見る、日本人の「三国志」像は、ここに決定づけられたと思われる。基本的なストーリーラインは中国の歴史小説『三国志演義』に従いつつも、特に人物描写は日本人向けに大胆にアレンジし、今日までの日本における三国志関連作品へ多大な影響を及ぼした。その確かな影響力の証として、吉川英治が改作した『三国志』は日本の「国民文学」と言われる位にまで普及してきた。尾崎秀樹は「吉川『三国志』は新たな日本版の『演義』でもある」といっている。<sup>1</sup>

中国において、『三国志演義』は、十四世紀の人、羅貫中の作とされているが、講談の世界に淵源を持っている。南宋代の都市で語られた講談までの間に培われた逸話群が、元代に刊本『三国志平話』としてまとめられ、さらに元の雑劇の要素を吸収しつつ、明代に作品として完成した。そのため、口語体を用いた白話小説となっている。一方、『三国志演義』は中国の長編白話小説の中では文語的な部分のかなり多い作品であるが、人物のセリフなどは白話、つまり口語体で書かれている。これも『三国志演義』が白話小説となる大きな要因の一つと思われる。白話は中国語で口語のことを指す。白話小説は中国において、伝統的な文語文で記述された文言小説に対して、より話し言葉に近い口語体で書かれた文学作品のことである。漢文では読めない読者層に広めようという意図がある。一般に、文言文は、知識人、文人のもので難しく、口語文は民衆のものだから優しいだろうという通念がある。広く読まれたのは事実だが、白話小説は庶民向けの小説と定着し、中国古典文学の主流として、取り扱うことができない。

日本では、江戸時代初期の翻訳『通俗三国志』以来、多くの読者をもち、現在でも漫画やコンピューターゲームを通じて広く親しまれている。外国の小説でこれほど日本人に愛される作品は、他にはおそらく例がないであろう。とりわけ、「国民文学作家」と言われる吉川英治は、中国四大奇書の一つである『三国演義』を、日本人の感性に合うようにアレンジし、書き直した作品は本場の中国より高い評価を得た。そこで、吉川英治『三国志』はなぜ「国民文学」と言えるか、そして『三国志演義』はなぜ日本でこのような発展を遂げたのか。また受容の過程で、どのような変化が起こったのか。さらにこれらの変化を通じて、どのような日本的な発想が反映されるのか、など一連の問題が、徐々に意識されて

---

<sup>1</sup> 雑喉潤、『三国志と日本人』、講談社、2002年12月20日、p.141。

きた。こうした問題意識を以て、日本近代における『三国志演義』の改作と研究について深く探究していきたい、と決心した。

## 第二節 本論の研究範囲

毛宗崗本『三国志演義』の最初の巻には、金聖嘆による序、凡例、読三国志法がつけられている。このうち、読三国志法には、『三国志演義』にどのような特徴があり、何が重要であるかに関する、毛宗崗の見解が示される。つまり、毛宗崗は編纂した『三国志演義』の読み方を自らが説明した。

この「読三国志法」は、三国時代において、人才の豊富さを挙げている。

古史甚多・而人独贪看《三国志》者・以古今人才之聚未有胜于三国者也。……吾以为三国有三奇・可称三绝：诸葛孔明一绝也・关云长一绝也・曹操亦一绝也。历稽载籍・贤相林立・而名高万古者莫如孔明。其处而弹琴抱膝・居然隐士风流・出而羽扇纶巾・不改雅人深致。在草庐之中・而识三分天下・则达乎天时；承顾命之重・而至六出祁山・则尽乎人事。七擒八阵・木牛流马・既已疑鬼疑神之不测・鞠躬尽瘁・志决身殒・仍是为臣为子之用心。比管・乐则过之・比伊・吕则兼之・是古今来贤相中第一奇人。历稽载籍・名将如云・而绝伦超群者莫如云长。青史对青灯・则极其儒雅；赤心如赤面・则极其英灵。秉烛达旦・传其大节・单刀赴会・世服其神威。独行千里・报主之志坚・义释华容・翻恩之谊重。作事如青天白日・待人如霁月光风。心则赵抃焚香告帝之心・而磊落过之；意则阮籍白眼傲物之意・而严正过之：是古今来名将中第一奇人。历稽载籍・奸雄接踵・而智足以揽人才而欺天下者・莫如曹操。听荀或勤王之说而自比周文・则有似乎忠；黜袁术僭号之非而愿为曹侯・则有似乎顺；不杀陈琳而爱其才・则有似乎宽；不追关公以全其志・则有似乎义。王敦不能用郭璞・而操之得士过之；桓温不能识王猛・而操之知人过之。李林甫虽能制禄山・不如操之击乌桓于塞外；韩侂胄虽能贬秦桧・不若操之讨董卓于生前。窃国家之柄而姑存其号・异于王莽之显然弑君；留改革之事以俟其儿・胜于刘裕之急欲篡晋：是古今来奸雄中第一奇人。有此三奇・乃前后史之所绝无者・故读遍诸史而愈不得不喜读《三国志》也。<sup>2</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』 读三国志法)

<sup>2</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.7~9。

「読三国志法」は、三国時代における三人の突出した人物を「三絶」と称する。この三人が毛宗崗本『三国志演義』の主役である。一人は、優れた宰相としての諸葛孔明、一人は傑出した武将であり、すでに神として信仰されていた関雲長である。ここまでは、常識の範囲と言えよう。毛宗崗本のすごさは、「三絶」の一人として、曹操を挙げる点にある。奸の極みを象徴する人物である。このように、毛宗崗本の特徴は、諸葛亮・関羽を宰相・將軍の「絶」として高く評価し、曹操を奸雄の「絶」として貶めていくことにある。一方、曹操だけを悪役とすることは、曹操と諸葛亮をともに英雄と捉える吉川英治『三国志』と大きく異なる。

小説の主役は物語の進行に大きな影響を与えられると考え、『三国志演義』の主要人物について、もっと詳しく、深く研究しようとする意欲は益々強くなってきた。諸葛亮・関羽・曹操という毛宗崗本の「三絶」を中心としたのは、毛宗崗本が、この三人に力を入れてその像を作り込んでいるためである。本論においては、「三国志」の理解を深めるため、毛宗崗本の理解に止まらず、三国時代そのものに最も影響力のあった曹操、古来より日本人が愛し続けてきた諸葛亮、中国で広く信仰を集める関羽の実像の解明を目指している。また、日中両国における「三国志」受容の最大の違いは、関羽と曹操の扱いにあることに対して、日本人が改作した『三国志』に関する著作を読み解き、「三絶」に関する人物像の相違を明らかにすることも肝心だ。それを以て日本人の「三国志」像或いは日本人の思考形態を明らかにすることも可能となる。

### 第三節 研究内容

日本近代以来、『三国志演義』の改作が、世界で最も盛んに行われているといっても過言ではない。また、『三国志演義』に関する研究も、数え切れないほど多数の存在であることは、事実であるから、筆者にとって、最も代表性を具有する『三国志演義』に関する改作と研究著述を選ぶのは、非常に肝要なことである。

#### 一、『三国志演義』に関する改作

『三国志演義』の日本語翻訳出版が、数え切れない程多数の存在であることは、いうまでもない。1689年～1692年京都天竜寺の僧侶義轍、月党兄弟が湖南文山の筆名で『通俗三国志』を文語体に翻訳・刊行して以来、多数の翻訳・改作が出版され、訳文・改作もそれ

ぞれ著者が腕を揮った渾身の作も出ている。

『三国志演義』に関する翻訳・改作年表

西暦（元号）	著作	作者	翻訳/改作
1689（元禄2）	『通俗三国志』	湖南文山	翻訳
1897（明治30）	『演義三国志』	久保天随	翻訳
1939（昭和14）	『三国志』	吉川英治	改作
1953（昭和28）	『完訳三国志』	小川環樹・金田純一郎	翻訳
1958（昭和33）	『三国志演義』	立間祥介	翻訳
1966（昭和41）	『英雄ここにあり』	柴田錬三郎	改作
1969（昭和44）	『随筆三国志』	花田清輝	改作
1974（昭和49）	『秘本三国志』	陳舜臣	改作
1996（平成8）	『三国志』	北方謙三	改作
2000（平成12）	『「新訳」三国志』	渡辺精一	翻訳
2001（平成13）	『三国志』	宮城谷昌光	改作
2002（平成14）	『三国志演義』	井波律子	翻訳
2004（平成16）	『完訳三国志』	村上知行	翻訳

表一（筆者作成）

明治以後には『通俗三国志』以外にも諸種の訳が現れ、明治期には久保天随『新訳演義三国志』が名高い。昭和から平成にかけ、出版された主な訳本に、小川環樹・金田純一郎『三国志』、立間祥介『三国志演義』、渡辺精一『新訳三国志』、井波律子『三国志演義』などがある。

昭和時代に入って、柴田錬三郎『英雄ここにあり』、花田清輝『随筆三国志』、陳舜臣『秘本三国志』、北方謙三『三国志』、宮城谷昌光『三国志』を代表とする改作が次々と登場する。とりわけ、吉川英治が翻訳した『三国志』は日本の「国民文学」と言われた。本論は、吉川英治の改作を中心にして、北方謙三、陳舜臣らの改作の異同およびそれぞれの特色を究明していきたい。（表一）

### (一) 吉川英治の『三国志』

吉川英治は 1892 年に神奈川県久良岐郡中村町に生れる。日本の有名な小説家であり、父直広、本名は英次である。様々な職についたのち作家活動に入り、1914 年 10 月『講談倶楽部・秋季増刊号』に処女作「江の島物語」を吉川雉子郎名で発表した。『鳴門秘帖』などで人気作家となる。1935 より連載が始まった『宮本武蔵』は広範囲な読者を獲得し、大衆小説の代表的な作品となった。1953 年第一回菊池寛賞を受賞、1955 年朝日賞受賞、「忘れ残りの記」が上半期の文芸春秋読者賞を受賞。1958 年「私本太平記」を『毎日新聞』に連載。「新・水滸伝」を『日本』に連載、未完のまま絶筆となった。吉川英治の一生は数多くの小説を生み出す。幅広い読者層を獲得し、「国民文学作家」といわれる。

吉川英治の『三国志』は、戦時中の 1939 年から 1943 年までほぼ四年間連載され、戦後に単行本として刊行され、絶大な人気を博した。基本的な流れは中国の歴史小説『三国志演義』に従いつつも、特に人物描写は日本人向けに大胆にアレンジした。とりわけ、英雄曹操のスケールの大きな人間像と、諸葛亮の抜群の才知と比類なき忠誠心を描いた。その影響力たるや絶大で、曹操と諸葛亮を二大主役と考える日本人の『三国志』像を決定づけた。さらに、今日までの日本における三国志関連作品へ多大な影響を及ぼした。

### (二) 北方謙三の『三国志』

北方謙三は、1947 年佐賀県唐津市に生まれる。中央大学法学部法律学科卒業。1981 年『弔鐘はるかなり』でデビューする。1983 年『眠りなき夜』で第 4 回吉川英治文学新人賞、1985 年『渇きの街』で第 38 回日本推理作家協会賞長編部門、1991 年『破軍の星』で第 4 回柴田練三郎賞をそれぞれ受賞。1996 年、全 13 巻 6500 枚書き下ろしという大長編、北方版『三国志』の刊行が開始され、以降歴史小説は、中国史へとその裾野を拡大した。1999 年には『水滸伝』が小説すばるで連載開始。前作を超える全 19 巻 9500 枚の超大作は、北上次郎によって「日本の大衆小説の最高峰」と評された。そして、『楊家将』『岳飛伝』など著作も人々によく知られ親しまれている。

北方謙三『三国志』は 1996 年から 1998 年にかけて刊行された。同作品は正史の『三国志』を原典としており、ストーリーの大綱は万世一系思想と易姓革命思想の対決を根幹としている。基本的な展開・人物描写は正史に準拠しながらも、適宜に独特のストーリー解釈を施すことで、歴史的リアリティよりも人物描写そのものに重きを置いた骨太な描写が特色である。北方謙三は十年以上にわたって、肉体派のハードボイルド小説を書きつづけ、

人間の肉体的な痛みと心の痛みの両面に目を向けることができる。とりわけ、その心理の描写が細かく、その分登場人物にどっぷり感情移入してしまう。

### (三) 陳舜臣の『秘本三国志』

陳舜臣は1924年、神戸に生まれ、在日華僑二世である。本籍は台湾台北だったが、1973年に中華人民共和国の国籍を取得し、その後、1989年の天安門事件への批判を機に、1990年に日本国籍を取得している。中国籍同時保有している。陳舜臣は大阪外国大学印度語部卒業する。同校西南亜細亜研究所助手を勤めるが終戦によって辞職し、家業の貿易に従事する。1961年、『枯草の根』により江戸川乱歩賞を受賞し作家生活に入る。1969年、『青玉獅子香炉』により直木賞、1970年、『玉嶺よふたび』『孔雀の道』により日本推理作家協会賞、1972年『諸葛孔明』により吉川英治文学賞など、それぞれ受賞する。日本芸術院会員。日本有名な推理小説、歴史小説作家、歴史著述家である。代表作に『阿片戦争』『太平天国』『秘本三国志』『小説十八史略』など多数ある。

『秘本三国志』は中国史に造詣が深い作家ならではの私小説である。『文藝春秋』で1974年から1977年まで連載された。文庫本は全6巻である。『三国志演義』のように劉備視点ではなく、主に五斗米道の教徒少容・陳潜から見た物語になっている。三国志を武将・英雄以外の、第三者的な視点から描いた異色作であると言えよう。戦闘の描写などに物足りなさは感じるものの、当時の庶民的な生活感までもが描かれている点でも貴重である。特に、推理小説作家の視点で、物語の筋の再構築を行いながら、登場人物の行動の裏に隠された動機及び心理的なかけひきを追求し、陳舜臣しか書けない三国志物語と言える。

## 二、『三国志演義』に関する研究

### (一) 渡辺義浩による先行研究

渡辺義浩は(1962年-)は、日本の中国史学者、早稲田大学教授である。東京都生まれ。1991年、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了。「後漢国家の支配と儒教」で文学博士。北海道教育大学講師、大東文化大学文学部助教授・教授、早稲田大学文学学術院教授。専門は中国古代史。三国志学会事務局長も務めている。彼の『『三国志 演義から正史、そして史実へ』(中公新書、2011)、『関羽 神になった「三国志」の英雄』(筑摩選書、2011)、『「三国志」の政治と思想 史実の英雄たち』(講談社選書メチエ、2012)、『諸葛亮孔明 その虚像と実像』(新人物往来社、1998)などの著作がよく知られている。

渡辺義浩に関する先行研究には、曹操の革新性の本質、諸葛亮と劉備の緊張関係、孫呉の盛衰の根底にある力学—史実の三国時代は、権力確立を希求する君主たちと、儒教的思想と文化、名声を力とする「名士」がせめぎ合う、緊迫した政治空間であったことを示した。曹操・魯肅(天下三分の計)の先進性に対する関羽(北方民族への対抗や山西商人の信仰により後に神格化)・諸葛亮の平凡さが挙げられる。さらにどうして関羽だけが三国志の英雄の中で突出して広く神として拝められているのかはもちろんのこと、財神になったいきさつもわかりやすく説明された。以上のように、渡辺義浩氏の論考はほとんど史料批判に基づき、三国志の意外な真実を伝える。

## (二) 井波律子による先行研究

井波律子(1944年-)は、日本の中国文学研究者、京都大学卒国際日本文化研究センター名誉教授である。彼女は『三国志』の研究や『三国志演義』の翻訳などで知られている。1972年の「曹操論」をはじめ、『三国志演義』一語り物から物語文学へ」など論文が多数見られる。2002年に『三国志演義』を完訳し、ちくま文庫で刊行された。

井波律子氏の『三国志演義』には、人物像を明らかにするため、史実による陳寿の『三国志』をはじめとする歴史記述、そして『平話』など民間の無名ストーリーテラーのテキストに基づき、文学的観点から、曹操、関羽、諸葛亮ら三人の活躍を分析し、今日われわれが見てきた『三国志演義』は正史『三国志』を起点に、千数百年の歳月をかけて、民衆と知識人が育てあげた物語世界の集大成であることを示した。

## (三) 金文京による先行研究

金文京(1952年-)も有名な中国文学研究者、京都大学人文科学研究所教授、そして所長も務めた。彼の『三国志演義の世界』、『三国志の世界 後漢三国時代』など著作が見られる。

金文京の『三国志演義の世界』【増補版】には、物語としての『三国志演義』は、いかに作られたのか。正史『三国志』に基づいた史実とフィクションを交えた叙述のスタイルを分析し、唐代以前から明清時代にいたる『演義』の成立事情、謎につつまれた作者羅貫中の人物像、関羽・劉備・張飛ら登場人物のキャラクターの変遷など、奥深い作品世界を案内する。後半では、『演義』の研究にも大きな影響を与えた民間伝承『花関索伝』、明清時代の書坊による出版戦争、『演義』に反映された正統論や五行思想など、物語の背後にある文化



や世界観も描き出す。本「増補版」では、初版から十七年を経た研究の進展を随所に反映させるとともに、日本と韓国における『演義』の受容を新たに加えた。

#### 第四節 研究目的

博士論文においては、以下の点を本論文における研究目的とする。

第一に、日本における「三国志」の受容に、最も大きな影響を与えた吉川英治の『三国志』を中心にして、同作は「国民文学」と言われる所以について検証したい。

第二に、吉川英治、北方謙三、陳舜臣の『三国志演義』に関する改作の異同およびそれぞれの特色を究明する。そして、作者は「三絶」の人物像を作り上げるとき、用いられた独特な叙述方法を検討し、物語の中に呈される様々な様相と作者自らの精神・思いとの関係についても詳細に考察する。

第三に、渡辺義浩、金文京、井波律子らの著述を精読し、各々の『三国志演義』の「三絶」に関する論考の特色、研究方法、特殊な観点などを忠実に見出すうえ、日本近代の『三国志演義』の主要人物に関する研究の在り方の実像を明らかにすることを試みる。そして、その結果と中国の人物評価の研究と比較しながら、日中両国における人物評価の異同及び相違の背景を検討したい。

第四に、『三国志演義』に関する改作と研究の特色を分析するとともに、近代日本における、曹操、関羽と諸葛亮の位置付けを再確認することも試みる。

最後に、「三国志」の物語は、小説、語り物、演劇、講談から、影絵芝居、漫才、劇画にいたるさまざまなジャンルによって、古くから独自の発展をとげ、人々に親しまれてきたのである。様々な「三国志」の物語の成立と変遷を、その頂点に立つ吉川英治『三国志』からはじまる改作を中心に分析してみようというのが、本論のねらいである。それはまた同時に、これらの改作を通じて、世界でもっとも古い文化から、生み出された新しい文化をもつ、日本の人々の思考形態をさぐることにもなるであろう。この事は、敢えて誤解を恐れずに言えば、もう一度中国の文学を学ぶと言うことは、中国に関する日本人の著作を通して、取りも直さず日本・日本人・日本社会を学ぶと言うことになるかと思う。よって本論では、特に『三国志演義』に関する改作の分析を中心にして、「三絶」の人物像を明らかにし、そこに映し出される日本的な発想及び人々の独特な思考形態を究明していきたい。

## 第一章 吉川英治の『三国志』<sup>3</sup>

『三国志演義』の日本語翻訳出版が、数え切れない程多数存在であることは、いうまでもない。1689年～1692年京都天竜寺の僧侶義轍、月党兄弟が湖南文山の筆名で『通俗三国志』を文語体に翻訳・刊行して以来、多数の翻訳が出版され、訳文もそれぞれ訳者が腕を揮った渾身の作も出ている。

『三国志演義』に関する翻訳というと、何よりもまず、日本の代表する大衆文学作家吉川英治のことを思い浮べるのは、自然である。なぜかというと、吉川『三国志』の影響力は非常に大きく、その後の作家が書く三国志小説も多かれ少なかれ吉川作品を意識したものとなった。とりわけ、吉川英治が翻訳した『三国志』は日本の「国民文学」と言われた。それで、「国民文学」とは何か。そして、なぜ数多くの訳本のなか吉川英治『三国志』のみが「国民文学」と言われているのか、など一連の問題が、徐々に意識されてきた。

本章において、吉川英治『三国志』と中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』とを比較することによって、吉川『三国志』の特色を明らかにし、最後にこの作品が後世へ与える影響を通じて、吉川『三国志』の地位及び意義を明らかにしようと思う。

### 第一節 吉川英治の略年譜

1892年（明治25年） - 神奈川県久良岐郡中村町（現、横浜市中区山元町）に生る。父直広、母いく、本名英次。

1898年（明治31年）六歳 - 横浜市千歳町の私立山内尋常高等小学校に入学。

1903年（明治36年）十一歳 - 秋、家庭の事情で退学、住吉町の川村印象店に住込む。以後、印刷所の少年工、土工、税務監督局の給仕、海軍御用雑貨商の店員等の職業を転々とし、横浜ドックの船具工となる。

1911年（明治44年）十九歳 - 秋、ドックで負傷して入院。退院後上京。

1914年（大正3年）二十二歳 - 井上剣花坊と交遊を深め、『大正川柳』の同人となる。赤沢やすを知る。十月『講談倶楽部・秋季増刊号』に処女作「江の島物語」を吉川雉子郎名で発表。

1921年（大正10年）二十九歳 - 山崎帝國堂に勤務。半年後、矢野錦浪の世話で毎夕新聞

---

<sup>3</sup> 吉川英治の『三国志』（大日本雄弁会講談社、全14巻、1940～1946）、初版が1940年～1946年。

社に入社。六月二十九日、母いく死去。

1923年（大正12年）三十一歳 - 震災後新聞社をやめ、講談社の各誌に執筆。赤沢やすと結婚。

1925年（大正14年）三十三歳 - 一月『キング』創刊号から吉川英治の筆名で「剣難女難」を連載（-十五年九月）。

1926年（大正15年）三十四歳 - 八月「鳴門秘帖」を『大阪毎日新聞』に連載（-二年十月）

1927年（昭和二年）三十五歳 - 十月から「江戸三国志」を『報知新聞』に連載。

1930年（昭和5年）三十八歳 - 旅を書斎とする生活はじまる。一月「月笛日笛」を『少女倶楽部』に連載（-六年十二月）。七月「梅風思の杖」を『オール読物』に発表。「さけぶ雷鳥」を『婦人倶楽部』に連載（-六年十二月）。九月「江戸城心中」を『新愛知』ほかに連載（-六年十二月）。十月「かんかん虫は唄ふ」を『週刊朝日』に連載（-六年二月）。

1935年（昭和10年）四十三歳 - 八月「宮本武蔵」を『朝日新聞』に連載。

1937年（昭和12年）四十五歳 - やすと離婚、池戸文子と結婚する。六月『週刊太陽』創刊。毎日新聞の依頼で華北戦線へ立つ。

1938年（昭和13年）四十六歳 - 漢口方面に従軍。十月、長男英明誕生。

1939年（昭和14年）四十七歳 - 「三国志」に執筆し、中外商業新報など、土曜会系の新聞に連載始める。

1944年（昭和19年）五十二歳 - 西多摩郡吉野村上柚木へ疎開。

1945年（昭和20年）五十三歳 - 三月、養女園子空襲で死ぬ。敗戦でしばらく筆を断つ。

1947年（昭和22年）五十五歳 - 執筆再開。

1950年（昭和25年）五十八歳 - 「新・平家物語」を『週刊朝日』に連載（-三十二年三月）。

1953年（昭和28年）六十一歳 - 第一回菊池寛賞を受賞。

1955年（昭和30年）六十三歳 - 一月、朝日賞受賞。「忘れ残りの記」が上半期の文芸春秋読者賞を受賞。

1958年（昭和33年）六十六歳 - 一月「私本太平記」を『毎日新聞』に連載（-三十六年十月）。「新・水滸伝」を『日本』に連載（-三十六年

十二月)、未完のまま絶筆となった。

1960年(昭和35年)六十八歳 - 文化勲章受章。

1962年(昭和37年)七十歳 - 癌が悪化、死去。<sup>4</sup>

吉川英治は日本の有名な小説家であり、本名は英次である。神奈川県生まれ。様々な職についたのち作家活動に入り、『鳴門秘帖』などで人気作家となる。1935より連載が始まった『宮本武蔵』は広範囲な読者を獲得し、大衆小説の代表的な作品となった。後には『三国志』を執筆、新聞連載小説として、戦時中の1939年から1943年までほぼ四年間連載され、戦中から戦後にかけて単行本として刊行され、絶大な人気を博した。基本的な流れは中国の歴史小説『三国志演義』に従いつつも、特に人物描写は日本人向けに大胆にアレンジし、今日までの日本における三国志関連作品へ多大な影響を及ぼした。

吉川英治の一生は数多くの小説を生み出す。幅広い読者層を獲得し、「国民文学作家」といわれる。

## 第二節 『三国志』を執筆する動機

吉川英治は少年のころ、久保天随訳の『三国志演義』を愛読し、夜のふけるのも忘れて読みふけたので、父に「早く寝ろ」と叱られることがたびたびあったと、<sup>5</sup>自ら書いている。だから三国志への愛着は、相当なものがあつた。

このような三国志好きだった吉川英治が、いよいよ三国志そのものに取り組む一念を固めたのは、昭和十二年(1937)の日中事変の勃発の際だった。

吉川英治は盧溝橋事件の直後に、毎日新聞から特派されて河北の地を視察したことがある。その時、吉川英治は早暁の進撃を前にして、仮眠をとっている兵士たちの寝顔につくづく眺め入り、その一人ひとりの身の上を想像し、戦野の緊張にくもらない人間の素顔を発見するが、そういった体験がかれの『三国志』執筆に大きく影を投じていることが想像される。さらに国土を焦土化されながらも、民族の不屈な意志をしめす中国の民衆にふれたことも、その歴史を理解する上に大きく役立っていた。

さらに、昭和十三(1938)年秋には漢口作戦に従軍し、上海から南京、九江を経て揚子江を遡行し、漢口(武漢)に到っている。この二度にわたる従軍が、吉川英治の中国に対

---

<sup>4</sup> 尾崎秀樹、『伝記 吉川英治』、講談社、1974年9月15日、頁312~318。

<sup>5</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、序。

する眼を開かせ、『三国志』執筆の直接的な動機となったといつてよかろう。<sup>6</sup>

ということで、吉川『三国志』は、劉備が黄河の川面を見つめる場面より始まる。

後漢建寧元年のころ。

今から約千七百八十年ほど前のことである。

一人の旅人があった。

腰に、一剣を佩いているほか、身なりはいたって見すばらしいが、眉は秀で、唇は紅く、とりわけ聡明そうなヒトミや、豊かな頬をしていて、つねにどこかに微笑をふくみ、総じて賤しげな容子がなかった。

都市の頃は二十四、五。

草むらの中に、ぼつねんと坐って、膝をかかえこんでいた。

悠久と水は行く—

微風は爽やかに鬢をなでる。

涼秋の八月だ。

そしてそこは、黄河の畔の一黄土層の低い断り岸であった。<sup>7</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 黄巾賊)

以上の黄河のほitori、劉備の初登場のシーンは、もとの『三国志演義』には一切出てこない。これはまさに吉川英治が従軍中の実感だったのではないかと思われる。

### 第三節 吉川英治『三国志』の特別な人物配置

戦後の日本における「三国志」受容に最も大きな影響を与えたものは、吉川英治の『三国志』である。「奸絶」の曹操、「義絶」の関羽、「智絶」の諸葛亮の三人を中心とする毛宗崗本『三国志演義』に対して、吉川英治は、曹操と諸葛亮という二人の英雄を中心に『三国志』を描く。さらに、吉川英治は『三国志』の「篇外余録」に、

劇的には、劉備・張飛・関羽の桃園義盟を以て、三国志の序幕はひらかれたものと見られるが、真の三国志的意義と興味とは、何といつても、曹操の出現から

<sup>6</sup> 尾崎秀樹、『伝記 吉川英治』、講談社、1974年9月15日、pp.258~264。

<sup>7</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.11~12。

であり、曹操がその主動的役割をもっている。

しかしこの曹操の全盛期を分水嶺として、ひとたび紙中に孔明が現れると、彼の存在もたちまちにして、その主役的王座を、ふいに襄陽郊外から出て来たこの布衣の一青年に譲らざるを得なくなっている。

ひと口にいえば、三国志は曹操に始まって孔明に終わる二大英雄の成敗争奪の跡を叙したものだともさしつかえない。

この二人を文藝的に見るならば、曹操は詩人であり、孔明は文豪といえると思う。<sup>8</sup>

(吉川英治、『三国志』八 篇外余録 諸葛菜)

と述べている。ここで曹操を「詩人」とするのは、曹操が建安文学を政治的に宣揚した文学者であることはもちろんのこと、曹操が吉川『三国志』の主役の一人であることを示している。

吉川英治の『三国志』が下敷きにしたという湖南文山の『通俗三国志』は、清代(1636～1912)の毛宗崗本ではなく、明代(1368～1644)の李卓吾本<sup>9</sup>を底本とした翻訳である。関羽が関聖帝君として、中国の津々浦々にまで祭られるようになるのは、清代に入ってからのことである。明代に成立した李卓吾本においても関羽は尊重されているが、清代の毛宗崗本は、関羽の扱いを曹操・諸葛亮と並ぶ三大主役にまで高めたのである。

もちろん、吉川英治は、毛宗崗本の完訳である久保天随の『新訳演義三国志』(1912)も見ているが、それでも関羽を熱く描くことはない。神として関聖帝君が信仰されていた清代初期に著された毛宗崗本と、日中戦争の最中に著された吉川『三国志』という成立時期の社会背景の違いが、そして国情の違いがそこにある。<sup>10</sup>

また、それまでは悪者として捉えられていた曹操を人間的な魅力を増して描き、単なる敵役ではない人物としての存在感を与えた。本作における曹操は、関羽や趙雲など優れた才を持つ武将を恋慕し、痛烈な敗戦に焦慮するいっぽう、詩情鮮やかに賦を詠む、実に豊かな人間性を持った人物として描かれている。中国に較べ、日本に曹操ファンが多いのも吉川『三国志』の影響が大きいと思われる。

<sup>8</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.375。

<sup>9</sup> 明の著名な思想家、李卓吾に仮託した評をつけた『李卓吾先生批評三国志』。

<sup>10</sup> 渡辺義浩、『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月16日、p.4。

## 第四節 吉川英治の曹操像

前に触れた如く、曹操が吉川英治『三国志』の二大主人公の一人として、日本人に広く好まれている。その源を追求すると、やはり吉川英治『三国志』の影響が非常に大きいと思われる。それで、この吉川英治が作り上げた曹操の人物像は中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』の中の曹操像はどのような差異があるかということをはっきりと明らかにしていきたい。そこに顕れた吉川英治が『三国志』を創作するときの特別な手法の考察も試みたい。

### 一、曹操の容姿：白面郎

为首閃出一将・身長七尺・細眼長髯...<sup>11</sup>

(罗贯中 著 毛宗崗 評訂、『三国演義』第一回 宴桃園豪杰三結義 斬黄巾英雄首立功)

近々と、その人物をみれば。

年はまだ若い。肉薄く色白く、細眼長髯、胆量人にこえ、その眸には、智謀はかり知れないものが見えた。<sup>12</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 転戦)

...白晳秀眉、丹唇をむすんで、...もっと底の深い、もっと肚も黒い、そしてもっと器も大きな曲者ではなかろうかと思われた。<sup>13</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 舞刀飛首)

「この子は鳳眼だ」

といって、幼少の時から、大勢の子のうちでも、特に曹操を可愛がっていた。鳳眼というのは鳳凰の眼のように細くてしかも光があるという意味であった。少年の頃になると、色は白く、髪は漆黒で、丹唇明眸、中肉の美少年ではあり...

<sup>14</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 白面郎「曹操」)

白面細眼、自若としてそういう容子...<sup>15</sup>

<sup>11</sup> 罗贯中 著 毛宗崗 評訂、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.9。

<sup>12</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.180。

<sup>13</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.299。

<sup>14</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.357。

<sup>15</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.372。

(吉川英治、『三国志』一 群星の巻 偽忠狼心)

『三国志演義』で曹操の外貌の描写は確かにすくない。曹操の外貌について全文で「身長七尺、細眼長髯」と貧相な姿だけであった。ここで、身長は七尺とも言われており、当時は一尺=23センチ程度だったのでおおよそ161センチくらいであろうか。よく考えてみれば、このような曹操は見栄えが悪いばかりでなく、少し滑稽ではないかと思う。

一方、吉川の『三国志』で曹操の外貌についての描写はかなり多い、「肉薄く色白く」、「髪は漆黒」、「丹唇明眸」さらに「胆量人にこえ、その眸には知謀はかり知れないものが見えた」と描かされている。曹操の本当の外貌如何にもかかわらず、ここで描かれた美男子のような曹操の容貌は誠に大胆かつ独特な創作と言えよう。全身チャームポイントで、できているような人だと思われる。

中国で「人不可貌相、海水不可斗量（人は見かけによらず、海水は升では量れない）」という諺がある。人はその見かけで能力の有無を判断することができず、海の水は1斗升でその量を測ることができないという意味であるが、昔の諺に反して、吉川氏は曹操の新たな外貌を取り入れることを通じて精一杯イメージアップしようとしていることがわかりやすいであろう。確かに、ストーリーの中に登場する人物に対して、外見、容姿が、人間の価値に関与しているものとも考えられる。優れた人間には優れた容姿が伴うことも普通であろう。とにかく、吉川氏の心の中で、曹操は威厳に満ち、堂々とした姿であった。まことに、「主要人物などには、自分の解釈や創意を加えて書いた」と書いたように、吉川『三国志』は翻訳というよりは、小説を改作することを行った。

## 二、曹操の初登場：赤い姿をしていた英雄

正直张梁・张宝败走・曹操拦住大杀一阵・斩首万余级・夺得旗幡・金鼓・马匹极多。<sup>16</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

草は燃え、兵舎は焼け、逃げくずれる賊兵の軍衣にも、火がついていないのは

---

<sup>16</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.10。



なかった。すると彼方から、一彪の軍馬が、燃えさかる草の火を蹴って進んできた。見れば、全軍みな紅の旗をさし、真っ先に立った一名の英雄も、兜、鎧、剣装、馬鞍、すべて火よりも赤い姿をしていた。<sup>17</sup>

(吉川英治、『三国志』 一 桃園の巻 転戦)

『演義』の中で曹操の登場を第一回に描いた。「正直張梁・張宝敗走・曹操拦住大杀一阵・斩首万余级・夺得旗幡・金鼓・马匹极多。」とごく簡単な描き方になっており、曹操は珍しく役と感じられない。

吉川英治はこんな描写だけでは曹操の特別感を表わさないと考え、読者に深いイメージを残るため、曹操の登場する場面を誇張するような手法で描かれた。

燃え盛る火の中から出た人はきっと火より旺盛な生命力を持つと思う。すごい勢いで読者の目の前に顕れた。そして、全軍みな紅の旗をさし、曹操の兜、鎧、剣装、馬鞍も全部火より赤い、それは不安な社会で曹操の出現は人々に新たな希望をもたらしたと思われる。真に乱世の中で英雄のような人物が出てきたことを感じさせる。

ここでもう一つ注意すべきなのは、毛宗崗本『三国志演義』において、最初に曹操の「身長七尺、细眼长髯」という容体を描いて、その後すぐ曹操の出自と昔のアクションを説明した。しかもこれらの昔のことを通して、曹操は狡猾な奸雄としての顔が余地なく明らかに顕せてきた。

曹操の「身長七尺、细眼长髯」という容体や彼のやり方、何等かの係りがある。常に人はその見かけで能力の有無を判断することができないが、ストーリーの中に登場する人物に対して、外見、容姿が、人間の価値にあずかるものとも考えられる。優れた人間には優れた容姿が伴うことも普通である。曹操のような身長が小さくて、目が細い人は、最初に小説を読む人に良いイメージを与えられないであろう。このような先入観を持ち、曹操は初登場のとき、突然に現れ、敗北した軍を追撃し、沢山な戦利品を自分の手にすることは確かに狡い。

一方、吉川『三国志』を見てみると、曹操はまず民の苦難を救うための英雄として突然現れ、そして「肉薄く色白く、細眼長髯、胆量人にこえ、その眸には、智謀はかり知れないものが見えた」など英雄の外貌と精神を付けられ、昔のことは一切言及していない。

私見によれば、吉川英治は曹操初登場の時、彼が昔にやったことを言及していないのに

<sup>17</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.179。

は、それなりの理由がある。吉川英治にとって、人の容体や行為は直接の関係がないものである。最初から、読者に曹操は「細眼長髯」の悪人というイメージを与えたくない。小説を読めば読むほど、曹操という歴史人物の精神や行為を味わうことができる。それは中国の曹操像ではなく、日本の曹操像でもない。人によって、多様な曹操の人物像である。これは、当に吉川英治の独特な事柄を述べる見方である。

### 三、曹操の出自：相国の後裔

官拜骑都尉・沛国譙郡人也・姓曹・名操・字孟德。操父曹嵩・本姓夏侯氏・因为中常侍曹腾之养子・故冒姓曹。曹嵩生操・小字阿瞞・一名吉利。<sup>18</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

声静かに、名乗っている。

「われは沛国譙郡(安徽省・亳県)の生まれで、曹操字は孟徳、小字は阿瞞、また吉利という者です。すなわち漢の相国曹参より二十四代の後胤にして、大鴻臚曹嵩が嫡男たり。」<sup>19</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 転戦)

竹裏館の秘密会で、王允もいったとおり、彼の家柄は、元来名門であって、高祖覇業を立て以来の一漢の丞相曹参が末孫だといわれている。<sup>20</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 白面郎「曹操」)

曹操は「奸絶(奸の極み)」と称される『三国志演義』最大の悪役である。毛宗崗があえて悪役を三絶の一人に数えたのは『演義』における曹操の存在感と、毛宗崗の分析のすごさを物語る。曹操が『演義』最大の悪役となったのは、主人公たる劉備の前に立ちふさがりライバルであること、漢王朝を終わらせた篡奪者であること、そして宦官曹腾の孫という出自などに起因する。『演義』は曹操初登場シーンの紹介で、宦官の家系に生まれたことを記す。毛宗崗は「曹操身世如此，岂得与靖王后裔，景帝玄孙同日论哉！（このような生

<sup>18</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.9。

<sup>19</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.180~181。

<sup>20</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.356~357。

まれの曹操が景帝の玄孫である劉備と同列に語れようか)』<sup>21</sup>と註釈で誹謗している。

実は、唐代以降、異姓養子は律により禁止されていたが、依然として明清時代にも続けられていた。しかし、それは悪である、という社会通念を利用して、毛宗崗『三国志演義』あるいは日本の諸訳本は、初登場の場面から、曹操は宦官の養子の子であることを強調し、曹操を貶めているのである。

これに対して、吉川英治は宦官である曹操の祖父のことを言及せず、二度と曹操は漢の相国曹参の後胤にすることを強調し、曹操の出自を引き揚げた。「四世三公」の袁紹とまだ肩を並べることができないが、痛いところを避ければ、草靴と箆を織って生活した劉備より勢いが強いではないかと思われる。

#### 四、曹操の性格

##### (一)「悪」知恵に長ける

汝南許劭・有知人之名。操往見之・問曰：“我何如人？”劭不答。又问・劭曰：“子治世之能臣・乱世之奸雄也。”操闻言大喜。<sup>22</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

曹操は一日、その許子将を訪れた。座中、弟子や客らしいのが大勢いた。曹操は名乗って、彼の忌憚ない「曹操評」を聞かしてもらおうと思ったが、子将は、冷たい眼で一眇したのみで、卑しんでろくに答えてくれない。

「ふふん……」

曹操も、持前の皮肉がつい鼻先へ出て、こう揶揄した。

「—先生、池の魚は毎度鑑ておいでらしいが、まだ大海の巨鯨は、この部屋で鑑たことはありませんね」

すると、許子将は、学究らしい薄べったくて、黒ずんだ唇から、抜けた歯をあらわして、

「豎子、何をいう！お前なんぞは、治世の能臣、乱世の姦雄だ」

と、初めて答えた。

聞くと、曹操は、

<sup>21</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.9。

<sup>22</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.10。

「乱世の姦雄だと。—結構だ」

彼は、満足して去った。<sup>23</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 白面郎「曹操」)

曹操は若くして機知・権謀に富んだが、放蕩を好み素行を治めなかったため世評は芳しくなかった。ただ太尉の橋玄は「天下は乱れようとしており、当代一の才の持主でなければ救う事はできない。天下をよく安んずるのは君である」などと曹操を高く評価した。

また、橋玄が紹介した有名な後漢の人物鑑定家の許子将（許劭）は、「子治世之能臣乱世之奸雄」（子は治世の能臣、乱世の奸雄）と評し、それを聞いた曹操が大笑したという有名なエピソードがある。毛宗崗本はこのことについて、「姦雄と認められて笑うとは、本当の姦雄である」と、曹操がいかに悪い奴であることを強調している。

吉川英治『三国志』を見てみると、思わずに曹操の賢さを引き出している。許子将の冷淡の態度に対して、曹操は「—先生、池の魚は毎度鑑ておいでらしいが、まだ大海の巨鯨は、この部屋で鑑たことはありませんね」と嘲り笑う。子ども喧嘩のように許子将に問い詰めると、「治世の能臣、乱世の奸雄」という最高の評価を得た。世が平和に治まっていれば、国家を支える有能な官僚。世が乱れていけば、「悪知恵の利く奴」と他人に言われるくらいの傑物として名を残すという意味で、いうならば、世の中がどう動いても、すぐに適応して上手く渡っていく。無名のまま死んでいくような人物には思えないということで、つまり最上級の褒め言葉である。

当時は知識人（「名士」）の評価を受けないと、その仲間に入れなかった。例えば、諸葛亮も「臥龍」と評されることによって「名士」の仲間に入れたわけである。曹操が満足したのは、「乱世の姦雄」という「評価」を得て「名士」の仲間入りができたことを喜んだからである。だから、曹操は後に橋玄を祀り、かつての恩義に報いたわけである。

## (二) 率爽な曹操

『三国志演義』には、「青酒、酒を煮て英雄を論ずる」という有名な場面がある。吉川英治『三国志』もこの有名なエピソードを省略することができない。まず、筋をそのまま踏襲して、「臣道の巻」には、劉備と梅の実をさかなに、酒を酌み交わしながら、天下の英雄を論じる。劉備が英雄として挙げる人物を、曹操は片っ端から否定する。「あれはいわゆる

<sup>23</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.360~361。

疥癬の輩という人物さ」、「あれは塚の中の白骨だ」、「あんな物は門を守る犬だ」など、これに対して、吉川英治は「否定はするが、あいまいではない。曹操の否定は明快だった。痛烈な快感すら、聞く者の耳におぼえさせる」と分析するのである。

その次に曹操はいきなり劉備を指し「天下の英雄は、予と足下の二人しかあるまい。」途端に凄い雷鳴が響き、劉備が箸を落とし、耳をふさいで食卓にうつ伏し、臆病者のふりをする場面は、この作品の名筆として、光る。ぞっとみれば、曹操は生意気で天下を奪わんとする野望の士ではないかと思われる。しかしながら、吉川英治はそう思わない、かえってそれは曹操の素朴の一面だと考えられる。

よく取れば、それは玄德が人間の本性をふかく観つめ、自己の短所によく慎み、あくまで他人との融和に気をつけている温容とも心がけともいえるが、悪く解すれば、容易に他人に肚をのぞかせない二重底、三重底の要心ぶかい性格の人とも言える。

すくなくも、曹操の人間は彼（玄德）よりはずっと簡明である。時折、感情を表に現して見せるだけでも、ある程度の腹中はうかがえる。<sup>24</sup>

（吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 雷怯子）

ここに書かれた吉川英治の劉備と曹操に関する人間分析は素晴らしいと思わないが。時代人物に対する自分の視点を際立たせようというねらいが見える。

『三国志演義』で曹操が性格のよい方面が略されるが、腹黒い面が誇張された。彼の喜怒哀楽はほとんど曹操の演技で、悪賢い人と言われる。しかし吉川英治がそれはただ曹操の本来の性質で、劉備より率直であると考えられる。

### （三）温雅典麗な曹操

吉川英治は曹操を普通の人間として「温雅典麗」の一面を示した。

曹操もはや四十を幾つかこえ、威容人品ふたつながら備わって、覇気熱情も日頃は温雅典麗な貴人の風につつまれている。時には閑を愛して独り書を読み、詩

---

<sup>24</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.220。

作にふけり、終日、春闈の室を出ることもなかった。また或る日は家庭の良き父となりきって、幼い子女らと他愛なく遊び戯れ、家門は栄え、身は丞相の顯職にあり、今や彼も、功成り名遂げて、弓馬劍槍のこともその念頭を去っているのであるまいかと思われた。<sup>25</sup>

(吉川英治、『三国志』三 草莽の巻 梅酸・夏の陣)

ここで、四十歳の曹操は慈父ぶりを人に見せる。本を読むことが好き、詩を作ることも好き、これはただ曹操の日常生活の縮図にすぎない。戦争で威風堂々している曹操も実は普通の人間と同じで、暇な時間で、自分が好きなことだけをして、世から離れ、自分の世界に閉じる生活を楽しんでいる。

『三国志演義』の中で、どうしても見つけられない光景だ。羅貫中は社会的に、曹操の影響や政治思想などから描いていた。反対に、吉川英治は曹操の性格や情感などの方面にもっと力を入れ、主観的な傾向があると思われる。

## 五、恋をする曹操：士を愛する

三国志の主役的存在である曹操は相当の困ったもの。有名な赤壁の戦いは、他人の嫁を自分のものにしたいがために仕掛けられ、曹操は人妻に無限な未練がある。彼の趣味は略奪愛である。

また、女性に限らず、男も熱烈に愛してしまうのが曹操の恋愛力の凄いところ。とある武将を自分のものにするためにみせた怒濤の口説きは、それこそ三国一。

### (一) 関羽への恋

吉川英治『三国志』の巻三の中に「恋の曹操」という章がある。これは関羽に対する恋なのである。

『三国志演義』の第二十五回には、劉備を敗走させ、徐州と小沛の二城を落とした曹操は、関羽の守る下邳の城を攻めるが、曹操は一代の英雄関羽を殺さず、自分に復帰させてくたて仕方がない。そこで張遼を説得に行かせ、関羽が出した少し無理な条件をことごとく飲み、最後に「文远之言当也。吾愿从此三事」と答えた。別に関羽への熱い愛情は感じさせない。それに対して、「すぐ関羽を迎えてこいと、恋人を待つように彼を待ち抜いたので

<sup>25</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.38。

あった」と吉川英治は描く。曹操は関羽への熱い追い求めはここから始まる。

まず、曹操は献帝に上奏して偏將軍の位を授与させる。そしてさらに金銀財宝を関羽のもとに送り、加えて新しい陣羽織も織らせた。しかし関羽は謙虚な姿勢を崩さず、金銀財宝を全て甘夫人に与え、曹操の陣羽織を今まで使ってきたものの下に着たのだった。曹操は、関羽の劉備に対する忠誠に変化がないのを知ると、遂にあの名馬・赤兔馬を贈呈させたのである。これに関羽は初めて歓喜の声を上げたので、曹操はやっと気を引くことができたと言った。しかしながら、関羽は曹操の好意に対してではなく、この馬があれば劉備のもとにすぐ駆けつけられるという思いから声を上げたのであった。

しかし、吉川英治から見れば、このような数多くの実例がまだ足りない。曹操は関羽への恋心を示すため、少女のような曹操の心理的描写を加えなければならない。

操叹曰：“真义士也！”然口虽称羨・心实不悦。<sup>26</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第二十五回 屯土山关公约三事 救白马曹操解重围)

三日に小宴、五日に大宴、といったふうに響応の機会をつくって、関羽を見ることを楽しみとしていた。<sup>27</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 大歩す臣道)

聞くと、曹操は感に打たれたものの如く、心のうちで、(ああ麗しい人だ。さても、忠義な人もあるものだ.....)と、しみじみ、彼のすがたに見惚れていたが、折ふしそこへ、寮の二夫人に仕えている者が迎えにきて、

「すぐお帰り下さい。おふた方が今、何事か嘆いて、羽將軍を呼んでいらっしゃいます」

と、関羽へ告げると、

「え。何か起こったのか」

と、関羽は、それまで話していた曹操へ、あいさつもせず馳け去ってしまった。

本来、こんな無礼をうけて、黙っている曹操ではないが、曹操は置き捨てられ

<sup>26</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.301。

<sup>27</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.399。

たまま茫然と彼のあとを見送って...<sup>28</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 大歩す臣道)

「いやお恥ずかしい。髯ばかり美しくても、五体は碌々と徒食して、国家に奉  
じることもなく、故主兄弟の約にそむいて、むなしく敵国の酒を酔う。.....こんな  
浅ましい身はまろうと思えませぬ」

なんとの話が出て、関羽はすぐ自身を責め、また玄德を思慕してやまないの  
であった。そのたび曹操はすぐ話をそらすに努めながら、心のうちで、関羽の忠  
義に感じたり、反対に、ほろ苦い男の嫉妬や不快を味わいなどして、すこぶる複  
雑な心理に陥るのが常であった。<sup>29</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 大歩す臣道)

吉川英治が大幅な創作を入れ、特に曹操の心理的描写に中心に置く。曹操は関羽の前で、  
自分の地位、癖、自己さえ忘れられ、関羽に無我夢中になった。無条件で関羽のすべてを  
受け入れ、毎日関羽のことを考え、四六時中忘れることがない。だから、曹操気持ちは彼  
が関羽にあげたが陣羽織を今まで使ってきたものの下に着た時の「心実不悦」から「感に  
打たれたものの如く」に変えられ、関羽への恋がさらに深くなってきた。しかし、曹操は  
自分がいくら努力しても、関羽は結局劉備のものだと認識する時、最初の愛慕の情から嫉  
妬となっている、心の中が苦しんでいるではなかろうか。

ついに、関羽と別れの日を迎えた。

操曰：“不忘故主・来去明白・真丈夫也。汝等皆当效之。”<sup>30</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第二十六回 美髯公千里走单骑 汉寿侯五关斩六  
将)

ついに関羽は去った！

自分をすてて玄德のもとへ帰った！

辛いかな大丈夫の恋。—恋ならぬ男と男との義恋。

<sup>28</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、pp.402~403。

<sup>29</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.407。

<sup>30</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.321。



「.....ああ、生涯もう二度と、ああいう真の義士と語れないかもしれない」

憎悪。そんなものは今、曹操の胸には、みじんもなかった。

来るも明白、去ることも明白な関羽のきれいな行動にたいして、そんな小人の怒りは抱こうとしても抱けなかったのである。

「.....」

けれど彼の淋しげな眸は、北の空を見まもったまま、如何ともなし難かった。

涙々、頬に白いすじを描いた。睫毛は、胸中の苦悶をしばだいた。<sup>31</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 大歩す臣道)

『演義』の中には、曹操も関羽を客としてたいへん手厚くもてなす、とても敬われている。しかし、それはすべて部下に「汝等皆当效之」のために行われているにすぎない。

しかし、吉川英治が描かれたこの別れのシーンには、恋人と別れるとき、名残惜しくて別れたくないさまが目の前に現れるように感じさせた。恋愛感情があってもなくても、人間同士の暖かい付き合いをしてきたなら、別れる時に涙がでるのは当然である。まして曹操のような恋に陥る人に耐えられるはずがない。以前の仲よしだった頃に戻れない、かなりショックでとてもとても辛い。ついに、涙が出て来た。

それにもかかわらず、関羽は旧主劉備の居所がわかったので、いとまも告げず去ってゆくが、あとを追った曹操は、霸陵橋で別れを惜しみ、餞別を与える。ときによっては数万の民を虐殺してかえりみない曹操、このことの直前には董承一派の曹操暗殺計画を暴き、献帝の愛妃董貴妃をくびりころしている。

曹操は、自分の胸の火を、自分で消しまわるのに苦しんでいるようだった。人いちばいの明晰な理念と、人いちばい烈しい感情とが、ここ数日、いかに彼を懊悩させたかは、他人の想像も及ばなかった。<sup>32</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 火か人か)

その曹操が、関羽に対しては、まるで少女のような恋心をさらけ出してかえりみないのである。この曹操が関羽への愛慕に部下たちはみな嫉妬した。さらに、この熱意は赤壁の

<sup>31</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.10。

<sup>32</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.355。

戦いの時に、大惨敗して逃げてきた曹操を、待ち受けた関羽が見逃すことの伏線となる。曹操の恋愛力が、結果的に曹操の天下につながったのだと思われる。

## (二) 趙雲への恋

曹操はその前に、宛城の張繡の嫂の色香に迷って彼女をものにしたため、怒った張繡の夜襲を受けて大敗しているが、このときの曹操は、べつに恋に落ちたようには書かれていない。それでは曹操に男色趣味があったかということそうではない。優秀な人材に会うと、敵であることも忘れて、自分の配下に置きたくなる、その切なる思いは、ほとんど恋に近い病気だというふうに、吉川英治は描く。

だから「赤壁の巻」で、当陽で曹操の騎兵集団が劉備軍を襲って壊滅させたとき、劉備の世嗣阿斗（劉禪）を趙雲が乱軍の中から救出するため、ただ一騎、曹操の陣を駆け抜ける姿に、曹操はまたも「恋心」をそそられる。

却说曹操在景山顶上,望见一将,所到之处,威不可挡,急左右是谁,曹洪飞马下山大叫曰:“军中战将可留姓名!”云应声曰:“吾乃常山赵子龙也!”曹洪回报曹操。操曰:“真虎将也!吾当生致之。”遂令飞马传报各处:“赵云到,不许放冷箭,只要捉活的。”<sup>33</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第四十一回 刘玄德携民渡江 赵子龙单骑救主)

「さては、かねて聞く趙子龍であったか。敵ながら目ざましい者だ。まさに一世の虎将といえる。もし彼を獲て予の陣に置くことができたなら、たとえ天下を掌に握らないでも、愁いとするには足らん。一早々、馬をとばして、陣々に触れ、趙雲が通るとも、矢を放つな、石弩を射るな、ただ一騎の敵、狩猟するように追い包み、生け擒ってこれへ連れてこいと伝えろ！」<sup>34</sup>

(吉川英治、『三国志』五 赤壁の巻 長坂橋)

ここまで見ると、まだ驚くことがない、中国決定版である『三国志演義』と殆ど同じ意味であるが、曹操の心理的描写だけが輝いている。「もし彼を獲て予の陣に置くことができ

<sup>33</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.514~515。

<sup>34</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、p.45。

たら、たとえ天下を掌に握らないでも、愁いとするには足らん。」世の虎将を見つかり、絶対に自分の配下にしたいという人材を集める趣味が終生変わらない。

真の勇士、真の良将を見れば、敵たることも忘れて、それを幕下に加えようとするのは、由来、曹操の病とっていいほどな持ち前である。

彼の場合は、士を愛するというよりも、士に恋するのであった。その情熱は非常な自己主義でもあり、盲目的でもあった。さきに関羽へ傾倒して、あとではかなり深刻に後悔の臍を噛んでいるはずなのに、この日また常山の子龍と聞いて、たちまち持ち前の人材蒐集慾をむらむらと起こしたものであった。<sup>35</sup>

(吉川英治、『三国志』五 赤壁の巻 長坂橋)

ここで、吉川英治は独自の分析を加えながら、曹操の人材を集める趣味を明らかにした。実はこの下知によって趙雲は助かり、へトへトになって劉備の陣営に帰り着くのだが、こういう個所を読んでいると、吉川英治自身が、曹操のそのような心情をよしとし、自身もまた、曹操に恋しているように見える。

### (三) 徐晃への恋

曹操收军回营・满宠引徐晃入见。操大喜・厚待之。

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第十四回 曹孟德移驾幸许都 吕奉先乘夜袭徐郡)

曹操は、望みどおり徐晃を味方に得て、

「近来、第一の歡びだ」と、いった。

士を愛すること、女を愛する以上であった曹操が、いかに徐晃を優遇したかいうまでもなからう。<sup>36</sup>

(吉川英治、『三国志』二 草莽の巻 両虎競食の計)

中国長い歴史を溯って見ると、元の主君を裏切って、優遇された新たな主に降服する将

<sup>35</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、pp.45~46。

<sup>36</sup> 吉川英治、『三国志』二、講談社、1989年4月11日、p.298。

領が少なくない。例えば、項羽を破った漢の劉邦の武将韓信は、もともとは項羽の部下であった。それが劉邦の厚遇を受け、項羽を討つ主力となった。あるいは、毛宗崗が生きた清の中国統一には、明からの降将呉三桂の果たした役割が大きかった。しかし、こうした敵から帰参した功臣は、悲惨な末路を辿ることも多かった。韓信は劉邦に、呉三桂は康熙帝に殺害されている。かれらの生き方に義がなく、主君もその才能を統御できなかったためである。

これに対して、曹操は降服までの経歴よりも人物の才能を重視し、才能のある者は高く用いた。人材を愛すること、女を愛することよりもであった曹操が、いかに帰順された将領たちを優遇したか言うまでもなく、殺すこともないわけだ。また、曹氏・夏侯氏以外の者に、原則として一万人以上の兵力を任せることはなく、武将の統御を厳格に行った。このため多くの武将が、群雄のもとを去り、曹操に従った。

## 六、二つの顔：詩人であり軍事家でもある

曹操は実戦においても優れた戦略家・軍略家であった。特に匈奴・烏桓・羌などの遊牧騎馬民族との戦いでは無類の強さを発揮している。また、奇襲・伏兵を用いた戦いを得意とし、袁術・呂布との戦いでは水攻めを用いて勝利している。謀略に長じ、軍の統率にも大いに長け、また兵書を編纂し評論できるほどの確かな戦術理論を持っていた。

### (一) 臨機応変に長ける

戦争について、『三国志演義』の中で、曹操を敵としてほとんどマイナス面から描いていた。しかし、曹操の戦う才能は吉川英治に高く評価されている。彼は、曹操の戦争を曹操の「創作」あるいは「詩」にたとえる。

古今の武将のうち、戦いをして、彼ほど快絶な勝ち方をする大将も少ないが、また彼ほど痛烈な敗北をよく喫している大将も少ない。

曹操の戦いは、要するに、曹操の詩であった。詩を作るのと同じように彼は戦いに熱中する。

その情熱も、その構想も、たとえば金玉の辞句をもって、胸奥の心血を奏でようとする詩人の気持ちと、ほとんど相似たものが、戦いにそのまま駆りたてられているのが、曹操の戦ぶりである。

だから、曹操の戦は、曹操の創作である。—非常な傑作があるかと思えば、甚だしい失敗作も出る。<sup>37</sup>

(吉川英治、『三国志』三 草莽の巻 梅酸・夏の陣)

『三国志演義』の中に、このような人物評価がほとんど目につかない。吉川英治が自分なりに人物評を加えたことから見れば、彼の心で、曹操は激情な詩人のような存在であると思う。曹操には兵家の将として詩人のような勘の鋭さがあった。詩人はいつも目前の情景に接して感慨を催し、すばらしい詩を作る。曹操の作戦や策略は詩人のごとく一瞬の靈感で、時々理性ではない。

例えば、「望梅止渴」という有名なエピソードがある。梅を望んで渴きを癒すという意味で、空想で自分を慰めることのたとえ。

この『三国志演義』から由来する昔の諺は、実は曹操の傑作である。曹操がのどの渴きを訴える兵士たちに梅林がこの先にあると言っていると、兵士たちは唾が出て、のどの渴きを癒したと言う。

操曰：“适见枝头梅子青青，忽感去年征张绣时，道上缺水，将士皆渴。吾心生一计，以鞭虚指曰：‘前面有梅林。’军士闻之，口皆生唾，由是不渴。”<sup>38</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第二十一回 曹操煮酒论英雄 关公赚城斩车胄)

行軍は、五月から六月にかかった。六月、まさに大暑である。

わけて河南の伏牛山脈をこえる山路の難行はひと通りでない。

大列のすぎる後、汗は地をぬらし、草はほこりをかぶり、山道の岩砂は焼け切って、一滴の水だに見当たらない。兵は多く仆れた。

「水がのみたい」

「水はないか」

斃れた兵も呻く。なお、進む兵はいう。

すると、曹操が、突然、馬上から鞭をさして叫んだ。

「もうすこしだ！この山を越えると、梅の林がある—疾く参って梅林の木陰に

<sup>37</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、pp.46~47。

<sup>38</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.514~515。

憩い、思うさま梅の実をとれ。一梅の実をたたき落として喰え」

聞くと、奄々と渴にくるしんでいた兵も、

「梅でもいい！」

「梅ばやしまで頑張れ」と、にわかにも勇気づいた。

そして無意識のうちに、梅の酸い味を想像し、口中に唾をわかせて、渴を忘れてしまっていた。

一梅酸渴を医す。

曹操は、日頃の閑に、何かの書物で見ていたことを、臨機に用いたのであるが、後世の兵学家は、それを曹操の兵法の一として、暑熱甲冑を焦がく日ともなれば、渴を消す秘訣のことばとして、思い出したものである。<sup>39</sup>

(吉川英治、『三国志』三 草莽の巻 梅酸・夏の陣)

『三国志演義』や吉川英治『三国志』がともにこのエピソードを紹介したことがあるが、毛宗崗本『三国志演義』は第二十一回「青酒、酒を煮て英雄を論ずる」というシーンで、劉備と天下の英雄を論じる前に、梅の実が見え、この話に言及するという筋である。一方、吉川英治『三国志』この話を取り出して、曹操と兵士の会話を加え、より鮮明にした。ここで、曹操がすごいのは、「むこうに川がある」と言っても、今の喉の渴きはいえないが、「梅の林がある」と言われれば唾がわいてきて「よし、前進して梅林まで行こう」という気持ちになることだ。曹操は「相手の望みをかなえる方法を教えてやれば人は動く」という人間の本性を知り、実践していたのである。後に、この曹操のやり方がのちに兵法家から見ると、戦争中兵士たちの渴を消す臨機応変な奇策と見なす。軍事家としての曹操にとって、このような一瞬の靈感で、戦争中の難題を解決できた例が少なくない。

## (二) 果敢断行

戦争の中で、曹操は臨機応変の策略に長けるだけでなく、果敢断行も曹操の持ち前性質の中で、凄い所の一つである。

果断即決は、実に曹操の持っている天性の特質中でも、大きな長所の一つだっ

---

<sup>39</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、pp.40~41。

た。彼には兵家の将として絶対に必要な「勘」のするどさがあった。他人には容易に帰結の計りがつかない冒険も、彼の鋭敏な「勘」は一瞬にその目的が成るか成らないか、最終の結果をさとるに早いものであった。<sup>40</sup>

(吉川英治、『三国志』四 孔明の巻 溯巻く黄河)

ここで、よく知らされている一つ良い例がある。まとまった中国北方には、袁紹と曹操の二大軍事勢力が対峙する局面が形成された。ただ相対的に袁紹のほうが優勢で、彼が割拠していた冀・幽・青・并の北方四州は、相対的に戦災が少なく、兵士は精良で、食料は十分だった。西暦200年、曹操と袁紹は官渡で対峙した。曹操軍は兵力がたらずで、装備が劣っており、食料が不足していた。袁紹軍は兵力が数十万人以上で、装備が優れ、しかも食料が十分で、とても優勢でした。この不利の状況の下で、白馬と延津の二箇所での前哨戦は、曹操軍が沢山の敵兵を殺したが、相手が優勢で自分が劣勢である状況を根本的に変えることはできなかつた。双方は、官渡で数ヶ月にわたり対峙し、攻めたり守ったりを何度か繰り返したが、なんらの成果もなく、曹操軍の食料は目に見えて減ってきた。このとき天が曹操にチャンスを与えた。袁紹に献策を無視され続けた名士許攸が、曹操に帰順する。袁紹は、どの名士の献策に従うべきか、判断できなかつたのである。許攸は、淳于瓊が烏巢で守る兵糧を攻撃することを曹操に進言する。その信用性を危ぶむ声もあったが、荀攸と賈詡の勧めもあり、曹操はためらわずに五千の精鋭の歩兵隊と騎馬隊を自ら率い、間道から烏巢を夜襲した。曹操が烏巢を襲撃したとき、その背後から袁紹軍の軍勢も迫ってきたが、曹操は落ち着いており、あわてることなく命がけで前進した。その結果、烏巢は攻め落とされ、袁紹軍の食料をすべて焼き払うことができた。袁紹軍は、食料がすべて焼かれたことで、全軍の兵士の心が大いに動揺した。曹操は、勢いに乗じて総攻撃を開始した。袁紹軍は潰滅し、数えきれない兵士が殺された。袁紹は、わずかに八百騎余りをつれて冀州に帰り、まもなく病死した。

曹操が戦役において、袁紹ら他の群雄と比べ瞭然として勝っていた部分は、部下の進言・献策を的確に見極めて果敢な取捨選択を行い、利己心無しに受け入れる能力と言える。多くの重要な戦役においては、それらによって曹操が一時不利な状況から勝利を収めた例が少なくない。既存の観念に縛られない合理的な思考の持ち主で、果敢断行で、臨機応変に対応する速攻型の人物。曹操の一瞬の決断力はいつもながら素晴らしい。状況の推移を的

<sup>40</sup> 吉川英治、『三国志』四、講談社、1989年4月11日、p.134。

確に予測して果敢な作戦を実行できる者こそ、曹操である。

## 七、曹操の精神：挫けない強靱な精神

作品の中で、曹操が勝ち戦をする時、官位が上がる度に、吉川英治の意欲も曹操の境遇と同じく非常に高くなり、口をきわめて曹操のことを賞賛する。また、失敗や挫折を遭う時、吉川英治が戦場で曹操と戦う戦友のように、失敗の経験をまとめ、心から曹操の精神を謳歌すると思っている。

官渡の戦は、曹操の人生の転換点と言える。袁紹を破った勝利によって、河北は曹操の手に入り、それは魏の成立に向けての大きな足掛かりとなった。吉川英治は曹操が袁紹を討つ心理的な原動力を分析した。曹操は自分の成功に対して多分に不満であり、不安であり、現状に安んじない精神を持つ人と吉川英治は思った。

(官渡の戦いの前) 自分の位置は、風曇によって生まれたのであるから、天下の土を完全に威服させてしまうまでは、寸時も生々躍動の先進を怠ったはならない。打開をやめてはならない。旧態の何物をも、ゆるがせに見残しておいてはならない。<sup>41</sup>

(吉川英治、『三国志』三 草莽の巻 北客)

そして、赤壁の戦いの時曹操はもう五十四歳になった。吉川英治の描きから、曹操が壮烈な志を抱いた男児で、人生の黄昏に至ろうとも勇ましい精神を持つことが感じられる。

(赤壁の戦いの前) ああ楽しいかな、男児の業。眸は四遠の地景をほしいままにし、胸には天空の月影を汲む。俯して杯をとれば、滾々わくところの吟醸あり、起こって剣を放てば、すなわち呉の死命を制す...<sup>42</sup>

(吉川英治、『三国志』五 赤壁の巻 月鳥賦)

この気持ちは当に曹操自身が作った「老驥櫪に伏すとも、志は千里に在り。烈士の暮年、壯心已まず。」という詩と対応する。老いたる名馬は馬小屋に繋がれていても、千里を駆け

<sup>41</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、p.60。

<sup>42</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、p.236。



ようとする気概を持っている。志高い者は晩年になっても、意気盛んなものだという意味である。強靱な精神と肉体を誇った曹操であったが、六十六歳にして不帰の客となる。しかし、曹操は死に至るまで、雄壮な志を抱き、猛々しい精神を持ち続けて生き抜いたのだ。この曹操の熾烈な生き様と「烈士暮年壯心不已」の精神は、その後幾多の壮年・熟年の人々を叱咤し、激励してきた。

このような描写から吉川英治が自分の感情を完全に曹操という人物に託し、心の中から曹操の精神に感心させられたと思われる。

## 八、曹操の死：蒼天に感動を与える

両作品は曹操の死について、全く違った描きを通して、作者の立場をはっきり示した。

忽闻殿中声如裂帛・操惊视之・忽见伏皇后、董贵人、二皇子、并伏完、董承等二十余人・浑身血污・立于愁云之内・隐隐闻索命之声。<sup>43</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十八回 治风疾神医身死 传遗命奸雄数终)

この『三国志演義』第七十八回に、曹操の死の場面も、奸雄の最期に似つかわしい。まず、宮殿を修築するため、自ら梨の木を切り、全身に木の血に染められた。それがもとで病に就く。そこに呼び寄せられたのが、名医華佗であるが、曹操は華佗の治療を謀殺の手段と思い込んで獄死させてしまった。それから、風疾がどんどんひどくなって、最期において、伏后ら曹操に誅殺された者たちの亡霊が登場し、心がうつうつとして死んでしまう、と言う筋である。

さらに、『演義』は曹操の献帝への対応を悪意にのみ描く。曹操がその遺言においても、遣される女性の身の振り方を細かく指示しながらも、献帝から禅譲を受けよとは命じなかったことについて、毛宗崗本第七十八回総評は、曹操の「偽」を強調する。

臨終の遺命は、禅譲よりも大事なことはない。それなのに家の者や婢妾の身の振り方については詳しく言い渡ししながら、禅譲の事は何一つ口にせず、後世の人々に、自分は国を篡奪する心がないのだと信じこませ、子孫は悪名を蒙るけれども、

---

<sup>43</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.968。

自分はそうならないように避けようとしたのである。.....曹操はまことに奸雄の最たるものである。曹操の生涯には真実などなく、死に及んでもなお偽りであったことは、( 禅譲を隠すために言い遺した夫人や妾に ) 香を分け履を売れとした遺言がまさにそれである。<sup>44</sup>

( 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第七十八回 治风疾神医身死 传遗命奸雄数终 )

この曹操が創り上げた漢を篡奪するマニュアルは「魏武 ( 魏の武帝と追尊された曹操 ) の故事」と呼ばれて、中国における禅譲のモデルとなった。<sup>45</sup> 奸雄曹操の一生は人を騙すから始まる。死に至るまで、彼は自分の誤りを隠すため、一生懸命「奸雄」あるいは「篡奪者」などマイナス面のイメージとはっきり区分してもらいたい気持ちが分かりやすいであろう。

一方、吉川英治『三国志』の「出師の巻」で、曹操が死ぬ場面には、多くの紙数を割いている。

おごそかに、こういうと、曹操はその瞬間に六十六年の生涯を一望に回顧したのであろう。涙雨のごとく頬をぬらし、一族群臣の嗚咽する瞳の中に、忽然と最期の息を終わった。一時、建安二十五年の春正月の下旬、洛陽の城下には石のような雹が降った。<sup>46</sup>

( 吉川英治、『三国志』七 出師の巻 曹操死す )

曹操の死は天下の春を一時寂闇にした。<sup>47</sup>

( 吉川英治、『三国志』七 出師の巻 英祖 )

曹操の死に直面して、彼の一生を顧みると、群臣の涙が禁じえない。蒼天さえ曹操の死に感動させ、雹を降らせ始めた。この場面を作り上げた吉川英治本人の悲しさは言うまでもなく、全世界が沈黙になってきた。

吉川英治は社会通念の角度から、曹操が漢の天下を奪うことを非難する気がない。

<sup>44</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.961。

<sup>45</sup> 渡辺義浩、『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中公新書、2011年3月25日、p.84。

<sup>46</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、p.143。

<sup>47</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、p.143。

「故人となってみれば彼の偉大さがなお分かる」

「彼の如き人物はやはり百年に一度も出まい、千年に一人もどうか」

「短所も多かったが、長所も多い。もし曹操が現れなかったら、歴史はこうな  
ってかなかつたろう。何しても有史以来の風雲児だった。華やかなる奸雄だった。  
彼逝いて寂寥なき能わずじゃ」<sup>48</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 英祖)

吉川英治はただ時代の風雲児である曹操を称賛し、三国時代の人々が彼の長所が分からな  
いかもしれないが、後世の人々は必ず曹操の偉大さが分かるはず。

夜は経書を読み、朝には詩を読んだ。わけて群書を博覧し、郷党のために学業  
の精舎を建て、府内には大文庫を設け、また古今の兵書を蒐蔵し、自分でも著す  
など、彼は、決して、武のみのひとではなかった。

ただ彼のために惜しむものは、彼の奸雄の性格が、晩年にいたって、忠良の臣  
の善言に耳もかさず、ついに魏王を僭称し、さらに漢朝の帝位をもうかがうまで  
に増長したことにある。彼が若年から戦うごとに世の群雄へ臨む秘訣としていた  
「尊朝救民」の大旆は、為にまったく自己が覇権を握るための嘘言にすぎなかつ  
たことを、その肝腎な晩節の時へきてみずから暴露していることだった。—英雄  
も老ゆればまた愚にかえるか、と長嘆直言した良臣も、いまは多く九泉の下へ去  
っている。<sup>49</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 英祖)

ここで、も一度曹操は本を読むことが好きという長所を強調された。しかも、読むだけ  
ではなく、自分が理解する上、注釈をつけて、兵書を編纂することも行う。君主個人の兵  
学研究の成果を部下の将軍に持たせ、統一的な作戦行動をとらせたということは、長い中  
国歴史の中で、曹操以外には見出せない。三国時代において、文、武ともに秀でてい  
る者は曹操しかいない。

一方、吉川英治も晩年に入った曹操に惜しんで「彼の奸雄の性格が、晩年にいたって、

<sup>48</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、pp.143~144。

<sup>49</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、pp.145~146。

忠良の臣の善言に耳もかざず」と一言で簡単に触れた。「英雄も老ゆればまた愚はかえる」の言葉で九泉の下へ去っていた良臣の恨みを隠している。

上述のどおりに、吉川英治自身が曹操に恋しているように見える。したがって、曹操の死について、吉川英治が自分の最も多い感情を傾けて、哀惜の念を表した。

## 九、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における曹操像の相違

曹操といえば、中国三国時代の悪者として知られてきた。それは小説『三国志演義』を代表とする中国の民間で培われた「三国志」物語が育ててきた曹操のイメージ。民間の「三国志」物語では、劉備やその部下である関羽・張飛・孔明らを善玉として活躍させる一方、曹操は彼らの前に立ちはだかる冷酷で残忍な悪玉として描かれる。そのような悪イメージに満ちた曹操像は現代にも受け継がれている。

その一方、日本の決定版である吉川『三国志』はどのように曹操を作り上げたのか。下の図表を整理することによって、両者の差異を明らかにすることができる。

毛本と吉川本における曹操の人物像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』
容体	細眼長髯、身長七尺（短くて、貧相な姿）	肉薄く色白く、髪は漆黒、丹唇明眸（美少年）
初登場	ごく簡単に触れ、珍しい役と感ぜられない。	誇張の手法、燃え盛る火の中から英雄曹操が登場して、世の人々に新たな希望をもたらした。
出自	中常侍曹騰の養子	再び曹参の末裔と強調され
性格	残忍、狡猾、腹黒い	率爽、賢い、温雅典麗
人材の扱い	人材が欲しい	人材に恋する、人材を集める趣味
戦争	油断大敵、女のため戦争を起こす	臨機応変、詩人のような勘の鋭さがある、理性ではない、果敢断行
精神	楽観的	強靱、不屈、現状に満足せず
死	婢妾のことを考えるばかり、曹操の「儀」を強調する	全世界が沈黙になってきた、風雲児である曹操を称賛する

表二（筆者作成）

ご示す如く、二つ作品の中に描かれた曹操のイメージがかなりかけ離れている。最初の容体から見ると、一つが小さくて、貧相な人である。もう一つは肉薄く色白く、髪は漆黒、丹唇明眸の美少年に変身した曹操である。続いて、曹操初登場のシーンにおいて、『演義』ごく簡単な描き方に対して、吉川英治は読者に深いイメージを残すため、曹操の登場する場面を誇張の手法で描かれた。曹操は燃え盛る火の中から登場して、世の人々に新たな希望をもたらしたと思われる。そして、曹操の出自に関する描写を比較すると、両者の差異もはっきり区別することができる。『演義』が曹操は宦官の養子の子であることを強調し、曹操を貶めているに対し、吉川英治は宦官である曹操の祖父のことを言及せず、二度と曹操は漢の相国曹参の後胤であることを強調し、曹操の出自を引き揚げようと努めたことがわかるであろう。そして、人材の扱いについて、吉川英治が『演義』の中にも窺える曹操の人材に対する意欲をさらに膨らませ、曹操は人材を愛するというよりも、人材に恋するのであったと主張した。曹操の戦争について、『三国志演義』の中で、曹操を敵としてほとんどマイナス面から描いていた。しかし、曹操の戦う才能は吉川英治に高く評価されている。彼は、曹操の戦争を曹操の詩にたとえ、曹操の臨機応変かつ果敢断行を詩人の鋭い「勘」とたとえる。軍事家としての曹操は、詩人のような一瞬の靈感で、いつも戦争中の難題を解決することができる。さらに、『演義』の中で完全に見つからない、吉川英治が創作した温雅典麗、率直な性格かつ挫けない強靱な精神をもついくつかの曹操像も見られる。最後には、両作品は曹操の死について、全く違った描き方を通して、作者の立場ははっきり示した。『演義』には、曹操がその遺言においても、遣される女性の身の振り方を細かく指示し、禅譲の事は何一つ口にせず行動は彼の儀の頭すと強調する。曹操の奸雄のイメージをさらに深めていく。一方、吉川英治は社会通念の角度から、曹操が漢の天下を奪うことや曹操の奸雄の性格に非難する気がない。曹操の死について、吉川英治が自分の最も多い感情を傾けて、彼の一生の功績を称賛し、そして哀惜の念を表した。（表二）

#### （一）毛宗崗本『三国志演義』の曹操像

曹操は「奸絶（奸の極み）」と称される『演義』最大の悪役である。毛宗崗があえて悪役を三絶の一人に数えたのは『演義』における曹操の存在感と、毛宗崗の分析の鋭さを物語る。曹操が『演義』最大の悪役となったのは、主人公たる劉備の前に立ちふさがるライバ

ルであること、漢王朝を終わらせた篡奪者であること、そして宦官曹騰の孫という出自などに起因する。『演義』は曹操初登場シーンの紹介で、宦官の家系に生まれたことを記す。毛宗崗は「このような生まれの曹操が景帝の玄孫である劉備と同列に語れようか」と註釈で誹謗している。

さらに、『演義』で強調される曹操の残忍性・狡猾性は、儒教の忠節の対象であり、理想化されていた漢王朝の皇室に対しての行為に顕著に現れる。第二十回では許田で狩猟を行った際に、献帝の獲物を曹操が平気で横取りし、憤慨した関羽が曹操を殺そうと息巻いて劉備に抑制される。また第六十六回では、伏完の造反計画が露呈した際、捕らえられた娘の伏皇后に対して曹操自らが罵倒し、その場で打ち殺させるという残忍さを見せ、毛宗崗も註釈で痛憤している。

『演義』はこのように、曹操の献帝・漢室への対応を悪意にのみ描く。曹操がその遺言においても、遺される女性の身の振り方を細かく指示しながらも、献帝から禅譲を受けよとは命じなかったことについて、毛宗崗本第七十八回総評は、曹操の「偽」を強調する。

## (二) 吉川英治の曹操像

吉川英治から見れば、曹操は『三国志演義』の中に描かれた中国伝統的な漢賊（漢室を奪う泥棒）ではなく、彼は心の中に血が燃えている典型的な東洋英雄である。さらに、曹操の精神的世界を探求すると、彼の世の中の人知らず、裏の顔が現れる。ときに狡猾、随意に人を騙されたり、ときに温麗典雅、慈父ぶりを人に見せたり、ときにどうしたらよいかわからない少女のように、恋に陥ったりする。

吉川『三国志』において、中国の毛宗崗本『三国志演義』の中にどうしても見つからない光景が沢山ある。その中、曹操の詩人と恋人としての顔が一番輝いている。『三国志』が描かれた「槊を横たえて詩を賦す」のような普通の詩人ではなく、曹操が戦争を行う時も、立派な詩人風采も随所に見られる。吉川英治は曹操の戦争を「詩」にたとえ、彼は詩人と同じような鋭い勘を持ちと主張している。さらに、曹操は既存の観念に縛られない合理的な思考の持ち主で、果敢断行で、臨機応変に対応する優れた軍事家である点も否定できない。

そして、『演義』の中曹操は才能のある人に対する執着心は非常に激しいことは言うまでもない。この点について、吉川英治『三国志』も同じ論調である。吉川英治の筆で、この人材に対する心情をさらに膨らませ、曹操は好きな人材の前で、自分の地位、癖、自己さ

え忘れられ、完全に無我夢中になる。まるで少女のような恋心をさらけだしているように見える。

## 第五節 吉川英治の関羽像

毛宗崗は自ら書き下ろした解説「読三国志法」で、『演義』の登場人物の中から、3人の卓絶した人物を選び「三絶」と称賛している。それは古今の賢相の第一たる諸葛亮（智絶）、古今の名将の第一である関羽（義絶）、そして古今の奸雄の第一とする曹操（奸絶）の3人である。この中国版の人物配置に対し、新たな日本版である吉川英治『三国志』においては、曹操と諸葛亮という二人の英雄を中心に『三国志』を描く。吉川英治『三国志』において関羽が捨てられ、小説全体としての主人公ではなくなった。それでは、吉川英治がどのような関羽像を作り上げたのか、このような関羽像が中国の関羽像とどのような異同があるのか、ということについて、実証的に解明していきたい。

### 一、関羽初登場：張飛との対比

「おういっ。もう寝たのか。雲長、雲長」

張飛は、烈しく、奥の家の扉をたたいた。すると横の窓に、うすい灯がさした。帳を揚げて誰か窓から首を出したようであった。

「だれだ」

「それがしだ」

「張飛か」

「おう、雲長」

窓の灯が、中の人影といっしょに消えた。間もなく、たたずんでいる張飛の前の扉がひらかれた。

「何用だ。今頃—」

手燭に照らされてその人の面が昼みるよりもはっきり見えた。まず驚くべきことは、張飛にも劣らない背丈と広い胸幅であった。その胸にはまた、張飛よりも長い髭鬚がふっさりと垂れていた。毛の硬い者は粗暴で神経もあらいということがほんとなら、雲長というその者の髭のほうが、彼のものよりは軟らかで素直でそして長いから、同時に張飛よりもこの人のほうが智的にすぐれているといえよ

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 童学草舎)

吉川英治『三国志』において、関羽は張飛との対話から登場し、張飛の焦りと違って、穏やかな人のように見える。ここで、吉川英治は直接に関羽の容体を述べるのではなく、張飛と比べることによって、関羽の非凡さを引き立てた。まず、張飛の容体はどうかと言うと、「身の丈七尺もある巨漢だった」「雷のような声だった」「豹頭環眼」などが見られる。そして、張飛より背丈が広い、張飛より髯が長い、さらに、張飛よりも智的に優れている。もしかしたら、張飛よりも勇猛ではないかと思われる。ここで注意すべきなのは、吉川英治が最初から関羽は智的な能力を持つ人だという見方である。

## 二、関羽の容姿：智慧を有する容貌

玄德看其人・身長九尺・髯長二尺・面如重枣・唇若涂脂・丹凤眼・卧蚕眉・相貌堂堂・威风凛凛。<sup>51</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

智的といえ、額もひろい。眼は鳳眼であり、耳朶は豊かで、総じて、体の巨きいわりに肌目こまやかで、音声もおっとりしていた。<sup>52</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 童学草舎)

と呼ばわりながら馳けてくる者があった。州郡の兵も、張飛も、何気なく眼をそれははせて振向くと、胸まである黒髯を春風になぶらせ、腰に偃月刀の佩環を夏々とひびかせながら、手には緋総のついた鯨鞭を持った偉丈夫が、その鞭を上げつつ近づいてくるのであった。<sup>53</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 三花一瓶)

小説『三国志演義』の中関羽の容体に関する描写が十分に細かく、身の丈9尺(約216cm)、2尺(約48cm)の髯、「熟した棗の実のような」と形容される紅顔で重さ82斤の青龍偃月

<sup>50</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.114~115。

<sup>51</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.6。

<sup>52</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.115。

<sup>53</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.134。



刀と呼ばれる大薙刀を持ち、赤兎馬に跨っている。

吉川英治『三国志』で、関羽のひろい額、豊かな耳朶などの外見は智恵を持つ人の証しであると主張した。さらに、関羽の儒者の位置づけを合わせるため、吉川英治はさらに関羽に繊細な肌や静かな声を与えた。この瞬間から、関羽の儒将としてのイメージが読者の頭の中へ持ち込まれた。

### 三、関羽の出身：寺子屋の先生

其人曰：“吾姓矣・名羽・字寿长・后改云长・河东解良人也。因本处势豪・倚势凌人・被吾杀了・逃难江湖五六年矣。今闻此处招军破贼・特来应募。”<sup>54</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

楊柳に囲まれた寺院がある。塀にそって張飛は大股に曲がって行った。すると大きな棗の木が五、六本あって、隠士の住居とも見える閑寂な庭があった。門柱はあるが扉はない。そしてその入り口に、

童学草舎

という看板がかかっていた。<sup>55</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 童学草舎)

暗い廊を歩いて、一室へ二人はかくれた。その部屋の壁には、孔子やその弟子たちの聖賢の図がかかっていた。また、たくさんな机がおいてあった。門柱に見えたとおり、童学草舎は村の寺子屋であり、主は村童の先生であった。<sup>56</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 童学草舎)

『三国志演義』の中、関羽の身の上に関する説明がないが、ただ簡単に「関羽が故郷で人を殺したから幽州涿郡に逃れてきた」と述べ、関羽の身の上にかんがらなくてはっきりしないことがわかるであろう。

一方、吉川英治『三国志』の中で、関羽が逃亡者から塾の先生に早変わりして登場した。彼が住んでいるところがまるで諸葛亮の臥龍崗と同列に論じることができると思わないが、

---

<sup>54</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.6。

<sup>55</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.114。

<sup>56</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.115~116。

外から見ると閑散とした場所だと思い、中へ入り、壁にいっぱい掛かって聖賢の図が目に映る。『三国志演義』の中の関羽もよく手に『春秋』を持ちながら、灯を手にもつ勉強するが、塾の先生のイメージとは程遠い。吉川英治『三国志』の中で、関羽が智恵と冷静を付与された。

#### 四、関羽の人間像

##### (一) 儒将関羽：経・史に通曉する

##### 1、最初の軍師役

毛宗崗本『三国志演義』の第一回では、黄巾賊の蜂起、そしてその討伐に立ち上がる諸侯が登場する。曹操も颯爽と現れたり、悪名高い董卓が劉備軍に助けられたりと、色々入り乱れての黄巾の乱鎮圧の始まりである。この回で忘れてならない有名シーンといえば桃園の誓いである。三国志時代の数あるエピソードの中でも、一、二を争う有名どころではないであろうか。

同到张飞庄上・共议大事。飞曰：“吾庄后有一桃园・花正盛开。明日当于园中祭告天地・我三人结为兄弟・协力同心・然后可图大事。”玄德、云长齐声应曰：“如此甚好。”<sup>57</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

関羽は、そう云いだして、劉備と張飛へ、こう相談した。

すべて物事は、体を基とする。体形を整えていないことに成功はあり得ない。

偶然、自分たち三人は、その精神において、合致を見、きょうを出発として大事をなそうとするものであるが、三つの物が寄り合っただけでは、体をなしていない。

今は、小なる三人ではあるが、理想は遠大である。三体一心の体を整えおくべきではあるまいか。

事の途中で、仲間割れなど、よくある例である。そういう結果へ到達させてはならない。神のみ禱り、神のみ祀っても、人事を尽くさずして、大望の成就是あ

---

<sup>57</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.6。

り得べくもあるまい。

関羽の説くところは、道理であったが、さてどういう体を備えるかとなると、張飛にも劉備にもさし当ってなんの考えもなかった。

関羽は、語をつづけて、

「まで兵はおろか、兵器も金も一頭の馬すら持たないが、三名でも、ここで義盟を結べば、即座に一つの軍である。軍には将がなければならず、武士には主君がなければならぬ。行動の中心に正義と報国を奉じ、個々の中心に、主君を持たないでは、それは徒党の乱に終わり、烏合の衆と化してしまう。—張飛もこの関羽も、今日まで、草田に隠れて時をまっていたのは、実に、その中心たるお人が容易にないためだった。折ふし劉備玄德という、しかも血統の正しいお方であったのが、急速に今日の義盟の会となったのであるから、今日ただいま、ここで劉備玄德どのを、自分らの主君と仰ぎたいと思うが、張飛、おまえの考えはどうだ」<sup>58</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 義盟)

毛宗崗本『三国志演義』冒頭第一回の劉・関・張三人による桃園の誓い、原作ではあっさり三人が意気投合してすぐさま義兄弟となるのに対し、吉川英治は大胆な改編を行って、関羽の人物造形を読者に強烈に印象づけている。

原作では義兄弟の契りを結ぼうと主張した人物はそそっかしい張飛である。これに対して、吉川英治は関羽が契りを主張させるという設定が最も相応しい。なぜかという、三人の中で、寺子屋の先生出身の関羽は最も智慧があるように見える。関羽の言動や行動も慎重に考えた結果である。例えば、「事の途中で、仲間割れなど、よくある例である。」と書いたように、蜂起を起こす前に途中で離散する結果を考え、このため、三体一心の体を整えなければならない。また「個々の中心に、主君を持たないでは、それは徒党の乱に終わり、烏合の衆と化してしまう」と主張し、血統の正しい劉備を主君に捧げることが最も賢明なやり方と言えよう。さすがに賢い関羽、説くところは全て道理であった。

それに、三人が義兄弟の契りを結んだ後、吉川英治が三人の役割を分業で説いた。

---

<sup>58</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.145~146。

もとより天下に臨むには足りない急仕立ての一小軍でしかなかったが、張飛の教練と、関羽の軍律と、劉玄徳の徳望とは、一卒にまでよく行きわたって、あたかも一箇の体のように、二百の兵は挙手踏足、一音に動いた。<sup>59</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 義盟)

張飛は兵士たちのトレーニングに責任があり、劉備の役割は徳をもって兵士たちを帰服させることである。この二人の位置づけは毛宗崗本『三国志演義』と同じであるが、関羽に智的な人として位置付けたのは初めてである。なぜ関羽に智的な人のイメージを付けたのかというと、彼が書いた檄文を見れば、分かりやすいと思う。

なかなか名文である。莊重なる慷慨の氣と、憂国の文字は、読む者をうたずにおかんかった。<sup>60</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 義盟)

『三国志演義』の中、智的な能力を持つ随一の人物が諸葛亮であることは言うまでもない。しかし、吉川英治の描きや関羽が下敷きをする檄文などの説明が示すように、関羽の智恵と諸葛亮の智恵は同じではない。諸葛孔明の智恵と言えば、謀をめぐらすのが得意なのを指し、主に物質の範囲に留まっている。一方、関羽の智恵が物の道理をわきまえるような儒者の智恵とすることができる。主に個人礼儀あるいは個人道徳など精神的教養に顕れる。

## 2、劉備への励まし

三国時代において、曹操は強い、確かに強い、その圧力をはねのける事は出来ても曹操の首を取るのは、至難の業だ。そのような時流から曹操に媚びて、その支配下に入った群雄は沢山いる。

その中で、劉備は、曹操が後漢王朝を喰い物にして、獻帝を蔑ろにしているのは許せないとして、曹操と敵対し目の敵にされて、何度も、戦争で敗れては命からがら逃げのびてする。このような経緯から劉備はいつまで経っても自分の勢力というものを持つ事が出来

---

<sup>59</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.162。

<sup>60</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.153。

ず、四十歳を超えても人の世話になり、荊州の劉表の下に居る。次の話は曹操に破られた劉備が劉表に身を寄せる前に、関羽との間の会話である。

関羽は杯を下において、

「むかし漢の高祖は、項羽と天下を争って、戦うごとに負けていましたが、九里山の一戦に勝って、遂に四百年の基礎をすえました。不肖、われわれも皇叔と兄弟の義をむすび、君臣の契りをかため、すでに二十年、浮沈興亡、極まりのない難路を超えてきましたが、決してまだ大志は挫折しておりません。他日、天下に理想を展べる日もあらんことを想えば、百難何かあらんです。お気弱いことを仰せられますな」と切に励ました。

「勝敗は兵家のつね。人の成敗みな時ありです。……時来れば自ら開き、時を得なければいかにもがいてもだめです。長い人生に処するには、得意な時にも得意に驕らず、絶望の淵にのぞんでも滅失に墜ちいらず、—そこに動ぜず溺れず、出所進退、悠々たることが、難しいのではございませうか」

関羽は、しきりと、言葉をつづけた。ひとり玄徳の落胆を励ますばかりでなく、敗滅の底にある将士に対して、ここが大事と思うからであった。

彼はふと、乾きあがっている河洲の砂上を見まわして、

「—ごらんなさい」と、指さして云った。「そこらの汀に、泥にくるまれた蓑虫のようなものが無数に見えましょう。虫でも藻草でもありません。泥魚という魚です。この魚は天然によく処世を心得ていて、旱天がつづき、河水が乾あがると、あのように頭から尾まで、すべて身を泥にくるんで、幾日でも転がったままでいる。餌をあさる鳥にもつえばまれず、水の干た河床でもがき廻ることもありません。—そして、自然に身の近くに、やがて浸々と、水が誘いにくれば、たちまち泥の皮をはいで、ちろちろと泳ぎだすのです。ひとたび泳ぎだすときは、彼らの世界には俄然満々たる大江あり、雨水ありで、自由自在を究め、もはや窮することを知りません。……実におもしろい魚ではありませんか。泥魚と人生—人間にも幾たびか泥魚の隠忍にならうべき時期があると思うのでございませう」<sup>61</sup>

(吉川英治、『三国志』四 孔明の巻 泥魚)

<sup>61</sup> 吉川英治、『三国志』四、講談社、1989年4月11日、pp.169~171。

この話は負け戦さを劉備に対し、関羽の一連の説得である。まず、項羽と劉邦の争い故事を引用して、劉邦が何度も失敗を経て、ようやく四百年の覇業を遂げたことを明言した。長い人生において、失敗はつきものだと劉備の落胆を励んだ。さらに、この道理を述べた後、関羽は人生を泥魚に喩え、人が痛目にあう時、苦難を耐え忍ぶ必要があると主張した。このように経書や典故を引用し、根拠がある論説することは史書を読み漁る人しかできないであろう。一つ一つの言葉哲理に富んで、おそらく劉備だけではなく、読者もある程度悟る。まさに、吉川英治が書いたように「関羽の話に人々は現実の敗戦を見直した。そこに人生の妙通を悟った」であった。

ここまで見てくると、関羽は劉備に対する励みは失敗を重ね、勇気を取り戻す必要がある劉備の一種の良薬ではなかろうか。吉川英治『三国志』の中、関羽の存在だからこそ、毎回の逆境でも、劉備は自分が掲げた旗印である、漢王朝の再興と打倒曹操の旗を終生降ろさなかったと思われる。

### 3、典例故実を知り尽くす

また、『三国志演義』の中で関羽が『春秋』を読むのが好きであることに言及した。吉川英治『三国志』の中でこの点がさらに明らかである。例えば、毛宗崗本『三国志演義』の第二十六回「袁本初損兵折將 关云长挂印封金」の中、張遼が曹操の命令を受け、関羽の離れるかどうかを試していた。

关公正闷坐・张辽入贺曰：“闻兄在阵上知玄德音信・特来贺喜。”关公曰：“故主虽在・未得一见・何喜之有！”辽曰：“兄与玄德交・比弟与兄交何如？”公曰：“我与兄・朋友之交也；我与玄德・是朋友而兄弟・兄弟而主臣者也。岂可共论乎？”

62

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第二十六回 袁本初損兵折將 关云长挂印封金)

「何を読んでおられるのか」

「いや、春秋です」

「君は、春秋を愛読されるか。春秋のうちには、例の有名な管仲と鮑叔との美

---

62 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.315。

しい古人の交わりが書いてある条があるが、—君は、あそこを読んでどう思う」

「べつに、どうも」

「うらやましいとはおもいにならぬか」

「.....さして」

「なぜですか。たれも春秋を読んで、管仲と鮑叔の交わりを羨望しないものはない。—我ヲ生ムモノハ父母、我ヲ知ルモノハ鮑叔ナリ—と管仲がいつているのを見て、ふたりの信をうらやまぬものはないが」

「自分には、玄德という実在のお人があるから、古人の交わりも、うらやむにたりません」

「ははあ。.....では貴公と玄德とのあいだは、いにしえの管仲、鮑叔以上だというのですか」

「もちろんです。死なば死とともに、生きなば生とともに。管仲、鮑叔ごとき類とひとつに語れませぬ」

.....<sup>63</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 避客牌)

毛宗崗本『三国志演義』では、この時点において、関羽が何をしているかが説明してなかった。そして、吉川英治『三国志』の書き換えに、張遼が訪問する時には関羽は『春秋』を読んでいると強調した。さらに、『春秋』に対して、関羽と張遼の間は議論があった。関羽は自分が古人の管仲と鮑叔の交わりを羨望しないと明言し、なぜかというと、自分と劉備の生死をともにするような信頼関係は管仲と鮑叔の類ではない。そしてここから自分の決意を表明した。そこで、私達の目の前で典例故実を知り尽くす関羽の顔が見せられた。

#### 4、文武ともに秀でる

ここまで、おそらく吉川英治は関羽の儒者気質がまだ不十分と思って、時々作品の中で他の登場人物の口を借り、側面から関羽の気質を際立たせる。

張飛は、蔭で舌打ちした。

---

<sup>63</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、pp.456~457。

「すこし兄貴は孔子にかぶれておる。武将と孔子とは、天職がちがう。—関羽、貴様もよくないぜ」

「なぜ俺が悪い？」

「閑があると、おぬしは自分の趣味で、兄貴へ学問のはなしをしたり、書物をすすめたりするからいけないんだ。—なにしろおぬしも根は童学草舎の先生だからな」

「ばかをいえ、じゃあ、武ばかりで文がなかったら、どんな人物ができると思う。ここにいる男みたいな人間ができはせんか」<sup>64</sup>

(吉川英治、『三国志』二 草莽の巻 母と妻と友)

ご示す如く、張飛によって、武将と孔子の天職が違って、前者は戦場で勇敢に敵と戦うことができる。しかし、孔子のような人のように、学校の先生ができるかもしれないが、戦場で功績を立てるわけがない。さらに、張飛は劉備の人を信じやすい性格は普段から関羽の教導による形成したものであって、関羽の寺子屋の先生の性質をしっかりとがめる。張飛の非難に直面して、関羽は「武ばかりで文がなかったら」事にはならないと弁解した。

確かに、単に勇気であるだけの武将は乱を起すだけであるとし、勇だけではなく「義」を兼ね備えなければ、「武」と呼ぶに足らない。こうして「武」という理念の中に、儒教的な倫理・道徳が求められるようになっていったのである。

「義」を称えられた関羽は、文の方面において、『春秋左氏伝』を愛読していたことが明らかである。関羽の「義」は、儒教を学んだ結果、身につけた「義」である。したがって、後、文武ともに秀でる関羽は儒教の武神として祭られることが自然であろう。

## 5、酒を飲まず、骨を刮って毒を療す

樊城から射掛けられた矢が右ひじに当たっていた関羽。帰陣して矢を抜き取ってみると、右ひじが青く腫れ上がる。鏃に塗ってあった毒がすでに骨までしみ透っていた。しかし関羽に退く気がなく、また傷も治らないので、大将たちが名医を探しているところに、関羽が毒矢を受けたことを聞いた華佗が陣屋を訪ねてきた。関羽のところに通されると、華佗は治療方法を説明した後、華佗が肉を切り骨を削って毒を取り除き、薬を塗って縫合する、と言うものである。

<sup>64</sup> 吉川英治、『三国志』二、講談社、1989年4月11日、pp.339~340。



时矣公本是臂疼・恐慢军心・无可消遣・正与马良弈棋；闻有医者至・即召入。  
礼毕・赐坐。茶罢・佗请臂视之。公袒下衣袍・伸臂令佗看视。

公饮数杯酒毕・一面乃与马良弈棋・伸臂令华佗割之。……佗用刀刮骨・悉悉有声。  
帐上帐下见者・皆掩面失色。公饮酒食肉・谈笑弈棋・全无痛苦之色。<sup>65</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十五回 关云长刮骨疗毒 吕子明白衣渡江)

衣服を担ぎながら、関羽は瘡を病んでいる片臂を医師の手にまかせ、なお右手では碁盤に石を打っていた。……二人とも碁に熱中していて、華佗の顔すら振り向かない。――が華佗は、関羽のうしろへ寄って、肌着の袖口をめくりあげ、じっと臂の傷口を診ていた。……「これは烏頭という毒薬が鏝に塗ってあったため、その猛毒はすでに骨髓にまで通っています。もう少し放っておかれたら片臂は廃物となさるしかなかったでしょう」

関羽は初めて華佗の顔を振り向きながら、

「今のうちなら治る法があるか」と、たずねた。<sup>66</sup>

(吉川英治、『三国志』七 関南の巻 建業会議)

『演義』の中の描写を通じて、関羽は矢瘡の痛みを少し和らげるため、馬良と将棋をすることが窺える。しかも、待ってられないほど華佗の治療を受けたい気持ちも感じられる。そのほか、関羽が華佗の手術を受ける前に何杯の酒を飲んで、手術中も酒をのみながら肉を食べた。

関羽は確かに度胸のある人であって、普通の人が我慢できない苦痛を辛抱することができる。しかし、関羽が手術の前に酒を沢山飲んだことは、人に「酒壮怱人胆（酒は人を大胆させることができる）」を連想させざるを得ない。さらに、手術中に血がぼたぼたと流れながら、大口をあげて肉と酒を食うことが確かに見苦しい。

吉川英治は粗忽な男のような関羽を見たくないから、ここを書き換えた。吉川英治『三国志』の中、最初関羽は将棋を指すことに熱中していて、華佗の顔すら振り向かなかった。関羽は全然腕の瘡に全然気にしない。華佗が毒はすでに骨髓にまで通っていて、もう少し

<sup>65</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.929~930。

<sup>66</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、pp.55~56。

放っておかれたら片臂は廢物となさると伝えるまで、関羽が初めて華佗を見上げた。その後、関羽は手術の前後にも酒を一滴でも飲まず、肉を一口でも食わず、順調に運んでいた。

「関羽は依然として碁盤から眼を離さなかった」と書いたように、吉川英治の筆で、関羽は骨を削って、毒を癒す時に際しても、儒者の気質をもつスマートな人である。

## (二) 武士関羽：「忠」・「仁」の士

### 1、漢の寿亭侯

話は毛宗崗本『三国志演義』の第二十四回に遡る。董承の曹操暗殺計画が露見すると劉備は小沛に逃れたが、関羽は下邳の守備と統治を行った。徐州の統治を任されたともいう。しかし建安五年（200年）、曹操が小沛・徐州を攻撃すると、劉備は敗れて袁紹を頼って亡命し、関羽は曹操に捕らわれた。曹操は関羽の人柄に感じ入り、彼を偏將軍に任じて厚遇を尽したが、関羽は「曹公の厚恩は有難いが死を誓い合った劉將軍を裏切ることはできぬ。必ず手柄を立てて曹公に恩返ししたうで立ち去りたい」と張遼に告げた。曹操は張遼とともに袁紹の將軍顔良を撃たせたが、関羽は敵軍勢の中に斬り込んで顔良を討ち、大軍を物ともせず首級を掲げて帰陣した。この功により漢寿亭侯に封じられた。関羽は曹操からの恩賞を封印して劉備のもとに去った。曹操は「主君のため忠義を尽しているのだ。彼を追ってはならぬ」と部下に命じる。

このエピソードを通じて、関羽の劉備に対する忠義の心を感じることが出来る。中には、袁紹の先鋒顔良を討つ関羽に対して、曹操は、彼の功績を称え、また引き留め策として、関羽を漢寿亭侯に封建するシーンがある。これについて、毛宗崗本『三国志演義』はごく簡単な37文字にまとめられ、読者には必ず何か特別な感じが無いはずであろう。

且说曹操见云长斩了颜良，倍加钦敬，表奏朝廷，封云长为汉寿亭侯，铸印送关公。<sup>67</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第二十六回 袁本初损兵折将 关云长挂印封金)

「.....これを、それがしに賜わるのですか」

関羽は一応、恩誼を謝したが、受けるともなく、印面の文を見ていた。

---

<sup>67</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.310。

寿亭侯之印

と、ある。

すなわち寿亭侯に封ずという辞令である。

「お返ししたそう。お持ち帰りください」

「お受けにならんのか」

「芳誼はかたじけのうござるが」

「どうして？」

「ともあれ、これは……」

なんと説いても、関羽は受け取らない。張遼はぜひなく持ち帰って、ありのまま復命した。

曹操は、考えこんでいたが、

「印を見ぬうちに断ったか。印文を見てから辞退したのか」

「見ておりました。印の五文字をじっと……」

「では、予のあやまりであった」

曹操は、何か気づいたらしく、早速、鑄工を呼んで、印を改鑄させた。

改めてできてきた印面には、漢の一字がふえていた。

—漢寿亭侯之印—と六文字になっていた。

ふたたびそれを張遼にもたせてやると、関羽は見て、呵々と笑った。

「丞相は実によくそれがしの心事を知っておられる。もしそれがし風情の如く、ともに臣道の実を践む人だったら、われらとも、よい義兄弟になれたろうに」

そう言って、こんどは快く、印綬を受けた。<sup>68</sup>

(吉川英治、『三国志』三 臣道の巻 燈花占)

その一方、吉川英治は長かった紙面に「漢寿亭侯」という物語の経緯を説明した。確かに、関羽といえ、日本でよく知られている「漢寿亭侯」の話がある。曹操が関羽の功績を称えて「寿亭侯に任ずる」という意味で「寿亭侯」と書かれた印章を贈ったが、関羽は気に入らないと突き返した。そこで今度は、「漢の寿亭侯」を意味する「漢寿亭侯」と刻まれた印章を贈ったら、関羽は「丞相は実によくそれがしの心事を知っておられる」と満足して、受け取ったという話である。

<sup>68</sup> 吉川英治、『三国志』三、講談社、1989年4月11日、pp.434~435。

ここまで見てくると、心の中にある疑問が浮かんできた。なぜこのエピソードが吉川英治『三国志』の中に収録されたのか。その源をみつけるため、以下の三つの文献を取り上げた。

羽望見良麾蓋・策馬刺良于萬眾之中・斬其首還・紹諸將莫能當者・遂解白馬圍。  
曹公即表封羽為漢壽亭侯。<sup>69</sup>

(陳壽撰 裴松之注、『三国志』蜀書 卷三十六 关张马黄赵转第六)

...一面には累次受くるところの金銀を以て、一一庫中に封置して、漢壽亭侯の印を堂上に懸け、二夫人を請うて車に上らしめ...<sup>70</sup>

(久保天随、『三国志演義』 第三 関羽、五関六将を斬る)

曹操は顔良を誅してより、彌関羽を重じ、壽亭侯に封ぜんとして、帝に奏して印を鑄させ、張遼を使として遣しければ、関羽再拜して印を見るに、壽亭侯之印とあり、乃ち辞して申しけるは、某いかんぞ、浩る高官を受くるとを得ん、張遼申しけるは、將軍顔良を誅して、希代の功を立て玉へり、此故に封賞あり、何ゆに辞し玉ふぞとて、再三に及べども受けざりしかば、無力かへりて、右の趣を報ず、曹操しばらく思案して申しけるは、関羽この印を見て、其後に辞したるか、張遼が曰、某ゆいて先印を渡し候へば、関羽よく印を見て、再三に及べども、固く辞して受候はず、曹操嘆じて申しけるは、此わが誤りなり、早く印を鑄改めよとて、漢壽亭侯之印と云六字を刻み、再び張遼に持たせて遣しければ、関羽これを見て打笑ひ、丞相よく我心を知玉へりとて、再拜して受けたりけり。<sup>71</sup>

(湖南文山、『通俗三国志』上 卷之十 関羽延津斬文醜)

その第一は晋陳壽の『三国志』から採録したものである。見ることによって、史実も毛宗崗本『三国志演義』も同じである。曹操は、関羽の手柄にむくい、漢壽亭侯に封建した。しかし、どちらも簡単に触れ、このシーンを強調する気がない。

<sup>69</sup> 陳壽撰 裴松之注、『三国志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.939。

<sup>70</sup> 久保天随、『三国志演義』、隆文館、1906年12月20日印刷1906年12月25日発行、p.73。

<sup>71</sup> 湖南文山、『通俗三国志』上 卷之十、早稲田大学出版社、1911年5月21日印刷1911年5月24日発行、pp.232~233。

前文に触れたように、吉川英治が『三国志』の序の中「少年のころ、久保天随訳の『三国志演義』を愛読し、夜のふけるのも忘れて読みふけたので、父に「早く寝ろ」と叱られることがたびたびあった」と自ら書いている。この久保天随が著した『三国志演義』では、関羽が曹操から受けた「漢寿亭侯」の印の由来さえ言及せず、ただ劉備のところに戻す前に、曹操からもらった賜り物に封印をし、漢寿亭侯の印を堂上に懸けたという筋である。陳寿の『三国志』と毛宗崗本『三国志演義』とほんの少し違いがあるが、全体的な筋が同じである。

さらに、三番目の記す、湖南文山が著した『通俗三国志』を見てみると、やっと吉川英治『三国志』と同じような「寿亭侯」の印から「漢寿亭侯」になった話が見つかった。

このような結果に対して、吉川英治が小説を書くときに参考にした文献の違いと密接な関わりがあると言わざるを得ない。

吉川英治は、毛宗崗本の完訳である久保天随の『新訳演義三国志』(1912)を愛読しているが、中には「漢寿亭侯」のエピソードがないはずだ。なぜかという、この毛宗崗の父である毛綸は李卓吾本を元に各書を取捨選択し、『演義』の改訂に取り組んでいた。その後毛宗崗はそれを引き継いで、記事や文章の誤りを正し、自らの評価を挿入して毛宗崗本を完成させた。成立時期は康熙5年(1666年)以降であるという。首巻には金聖歎に仮託した序文と「凡例」「読三国志法」および目録・図録を収める。「凡例」は毛宗崗が底本とした李卓吾評本からどの部分をどういった方針で修正したかを説明したもの、「読三国志法」は毛宗崗自身による『演義』の解説である。

毛宗崗は校訂にあたって、なるべく史実を重視し、それまでの刊本に採録されていた花関索説話などの荒唐無稽な記述や、周静軒の詩を削除する方針をとった。たとえば毛宗崗が削った逸話に「漢寿亭侯」故事がある。関羽の漢(即ち劉備)に対する忠節を示す話であるが、実際には関羽は「漢寿」という土地(現在の湖南省常德市漢寿县)に封じられた亭侯<sup>72</sup>であり、漢と寿を切り離す話には無理がある。「漢寿」という地名を「漢」と「寿」に切り離して作った李卓吾本までの『三国志演義』のフィクションである。ところが、史実を重んじる毛宗崗本は歴史的な事実に戻そうとしたので、漢寿亭侯の話は切っている。

一方、吉川英治の『三国志』が下敷きにしたという湖南文山の『通俗三国志』は、清代(1636-1912)の毛宗崗本ではなく、明代(1368-1644)の李卓吾本<sup>73</sup>を底本とした翻訳であ

---

<sup>72</sup> 後漢の爵位のひとつ。

<sup>73</sup> 明の著名な思想家、李卓吾に仮託した評をつけた『李卓吾先生批評三国志』。

る。元明代にはむしろ「漢の寿亭侯」の解釈の方が一般的であった。その時期の刊本には収録されていたため、李卓吾本を輸入・翻訳した日本では、この説話が残り、広く知られている。

こうしてみると、吉川英治は確かにこの二つのバージョンの『三国志演義』に対してある程度理解できる。「漢寿亭侯」のシーンについては、吉川英治は関羽に忠義の人のイメージを与えられる理由はただ湖南文山の『通俗三国志』を参照した結果ではなく、日本人は忠義という言葉に対する気持ちと何らかの係りがあると思われる。実は、江戸時代の日本において「武士道」という言葉はすでに顕れ、その武士階級の倫理・道德規範及び価値基準の中、忠義という最も重要な項目がある。主君の命令は絶対だったが、武士は主君の奴隷ではなかった。主君の間違った考えに対して本物の武士たちは命をかけて己の気持ちを訴えた。忠義とは強制ではなく、自発的なものである。武士たちはあくまで己の正義に値するものに対して忠義を誓ったのだ。この武士たちの忠義は関羽の漢（即ち劉備）に対する忠義と同じ物ではなかろうか。

ごまかしに満ちる三国時代において、関羽の忠義という品質が一層眩しい。これはまさに吉川英治が「漢寿亭侯」というエピソードを加えられたわけである。このような書き方は単に関羽の漢への忠を表すばかりでなく、同時に日本昔の武士の美德、更には日本人の道德観を徹底的に体现することができる。

## 2、敗れた敵軍を救う

『三国志演義』の中、関羽は智恵と勇気を兼ね備えるイメージを人々の前に立つ。これは彼の戦場で敵を殺す時の勇猛や臨機応変の戦い方と深い係りがある。例えば、『演義』の第七十四回には、関羽が魏の樊城を水攻めし于禁ら七軍を破るシーンがある。関羽、陸遜の「呂蒙、大都督を退任」との偽情報にはまり、全力で樊城攻略に向かう。樊城を守る曹仁は守りを固める。魏の援軍として大将于禁、副将龐徳が駆けつけるが、雨水を貯めておいた堰を切って樊城を水攻めし于禁七軍を大破、襄陽を得るという流れである。

関公将船四面围定・军士一齐放箭・射死魏兵大半。<sup>74</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十四回 庞令明抬椽决死战 关云长放水淹七军)

---

74 明の著名な思想家、李卓吾に仮託した評をつけた『李卓吾先生批評三国志』。

矣公催四面急攻・矢石如雨。<sup>75</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十四回 庞令明抬榉决死战 关云长放水淹七军)

「筏にすぎり、船へ漂いついてくる敵は、降人と見て、助けてつかわせ。激流に溺れてゆく者は、いずれ助からぬ命、無駄矢を射るな」.....

関羽は夜どおし洪水の中を漕ぎ廻り、多くの敵を水中から助けて降人の群れに加えていたが.....<sup>76</sup>

(吉川英治、『三国志』七 凶南の巻 七軍魚鼈となる)

このエピソードに対して、毛宗崗本『三国志演義』は関羽の熱心に敵を殺す気持ちを見せてくれたが、洪水の中に落ちる敵を、みな射殺しのやり方にはいささか驚かされた。翻って吉川英治はこのシーンについての描写を見てみると、関羽の溺れる敵軍への助けを通じて、関羽に慈悲かつ博愛の新しいイメージを与えられた。

私から見ると、吉川英治は『三国志』の中わざわざ関羽を敵軍の兵士を救う手配をして、この創作にはそれなりの特殊な意味を持つ。既述のごとく、吉川英治は日本武士道の中の忠義を強調するため、わざわざ「漢寿亭侯」の話を加えて、関羽を忠義の人のように描かれた。ここで、関羽に与えた仁愛の精神も日本武士道の一つの倫理綱目である。武士の仁愛が他の仁愛と異なるわけではないが、武士の場合には愛は盲目的な衝動ではなく正義に対して適当なる顧慮を払える愛であり、また単にある心の状態としてのみではなく、生殺与奪の権力を背後に有する愛だからこそである。特に、弱者や虐げられた者、敗れた者への「仁」は、武士に相応しいものとして賞賛された。だから吉川英治は『三国志』中、わざわざ関羽が敵兵士を救うという手配を加えられ、「仁」という日本人の目の中の武士の高貴な人柄を関羽に与えたいことがわかりやすいであろう。

「仁」は柔和なる徳であり、女性的な慈愛と説得性を持つ。それに対し「忠義」は、真直なる道義と厳格なる正義とを持つ男性的な徳である。吉川英治の筆で、同時にこの二つの優秀な人柄を備えた関羽はなんとキラキラ輝いたことか。

## 五、関羽の最期：洗練された一般人

<sup>75</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.924。

<sup>76</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.43。

樊城を水攻めにし、救援にきた于禁をとりこにし、龐徳を斬った功績を立った関羽は曹操に怖がられる存在になった。許都から遷都を考えたほどだった。

しかし冷静な司馬懿らは関羽軍の兵糧欠乏を見抜き、荊州をエサに孫権と同盟して、関羽を挟み撃ちにする計略を立てた。孫権配下の隠密部隊は、長江をさかのぼり、関羽の本拠荊州を落とし、背後から関羽軍を衝いた。これには呂蒙の働きが大きかった。前後に敵を受けた関羽は、麦城で態勢を整えようとしたが、逃亡者が続出して、もはや戦力はいくらもなかった。夜に乗じて蜀へ脱走を凶ったところを、養子の関平ともども呂蒙の配下につかまって斬られた。

『演義』では、関羽の最期はことのほか壮烈で、死後も劉備の夢枕に立つ。そのほか、自分を陥れた呉の呂蒙に憑依して、荊州を奪ったことを祝う宴席で、孫権を罵る。呂蒙はその場に討ち倒れ、七つの穴から血を流して死んでしまった。さらに、洛陽で首実検した曹操が「羽將軍しばらくだった」と呼びかけると、関羽の髯が生きているように動いたので、曹操はびっくりして昏倒、これがもとで曹操は死ぬ。

関羽の死に巡って、『演義』は第七十六回～七十七回までに二章で詳しく紹介した。吉川英治もこのシーンに対して何の補うことができないようだ。しかし、吉川英治はストーリーを再編成することを行い、物語の焦点を再び関羽に置いた。読者のために一代の英雄がどのように老衰し、そして敗走し捕虜になって、ついに殺された過程を語られた。

### (一) 鬚糸の雪 (老衰した関羽)

まず、吉川英治はわざと「徐公明大いに沔水に戦い」を「鬚糸の雪」に書き直し、ストーリーの軸を関羽に戻させた。

「一別以来、いつか数年、想わざりき將軍の鬚髪、ことごとく雪の如くなるを。  
一昔それがし壮年の日、親しく教えをこうむりしこと、いまも忘却は仕らぬ。今日、幸いにを顔を拝す。感慨まことに無量。よろこびにたえません」<sup>77</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 鬚糸の雪)

『演義』にはこの徐晃からの挨拶も窺える。物語の進行中において、関羽は具体的にどのように年寄りじみていて、どのように両方の鬚は霜のようになるのか、一切言及しな

<sup>77</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.86。



った。それにもかかわらず、関羽の旧交である徐晃の挨拶に通じて、私たちに「時間は人を待たず」という言葉の意味を深く体得することができた。光阴一度去ってまた帰らず、英雄はすでに晩年に入った。このタイトルに通じて、吉川英治は関羽に対する無限の同情の念も感じることができる。

## (二) 月落つ麦城 (惨敗を喫する関羽)

呂蒙の返信を聞いたところの関羽について、『演義』はこのように語っている。

关公大怒：“此奸贼之计也！吾生不能杀此贼，死必杀之，以雪吾痕！”<sup>78</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十六回 徐公明大战沔水 关云长败走麦城)

呂蒙の姦計を見破った関羽が大いに怒る。さらに、自分はきっと重圍から脱出し、そして呂蒙を殺すと決意した。このような描写を通じて、私たちは関羽の怒りを深く感じながらも、思わず関羽が莽漢と似ている感じもする。

関羽は長嘆しゅうして、

「ああ、われはとうてい、呂蒙の遠謀には及ばない。今思うに、すべて呂蒙の遠い慮りであった。荊州の民をも、それまで帰服せしめてしまうとは、恐るべき人物……」

あとは口を閉じて何もいわなかった。ただ眼底の一涙がきらと光ったのみである。<sup>79</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 月落つ麦城)

その一方、吉川英治の『三国志』を見ると、私たちはもう莽漢のような関羽が見えなくなった。その代わり、私たちの目の前に見せたのは大きな打撃を受けても、敵を褒めることも忘れない温厚な関羽である。関羽の温厚な一面を持つことは彼の脱走兵に対する態度から窺える。『三国志演義』で描かれた「关公率兵取荆州・军行之次・将士多有逃回荆州者。

<sup>78</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.944。

<sup>79</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.91。

関公愈加恨怒・遂催军前进。」<sup>80</sup>という焦っている関羽に対し、吉川英治が描き出した関羽は逃走した兵士に責めたいことはない。ただ、「去る者は去れ、一人になっても我は荊州に入る」<sup>81</sup>と自分で自分を励ましながら、決然と進軍する。このような関羽のイメージはちょうど吉川英治が極力作った儒者関羽のイメージとぴったり合わせる。ただ目に涙が輝かせる関羽のイメージはややもろくて弱いではなかろうか。

さらに、関羽は挫折に直面するとき、敵の攻撃に対して無力である。

関羽は憮然として、月に竦み立っていた。

……

「万事休す」

関羽のすがたは冷たい石像のように動かなかった。<sup>82</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 月落つ麦城)

関羽は幽暗な一室に瞑目していた。<sup>83</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 月落つ麦城)

吉川英治の目の中で、関羽は普通の人だけかもしれない。取り返しのつかない負けに直面すると、関羽も先に「万事休す」を言う。そして、戦場で石像のように動けなくなる時もある。一人で幽暗な一室に瞑目する関羽の姿を想像すると、読者は思わずに涙を流している。老衰した関羽はこのような大敗を経験した後はまたどのようになるか、その惨状は想像するに忍びない。

### (三) 蜀山遠し (虜になる関羽)

吉川英治は関羽が蜀国へ駆けつける途中に捕えられるシーンに「蜀山遠し」と名づけた。まず、この関羽の最期について、彼の傲慢ともいえる自尊心の強さのせいで、敗北を喫するという『演義』からの非難に対し、吉川英治がこのように書いている。

後の史家は、紛議して、これを玄徳の順調と好運がふと招いた大油断であると

<sup>80</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.945。

<sup>81</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.92。

<sup>82</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.92~93。

<sup>83</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.97。

いい、また王佐の任にある孔明の一大失態であるとも論じて、劉備と孔明のふたりを非難したりした。<sup>84</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

全く関羽に非難する気はなかった。史家の口を通じて、惨敗を喫する責任を劉備と諸葛亮に転嫁した。このような手法に通じて、吉川英治が関羽を好む気持ちが感じられる。彼は敗北の責任を老衰して、人生の最後の段階に悲惨な結末を迎えた関羽にしたくない気持ちがわかるであろう。

関羽は当代の名将にちがいがなかった。けれどそれにしても限度がある。ひとたびその荊州の足場を失っては、さすがの関羽も、末路の惨、老來の戦い疲れ、描くにも忍びないものがある。<sup>85</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

関羽が敗北を喫することは彼の一生の中で最後の旅であり、輝かしい人生と別れを告げる不帰の旅行とも言える。その心の悲しみはもちろん、詳しく述べる必要もない。しかし、いくら作者や読者が別れるに忍びないといえども永遠に彼と別れなければならないため、著者はこの一節の冒頭、自分が深く感じたことを書いた。なかなか涙を誘う話である。

続いて、関羽はどのように诸葛瑾の投降勧告を拒否したのか、どのように王甫や周倉と涙を流して別れたのかなどを書いた。

王甫諫曰：“小路有埋伏・可走大路。”公曰：“虽有埋伏・吾何惧哉！”<sup>86</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十七回 玉泉山关公显圣 洛阳城曹操感神)

さすがの関羽もいまは百計尽きたかの如くであった。王甫や趙累にむかって、「もう最後である。顧みるに、この大敗を招いたのは、一に関羽の才が足らなかったというしかない。寥化も途中で討たれたかどうしたか、所詮、援軍を待つ

<sup>84</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.100。

<sup>85</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.101。

<sup>86</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.951。

望みも絶えた」

と、絶望を洩らした。義胆忠魂、一代に鳴らした英傑も、いまは末路を覚るか  
と、王甫は思わず涙をながした。<sup>87</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

両作品において、このシーンに対する描写を通して、関羽は『三国志演義』の中でこれ  
まで剛情な性格を改め、敗北を喫する責任は全て自分の力不足にまとめられた。一代に鳴  
らした英雄が絶望を洩らした光景は、王甫に涙を流させるだけでなく、読者も思わずひそ  
かに感傷的になるはずだ。

一山を越えて、また次の一山を迎えた。その間は西方の沢が裾をひいて、まる  
で漆壺のような闇の盆地を抱いている。深々として白きは水、岸々として高きは  
岩、関羽や関平の駒は幾たびも石ころや蔓草につまずきかけた。<sup>88</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

「父上っ、父上っ……」

どこかで関平の声がする。関羽は心がみだれた。子は何処？趙累その他の味方  
は如何にと。<sup>89</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

このシーンに対して、吉川英治氏は物語の進行中に大幅に補うことを行わなかった。し  
かし彼の感慨があつて、彼は関羽が脱出途中にある景物の描写、特に関羽のひとり息子が  
完全に敵に包囲された時心配な気持ちなどを通じて、思わず読者に悲しみ、孤独、絶望を  
感じさせた。まるで関羽が長い帰省中に疲れてしまい、足音の重さを感じ、故郷の家族は  
高嶺の花のようだと感じた。

#### (四) 草喰わぬ馬 (死に赴いた関羽)

『三国演義』において関羽が死んだ後、ごく簡単に述べる方と比べ、吉川英治の書き方

---

<sup>87</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、pp.106~107。

<sup>88</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.108。

<sup>89</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.110。

から、彼は関羽への深い思いを感じることができる。

時、建安二十四年の十月で、この日、晩秋の雲はひくく麦城の野をおおい、雨とも霧ともつかぬ濛気が冷やかにたちこめた。<sup>90</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 草喰わぬ馬)

吉川英治は「雲が麦城を覆い隠す」、「雨とも霧ともつかぬ濛気が立ち込める」など景色に対する描写を通じて、自分の哀愁を託すことがよくできた。関羽が死去していくため、全世界さえ荒涼としている。

さらに、吉川英治は「玉泉山に聖を顕す」を「草喰わぬ馬」と改めて、関羽が死んだ後に赤兎馬の飲まず食わずの状況を具体的に描いた。

なぜならば拝領の赤兎馬は、関羽の死んだその日から草を喰わなくなったからである。秋日の下に曳きだして、いかに香しい飼料をやっても、水辺に覗かせても首を振っては悲しげに麦城のほうへ向かっていなくなのみであった。<sup>91</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 草喰わぬ馬)

曹操と孫権の挟み撃ちにより死去した関羽の魂は、なおこの世に残り、悠々、空に浮かんで、玉泉山の普浄のところに飛び来たという『演義』の流れと比べ、吉川英治は原作の中の「其馬数日不食草料而死」という一言に重点を置いた。そして、「玉泉山に聖を顕す」と「呂蒙に憑依して、孫権を罵る」という二つ最も有名な話に対して、吉川英治はそれらを関羽の死後に伝わった不思議な伝説とみなす。関羽の武徳と民望が、それを深く惜しみ嘆く庶民の口々に醸されて、いつか神秘を加えた説話をつくり、それが巷に語られると纏めてきた。

新しく作り上げた「草喰わぬ馬」というシーンについて、馬は草を食べないことは馬主人に対する懐かしい気持ちをよく表現できる。これは亡くなった人に対する生きる者の悲しみの現れである。このような書き方で、吉川英治は自分が関羽と別れた時の悲しみを馬に託してよく表現できた。

<sup>90</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.113。

<sup>91</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.114。

## 六、関羽の死因：天命に帰す

毛宗崗本『三国志演義』の中、関羽の右臂を治療してもらったが、完全に治らなかった。結局、敵は大勢で味方は小勢だったような状況において、昔のように青竜偃月刀を振って、敵陣を脱出することができないため、生け捕られている。関羽の敗北を喫することは矢傷を受けることと直接関係があると言わざるを得ない。それは『演義』の第七十六回の中で顕れる。

战八十余合・公虽武艺绝伦・终是右臂少力。<sup>92</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十六回 徐公明大战沔水 关云长败走麦城)

关公闻言・怒气冲塞・疮口崩裂・昏绝于地。<sup>93</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十六回 徐公明大战沔水 关云长败走麦城)

まず、徐晃と戦って、右臂のけがのせいで、全力で戦うことが出来ず、ついに退いていた。その後、荊州すでに陥落し、多くの人が呉国に投降したと聞いてから、傷口が崩れて卒倒した。『三国志演義』の中で、関羽の矢傷と彼の敗退が必然の関わりがあることが言うまでもない。

関羽が左の臂の矢瘡は、いまは全く癒えたかに見えるが、その手に偃月の大青龍刀を握るのは、病後久しぶりであった。<sup>94</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 鬢糸の雪)

関羽の駒はまた何物かに脚をからまれていなないた。天命ここに終われるか、同時に関羽は鞍から落ちた。<sup>95</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 蜀山遠し)

吉川英治『三国志』では、作者は関羽の左腕に矢の瘡をし、右腕ではない。しかも関羽の矢傷は名医華佗の真摯な治療の下で完全に治り、関羽の矢傷と「敗北を喫する」の間に

<sup>92</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.942。

<sup>93</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.943。

<sup>94</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.86。

<sup>95</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.110。

必然な関連性がなくなった。

吉川英治はさぞかし比較的完璧な関羽イメージを作りたいであろう。彼にとって、一代の英雄は最終的に毒矢を受けて死ぬことがあまりにも悲し過ぎるのではなかろう。したがって、吉川英治『三国志』の中、関羽は天命から死んだ。この点について、骨に浸透する毒を削る前に、関羽が衆を慰めることと完璧に呼応した。

「王甫王甫。また関平もそのほかの者も、無用な時を費やした無用な心をつかわなくてもよい。わが生命はすでに蜀へささげてあるものだ。武人の一命は常に天これをするのみ。樊城一つを攻めあぐねて荊州へ引き揚げたりと聞いては以後、関羽の武名はともあれ、蜀の国威にかかわる。——一矢の瘡など何かあらん。戦場に立てば十矢百矢も浴びるではないか。黙って、わしの下知るに伏せ」<sup>96</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 骨を削る)

吉川英治『三国志』では、関羽は「天命」を受けたため死に赴いた。吉川英治は関羽の左腕に矢をさせて、そして矢傷が完全に治った後戦場に入った。関羽は矢傷で「衰え」の一環を省いて、この偉大な英雄は直接「盛り」から突然に「亡」に向かっている。昨日はまだ盛んであり、今日もうすでに亡くなった。この関羽の人生はまるで日本の国花桜のような美しいものと言える。その花は美しく、人の心躍らせる。桜が日本人に好かれる理由は、春が来たことを知らせること以外に、その短いけど美しい命と、その命が終わるときの静かさと清潔さにある。桜の命は非常に短い、その壮絶は一瞬の美しさにある。それは関羽が人生の頂点に達した後、すぐに亡くなった人生と似ている。関羽人生の中一番輝いた時期は桜の花期のように短い。一瞬で咲いて、すぐに散る。その短い時間の中で、桜のように美しく生きること、その精神は多くの日本人が認められている。吉川英治が桜のピンクを関羽の血液の中に溶けてさせた理由は日本人の考え方と緊密な関係がある。このような汚れない関羽のイメージは日本の民衆に受け入れられやすいと思われる。

## 七、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における関羽像の相違

中国において、『三国志演義』の人物を論じる時、なぜ劉備でなく、孔明でなく、関羽から始めるのか。それは、関羽こそがこの物語のかくれた主人公、いや真の主人公と言って

<sup>96</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.53。

もよい、と思えるからである。魯迅は『中国小説史略』の中で『演義』の人物描写を評して、「劉備の温厚長重を表そうとするあまり偽物くさく、諸葛の知謀を述べて妖怪じみている。ただ関羽については特に優れた表現が多く、その武勇の有様も場面で目に見るようだ。」<sup>97</sup>、つまり劉備は温厚にみせようとしてかえって偽善者のようになり、孔明の智恵者ぶりはまるで妖術使いかと思われる。ただ関羽だけが見事な描写で、その正義感あふれる勇者ぶりをまのあたりに見るようだ、と言った。

その一方、日本の決定版である吉川英治『三国志』の中に描かれた関羽のイメージは中国とどのような差異があるか。下の総括的な表を通じて、明らかにすることができる。

毛本と吉川本における関羽像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』
容体	身長九尺、髯長二尺、丹凤眼、卧蚕眉、相貌堂堂、威风凛凛(大男)	額が広い、耳朶は豊か、繊細な肌、静かな声(智恵を有する容貌)
初登場	故郷で人を殺したから幽州涿郡に逃れてきて、 劉備・張飛と出会った(人殺し)	張飛との比較を通じて、最初に好印象を与えられ
身の上		閑散とした場所に住んでいる 寺子屋の先生
人間像	万人敵、剛情な人、忠義の人	経・史に通曉する儒将、 「忠」・「仁」を備える武士
最期	第七十六回 徐公明大戦沔水 関雲長敗走麦城 (第七十六回 徐公明大いに沔水に戦い 関雲長敗れて麦城に走る) 第七十七回 玉泉山関公顕聖 洛陽城曹操感神 (第七十七回 玉泉山に関公霊を顕わし 洛陽城に曹操神に感ず)	鬢糸の雪(老衰する) 月落つ麦城(敗北を喫する) 蜀山遠し(捕えられる) 草喰わぬ馬(殺される)  洗練された一般人

<sup>97</sup> 魯迅著 中島長文訳：『中国小説史略』、平凡社東洋文庫、1997年6月、p.361。



死因	矢傷	天命に帰す
----	----	-------

表三（筆者作成）

表で示す如く、二つの作品において、描かれた関羽のイメージが幾つかの違いがある。まず、関羽の容体から言うと、一つが長身の偉丈夫で立派な髯をたくわえ、赤ら顔である大男のイメージが強烈であった。もう一つは「額が広い」「耳朶は豊か」「繊細な肌」「静かな声」の智恵を有する容貌であった。続いて、関羽初登場のシーンにおいて、『演義』のごく簡単な描き方に対して、吉川英治は関羽に好印象を与えるため、彼を張飛との対話から登場させた。張飛の焦りと違って、穏やかな人のように見える。ここで、吉川英治はまず直接に関羽の容体を述べるのではなく、張飛と比べることによって、関羽の非凡さを引き立てることも新しい視点である。そして、関羽の身の上について、大きな違いが顕れた。それは『演義』において、関羽は故郷で人を殺したから幽州涿郡に逃れてきて、劉備・張飛と出会った人殺しである。一方、吉川英治『三国志』の中で、関羽は塾の先生にはや変わりして登場した。閑散とした場所に住んでいる関羽が智恵と冷静のイメージを付与された。そして、作品中に現れた人間像について、『演義』の中関羽は万人敵である。しかし、自尊心が非常に高い事も挙げられる。関羽には「自信過剰な上に、部下には優しいが同格の士大夫を見下す」という悪癖があった。吉川英治は儒将関羽と武士関羽という二つの新しいイメージに関羽に加えた。最後の関羽の死について、吉川英治は物語の流れを再構築することを行い、物語の焦点を再び関羽に置いた。「鬚糸の雪」（老衰する）「月落つ麦城」（敗北を喫する）「蜀山遠し」（捕えられる）「草喰わぬ馬」（殺される）という四つのシーンを通じて、読者のためにある絶世の英雄がどのように老衰し、そして敗走し捕虜になって、ついに殺された過程を語られた。この過程の中で作者の心の悲しみもよく表現した。ついに、比較的完璧な関羽イメージを作るため、関羽の矢傷による殺された死因も天命に帰すに書き直した。（表三）

#### （一）毛宗崗本『三国志演義』の関羽像

関羽と言え、蜀漢の創始者である劉備に仕え、その人並み外れた武勇や義理を重んじた彼は敵の曹操や多くの同時代人から称賛された。『演義』では、関羽の武や義を強調するため、様々な工夫が施されている。まず本来別人が挙げた功績を関羽に移し替える作業で

ある。たとえば董卓の部将華雄を斬る功績は本来孫堅のものであったが、これを関羽に移し替えて「温酒斬華雄」という名場面に転換した。また曹操に降った関羽が白馬の戦いで袁紹の部将顔良を斬ったことは正史にも載るが、その後さらに文醜まで関羽が斬ったとするのは創作である。武神・軍神として関羽の武を強調する作為である。

忠義の将としての姿は「千里走単騎」で典型的に語られる。一時曹操に降伏していた関羽は、袁紹軍に身を寄せている旧主劉備の下に参ずるため、曹操から受けた栄典をすべて返上し、劉備夫人を護衛しながら、行く手を塞ぐ五つの関門で六人の将を斬る。この逸話の挿入により、関羽の劉備に対する忠義と、曹操の関羽に対する惚れ込みようがさらに強調された。

さらに、関羽の義将たる側面が最大限に発揮される名場面が「華容道」である。赤壁の戦いにおいて諸葛亮は、関羽が以前曹操から恩義を受けていたことを知りながら曹操の追撃を命じた。しかし関羽は華容道で敗残の曹操とまみえると、情義からあえて曹操を見逃すのである。それまで丁寧に叙述されていた関羽と曹操の因縁を伏線として形成された非常に感動的な場面であり、毛宗崗も総評でこの場面における関羽の義を絶賛している。

これ程までに称揚された関羽は、非業の最期を迎えた。彼の最大の失点は、外交的に呉と決裂させ、荊州を失った。この悲劇を招いた原因は、関羽の傲慢ともいえる自尊心の強さである。その後、矢傷のせいで全力を出せず、呂蒙の計略で捕らえられ、孫権に処刑された関羽は「顕聖（神として姿を現す）」し、普静和尚の前に姿を現す。そして勝利の宴を祝う呂蒙に取り憑いて、呪い殺すという神罰をくわえ、さらに首となった後に曹操の健康まで害する。このようにして毛宗崗本『三国志演義』の中の「義絶」関羽は文字通り神となった。

## （二）吉川英治『三国志』の関羽像

吉川英治から見れば、関羽はまだ二つの最も重要な人間像を持つ。彼は関羽を寺子屋の先生の身の上を与え、そして関羽を経・史に通暁する儒将と忠・仁を備える武士に変身させた。

儒将として、関羽は、智では劉備の良き相談相手となり、たまに劉備を励ます言葉も道理に尽くす、彼の言動や行動も慎重に考えた結果である。武では虎将・張飛にも劣らぬ羅刹ぶりを見せ、文武両道の面を持っていた。

武士として、関羽は最後に劉備に帰参する「忠義」が称揚されるべきだ。この中、毛宗

岡本『三国志演義』が削られた「漢寿亭侯」のエピソードがある。吉川英治は長かった紙面にこの物語の経緯を説明した。私見によれば、吉川英治が「漢寿亭侯」というエピソードを加えた理由はただ湖南文山の『通俗三国志』を参照した結果ではなく、日本人の忠義という言葉に対する気持ちと何らかの係りがあると思われる。このような書き方は単に関羽の漢への忠を表すばかりでなく、同時に日本の昔の武士の美德、更には日本人の道德観を徹底的に体现することができる。そのほか、吉川英治は関羽の溺れる敵軍への助けを通じて、関羽に仁愛という日本武士道の精神を与えた。

関羽の「忠」と「仁」は、儒教を学んだ結果、身につけた精神である。したがって、儒教的な倫理・道德を備えた儒将・武士として相応しい資格を持つ。

最後関羽の死について、彼の傲慢ともいえる自尊心の強さのせいで、敗北を喫するという『演義』からの非難に対し、吉川英治は史家の口を借りて、責任を劉備と諸葛亮に転嫁した。さらに、一代の英傑が人生最大の挫折の前に無力な一面も提示され、私達に洗練された一般人のような関羽像を明らかに示された。

そして、この一代の英雄関羽を完璧にするため、吉川英治は関羽の左腕に矢傷をさせ、そして矢傷が完全に治った後戦場に入れられた。関羽は矢傷で「衰え」の一環を省いて、この偉大な英雄は直接「盛り」から突然に「亡」に向かっている。この関羽の人生はまるで日本の国花桜のような美しいものである。桜の命は非常に短い、その壮絶は一瞬の美しさにある。それは関羽が人生の頂点に達した後、すぐに亡くなった人生と似ている。関羽人生の中一番輝いた時期は桜の花期のように短い。一瞬で咲いて、すぐに散る。この桜のように美しく生きること、多くの日本人が認められていると思われる。

## 第六節 吉川英治の諸葛亮像

日本では、諸葛亮がその知恵や忠誠心に幅広い日本民衆に好まれ、三国時代代表的な人物の一人と数えられる。その源を追求すると、やはり吉川英治『三国志』の影響が非常に大きいと思われる。吉川英治は諸葛亮に重点を置いて、彼を『三国志』の中二大主人公の一つとして詳しく描いた。本論において、吉川英治が作り上げた諸葛亮の人物像は中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』の中の諸葛亮像はどのような差異があるかということをも明らかにするうえに、そこに顕れた吉川英治が『三国志』を創作するとき、独特な手法の解明を試みたい。

## 一、諸葛亮の位置づけ：物語のターミネーター

『三国志演義』の校訂者毛宗崗によれば、『演義』には「三絶」、つまり三人の傑出した登場人物が存在するという。「智絶（知者のきわみ）」の諸葛亮、「義絶（義人のきわみ）」の関羽、「奸絶（悪人のきわみ）」の曹操の三人が、これにあたる。これはさすがに的を射た卓見である。なぜなら、かれら「三絶」こそ『演義』の世界を動かす真の主役なのだから。

三人のうち、関羽と曹操は第一回から登場、はなばなしい動きを示して、『演義』前半の世界をリードする。ところが、関羽は第七十六回で孫権に殺され、曹操は第七十八回で病死、というふうには、『演義』全百二十回のほぼ三分の二あたりで、関羽と曹操はあいついで退場してしまう。こうして『演義』の主役たる者の二人は、物語がほぼ三分の二まで進行した地点で、退場してしまうことになる。

これに対して、残る「三絶」の一人、諸葛亮一物語の主役としては、『演義』の世界に初めてお目見えするのは第三十八回、物語が三分の一まで進行した地点である。五丈原で絶命し、『演義』世界から退場するのが第百四回。

こうして主要人物の配置から、『演義』が全体として三部構成になっていることが、よみとれる。つまり、第一部は関羽、曹操で編成され、第二部で、諸葛亮が登場、関羽や曹操と交差して、徐々にその比重を増し、第三部では、関羽や曹操がことごとく退場するや、諸葛亮の一人舞台になる仕組みなのだ。<sup>98</sup>

こうしてみると、ほかならぬ諸葛亮の存在が、『演義』の物語的時間の進行と全体的な構成の大きなポイントになっていることが、よくわかるはずであろう。

この毛宗崗本『三国志演義』の章節の人物配置に対し、吉川英治『三国志』はどのように再構築したのか。まず、吉川英治『三国志』毎巻のタイトルは次の通りである。

- 一 序 桃園巻 群星巻
- 二 群星巻（つづき） 草莽巻
- 三 草莽巻（つづき） 臣道巻
- 四 孔明巻 赤壁巻
- 五 赤壁巻（つづき） 望蜀巻

---

<sup>98</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.152~153。

- 六 望蜀卷（つづき） 凶南卷
- 七 凶南卷（つづき） 出師卷
- 八 五丈原卷 篇外余録

この八冊の本を完全に巻によって整理すると、「桃園卷」「群星卷」「草莽卷」「臣道卷」「孔明卷」「赤壁卷」「望蜀卷」「凶南卷」「出師卷」「五丈原卷」と合わせて十巻になる。これらの巻のタイトルを細かく観察することを通じて、物語の中心は第四巻から諸葛亮をめぐる展開することは容易に発見される。これこそ、吉川英治のアイデアである。彼の『三国志』においては、主役の違いによって前後二部分に分け、前半は曹操に主役を割り当てられ、後半に入ると、曹操に代わって諸葛亮は一躍主役になる。こうして見ると、吉川英治『三国志』の後半は「諸葛亮伝」とも言えるではなかろうか。

このような人物配置はまさに、吉川英治が「しかしこの曹操の全盛期を分水嶺として、ひとたび紙中に孔明の姿が現れると、彼の存在もたちまちにして、その主役的王座を、ふいに襄陽郊外から出てきたこの布衣の一青年に譲らざるを得なくなっている。」<sup>99</sup>と自分も書いたようである。ひと口に言えば、吉川英治の『三国志』は曹操に始まって孔明に終る二大英傑の成敗争奪の跡を叙したものととってもさしつかえない。

なお『演義』は全百二十回で、魏・呉・蜀三国が晋に統一されるまでを描くが、諸葛亮を後半最大の主人公と位置づけた吉川は、孔明の死（『演義』第百四回）以後の物語は甚だ興味に劣るために省略し、後書きともいえる篇外余録でわずかにあらすじをなぞるのみとしている。

ゆえに原書「三国志演義」も、孔明の死にいたると、どうしても一応、終局の感じがするし、また三国争覇そのものも、万事休む一の観なきを得ない。

おそらくは読者諸氏もそうであろうが、訳者もまた、孔明の死後となると、とみに筆を呵す興味も気力も稀薄となるのを如何ともし難い。これは読者と筆者たるを問わず古来から三国志にたいする一般的な通念のようでもある。<sup>100</sup>

（吉川英治、『三国志』八 篇外余録 諸葛菜）

<sup>99</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.375。

<sup>100</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.372。

したがって、吉川英治は、『三国志演義』全書を完訳しなかった。物語は諸葛亮が五丈原で亡くなったときに、ふつつり止まった。この原作に基づいた改作はさらに現代小説の構造配置として実に相応しい。その根本を究めると、やはり吉川英治自分が言った通り、彼は孔明の逝去で作文の力を失ったことが窺える。一方、小説の最後の主人公が死んで、ストーリーも結末を迎えたという配置も更に物語の整合性が良いと思われる。その影響としては、吉川英治以降に書かれた陳舜臣の『秘本三国志』や北方謙三の『三国志』など、日本で書かれた多くの三国志小説が五丈原で物語を終わらせていることも窺える。

## 二、諸葛亮の家系：流浪する少年時代

『三国志演義』の中で、作者は徐庶の口を借りて、最初に諸葛亮の身の上を紹介した。

庶曰：“此人乃琅琊阳都人，复姓诸葛，名亮，字孔明，乃汉司隶校尉诸葛丰之后。其父名珪，字子贡，为泰山郡丞，早卒，亮从其叔玄，玄与荆州刘景生有旧，因往依之，遂家于襄阳。后玄卒，亮与弟诸葛均躬耕于南阳……”<sup>101</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第三十六回 玄德用计取樊城 元直走马荐诸葛)

諸葛亮字孔明，琅琊陽都人也。汗司隸校尉諸葛豐後也。父珪，字君貢，漢末為太山郡丞。亮早孤，從父玄為袁術所署豫章太守，玄將亮及亮弟均之官。會汗朝更選朱皓代玄。玄素與荊州牧劉表有舊，往依之。玄卒，亮躬耕隴畝，好為梁父吟。<sup>102</sup>

(陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』卷三十五 蜀書五 諸葛亮傳第五)

以上二つの説を比較して見れば、小説『三国志演義』に現れる諸葛亮の身の上の紹介は、完全に正史『三国志』をそのまま踏襲した結果である。わずか94字であるが、系統的に諸葛亮の身の上を述べた。

吉川英治『三国志』において、このシーンについての完訳も見られる。しかし、吉川英治から見れば、ただ100字だけでは小説の中心人物の身の上を紹介することは何だか足りないような気がする。それで、わざわざ17ページの紙面を使って、諸葛亮およびその家族により具体的な説明を加えることを行った。さらに、この章節を「諸葛氏一家」と名付け

<sup>101</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.446。

<sup>102</sup> 陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.911。

た。

具体的には、まず家系から紹介する。先祖に諸葛豊という方がいて、前漢の元帝の時代に司隸校尉となった。彼は性格が厳格な方だったようで、法律に遵わない人は高官であろうが容赦をしなかった。その性格が災いして、左遷され、ついには庶人に身分を落とされた。

そして、「諸葛」という姓の由来について、本は単に「葛氏」といい、琅邪郡の諸県に居住されていたが、後に陽都に移住した際、陽都には以前から葛姓がいたので、これと区別するため、諸県から来た葛氏という結果になる。

この後も家庭メンバーを紹介した。父は諸葛珪といい後漢末、太山郡の丞だった。母は章氏といい、三男一女を産んだ。その次男が諸葛亮、後、蜀の丞相。長男は諸葛瑾で7才上、後、呉の大將軍に昇る。末っ子は諸葛均で、後、蜀にて長水校尉に就任した。

最後に諸葛亮の少年時代の流浪生活をめぐって、詳しく紹介した。諸葛亮が幼い時、母が亡くなり、父は後妻を迎えるも、その父が二年後に亡くなる。そして、兄瑾は戦乱を避けるため、継母と共に江東へ。諸葛亮、弟諸葛均、妹は従父玄に引き取られた。やがて、玄は群雄の一人である劉行の任命した予章郡の太守となる。諸葛亮達を連れて赴任する時、反乱で殺された。叔父を失った諸葛亮は石韜の下で学び始めた。後、荊州で弟と共に晴耕雨読の生活に入り、好んで「梁父吟」を歌っていたという。この時期には自らを管仲や樂毅に比していたが、当時の人間でこれを認める者はいなかった。ただ親友の崔州平や徐庶だけがそれを認めていたという。また、この時期に地元の名士黄承彦の娘を娶ったという冗長な流れである。

吉川英治は諸葛亮の少年時代の流浪生活を描いた時、自分の感情をたくさん入っていた。諸葛亮の心理的描写に重心を置くだけではなく、小説の中の人物が苦難をなめるとき、作者自身も影響を受け、感情が自ずから現れる。

まだ十三、四歳でしかない孔明の眼にも、このあわれな流離の群れ、飢民の群れの生活が、ふかく少年の清純なたましいに（—あわれな人々）として烙きついていたにちがいない。

...

と、いう程度の考えは、もう少年孔明の胸に、人知れず醜酵していたにちがいない。

...

二十歳だいの長男。まだ十三、四歳の孔明。その下の弟妹たちは、このあいだにこそ、たしかに大きな「生きぬく力」を学んだにちがいない。

...

運命は、兄の瑾と相反していた。世路の波瀾は、はやくも少年孔明を鍛えるべく、心すべくあらゆる形で襲ってきた。

...

少年の孔明や弟の均は、このとき初めて、戦争を身に知った。

...

叔父の玄を亡い、頼る者としてなく、年少早くも世路の辛酸をなめつつあった孔明が初めて、石韜の門をくぐって...<sup>103</sup>

(吉川英治、『三国志』四 孔明の巻 諸葛氏一家)

諸葛亮の幼少期は乱世の様相が深まりつつあり、そして、不幸にもあいついで両親が亡くなる事態に見舞われた。彼の心中、いかばかりだったのか、察するにあまりある。従父に引き取られたとはいえ、長年の流浪生活を送り、兄と別れ、弟達の面倒を見なくてはならない立場になる。こういう幼き時代の環境があったればこそ、諸葛亮の「毅然とした芯の強さ」が身につけられたのではないかと私は思うのである。

さらに、この吉川英治の書き換えの中で内藤湖南の『諸葛武侯』の姿が見える。内藤湖南の『諸葛武侯』は次のような構成になっている。

- 一 侯が産地及び世系
- 二 侯が生時、少時、及び躬耕の時
- 三 草廬三顧、三分の策
- 四 赤壁の戦い
- 五 益州領有
- 六 漢中平定、荊隕陥没、侯が前半生を論ず
- 七 昭烈正号

この内藤湖南が書いた諸葛亮論において、前の二章と吉川英治が創作した「諸葛氏一家」という章節が殆ど同じ目線で書かれたのではないかということに気づいた。内藤湖南の息

---

<sup>103</sup> 吉川英治、『三国志』四、講談社、1989年4月11日、pp.293~298。



子である内藤乾吉が『内藤湖南全集』巻一のあとがきの中に書いたように、内藤湖南は明治二十九年（1896年）から明治三十年（1897年）までの二年の間に『諸葛武侯』を書いたに間違いない。それは昭和十四年（1939年）に連載された吉川英治の『三国志』よりはるかに早かった。両者の間にどんな関係があるかは分からないが、吉川英治から見ると、諸葛亮一家及び諸葛亮の生い立ちを紹介することが最も重要である。したがって、彼は内藤湖南の著作『諸葛武侯』のもとにして、「諸葛氏一家」という章節を作られた。

### 三、諸葛亮の容姿：婦人好女の如く

玄德见孔明身長八尺・面如冠玉・头戴纶巾・身披鹤氅・飘飘然有神仙之盖。<sup>104</sup>  
(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第三十八回 定三分隆中决策 战长江孙氏报仇)

彼の身丈は、人なみすぐれていた。肉はうすく、漢人特有な白皙長身であった。

105

(吉川英治、『三国志』四 孔明の巻 諸葛氏一家)

孔明は切れの長い眼を、しずかに玄徳のほうへ向けた。

.....

玄徳はまず彼の語韻の清々しさに気づいた。低からず、高からず、強からず、弱からず、一語一語に、何か香気のあるような響きがある。余韻がある。

すがたは、坐していても、身長ことにすぐれて見え、身には水色の鶴氅を着、頭には綸巾をいただき、その面は玉瑛のようだった。

たとえていえば眉に江山の秀をあつめ、胸に天地の機を蔵し、ものいえば、風ゆらぎ、袖を払えば、薫々、花のうごくか、嫋々竹そよぐか、と疑われるばかりだった。

.....

孔明は、細くふさいでいた睫毛を、こころもち開いて、静かな眸で、その人の容子を、ながめていた。<sup>106</sup>

(吉川英治、『三国志』四 孔明の巻 立春大吉)

104 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.466。

105 吉川英治、『三国志』四、講談社、1989年4月11日、p.302。

106 吉川英治、『三国志』四、講談社、1989年4月11日、pp.353~355。

『演義』の印象では、綸巾をかぶり、顔は冠の白玉のごとく、高身長の子目である。後漢の頃の尺は今日よりだいぶ短ったとはいえ、1尺は23センチに相当するといわれる。とすると、身の丈8尺といえは184センチ、相当な大男だったことになる。さすが諸葛亮を全知全能の軍師として扱った『演義』であり、初登場からすでに諸葛亮に神仙のイメージを付与された。

一方、吉川英治は再び自分の小説の中の主役の外貌に緻密な描写を加えた。単に顔の色や身の丈を述べるではなく、「静かな眸」「細くふさいでいた睫毛」「余韻がある声」などを加えられ、生き生きとした優美に見える諸葛亮の姿が見られる。吉川英治は『演義』のように、諸葛亮に神仙のイメージを与えなかった。その代わりに、私たちの目の前で現れた諸葛亮は一挙手一投足の間には優美な資質が滲み出ている。そして、話す声も非常に甘くて、一語一語に、何か香気のあるような響きがある。

このような書き方から、思わず史記の中で張良に関する描写を連想させる。高祖の三功臣の一人張良あざなは子房、その伝記として書いた「留侯世家」、その巻末の附論で、司馬遷はいう、「高祖離困者數矣、而留侯常有功力焉、豈可謂非天乎？上曰：“夫運籌策帷帳之中，決勝千里外，吾不如子房。”余以為其人計魁梧奇偉，至見其圖，狀貌如婦人好女」。すなわち、張良という人物は、高祖皇帝から、籌策を帷帳の中に運らし、勝ちを千里の外に決するは、吾れ子房に如かず、とまで賞讃された人物である。外貌も魁梧奇偉、たくましくめざましかろうと予想していたところ、その肖像を見ると、状貌は婦人好女の如くであると。もしかすると、吉川英治は諸葛亮を描くの時、脳裏の中では張良の姿が現れた。総じて、吉川英治が描き出した諸葛亮は更に優雅な女のようなものである。

#### 四、諸葛亮の人間像

##### (一) 繊細な心を持つ科学家

「智絶」諸葛亮が『演義』で用いる道術の中で、最も有名なものは、赤壁の戦いに際して東南の風を呼ぶ「借東風」である。

孔明索筆紙・屏退左右・密書十六字曰：“欲破曹公・宜用火攻；万事俱備・只欠東風。”写畢・遞与周瑜曰：“此都督病源也。”瑜見大驚・暗思：“孔明真神人也！早已知我心事。只索以实情告之。”乃笑曰：“先生已知我病源・將用何药

医之？事在危急，忘即賜教。”孔明曰：“亮虽不才，曾遇异人传授奇门遁甲天书，可以呼风唤雨。都督若要东南风时，可于南屏山建一台，名曰七星坛：高九尺，作三层，用一百二十人，手执旗幡围绕。亮于台上作法，借三日夜东南大风，助都督用兵，何如？”

……

瑜骇然曰：“此人有夺天地造化之法、鬼神不测之术！若留此人，乃东吴祸根也。及早杀却，免生他日之忧。”<sup>107</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第四十九回 七星坛诸葛祭风 三江口周瑜纵火)

すなわち、侍臣をみな退け、魯肅をのぞくほか、房中無人となると、孔明は紙筆をとって、それへ、

欲破曹公宜用火攻

万事俱備只欠東風

こう十六字を書いて、周瑜に示した。

「都督。—これがあなたの病の根源でありましょう」

周瑜は愕然としたように、孔明の顔を見ていたが、やがてにっこと笑って、

「おそれ入った。神通のご眼力。……ああ、先生には何事も隠し立てはできない」と、いった。

……

「むかし、若年の頃、異人に会って、八門遁甲の天書で伝授されました。それには風伯雨師を祈る秘法が書いてある。もしいま都督が東南の風をおのぞみならば、わたくしが畢生の心血をそそいで、その天書に依って風を祈ってみますが—」と。<sup>108</sup>

(吉川英治、『三国志』五 赤壁の巻 孔明・風を祈る)

ここまで見てくると、この「借東風」というエピソードについて、『演義』と吉川英治『三国志』はほぼ同じ目線で書いていた。諸葛亮は『奇門遁甲天書』を伝授され、それによって風を呼べると明言している。ここで、吉川英治の創作は諸葛亮が周瑜に自分が風を呼べ

<sup>107</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.604~606。

<sup>108</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、pp.253~254。

る方法があると伝えたあと、引き継ぎで諸葛亮の心理を書いた。

だが、これは孔明の心中に、べつな自信のあることだった。毎年冬十一月ともなれば、潮流と南国の気温の関係から、季節はずれな南風が吹いて、一日二日のあいだ冬を忘れることがある。その変調を後世の天分学語で貿易風という。

ところが、今年に限って、まだその貿易風がやってこない。孔明は長らく隆中に住んでいたので年々つづさに気象に細心な注意を払っていた。一年といえどもまだそのなかった年はなかった。—で、どうしても今年もやがて間近にその現象があるものと確信していたのである。<sup>109</sup>

(吉川英治、『三国志』五 赤壁の巻 孔明・風を祈る)

このあと、いよいよ諸葛亮が七星壇で行われる道術には、あまりリアリティーがない。このため、吉川英治は諸葛亮の風を呼ぶことを彼は現地の気候の理解と細かい観察に帰結した。長年の細心の注意を払ったからこそ、周瑜に風呂敷を広げることができる。諸葛亮は季節はずれの風が吹くことを知っていた、すなわち「風を読んでいた」と説明したほうが相応しいであろう。これは自然現象であって、諸葛亮が風を呼んだわけではない。そもそも人間が「風を呼べる」はずはない。

中国文学研究者、金文京氏の著書『三国志演義の世界』の中に、この「借東風」のというエピソードは現代風に言い換えれば、科学技術の勝利ということであると明言した。

戦争をするには戦略がいるが、戦略は今も昔も科学技術と密接な関係がある。ただし昔の科学は今から見れば迷信である。現代の軍事家はレーダーで敵を探すが、昔のレーダーは占いであった。かくして星占い、雲占い、風占いなどが、みな軍事技術として利用された。昔の軍隊には、このような占い師としての科学者が大勢いて、重要な役割をはたしていた。占いといっても、たとえば星占いであれば天文観測もやるわけであるから、科学とは表裏一体、いやむしろ科学の前身である。そしていつの時代でも科学者は戦争に奉仕し、科学は戦争によって進歩するのには変りはない。

吉川英治の書き方により、諸葛亮の謀は全知全能から知恵に戻った。また、吉川英治の解釈もとても情理にかなっている。このように、諸葛亮は非凡な知恵を備えただけではなく、丹念に観察、骨身を惜しまず勤勉の精神も身に着けた。魯迅は孔明を魔術師と評した

---

<sup>109</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、p.254。

が、魔術師こそは科学者の父であった。『演義』の孔明は、前近代における中国的科学者像の一つの投影であろう。

## (二) 重厚な名宰相

建興元年八月、魏が蜀に攻め込んできたが、諸葛亮は病床におり朝廷に出てこなかった。慌てた後主は丞相府に出向いて相談したが、諸葛亮は笑いながら、五つの敵をどう撃退することを言った。そして、彼は連日外出することがないことは、策を他人に漏らしたくないためであるという解釈も挙げられた。いわば、諸葛亮は超人的な機知と巧妙な策略をもつ優れた人間という存在であろう。

孔明曰：“先帝以陛下付托与臣・臣安敢旦夕怠慢。成都众官・皆不晓兵法之妙贵在使人不测・岂可泄露于人？”<sup>110</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第八十五回 刘先主遗诏托孤儿 诸葛亮安居平五路)

「ただ宰相たるのゆえをもって、無為無策のまま臨んでも、かえって諸員に迷妄を加えるのみですから、暫しじっと、孤寂を守って、深思していたわけであります。そしてこうして、日々池の畔に立ち、魚の生態をながめ、波紋の虚と、魚游の実とを、この世の様に見立てて思案しているうちに今日ふと、一案を思い浮かべました。……陛下、もうお案じ遊ばされますな」<sup>111</sup>

(吉川英治、『三国志』七 出師の巻 魚紋)

一方、吉川英治『三国志』第七巻の「魚紋」という一節を見れば、諸葛亮の敵を撃退する策は細かい点まで周到に熟考した結果である。彼は連日君主に政務を上奏しに行かなかった理由は、身を丞相の自分が敵を撃退する策を出せないと、一時百官を慌てさせる恐れがある。ここで、諸葛亮は『演義』の中で笑いながら策を言い出すことを削除し、一遍にあか抜けて、慎重かつ周到な人柄を見せてくれた。このような書き換えは諸葛亮の性格を更に充実させて、同時に彼は国を治める良い宰相のイメージも上げられた。

<sup>110</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.1053。

<sup>111</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、pp.289~290。

### (三) 人道主義精神を備えた軍師

『三国志演義』の原作で、諸葛亮は政治外交や進軍作戦の両方にも内攻することが得意である。しかし、郝昭や曹真の死について、まことに諸葛亮のいささかの非人道的性格を感じることができる。読者はこれらのエピソードを読んで、諸葛亮のやり方が多少やりすぎではないかと思わせる。

#### 1、周瑜に泣く

『三国志演義』の中で、周瑜は孫策の挙兵にかけつけ、江東制覇に協力し、孫策の死後も孫権に仕え、張昭と並ぶ重臣となった。赤壁の戦いにおいて、主戦派の重鎮として登場するが、劉備の使者として呉に滞在していた諸葛亮にその出会いのときから翻弄され続ける損な役回りを負わされている。自らの策を全て見透かす諸葛亮を危険視し暗殺を企むも果たせず、終始ライバル視しながらも遂に敵わず病に倒れる。臨終の際にも諸葛亮からの挑発的な書状を読み、「天はこの世に周瑜を生みながら、なぜ諸葛亮をも生んだのだ!」と血を吐いて憤死するという最期となっている。

孔明祭毕・伏地大哭・泪如涌泉・哀恸不已。众将谓曰：“人尽道公瑾与孔明不睦，今观其祭奠之情，人皆虚言也。”鲁肃见孔明如此悲切，亦为伤感，自思曰：“孔明自是多情，乃公瑾量窄，自取死耳。”<sup>112</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第五十七回 柴桑口卧龙吊丧 耒阳县凤雏理事)

読み終わると、孔明は、ふたたび地に伏して大いに哭き、哀働の真情、見るも傷ましいばかりだったので、並びいる呉の将士もことごとく貰い泣きして、心ひそかに、皆こう思った。

(周瑜と孔明とは、たがいに仲が悪く、周瑜はつねに孔明を亡き者にしようとし、孔明もまた周瑜に害意をふくんでいると聞いていたが、.....この容子ではまるで骨肉の者と別れたような嘆き方だ。察するところ、周瑜の死は、まったく孔明のためではなく、むしろ周瑜自身の狭量が、みずから求めて死を取ったものだろう

<sup>112</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.701~702。

う。どうもそれでは致し方もない.....)

初めの殺意は、かえって、後の尊敬となって、魯肅以下、みな引き留めたが、孔明は長居は無用と、惜しまれる袂をふり切って、その日のうちにすぐ船へ帰って行った。<sup>113</sup>

(吉川英治、『三国志』五 望蜀の巻 鳳雛去る)

周瑜の死後、諸葛亮は呉に喪を弔っていく様子の比較によって、我々はその小さな違いを窺うことができる。『三国志演義』の中で、周瑜の死は、実は孔明と関係がなくて、彼が自分の度量が小さいに由来した人は魯肅一人だけである。この状況は吉川英治『三国志』に変えると、呉国全体の将も心の中に孔明は無実の罪に落とされたと思った。彼が死んだ周瑜を兄弟と見なして、激しく泣いたことはすでに尊敬に値するではなかろうか。吉川英治は、このような小さな書き換えを用い、諸葛亮という人物のイメージを改めて付与された。読者たちに周瑜の死は諸葛亮と深く関係があることを忘れさせ、それによって諸葛亮のイメージをさらに正面な人間に見える。

## 2、郝昭の戦死

228年、蜀漢の諸葛亮が侵攻し陳倉を包囲した。諸葛亮は郝昭の同郷である靳詳を派遣して降伏を呼びかけたが、成果はなかった。一方、守備を任されていた郝昭は曹真の命を厳格に守り、数千程度のわずかな軍隊で諸葛亮の軍勢を寄せ付けず、頑健に防衛した。

却说陈震回到汉中，报知孔明。孔明尚忧陈仓不可轻进，先领人去哨探。回报说：“陈仓城中郝昭病重。”孔明曰：“大事成已。”

.....

且说郭淮闻郝昭病重，乃与张郃商议曰：“郝昭病重，你可速去替他。我自写表申奏朝廷，另行定夺。”张郃引着三千兵，急来替郝昭。时郝昭病危，当夜正呻吟之间，忽报蜀军到城下。昭急令人上城守把。时各门上火起，城中大乱。昭听知惊死，蜀兵一拥入城。

.....

---

<sup>113</sup> 吉川英治、『三国志』五、講談社、1989年4月11日、pp.470~471。

“吾早有细作在城内放火、发喊相助，令魏兵惊疑不定。兵无主将，必自乱矣。吾因而取之，易如反掌。兵法云：‘出其不意，攻其无备’正谓此也。”魏延、姜维拜伏。孔明怜郝昭之死，令彼妻小扶灵柩回魏，以表其忠。<sup>114</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第九十八回 追汉军王双受诛 袭陈仓武侯取胜)

これが何百台となく、城壁の四方から迫ってきたのを見て、郝昭は立ちどころに、火箭を備えて待っていた。

そして、鼓を合図に、たちまち火箭を放ち、油の壺を、投げ始めた。<sup>115</sup>

(吉川英治、『三国志』八 五丈原の巻 二度祁山に出づ)

—王双の死が、曹真の本営へ知らされてからいくばくもなく、陳倉城の守将郝昭の死がまた報じられてきた。郝昭は病死であったが、曹真にとり、また魏にとっては、重ね重ねの凶事ばかりだった。<sup>116</sup>

(吉川英治、『三国志』八 五丈原の巻 食)

孔明は、落去の跡を視察して、火中に死んだ郝昭の屍を捜させ.....<sup>117</sup>

(吉川英治、『三国志』八 五丈原の巻 総兵之印)

『三国志演義』第九十八回で、諸葛亮は郝昭が陳倉城で重い病気になることを知って、「大事になってしまう」と言い。すぐに関興、張苞を命じ、暗い夜にこっそり陳倉城に来らせて、奇襲攻撃をかけた。さらに城の中のスパイも火を放つ、慌てて民衆を唆して、大声を張り上げて騒ぎ立てる。このように重病の郝昭は驚いて死に致す。そこで陳倉城で主将がないので、蜀軍がどっとなだれ込む。

一方、吉川英治『三国志』の書き換えの中で、諸葛亮は郝昭が病気になることを知った後、ものすごく速い速度で陳倉城の防衛の弱い所へ進軍した。そして、火攻めで敵の城を攻撃し、混乱に乗じて城に入ったという流れである。文の中には、重病になる郝昭は孔明の奇襲に対して、何かの反応があるかに言及しなかった。ただ攻略後、孔明は戦場の視察を行う時、火の中で郝昭の死体を探していたことが窺える。このように考えてみると、郝昭が戦いの中で死んでしまったのではないかと思われる。

<sup>114</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.1219~1221。

<sup>115</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.147。

<sup>116</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.174。

<sup>117</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.179。



吉川英治『三国志』では、諸葛亮の陳倉城に対する攻撃は『演義』の方よりもっと正面的、直接的であり、一定の程度の上で彼のマイナスイメージを免れた。

### 3、曹真への手紙

『三国志演義』における曹真は、皇族出身として曹叡を支える重臣の一人とされている。諸葛亮の離間工作によって群臣の多くが司馬懿を疑った時、「蜀か呉の計略ではないか」と一人彼を弁護したり、病氣療養中に呉蜀が連合して魏に侵攻してきたという知らせを聞くや、自ら進んで都督の印綬を司馬懿に譲り、彼に全権を委ねるなど、基本的に公正で良識ある人物として描かれている。このような曹真に対して、諸葛亮は再び情け容赦のない性格を見せられた。

正议进兵・忽有细作报说：“曹真卧病不起，现在营中治疗。”孔明大喜，谓诸将曰：“若曹真病轻，必便回长安。今魏兵不退，必为重病，故留于军中，以安众人之心。吾写下一书，教秦良的降兵持于曹真，真若见之，必然死矣！”

.....

其书曰：

汉丞相、武乡侯诸葛亮，致书于大司马曹子丹之前：窃谓夫为将者，能去能就，能柔能刚；能进能退，能若能强。不动如山岳，难知如阴阳；无穷如天地，充实如太仓，浩渺如四海，炫耀如三光。预知天文之旱涝，先识地理之平康；察阵势之期会，揣敌人之短长。嗟尔无学后辈，上逆苍穹。助篡国之反贼，称帝好于洛阳；走残兵于斜谷，遭霖雨于陈仓。水路困乏，人马猖狂。抛盈郊之戈甲，弃满地之刀枪。都督心崩而胆裂，将军鼠窜而狼忙！无面见关中之父老，何言入相府之厅堂！史官秉笔而记录，百姓众口而传扬：仲达闻阵而惕惕，子丹望风而惶惶！吾军兵强而马壮，大将虎奋以龙骧。扫秦川为平壤，荡魏国作丘荒！

曹真看毕，恨气填胸，至晚死于军中。<sup>118</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一百回 汉兵劫寨破曹真 武侯斗阵辱仲达)

「曹真の病は重態とみえる.....」

<sup>118</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.1243~1244。

一日、孔明は敵のほうをながめて呟いた。

斜谷から敗退以後、魏の大都督曹真が病に籠るとの風説はかねて伝わっていたが、どうしてその重態がわかりますか—と傍らの者が訊くと、孔明は

「軽ければ長安まで帰るはずである。今なお渭水の陣中に留まっているのは、その病、甚だ重く、また士気に影響するところをおそれて、敵味方にそれを秘しているからだろう」と、いった。

「自分の考えが適中していれば、おそらく彼は十日のうちに死ぬだろう。試みにそれを問うみよう」

彼は、曹真へ宛てて戦書（挑戦状）をしたため、軍使を派して、曹の陣営へ送りつけた。その辞句はすこぶる激越なものだったという。

果たして、明答がない。梨のつぶてであった。—けれど、それからわずか七日の後、黒布につつまれた柩車と、白い旗や幡を立てた寂しい兵列が、哀愁にみちた騎馬の一隊にまもられて、ひそかに長安のほうへ流れて行った—という知らせが物見の者から蜀の陣に聞こえた。<sup>119</sup>

（吉川英治、『三国志』八 五丈原の巻 八陣展開）

『演義』において、曹真は諸葛亮と対戦し、圧倒的に優れたその知略の前に連戦連敗を喫してしまう。腹心の王双を魏延に斬られ、同僚の司馬懿との賭けに負け、自分の能力の無さに愕然とする。決して暗愚ではなく、人の意見を聞き入れる度量のある人物なのだが、なまじ聡明で、諸葛亮や司馬懿と自らの力量の差がわかるため心中苦しみ続け、そのことが原因で病にかかってしまう。諸葛亮はそれを聞いて大喜び、そこで曹真に自ら書いた手紙を送った。その手紙の内容としては、曹真の様々な惨敗を揶揄し、さらに彼を慎重に、軍隊を厳しく統御する司馬懿と比較して、彼を酷く貶めた。結果、重病になる曹真はこんな辱めには耐えられなくて、手紙を読んだ後憤死していた。

吉川英治『三国志』の中で、諸葛亮の手紙は曹真の直接の死因にはならなかった。彼が手紙を書いて送った理由は曹真が本当に重病かどうかを探るだけである。吉川英治の書き換えで手紙の内容さえ削除された。だから、手紙で重症中の敵将を死ぬまでむかむかするやり方は、あまりにも人道に背く。諸葛亮の正面的なイメージを確立するためにこの手紙の内容を削除すべきである。

---

<sup>119</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、pp.220~221。

## 五、諸葛亮の死：忠誠いちずの名宰相

南中を平定し、後顧の憂いを断った諸葛亮は、後主劉禪に「出師の表」を捧げ、蜀の建興六年（二二八）春、関中に向けて出撃、魏への正面切った挑戦を開始した。これを皮切りに、小刻みに出兵を繰り返したが、思わしい戦果をあげるにはいたらない。北伐の執念に燃える諸葛亮は、それまでの失敗の経験を踏まえ、木牛・流馬の新兵器を発明するなど満を持して、彼にとって最後の出陣となる第六次北伐にふみきった。建興十二年（二三四）二月のことである。かくして武功郡五丈原に本陣を敷き、魏軍を率いる司馬懿に合戦を挑んだが、司馬懿は守りに徹して応じない。膠着状態がつづくうち、諸葛亮は過労のはてに病魔に蝕まれていく。

『演義』百三回には、病状が悪化した諸葛亮は幕内に祭壇を築いて寿命を延ばす祈禱を行うが、唐突に幕内に入ってきた魏延がこの祭壇を壊してしまったために祈禱に失敗した。延命の望を断たれた諸葛亮は、死後に備えて手配りを終え、建興十三年秋八月、ついにこの世を去った。諸葛亮の死の時に大きな流星があり、司馬懿はこれを見て諸葛亮の死んだ事を悟り、蜀軍に対して総攻撃をかけようとする。ところが蜀軍には諸葛亮の姿があり、これに狼狽した司馬懿は慌てて引き上げる。だが実はこの諸葛亮は木像であったと描いている。後に現地の間人は「死せる孔明、生ける仲達（司馬懿の字）を走らす」と言ったという。

ここまで見てきたように、諸葛亮は祭壇を築いて寿命を延ばす祈禱の儀式を行う行動が、実は道教的な発想にもとづくものである。仙郷を思わせる臥龍岡の住まいから『演義』に登場、奇跡をおこす魔術師として物語世界を揺り動かした諸葛亮は、退場するときも、やはりこのうえなく神秘的なムードに包まれている。

### （一）小異を捨てて大同につく

その一方、吉川英治は諸葛亮の死を巡って、ストーリー上の削除することを行った。

后主闻奏大惊・急命尚书李福・星夜至军中间安・兼讯后事・李福领命・趨程赴五丈原・入见孔明・传后主之命。……李福领了言语・匆匆辞去。

……

是夜・孔明令人扶出・仰观北斗・遥指一星曰：“此吾之将星也。”众视之・见

其色昏暗・摇摇欲坠。孔明以剑指之・口中念咒。咒毕回帐时・不省人事。众将正慌乱间・忽尚书李福又至・见孔明昏绝・口不能言・乃大哭曰：“我误国家之大事也！”须臾・孔明复醒・开目遍视・见李福立于榻前。孔明曰：“吾已知公复来之意。”<sup>120</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第一百四回 陨大星汉丞相归天 见木像魏都督丧胆)

成都からは即刻、尚書僕射李福が下っていた。帝劉禅のおどろきと優渥な勅を帯して夜を日に継いで急いでいるとは聞こえていたが、—なおまだここ五丈原にその到着を見なかった。

しかし幸いに、費禕がなお滞在している。孔明は、われ亡き後は彼に囑するもの多きと思った。一日、その費禕を招いて懇ろにたのんだ。<sup>121</sup>

(吉川英治、『三国志』八 五丈原の巻 秋風五丈原)

たとえば、孔明が最後に味方の陣々を見て巡るとき、自己の宿星を劍で指し、呪文を唱えた。なお、劉禅の命を受け、成都から駆けつけて、あっという間に五丈原にやってきた尚書李福もすべて幻の話である。これに対して、吉川英治は前者を削除し、後者に書き換えを行った。彼の筆で成都から五丈原までの道が遠いため、尚書僕射李福は結局諸葛亮に会えなかった。その代わり、五丈原いる費禕が諸葛亮の残した頼みを受けた。このようにして、物語のプロットをさらには真実性を備えられた。

その一方、吉川英治自身も後の文章の中に、諸葛亮の死に巡る真実性を欠けたエピソードに対して、「そうした筆者の愛惜の余りから出ているものと思われるのである—が、ここではむしろ、その不合理などを問わず原書のままを訳しておくことにする。そのほうが千七百年前から今日まで、孔明の名とともにこの書を愛しこの書を伝え来った民族のこころを理解するにも良いと訳者にも考えられるからである。」という解釈を加えた。したがって、息をひきとった後、成都の勅使李福が着いたことになっていて、勅使と聞くや、孔明はふたたび目をひらいて、奉答しているという話そのまま文中に残している。この中国にあるところの不死の観念と、やがて日本の詩や歌や「もののあわれ」に彩られた人々の生死観とでは、もちろん大きな相違があるが、とまれ諸葛孔明の死に対しては、当時であって

<sup>120</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.1293~1294。

<sup>121</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.345。

もその蜀人たると魏人たるを問わず、何らか偉大なる靈異に打たれたことは間違いなく、そして『演義』の作者や吉川英治は、諸葛亮をそのまま死にさせたくない感情を感じることができる。だから、吉川英治はほんの一部の架空の話を抜いて、最後のストーリーにして全体的に変えることを行わなかった。

## (二) 国に尽瘁する

さらに、吉川英治『三国志』の「秋風五丈原」の文面では、

「その夕方からまた容態が悪化した。しかし昏絶しては甦ること数度で、幾日となく、同じ死生の彷徨状態が続いた。」

「この日以来、とみに、ものいうことばも柔かになり、そして眉から鼻色には死の相があらわれていた。」

「いうかと思うと、孔明その人の面は、たちまち白蠟の如く化して、閉じた睫毛のみが植え並べたように黒く見えた。」

などの精神状態の緊迫や容態がますます悪くなる変化を現している場景がたくさんある。死の淵に立つにもかかわらず、諸葛亮はまだ軍務に忙しく管理する。

「孔明の病状はこの時から精神的にもふたたび回復を望み得なくなっていた。翌日、彼はその重態にもかかわらず姜維を身近く招いていった。」

「以上の事々を、費禕に遺言し終わってから孔明の面にはどこやら肩の重荷がとれたような清々しさがあらわれていた。」

「命旦夕に迫りながら、なおそれまでに、軍務を気にかけておられるのかと、侍医も諸臣も涙に濡らした。」

「もう何も云いおくことはない。みなよく心を一つにして、国に報じ、職分をつくしてくれよ」

「身は死すともなお漢中を守り、毅魄は千載に中原を定めん」となす、これが孔明の遺志であったにちがいない。

などの記述がある。孔明が昏絶、人事不省に陥る後、目が覚める度に自分が死んだ後国の事務はどう処理すべきかをまわりの人に言い含める。この一連の描写を通じて、吉川英治が小説の最後に諸葛亮の忠誠いちずのイメージを上げた。

## 六、毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』における諸葛亮像の相違

『演義』前半の主役が曹操と関羽であるならば、後半の主役は「智絶」諸葛亮である。『三国志演義』における諸葛亮は、綸巾を戴き羽扇を手にして四輪車に乗り、鬼神や天候をも操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死にを知る事が出来るといったほぼ完璧な人物として描写されている。しかし、この描写については批判があり、魯迅は「人物描写に至ってはすこぶる欠点がある。劉備を温厚な人格者として表現しようとしてむしろ偽善者じみているし、諸葛亮を知恵者として表現しようとしてむしろ化け物じみてしまっている」と述べている。

それでは、このような魯迅の評価に直面して、吉川英治は一体どのような諸葛亮像を描き出すのか、ということについて、下の総括的な表を纏めることによって、明らかにすることができる。

毛本と吉川本における諸葛亮像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』
位置づけ	「三絶」の一人	二大主役の一人 物語のターミネーター
家系	正史『三国志』をそのまま踏襲する わずか94字	「諸葛一家」という章節を書き入れ 諸葛亮の流浪する少年時代を強調する
容体	身長八尺，面如冠玉，头戴纶巾，身披鹤氅，飘飘然有神仙之盖。	「静かな眸」「細くふさいでいた睫毛」「余韻がある声」「肉はうすく」など、 婦人好女の如く
人間像	魔術師、神仙のイメージ	繊細な心を持つ科学家 重厚な宰相 人道的性格
死	退場するまで、神秘的なムードに包まれている	解釈を加え、合理化させたい 国に尽瘁する名宰相

表四（筆者作成）

表に示す如く、二つの作品の中に見せられた諸葛亮のイメージがかなり違う。まずは諸葛亮が全書の中の位置づけから言うと、毛宗崗本『三国志演義』の中で、彼は「三絶」の一人として、力を入れて描いた。その一方、吉川英治『三國志』においては、主役の違いによって小説を前後二部分に分け、前半は曹操に主役を割り当てられ、後半に入ると、曹操に代わって諸葛亮は一躍主役になる。さらに、『演義』は全百二十回で、魏・呉・蜀三国が晋に統一されるまでを描くが、諸葛亮を後半最大の主人公と位置づけた吉川は、孔明の死（『演義』第百四回）以後の物語は甚だ興趣に劣るために省略し、後書きともいえる篇外余録でわずかにあらすじをなぞるのみとしている。続いて、諸葛亮の家系について、『三国志演義』に記される諸葛亮の身の上の紹介は、完全に正史『三国志』をそのまま踏襲した結果である。わずか94字であるが、系統的に諸葛亮の身の上を述べた。それに対して、吉川英治はわざわざ17ページの紙面もかかって、諸葛亮およびその家族により具体的な説明を加えることを行った。さらに、この章節を「諸葛氏一家」と名付けた。さらに、この吉川英治が作られた章節の中では、内藤湖南の著書『諸葛武侯』の姿も窺える。そして、諸葛亮の容体について、『演義』の印象では、綸巾をかぶり、顔は冠の白玉のごとく、高身長二枚目である。さらに、初登場からすでに諸葛亮に神仙のイメージを付与された。それに対して、吉川英治は単に顔の色や身の丈を述べるではなく、「静かな眸」「細くふさいでいた睫毛」「余韻がある声」などを加えられ、生き生きとした優美に見える諸葛亮の姿が目の前に現れる。このような書き方から、思わず史記の中で張良に関する記すに連想させる。高祖の三功臣の一人張良字は子房、その伝記として書いた「留侯世家」、その巻末の附論で、司馬遷は彼の状貌は婦人好女の如くであるという。もしかすると、吉川英治は諸葛亮を描く時、脳裏の中では張良の姿が現れたではないかと思われる。その次、両作品における諸葛亮の人間像について、『演義』において、諸葛亮は超能力の仙人、なあざることなき全知全能の魔術師として結実したのである。一方、吉川英治『三國志』の中、赤壁戦いの時風を呼んでくる諸葛亮は繊細な心を持つ科学家になり、丞相府に閉じこもって五つの敵を撃退する諸葛亮は重厚な宰相になる。さらに、諸葛亮は週瑜、郝昭や曹真に対して、死ぬまで迫る様子が見えなくなる。その代わりに、諸葛亮に人道的性格を与えられ、彼の正面的なイメージを確立した。最後には、諸葛亮の死について、『演義』では、病状が悪化した諸葛亮は幕内に祭壇を築いて寿命を延ばす祈祷を行うなど、一連神秘的な行動が見られる。仙郷を思わせる臥龍岡の住まいから『演義』に登場、奇跡をおこす魔術師として物語世界

を揺り動かした諸葛亮は、退場するときも、やはりこのうえなく神秘的なムードに包まれている。そして、吉川英治はこの妖術を使う諸葛亮のイメージとストーリーに不合理なところに対して、自分の説明を加え、合理化させたい気持ちがわかりやすい。しかしこれはまた「借東風」の中、諸葛亮は長年の天分観測という科学の手段を持ち、東風を呼んでくると違う。諸葛亮の死をめぐる、吉川英治はこれらの不合理なエピソードが『演義』の作者は諸葛亮への愛惜の情を具体的に表すことができると主張する。したがって、吉川英治は自分の考えを加えながら、毛宗崗本『三国演義』をそのまま踏襲して訳した。このほか、死の淵に立つにもかかわらず、諸葛亮はまだ軍務に忙しく管理する姿を強調され、小説の最後において諸葛亮の忠誠一筋のイメージを上げたことも見られる。(表四)

### (一) 毛宗崗本『三国志演義』の諸葛亮像

諸葛亮は『三国志演義』の中で、数えるほど重要な人物である。毛宗崗は彼を「三絶」の一人「智絶」と評価した。小説の中、諸葛亮は軍師・参謀という枠を超え、むしろ神仙・魔術師的な活躍まで見せる超能力者として描かれる。彼は劉備の三顧の礼に感激して軍師となり、智謀のかぎりをつくして「天下三分の計」を実現させ、劉備亡き後はその信頼に答えて、暗愚な二代目劉禅を守り抜いた、誠実無比な名宰相であり、様々な兵法を駆使して、好敵手の司馬懿を陣形比べて破って、魏への北伐に際して食糧輸送に用いられた「木牛・流馬」を發明され、神算鬼謀の大軍師であり、風を呼び人工獣を駆使し、北斗星に呪文を唱えて宿命さえかえようとする、超自然的力をもつ魔術師でもある。

### (二) 吉川英治『三国志』の諸葛亮像

吉川英治『三国志』の諸葛亮像を解析することによって、吉川英治『三国志』の一つの特徴は、『三国志演義』にくらべて「怪力乱神」を語る事が非常に少ない点であることがわかってきた。吉川英治は『三国演義』のように諸葛亮を「智絶」として描かなかった。更に、諸葛亮の神仙のイメージを引き立たせるたくさんのエピソードに対して、合理性のある解釈を加えあるいは一部を削除することを行った。その理由としては、彼自身にも書いたように、

軍略家、武将としてみれば、実にそこに真の孔明がある気がするし、また、政治家として彼を考えると、むしろそのほうに彼の神髄はあるのではないかという



気もする。

思想家ともいえるし、道徳家ともいえる。文豪といえば文豪というもいささかもさしつかえない。

もちろん彼も人間である以上その性格的短所はいくらでも挙げられようが、—それらの八面玲瓏ともいえる多能、いわゆる玄德が敬愛おかなかった大才というものはちょっとこの東洋の古今にかけても類のすくない良元帥であったといえよう。

良元帥。まさに、以上の諸能を一将の身にそなえた諸葛孔明こそ、そう呼ぶにふさわしい者であり、また、真の良元帥とは、そうした大器でなくてはと思われる。

とはいえ、彼は決して、いわゆる聖人型の人間ではない。孔孟の学問を基本としていたことはうかがわれるが、その真面目はむしろ忠誠一箇な平凡人というところにあった。<sup>122</sup>

(吉川英治、『三国志』八 篇外余録 諸葛菜)

という。吉川英治がしたいのは、諸葛亮の人間性を取り戻すことである。吉川英治筆の下で、『演義』の中の風を呼ぶことや神算鬼謀の筋が緻密な分析と論理的思考の産物になる。この写実的な手法で、吉川英治は諸葛亮のお高くとまった神のイメージを、欠点もある平凡人に転換されることができた。これによって、諸葛亮を日本の読者に受け入れやすくなって、さらに、小説の主役にもっとふさわしい存在になる。

なお『演義』は全百二十回で、魏・呉・蜀三国が晋に統一されるまでを描くが、諸葛亮を後半最大の主人公と位置づけた吉川は、孔明の死（『演義』第百四回）以後の物語は甚だ興味に劣るために省略し、後書きともいえる篇外余録でわずかにあらすじをなぞるのみとしている。物語は諸葛亮が五丈原で亡くなったときに、ふつつり止まった。その根本を究めると、やはり吉川英治自身が言った通り、彼は孔明の逝去で作文の力を失ったことが窺える。一方、小説の最後の主人公が死んで、ストーリーも結末を迎えたという配置も更に物語の整合性が良いと思われる。その影響としては、吉川英治以降に書かれた陳舜臣の『秘本三国志』や北方謙三の『三国志』など、日本で書かれた多くの三国志小説が五丈原で物語を終わらせていることも窺える。

<sup>122</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、pp.376~377。

## まとめ

吉川英治『三国志』の新しさは、中国で読まれてきた『三国志演義』の面白さを生かしつつ、現代の作家の眼から大胆な加筆を行って現代日本人にマッチした『三国志』を作り出したことにある。

そのため、私達は吉川英治『三国志』を読むと、「白面郎曹操」、「温雅典麗な曹操」、「恋をする曹操」、「寺子屋の先生関羽」、「儒者関羽」、「武士関羽」、「婦人好女の如くである諸葛亮」、「科学家である諸葛亮」、「重厚な宰相である諸葛亮」、「人道的性格をもつ諸葛亮」など沢山見たことのない新たな人物像を見つけることができる。武将を形作る時、吉川英治は主要人物が持つ風雅情趣のイメージを強調することが窺える。これも日本の読者の武将に対する美的観点に迎合している。

さらに、羅漢中は時代の要求に答えて、歴史や社会的な角度から主要人物を描写した。それに対して、吉川英治の作品の注目すべきところは劇的場面と、戦争の衝突だけではない。彼がもっとも力を入れたのは主要人物の精神的な葛藤と気分の変化であることが分かってくる。これこそ、吉川英治『三国志』の凄いところ、当に、彼自身も述べたように、

簡訳や抄略をあえてせずに、長編執筆に適当な新聞小説にこれを試みた。そして劉玄德とか、曹操とか関羽、張飛そのほか、主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いた。随所、原本にない辞句、会話など、わたくしの点描である。<sup>123</sup>

(吉川英治、『三国志』一 序)

吉川英治の『三国志』は羅貫中の『三国志演義』の翻訳ではなく、自分の解釈や創意を

---

<sup>123</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.4。

加えて創造したものである。彼が作り出した曹操も関羽も諸葛亮も物語随一の人物として、日本人に受容され、多くの人々に愛された。

このため、中国に比べて日本に曹操ファンの多いことは分かりやすいであろう。それは芝居や寄席の講談の伝統から、より多く影響を受けてきた中国人の曹操像に対して、日本における曹操ファンを飛躍的に増やしたのは、吉川『三国志』である。吉川ははっきりした評価の目をもって、曹操をこの時代第一の人物として描いたのである。

そして、吉川英治『三国志』の関羽や諸葛亮の人間像を解析することによって、吉川英治『三国志』の一つの特徴は、『三国志演義』にくらべて「怪力乱神」を語ることが非常に少ない点であることがわかってきた。吉川英治は小説の中のたくさんの神秘的なエピソードに対して、合理性のある解釈加えあるいは一部を削除することを行った。この写実的な手法で、神のような存在である関羽や諸葛亮を平凡人に転換されることができた。これによって、関羽や諸葛亮を日本の読者に受け入れやすくなって、さらに、小説の主役にもっとふさわしい存在になる。

吉川英治は、現代の作家の眼からこうした冗長さをはぶき、不必要な怪奇性を除き、適確な加筆によって、原典のともすれば類型化しがちな人物像にふくらみをあたえ、千数百年前の戦乱の中国大陸に生命を燃焼させた人々を、現代に見事によみがえらせたのであった。

戦後の三国志ブームの出発点は、戦中に書かれた吉川『三国志』である。全集に文庫本に、何回となく復刻され、それに触発されて劇画やテレビの人形劇などが人気を呼び、それがまた吉川『三国志』の新しい読者を増やした。この意味で、吉川『三国志』は、日本ではじめて生まれた日本版の『演義』であるといっても過言ではあるまい。さらに、この吉川英治『三国志』が中国における小説「三国志」の発展線上に位置するものでもあり、中国版『三国志演義』に新しい生命を与えて現代に甦らせた作品である。

## 第二章 北方謙三の『三国志』<sup>124</sup>

日本は近代以来、『三国演義』を翻訳、改作と再創作のブームを巻き起こし、中には獨創性を重視した吉川英治『三国志』と写実主義を重視した北方謙三『三国志』が最も人気が集まる。この二つの版本は、鮮やかな時代特色のある同時に、日本の社会問題にも反映し、大和民族特有の文化心理と審美的傾向を示している。

「国民文学」と位置付けられた吉川英治『三国志』には、美少年曹操、私塾先生関羽、儒将関羽、科学者諸葛亮など一連の中国と異なる新しいイメージの人物像を作り上げた。さて吉川英治『三国志』を読んだことのある北方謙三が自分の『三国志』を書くとき、どのような「三絶」の人物像を作り出したのか。また、それと中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』および吉川英治『三国志』との間、どのような異同があるか。こうした一連の問題を抱え、本章においては北方謙三『三国志』の「三絶」の人物像を中心に置き、吉川英治『三国志』の主な創作視点と対比しつつ、時間の流れとともに作品にあらわれた時代の特色を明らかにしていきたい。

### 第一節 北方謙三の小説著作

北方謙三は1947年佐賀県唐津市生まれ、1973年中央大学法学部法律学科を卒業した。法学部出身なのに、なぜ小説家になるかという点、それは高校時代の趣味にまどめる。北方謙三の陳述により、彼高校生の頃は健全で、柔道部であった。男子校で、先生や先輩の言うこともよく聞き、授業中にエッチな小説を書いて前の席の人に読ませた。それで大学に進もうとしたら、結核で「就学不可」になり、一年ぶらぶらしていた。実は次の年も治っていなかったが、診断書を誤魔化し、何とか大学にもぐりこんだ。ところが大学には行か

---

<sup>124</sup> 北方謙三の『三国志』(角川春樹事務所、全13巻、1996~1998)、初版が1996年~1998年。

ずに、ノートに文章を書き始めた。自分とは何かが知りたかった。しかし一人称で書くとどんどん内側に入っていく。もっと客観的に書きたいと思い、あるとき主語を「私は」から「彼は」にしてみた。するとブワッと世界が広がって、それが小説の元になったと言える。<sup>125</sup>北方謙三の主な創作は次のとおりである。

北方謙三の小説創作略表

	創作物	類型
1970年	『明るい街へ』(学生デビュー)	純文学
1981年	『吊鐘はるかなり』(二度目デビュー)	ハードボイルド小説
1982年	『眠りなき夜』	
1984年	『渴きの街』	
1985年	『黒いドレスの女』 など	
1989年	『武門の王』	日本歴史小説
1990年	『破軍の星』 など	
1996年	『三国志』	中国歴史小説
1999年	『水滸伝』	
2003年	『楊家将』	
2012年	『岳飛伝』 など	

表五 (筆者作成)

ご示したように、北方謙三は在学中の1970年、純文学作品『明るい街へ』を同人誌に発表し、学生作家としてデビューを果たす。1981年『吊鐘はるかなり』にて二度目デビューした。1983年『眠りなき夜』で吉川英治文学新人賞、1985年『渴きの街』で第38回日本推理作家協会賞長編部門をそれぞれ受賞され、一躍人気作家となる。

それに、1983年には『逃れの街』が、主演水谷豊、監督工藤栄一で映画化。以降『友よ、静かに眠れ』(1985年)、『黒いドレスの女』(1987年)などが次々と映画化され、作家としての地位を築き上げる。

<sup>125</sup> 『オール讀物』2014年5月号、文藝春秋、2014年4月22日。

近年は、時代・歴史小説の分野にも力を注ぎ、1989年、初の歴史小説として南北朝時代を舞台とした『武王の門』を発表。続く南北朝ものである『破軍の星』では、第4回柴田錬三郎賞を受賞。

1996年、全13巻6500枚書き下ろしという大長編、北方版『三国志』の刊行が開始され、以降歴史小説は、中国史へとその裾野を拡大。1999年には『水滸伝』が小説すばるで連載開始。前作を超える全19巻9500枚の超大作は、北上次郎<sup>126</sup>によって「日本の大衆小説の最高峰」と評された。そして、『楊家将』『岳飛伝』など著作も人々によく知られ親しまれている。(表五)

## 第二節 『三国志』を改作する経緯

北川謙三は高校時代に吉川『三国志』を読み、そのおもしろさを知るようになった。ただし、青春時代の「三国志」は、まだたくさんのおもしろい物語の中の一つにしかすぎなかった。再び北方謙三が「三国志」に直面することになったのは、プロの小説家としてデビューし、十年以上経ってからだ。

### 一、純文学からストーリー性を重視した小説へと

北川謙三はまず純文学を志し、これがまったく売れず、その後にストーリー性を重視した小説を書き始めた。これがいわゆるハードボイルド小説として世に知られるようになったのだが、こうした小説を長年書き続けていると、どこか閉塞したものが出てくる。娯楽小説ではあるが、一方で現実のリアリティにきちんと準拠していなければ、小説そのもののおもしろさが薄れてしまうためだ。<sup>127</sup>

### 二、歴史小説に辿り着く

北方謙三はこのジレンマを打破するために、どうすればいいのかを必死で考えた。最後に歴史小説というジャンルに向かってみようと思った。すぐに日本や、日本と関わりの深い朝鮮半島、中国大陸の歴史の勉強を始めた。中国の三国時代がどういうものかは、その勉強の中でだいたい知ることができた。ただし、そのときはまだ「三国志」は北方謙三の

---

<sup>126</sup> 目黒考二(1946年10月9日-)は、日本のエッセイスト・文芸評論家・編集者。東京都生まれ。北上次郎のペンネームを使用した。

<sup>127</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、p.14。

頭にはないらしいのである。北方謙三がまず向かったのは日本の「南北朝」だった。<sup>128</sup>

### 三、日本の南北朝から中国の三国時代へと

十四世紀、朝廷が二つに分かれ対立した時代を題材にした小説を書いたのだ。それが『武王の門』に始まる一連の南北朝ものだった。ところが、これにはこれで一抹の書きづらさがある。北川謙三は南朝と北朝のどちらかに肩入れするつもりも、歴史上の天皇を誹謗するつもりもない。その時代を舞台にした小説を書いているだけなのだが、それでも大きな発想の飛躍はできず、極端な人物造形もしにくかった。

その後、江戸時代を舞台に書いてみたりもしたのだが、南北朝もので書き切れなかったものが胸の内にしこりのように残っている。王朝とか王朝を建てた人物、王朝を建てようとしたり、継ごうとした人物の物語を自由に書ける場所を、無意識のうちに探していたのだ。そこに、思い浮かんだのが「三国志」だった。<sup>129</sup>

そのときが、北川謙三と「三国志」、あるいは「三国志」の世界との本当の出合いの始まりだった。たくさんあるおもしろい物語の中の一つから、小説家として自らの物語を紡ぐために直面すべきものとなったのだ。自分なりの歴史観を込めつつ物語の翼を自由に広げるには、「三国志」というのは最適の舞台だと北川謙三は改めて思った。

### 第三節 吉川英治『三国志』への違和感：『三国志』人物描写を改めるきっかけ

「三国志」を書く。「三国志」の世界を舞台に自由に王朝の栄枯盛衰を書く。そう決めて、吉川英治『三国志』の物語を改めて思い起こしてみた。北川謙三はその物語の芯に一本通っているのは、「尊皇思想」だと思った。しかし、吉川英治『三国志』を何回も読んだことがある北川謙三は物語の中にある微妙な違和感に気づいた。

それは劉備という人間の描かれ方である。劉備は「徳の将軍」、人格者で、初めから終わりまでずっと偉い人のままなのだ。偉いというのは地位だけではなく人格的に偉いということだが、ムシロ売りから蜀の帝にまで成り上がる中で、人間というのは終始一貫人格者でいられるものなのか。しかも、ちょっとショックを受けると劉備ともあろうものが、そのために気絶したり泣きくずれる、その大げさなところも気になった。白髪三千丈、つまり愁いのために白髪が九千メートル以上も伸びると表現するような中国が舞台の物語だか

<sup>128</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、pp.14~15。

<sup>129</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、pp.15~16。

らある程度はしかたがないが、それにしても不自然だと感じた。尊皇思想や倫理観についての語り口も、やや古びて見える。物語の展開にもスピード感がない。ここで述べた批判めいた意見は、北川謙三が「三国志」を書くならばこうするのにという、批判的に読み進めていた時点での感想だという。

吉川英治『三国志』の人物造形について、別の視点から見れば、この小説が書かれたのが戦争中だった昭和十四年から十八年（1939-1943年）にかけてであるということも、きっと大きな要因ではあるのだろう。日中戦争、太平洋戦争という戦時下に書かれたため、特に尊皇思想という「三国志」の物語の芯やそのエピソードの細部を描くとき、当時の時代的制約や儒教的な倫理観に沿わなざるを得なかったのかもしれない。

また、『三国志』は当時の娯楽小説の約束をあえて忠実に守りながら書かれている小説だということも指摘しておきたい。もしこれが、通俗小説の枠を超える覚悟で書かれたものならばいったいどのような作品になっていたのか、想像もできない。むしろ、中国で戦争をしていた時代に、他ならぬその中国の英雄たちを主人公にした「三国志」を書き、その物語のおもしろさを広く伝えてくれたという事実に、頭の下がる思いがする。<sup>130</sup>

したがって、北方謙三は自分の『三国志』を書くとき、自分なりの考えがある。劉備に関しては、泣くのが許せない、気絶するのが許せないという。いかにも北方謙三らしい好みである。劉備は徳の将軍として謳われるが、徳の人だけではない。荒れ狂い、激情を溢れさせ、深く沈み込むときがある。

毛宗崗本『三国志演義』の主役は「三絶」（曹操、関羽、諸葛亮）と吉川英治『三国志』の二大英雄（曹操、諸葛亮）との設定が違い、北方謙三は最も力を入れ、描き出したのは曹操や諸葛亮のほか、劉備、張飛そして呂布もいる。前述も触れたように、吉川英治『三国志』を何回も読んだことがある北川謙三は物語の中にある微妙な違和感に気づいた。それは劉備の描かれ方である。そのため、北方謙三は劉備に泣かせなく、情熱や知恵を与え、真の君主に生まれ変わられた。お次は三国時代における一番のやんちゃ坊主、張飛翼徳である。『演義』などは、ちょっと思慮が足りない暴れん坊として描かれているが、北方謙三『三国志』では、充分思慮のある、優しい男となっている。義兄弟の中では唯一の恋愛結婚であり、妻の暗殺によりすでに生きながらの死を迎えてしまうほどである。最期におよ

---

<sup>130</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、pp.18-20。



んで、刺客の路幽に「死ぬまで俺が抱いていてやる」なんていうセリフが吐けるキャラクターは、他にいないだろう。ほかに張飛と同様に強い思い入れがある人物が呂布であろう。孤高の軍人として強く書かれている。この呂布はかっこよく書かれている。この一連の北方謙三が描いた新しい人物像に対し、私は物語の一番早く登場した関羽から述べておきたい。

## 第四節 北方謙三の関羽像

### 一、関羽の初登場

#### (一) 三人の狭気ある男の出会い

『三国志演義』は、劉備と関羽、張飛の出会いを描く「桃園の契り」から物語を始めている。黄巾の乱が起きたとき、故郷の幽州・涿県でムシロ売りをして暮らしていた劉備、黄巾討伐のための義勇軍募集の立て札を前にため息ついていた。すると、なぜため息などつくのだと聞いてくる男がいる。張飛だった。劉備が、「自分は漢王朝の血筋をくむ者で、国のため民のため義勇軍に参加したいが、資金も力も不足しているからだ」と答えると、張飛は酒屋に誘い、一緒に参加しようと酒を酌み交わす。酒屋で二人はもう一人義勇軍に参加しようという男に出くわす。それが関羽で、たちまち意気投合した。翌日、張飛の家の裏にある満開の桃の木の下で、三人は義兄弟の契りを結び、さらに「姓は違い生まれ日が別でも、死ぬのは同じ日だ」と誓い合う。

「まだ礼を言うのは早い。俺たちは、あんたの手並みをちょっと見てみたいと思っただけだ。涿県で声をかけられた時も、おいしいことは言わなかった。それで、誘いに乗ってみる気になった。つまり男だとわかれば、俺たちは消える」<sup>131</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

「私と張飛を、その覇業に加えていただけませんか？」

言っていた。そう言わなければならないような気分に、関羽は襲われていたのである。天下を取るということについては、実感などまるでなかった。ただ、自

---

<sup>131</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.14。

分が考えつきもしないようなことを考えている人間が、目の前にいる。人生は捨てたものではない、と思った。

「加わると言う？」

「劉備玄德様のもとで、われら二人は働きたいと思います」<sup>132</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

「桃園の契り」は物語の始まりとしては確かにおもしろいが、それは民話伝説を聞いたときのようなおもしろさで、男と男の出会いとして考えると、あまりリアリティが感じられなかった。漢の皇帝と同じ劉姓で、中山靖王の末裔と聞いたにしても、それで会ってすぐに「生死を共にしよう、死ぬときは一緒だ」とはならないと思う。

この『演義』のオリジナルに対し、北方謙三は劉備たち三人を義勇軍に応募する前に会うようにさせた。劉備が、盗賊に盗まれた六百頭の馬を取り戻す仕事を請け負う。その仕事に雇われた男たちの中に、関羽と張飛がいる。馬はたやすく取り戻せたが、雇った連中で波風を立てる者が出た。そのとき、劉備が言う。

「ならば、去れ。私は、賊になるつもりはない。男には、命を捨てても守らなければならないものがある。それが信義だ、と私は思っている」<sup>133</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

すでに義兄弟の関係にあった関羽と張飛は、劉備という男に興味を持ち、楼桑村まで歩いてゆく。信義を通して馬を取り戻した男が、次に何をするのか。

ところが、劉備は再び葦織りの生活へと戻る。それでも惹かれた関羽と張飛に乞われて、劉備は心に秘めた想いをはじめて余人に語る。天下平定。まるで夢物語のような話だったが、生涯を賭けられるものを探していた関羽と張飛の琴線に何かが触れた。二人は、劉備に尽くすことを誓う。三人は単なる友情ではなく、義で結ばれた間柄だ。それは、「命を捨てても守らなければならない」関係であった。

これによって、北方謙三『三国志』には、「桃園の契り」はない。関羽と張飛はまず劉備の指揮下で馬運びの仕事を一緒にやってみて、劉備というのはなかなか信用できるやつだ、

---

<sup>132</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.41~42。

<sup>133</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.11。

腕っ節は自分より弱いが尊敬できるやつじゃないかとなり、義勇軍に応募するときに義兄弟になるという流れだった。男と男出会ったら、まずお互いの器量を「計り合う」もの。絆が結ばれるのは、その上で認め合うものがあつたとき。それは今も昔もおそらくかわらないだろうし、侠勇と呼ばれるにふさわしいと思う。

## (二) 出会った理由

### 1、三人の共通点：乱世の侠勇

北方謙三『三国志』において、作者は関羽と張飛を先に出会いさせ、その後劉備と合流するという設定である。ここで、関羽は俠気のある人を示すため、わざと好漢は好漢に助けられるというシーンを作り出した。

関羽は、河東郡の解県出身だった。洛陽と長安の間あたりで、いい岩塩が採れた。

張飛と出会ったのは、そこである。岩塩を独占していた役所を、張飛が襲って暴れたのである。力の強い子供が暴れている。というように関羽には見えた。理は、張飛の方にあつた。ひと掴みの岩塩を家に持ち帰ろうとした友人が咎められ、手を切り落とされそうになったのに怒って、役所に暴れこんだのだ。役所には、六十人の兵がいた。派手に暴れていたが、いずれ力が尽きると関羽は見た。思わず、助けていた。役人を十人ばかり叩き伏せ、張飛とともに河東郡から逃げたのだ。<sup>134</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

このエピソードにおいて、六十人の兵士を相手にし、ぎりぎり力が尽きた張飛に援助の手を差しのべる関羽はさすがに俠気を持つ侠勇と言えるではないか。このような創作は中国の別の名著を連想させ、それは『水滸伝』である。言わずと知れた中国伝奇の大傑作。腐敗した役人に反発した豪傑達が、梁山泊に集結し、最後には国の為には外敵や謀反人をやっつけるというストーリー。これと違い、北方謙三『三国志』は王朝交代劇である。それでも、北方謙三は個人的な好みから、正義感の豪傑達が社会の腐敗について行けずにはみ出して行く過程、つまりこのような侠勇の出会いが非常に痛快である。

<sup>134</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.32。

国が皇帝の威光でなく、軍事力でしか治められなくなった時代を「乱世」と呼ぶ。黄巾の乱勃発から五年後の一八九年。霊帝が崩御し十六歳の少帝が即位すると、乱世は一気に加速した。洛陽で、皇帝の外戚で実力者だった何進の暗殺、暗殺の報復として行われた名門貴族の武将・袁紹による宦官の大虐殺、西域の涼州に派遣されていた將軍・董卓による洛陽占拠、さらに少帝廃位とその弟の献帝即位という大事件が、わずかひと月の間にたて続けに勃発する。まさしく乱世である。国のため、民のためという名分もルールもない、末期的な状況だった。

しかし乱世は、武勇に優れ、俠気にあふれた男たちを輩出させる。平時ならただ遊俠の徒、粗暴な輩と呼ばれ嫌われるに違いないそんな男たちを、北方謙三は「俠勇」と呼んでいる。黄巾の乱の前後に名を挙げた騎都尉の曹操、長江南岸の揚州・呉の地方官だった孫堅。中原から海沿いの諸州まで転戦して地歩を固めつつあった、若き騎都尉の公孫瓚。その年上の友人で、仲間を募り義勇軍として黄巾の乱討伐に参加した劉備。まだ二十代前半から三十代初めだった彼らこそ、若き俠勇たちだった。<sup>135</sup>つまり、劉備、関羽、張飛ら三人は、人より少々世間を見てきたり（劉備）、腕に多少の覚えはあったりするが（関羽と張飛）、未だ何者でもない若く無名の乱世の俠勇だったのではないか。

## 2、三人の相補性

劉備たち三人の根拠地を持たない流浪の日々は決して短くない。少し長く落ち着いたのは、劉備は徐州の牧の地位に就いた十年目からの二年間ほどで、その後も曹操やその曹操の敵方の袁紹の客将になったり、荊州の刺史劉表の客将になったりと、中国中央部全域を転戦する年月だった。ようやく荊州南部を根拠地らしきものとしたのは、呉と連合して曹操と戦った「赤壁の戦い」後のことである。旗揚げから二十四年もたっていた。

二十四年間もの間、落ち着ける場所もなく戦を続け、死地をさまよいながら、関羽と張飛は劉備を見捨てなかったのだ。機会がなかったわけではない。たとえば関羽は、曹操と袁紹が戦った「官渡の戦い」の直前、劉備の妻子とともに曹操に捕えられたとき、曹操あから配下となることを強く求められている。しかし関羽はこう言って断る。「吾極知曹公待我厚・然吾受劉將軍厚恩・誓以共死・不可背之」<sup>136</sup>関羽も張飛もなぜ、劉備と共にあることを選び続けることができたのか。それが俠気だったと言えるそれまでだが、実は三人の間

<sup>135</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、pp.33-34。

<sup>136</sup> 陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p. 940。

にある相補的な関係が存在する。

### ①劉備のだけがもつ力：尊皇という建て前

関羽と張飛が劉備を見捨てなかったのは、劉備が自分よりすべての面で抜きん出ている男だったからということでは正しいとは言えないだろう。二人とも、「一人で万人の敵を相手にすることができる」と言われたほどの男である。けんかでも戦でも負けない自信はあったはずなのだ。では、武功に秀でない劉備には、彼だけが備えている力は何だろう。

劉備たちが無位無官で流浪している間、黄巾の乱でも反董卓の戦いでも名を挙げた曹操は、すでに 190 年代中頃には、後漢の名門出身で、董卓が滅んだ後は最大の実力者だった袁紹に迫る地歩を確保していた。そしてついに献帝を手中に収めると、軍勢力とともに献帝という名分を道具にして、統一に向けたさらに激しい戦の日々に入るのである。このとき対照的だったのは袁紹だ。その機会があったにもかかわらず、そして献帝を守り立てるならこの人という世評があったにもかかわらず、自陣に献帝を招くことはなかった。乱世の覇者に最も近い位置にいる自分が、新しい王朝を開くというつもりでいたのだった。

乱世の武人実力者として、どちらもある意味で当然の結論だろう。皇帝とはいえ力なきものが消えていくのはしかたがなかった。曹操と袁紹で判断が分かれたのは、道具、建て前として皇帝が使えるかどうかということにすぎない。

しかし、劉備にとっては違った。曹操や袁紹と違い、また公孫瓚や孫堅など他の乱世の有力者とも違って、劉備には資金も領地も譜代の兵隊も、本当の意味での家柄もなかった。すると、覇権争いをする群雄たちと伍していけるのは、勝利を重ねていけば大きくなる可能性のある軍勢力というものを別にすると、なぜ戦うかという理念だけになる。後漢を護るという理念、漢の帝室への尊王思想だ。

劉備が関羽や張飛との出会いで語ったのは、実際には漢四百年の恩義とか忠節の大事さとか、当時の尊皇思想に則ったもののはずだ。しかし、曹操や袁紹が当初の建て前を捨てて霸道に邁進していく中、相変わらずその建て前だけを語り続ける劉備を、二人はやはり信頼に値する人と思ったに違いない。<sup>137</sup>

尊皇という建て前だけを言いつける劉備と、行動を共にした関羽と張飛。そのため二十四年も流浪し、命をかけた戦いをした。「一人で万人の敵を相手に戦うことができる」二人である。もし、曹操についていけば、孫権についていけば、時代も少し異なる展開にな

<sup>137</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、pp.43~45。

っていたかもしれない。しかし、二人が求めているのは、自分あるいは群雄が備えていない尊皇という建て前である。出会えたことそれだけでよかったと思える、きわめて幸福な出会いというものがある。

## ②性格的部分：せっかちな関羽と冷静な劉備・張飛

三国時代において、関羽は蜀随一の豪傑。『三国志演義』では、完全無欠な人物に描かれる。史実においても文武に秀で、義を重んじる性格。下の者に優しく、よく面倒を見たという。そして、張飛は関羽と並ぶ豪傑と言える。『三国志演義』では粗暴だが邪気がなく、単純な性格に描かれる。しかし学問をした形跡はない。そういう環境になかったと思われるが、同じような境遇の関羽は、成人後に学問を始めている。張飛は生来じっくり書を読んだり、熟考するのが苦手なタイプかも知れない。地勢を見て作戦を立てるのは得意でも、言語的な思考にはあまり向かない。

一方、北方謙三が描いた関羽と張飛の二人の性格は完全に逆さまにした。まずは三人の出会いから述べておきたい。

「玄德様な夢を持ったことと、同じことだろうと思います。とにかく、お考えください。今日のところは、われらは失礼いたします。われらも、考えてみますので」

関羽は立ち上がり、一礼して、家の外へ出た。慌てていた。自分がなぜ慌てているのかもわからぬまま、ひどく慌てていた。待ってくれ、という張飛の声が追ってきた。<sup>138</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

関羽と張飛はまず劉備の指揮下で馬運びの仕事を一緒にやってみて、劉備というのはなかなか信用できるやつだ、腕っ節は自分より弱いが尊敬できるやつだと思った。そして、三人の食事会の間に、劉備は自分の夢を語り、関羽は大変共感し、劉備の夢に生涯を賭けると決心した。しかし、その後劉備の答えを待たせず、慌てて帰った。関羽はどうしてあたふたと出て行ったのか。劉備に拒否されるのが怖いのか？初めて心を露わになって恥ずかしいと思ったのか？とにかく、このような関羽の行動はあまりにもせっかちだ。

<sup>138</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.42。

そして、戦況の行き先などに対して抱いていた認識も、関羽は張飛に及ばないらしい。

「そうか、四郡をしっかりと制圧してから、油口か。われらが戻れば、六万の大軍になるしな。これで、周瑜とも闘える」

関羽が言った。まだ兵の練度がまるで違う、と張飛は思った。かつての劉備軍は六千だったが、普通の軍ならば二万までとは闘うことができた。いま江陵を攻めている周瑜軍は、選りすぐった精鋭だろう。いまの兵なら、十万の軍があっても、勝てるとは思えない。

それより、関羽はなにを急いでいるのか、と張飛は思った。周瑜といずれぶつかることになるとしても、いまはまだ同盟軍なのだ。周瑜と闘うことより、曹操が再び攻めてきた時にどうするか考えるべきではないのか。<sup>139</sup>

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 わが声の飢する時)

『演義』の中、関羽の軍事能力は相当高かったはず。当時関羽の名は他国に響き渡り、「蜀の名将といえはまず関羽」というのが定番の評価だった。しかし、この北方謙三が描いた関羽はすこし焦りがあるようである。最大の勢力を持つ曹操がまだいるのに、六万の軍を擁して同盟軍の周瑜を討伐しようと思った関羽はさすがに戦場の形勢を読み取ることができない。なかなか落ち着かない関羽と違い、北方謙三『三国志』の張飛は慎重かつ周到な人柄を持つ主である。三つの国の実力を冷静に分析することができ、呉国と連合して曹操に当たる方針もはっきり知っている。このような張飛は決して単細胞ではなく、将軍としてかなりの才を備えていた。

最も有名な「三顧毛蘆」のシーンにおいても、関羽と張飛の雪と墨ほど違う性格が見せられる。

过了数日・玄德使人探听孔明・回报曰：“卧龙先生已回矣” 玄德便教备马。张飞曰：“量一村夫，何必哥哥自去，可使人唤来便了” 玄德叱曰：“汝岂不闻孟子云：‘欲见贤而不以其道，犹欲其入而闭之门也’ 孔明当世大贤，岂可召乎！” 遂上马再往访孔明，关、张亦乘马相隨。……张飞曰：“天寒地冻，尚不用兵，岂宜远见无益

<sup>139</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.215~216。

之人乎！不如回新野以避风雪。”玄德曰：“吾正欲使孔明知我殷勤之意。如弟辈怕冷，可先回去。”飞曰：“死且不怕，岂怕冷乎！但恐哥哥空劳神思。”玄德曰：“勿多言，只相随同去。”……<sup>140</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第三十七回 司马徽再荐名士 刘玄德三顾茅庐)

「ところで張飛、あの隆中の若造のことだがな」

「頭はいいのだろうな。あの櫓を考えついたりするんだ。剣は、そこそこに遣える。馬にも乗れる。それでいいではないか。あんなやつが、田舎の村にいるとほっとする」

「ところが、兄上はまた諸葛亮を訪ねになる気だ」

「そうか、またか」

「仕官を望んでいるというのなら、断る理由もないが、ことらから出向くとは、兄上は買い被りすぎておられるような気がする」

「どうだろう」

張飛が、酒を注いだ。二人きりの時、張飛はあまり酒を飲んだことがなかった。大酒を飲むのは、人が見ている時だけだ。

「いまは、あんな若造に構うより、やらなければならないことが、山ほどある」

「なあ、小兄貴」

「そうはおもわないのか、張飛？」

「大兄貴は、諸葛亮を欲しがっておられるのだおう？」

「多分な」

「小兄貴に説教するような柄ではないが、大兄貴が欲しいというなら、黙って見ていたらどうだろう。俺たちには、確かに足りないところがある。大兄貴が欲しいと思うなら、なにもいうのはよそうぜ」

「しかし、どうってこともない若造だ。世をすねて、あんな暮しをしているのかもしれない」<sup>141</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

<sup>140</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.456。

<sup>141</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.88。



『三国志演義』では、第一回目諸葛亮の草廬を訪ねた後、張飛はすでにくどくどと恨み言を言い始めた。そして、二回目の諸葛亮訪問のうち、雪はますますひどくなる。張飛はもっと文句を言うと、兄の劉備にさえ、少しの怒りがあったようだ。

一方、北方謙三『三国志』において、だれよりもまず文句を言うのはまさかその関羽である。関羽は劉備がなぜ諸葛亮に対してこのように手厚いことをするのが理解できない。この関羽はわざわざ張飛の家まで来られ、酒を飲みながらぐちをこぼす。さすがにすこし子供っぽいところがあるではないかと思われる。このとき、北方謙三筆の下で、慎重な性格を持つ張飛は関羽を説得せざるをえなかった。

そして、吉川英治『三国志』の中の経書や典故を引用し、劉備を励ました関羽と違い、北方謙三が描いた関羽はときときイライラして、劉備の説得が必要である。

「兄上は、年が明けると、五十になられます。私は、四十九です。周瑜を見ていて、時間がないのだ、とふと思いました。荊州に入ったら、北を奪るべきだと考えました。いや、荊州全域でもいいのです。孔明殿の戦略が益州にあるのなら、すぐにでも益州に進攻すべきです。そして力をつけ、曹操とぶつかり、天下を手にするべきです。それが、弟である私が、兄上のためになさねばならないことだ、と思います。しかし、四十九でした。戦場で働けるのは、あと十年ぐらいかもしれせん」

関羽は、老いを自覚したのだ、と劉備は思った。その自覚が、残された時間がどれほどあるのか、という焦りに繋がったのだろう。

孔明や周瑜という、若い者たちの働きも目の当たりに見えたのだ。

「お互いに、歳だな、関羽」

劉備は笑い、関羽の杯に酒を注いだ。

「おまえの髭も、私の髪も、白くなった。しかし、心までは白くなっていない」

「心まで白く？」

「涿県を出た時から、われらはどこが変わった。一度として、志を曲げなかった。そのたびに、すべてを耐えた。それはいま、私の誇りでもある。おまえや張飛の、誇りでもあるはずだ。誇りをともに抱ける兄弟に、人生で出会えた。それは、よかったと思う」

「しかし、天下に届かなければ、なんのための志だったのですか？」

「急げば、届くのか、関羽？」

関羽が、黙りこんだ。<sup>142</sup>

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 秋)

この話は老いを自覚した関羽に対し、劉備の一連の説得である。もうすぐ四十九歳になる自分に自信がない。戦場で働けるのは、あと十年ぐらいしかないので、劉備にはやく益州に進行し、その後すぐに曹操とぶつかりと勧めた。この時の劉備は彼をこんこんと諭していた。これは吉川英治『三国志』における二人に対する描写と完全に逆になる。ここの劉備はショックを受けてもめそめそしない、優柔不断の性格も全く見えない。これはまさに北方謙三が言及されていた吉川英治『三国志』の違和感への改作ではないか。このような改作を行うことに通じて、劉備は一人前の君主に生まれ変わった。

心の底にある、焦りに似た思いは、消えていなかった。関羽は、五十三歳になっている。劉備は、五十四歳だ。残された時が、どれほどあるのかと、ひとりになるとよく考えた。あと十年として、その間に曹操を破り、孫権を破り、この国を平定できるのか。

.....

再び待つには、齢を重ねすぎている。

月の光が、地面に関羽の影を落としている。歩哨の呼び交わす声。かすかな風。

143

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 たとえ檻樓であろうと)

関羽の心の底にある、焦りに似た思いは、これからも決して消えていなかった。一人で荊州にいるときもたまたま複雑な心境に落ちる。このとき、月の光、人の影、歩哨の声、かすかな風など景色に関する描写も更に関羽の喪失感を引き立たせる。

「いまのところ、孔明殿の戦略は、ぴたりと的中しているな。天下三分、まさに、そういう形勢になってきた」

<sup>142</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.293~294。

<sup>143</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.57。

「すでに、三分されている、と見てもよいでしょう」

「細かい話に入る前に、ひとつ言っておく、孔明殿。私は、もう若くない。殿もだ。何年も、じっくり待つということは、もうできなくなっている。私は、劉備玄德その人に、天下をとらせたい」<sup>144</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 荊州の空)

最後、関羽は諸葛亮のところに相談してきた。自分は劉備に天下をとらせたいが、時間はあまり残っていないと言いつつ、ひいては諸葛亮の策略を疑っている。関羽の不安はすべて早く劉備に天下を奪取ようとしているのだが、このような関羽確かに儒将の気質を失った。すこし子供っぽいかもしれない。すこし女々しいかもしれない。目に触れ耳にするものすべてが新しく変わる感じをしたことは認めざるを得ない。

総じて自分がないとこの人はだめになる。男でも女でもそんな気持ちが人を深みにはまらせるものだ。結局、劉備と関羽と張飛は三人で一人、だめな部分をそれぞれ相補う関係だったというのが、結論である。劉備のだめな部分は張飛が、そして関羽が引き受ける。極端に言うと三人で一人格のようなものだから、これは途中で別れるわけにはいかない関係なのである。

## 二、関羽の人間像

### (一) 仁者関羽

#### 1、無意味の殺戮を禁ずる

『三国志演義』では、関羽の猛将たる側面が最大限に発揮する名場面が数々ある。その中でもっとも有名なのは「顔良、文醜を斬る」及び「水攻めし七軍を破る」である。後者については、建安二十四年、劉備は漢中王となると関羽を前将軍に任命した。この歳、関羽は軍勢を率いて樊の曹仁を攻めた。曹操は于禁を派遣して曹仁を救助させたが、秋に大長雨となって漢水が氾濫し、于禁が監督していた七軍は全て水没してしまった。于禁は関羽に降り、関羽はさらに將軍龐惠を斬った。関羽の威勢は華夏を震わせた。

比及平明・矣公及众将皆摇旗鼓噪・乘大船而来・于禁见四下无路・左右止有五

<sup>144</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.128~129。

六十人・料不能逃・口称愿降。关公令尽去衣甲・拘收入船・然后来擒庞德。.....关公将船四面围定・军士一齐放箭・射死魏兵大半.....关公催四面急攻・矢石如雨。<sup>145</sup>  
(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十四回 庞令明抬榉决死战 关云长放水淹七军)

于禁は、雨が落ちてくる天を一度仰ぎ、それからうつむくと、槍を捨て、馬を降りた。

「負けました、関羽將軍。この首をお取りください。願わくは、部下の命はお救いくださるよう」

「于禁殿、戦は結着がつけばよい。もはや、無用に殺し、殺される時代ではない。これは、国を作るための戦なのだ」

「しかし」

「ひとりひとりが民。于禁殿も兵も、そのひとりひとりであろう。戦が終わるまで、江陵にいていただく。それだけでよい」<sup>146</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 北へ駆ける夢)

『三国志演義』において、関羽が策に成功した後、一気に敵を退治しようとする気持ちがよく伝えられた。この戦争を通じて、関羽の知略と勇気を顕われたが、洪水の中に落ちる敵をみな射殺しのやり方はいかにも残忍である。確かに、人間の歴史なんて大抵血と涙と共にある。戦争があればこそ、このような無情な関羽がいる。そして、非人道な事件がおこるわけである。

これに対し、北方謙三の『三国志』は関羽に一つ作戦の名分を挙げた。それは「国を作るための戦」という旗である。そして、関羽も自分の行動を正当化しようとしている。彼によって、戦は決着つけた後、無意味の殺戮をする必要はない。関羽から見れば、敵将の于禁も敵の兵士たちもひとりひとりの民である。この博愛の精神はなんと立派である。私は人間には他の動物には無い「理性」があると思う。もしこの理性を磨くことができれば、だれでも関羽のように広い心を持つことができるではなかろうか。

## 2、流民に兵糧を与える

<sup>145</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国志演義』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.923~924。

<sup>146</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.260。

無意味の殺戮を禁ずるほか、関羽の仁者としての資質も人生の最終段階、麦城に包囲されたときにあらわれた。

樊城の近隣の村を、関羽は関平の率いる二千騎ほどを連れて、駆け回った。

洪水にやられた村が多い。家を失った人々の群れもいた。わずかだが、関羽は兵糧を与えて歩いた。苦しいのは、兵も民も同じである。<sup>147</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 野に降る雪)

洪水の被害で、流民となる民に対し、関羽は自分のわずかの兵糧を与え、彼らが受けている痛みを軽減しようとしている。彼から見れば、兵士と庶民は全く同じな存在である。戦争があれば、誰かが傷つく、誰かが命を落とす、この点には関羽がよく理解している。だから彼は全力を尽くし、たくさんの流民を助けてあげた。関羽の心の中には、自分の戦争で、村の人たちは流民になっていたことを後ろめたく思っているかもしれない。しかし、彼の慈愛と博愛の精神はやはり読者たちに感動させた。

### 3、兵士を解放する

『三国志演義』では、関羽は樊城にいる間、最後まで必死に抵抗し、決して孫呉に降服しない姿は印象に残る。諸葛瑾が降服を勧めると、関羽は「義に背いて敵に降るようなことはできぬ」と言い、その死が義に基づくものであることを宣言する。これによって、関羽の義は天に貫くことができ、毛宗崗に「三絶」の一人に位置づけられた。一方、関羽の死は自分の専断によるものと言わざるを得ない。最後まで他人の意見を聞かない、死ぬまで孫権をののしることも窺える。

且说关公在麦城盼望上庸兵到，却不见动静。手下止有五六百人，多半带伤，城中无粮，甚是苦楚。<sup>148</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十六回 徐公明大战沔水 关云长败走麦城)

且说关公在麦城，计点马步军兵，止剩三百余人，粮草又尽。是夜，城外吴兵招

<sup>147</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.282。

<sup>148</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.947。

喚各軍姓名・越城而去者甚多。<sup>149</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十七回 玉泉山关公显圣 洛阳城曹操感神)

二日目、関羽は兵を集め、残りの兵糧を配った。

「故郷へ帰れ。いままで、私とともによく闘ってくれた。生きて故郷に帰れたら、そこで休め。まだ戦ができると思った者だけが、益州の殿のもとへ行けばよい」<sup>150</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 野に降る雪)

『演義』には、関羽と部下と一緒に樊城に閉じ込められ、いやというほど食糧不足の苦しみを受け、救援を待つことにイライラしている。残った三百人余人の軍に直面し、その大半は傷を負い、関羽はまだどうやって早く包囲を突破することを図る。結局、自分の剛情で、呂蒙に捕えられ、わずかの兵士たちもそのために貴重な命を払った。

北方謙三『三国志』において、前も述べたように、博愛かつ慈愛の心を持つ関羽は戦場で無意味な犠牲を見たくない。流民に兵糧を渡すと同じ、関羽もわずかな兵糧を残りの兵士たちに配った。その後、私たちが想像したように、兵士たちに満腹させ、最後にご飯を食べた後、戦場に赴くではなく、関羽は兵士たちに故郷へ帰って、生活をよくしてと勧めた。これは中国版本の『三国志演義』には見られない光景であるが、北方謙三の筆で、関羽は確かに仁者に生まれ変わった。関羽にとって、戦争とか、あまりにも残酷である。劉備がいなければ、自分は自分が言ったように、故郷に帰って新たな生活を始めているかもしれない。

## (二) 情の深い関羽

### 1、父子の間：含蓄の情

北方謙三『三国志』において、張飛は屈指のロマンチストである。義兄弟の中では唯一の恋愛結婚であり、妻の暗殺によりすでに生きながらの死を迎えてしまうほどである。最期におよんで、刺客の路幽に「死ぬまで俺が抱いていてやる」なんていうセリフが吐けるキャラクターは、他にいないだろう。この張飛に比べ、関羽の家族に対する感情は含蓄に

<sup>149</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.951。

<sup>150</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.308。

富んでいる。驚くほどの言葉はないけれど、人を泣かせるのはいっそう甚だしいものである。

「張飛翼徳。おまえは、最後に張飛に鍛えて貰え。それで、一軍の将たり得るだろう」

「張飛將軍のもとで」

「私が鍛えるよりはいいと思う。おまえは強いが、張飛にはまだ遠く及ぶまい。益州には、趙雲もいる」

「私が使いものにならないので、益州へ行けと言われていたわけではないのですね？」

「益州は、わが兄、劉備玄德様の本拠となるところだ。腰抜けをやれると思うか」

「はい」

「明日の夕刻、もう一度ここへ来い。引き合わせたい人物がいる。いつでも、出発できるようにしておけよ」

「かしこまりました」

関興は、青竜偃月刀を、両手で差し出した。

「持っていけ。おまえのために、江陵の鍛冶屋に打たせたものだ。私が遣っているものと、ほとんど同じにできている」

「私のため、だったのですか」

関興の眼が、じっと見つめてきた。涙が溢れかけているように、関羽には見えた。

「もう行け、興」<sup>151</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 荊州の空)

蜀の將軍関羽が、実子である関興を益州の張飛へ武者修行に送った。関興は、廖化の下で校尉を務めていたが、劍術の腕前を上げた、との評価を受け、関羽が直々に腕を試した後、益州行きを言い渡した。

今回の武者修行は、音に聞こえる英傑の息子に恥じない腕前に鍛え上げる、というより

<sup>151</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.126。

も、血のつながった息子を戦場でやすやすと死なせたくない、という関羽の親心が込められている模様。さらに、関羽もわざわざ職人を命令し、自分と同じく武器青竜刀を作り、関興に差し上げた。関羽には、関興のほかに養子の関平と、実子である三男に当たる幼少の関索がいるはず。しかし、自分と同じ武器を与えられる人もこの子しかいない。もし自分がさきに死んだら、自分の意志を継承するのもこの子しかいないということはよく伝えられた。そして、息子の涙を見て、自分も涙をこらえきれない時、関羽の別れ言葉も子供に対し、父親の愛情が流露する。これによって、関羽は息子関興への慈愛と期待を見抜くことができる。

## 2、義兄弟の間：一筋の情

毛宗崗本『三国志演義』は「桃園結義（桃園に義を結ぶ）」という虚構から始まる。劉備・関羽・張飛ら三人の間の感情を強調し、「生死を共にする」という誓いの言葉も後世の人々に語り継がれた。『三国志』は、もちろん「桃園結義」を記載しない。ただ、『三国志』関羽伝に、「先主與二人寢則同床、恩若兄弟。而稠人廣座、侍立終日……」<sup>152</sup>（先主は二人と寝るときは牀を共にし、恩は兄弟のようであった。しかし、多くの人が集まっている席では、一日中でも立ったまま待った。）と、「恩」は兄弟のようであったと伝えるだけである。果たして北方謙三はどのように関羽と劉備の間の感情を描いたのか。

.....関羽は、決められた税をきちんと徴収し、その後、領内を駆け回りながら、余分なものを自身で返していった。いまは備蓄に力を注ぐより、民心を落ち着けることを優先した。

「一度徴収された税が、わずかでも返ってくる。これは、民にとっては信じ難いことのようにです。荊州の東部からは、農民が少しずつ流入しはじめています」<sup>153</sup>

（北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 荊州の空）

荊州の蜀軍の数が急激に増えはじめ、すでに五万五千に達していた。志願した者をすべて受け入れていたら、七万近くになっているだろう。魏軍の徴兵が厳しく、北から流れてきた者がいる。荊州東部からも、関羽のやり方に好感を持った民が、かなりの数流入してきた。余分に徴収した税を、返すというやり方である。

<sup>152</sup> 陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.939。

<sup>153</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.112~113。



もともと東部が支配下であったころ、関羽は徹底した慰撫に努めていた。頻繁に豪族と会い、民とも語った。そのつもりはなくても、慕われていたのだ、と関羽は気づいた。関羽が考えていたのは、徳の将軍という劉備の名声を、荊州では守り抜いていかなければならない、ということだけだった。<sup>154</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 荊州の空)

劉備は益州を討伐するため、荊州を一番親しみ兄弟関羽に任せた。この間、関羽は外敵を防ぐため、軍の訓練を繰り返すだけではなく、徴収した税金の余りを民に返すことによって、民心を落ち着かせた。そして頻繁に荊州の豪族と会い、民とも語った。時代にあった政策を行い、このような関羽は一人前の政治家と連想させた。しかし、関羽の考えとしては、これら仁政を実施するのはすべて徳の将軍という劉備の名声を守るためだ。

弟分張飛とともに、劉備と義兄弟の契りを結んだ男、関羽。青竜偃月刀を手に、駿馬赤兔を駆る蜀の英傑としての雄姿は、あまりに有名だ。

その関羽を欲しがったのが、他ならぬ曹操である。小沛を急襲され劉備が潰走した際、下邳にいた関羽は、劉備の正室甘夫人、側室の糜夫人を守るために曹操へ降伏する。曹操は関羽を降人として扱わず、なんか懐柔しようと試みた。結局、関羽は曹操の下で功を立てて、劉備のもとに戻っていった。この話こそ、毛宗崗本『三国志演義』は関羽を「三絶」の一人「義絶」と位置づけ、その義を称える理由である。三国時代において、多くの武将が、それぞれ群雄のもとを去り、「奸絶」の曹操に従った。そうした中で、関羽だけが劉備のもとに戻っていく。主君が敗れても見捨てず、優遇されても元の主君に帰参した事例がきわめて稀なためであろう。

関羽が義であるとの評価を定め者は、実は曹操なのである。北方謙三『三国志』はさらに関羽の性格を愚直に定義する。

苦境の時、人はなにによって自分を支えるのか。曹操が、人を見る場合の要素のひとつだった。関羽は、愚直なまでの忠義心で、自分を支えている。<sup>155</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 風哭く日々)

「頼みたいことがあるのだかな、関羽」

<sup>154</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.121~122。

<sup>155</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.209。

「はい。事と次第によります」

「難しいことではない。一万ほどの軍が、郊外で訓練をする。官渡に送る兵だ。しかし、私の幕僚たちはみんな官渡で、先日張遼も行った。訓練の指揮を執れる者がおらぬ。それを、おまえに頼みたい。十日ほどで、仕上げてくれぬか？」

……

「そうしよう。ところで、これがおまえの、私に対する手柄になるのかな」

「手柄は、戦場で立てるもの、とっております」

……

「官渡へ行け、関羽。張遼の軍に加えられ……」

「わかりました。私に、機械を与えてくださっているのですね」

「そうだ。おまえの言う手柄というのが、どれほどのものか見てみたい」

かすかに、関羽が笑ったような気がした。<sup>156</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 風哭く日々)

「曹操殿、どうかこれを、手柄とお認めください」

首を地面に放り出し、関羽が言う。認めない、と言うわけにはいかなかった。時がかかるかもしれないと思ったものが、一瞬で決まったのだ。

「御恩を受けいたしました、これでお別れいたします」

関羽は下馬して一礼し、再び馬に飛び乗ると駆け去った。

……

「どこまで愚直な男なのだ」

呟いた。自分のもとにいれば、いずれ一州を領させてもいい。それでもなお、劉備のもとへ帰るのか。帰ったとして、なにがあるというのか。

「愚直すぎる」

「それが、関羽雲長でございます」

聞こえたのか、張遼が言った。<sup>157</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 風哭く日々)

大漢和辞典によると、「愚直」の意味は「正直一方でかけひきのないこと。ばか正直」と

<sup>156</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.211~214。

<sup>157</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.224~225。

いう。関羽の「愚直」は主に二つのところに顕われている。その一、曹操の説により、関羽の忠誠心は愚直な状態に達している。自分のもとにいれば、いずれ一州を領させてもいいと曹操思った。それにもかかわらず、功績を立つ次第すぐ自分にいとまを告げる。劉備のもとに帰ったとしても、なにが良いものを手に入れたい。そこまで劉備を慕い、「愚直」というべきではないか。その二、関羽にとって、手柄というのは戦場で立てるものである。曹操は関羽がはやく戦功を立てたいことを知り、わざと軍の訓練を彼に任せた。しかし関羽からみれば、軍隊の訓練は手柄と呼ぶことができない。結局、曹操は関羽を戦の前線に行かせ、袁紹臣下の顔良を討った。これにてやっと戦場で手柄を立てることができ、曹操に恩義を返した。

荊州を治めていた関羽は、隣国の呉国君主である孫権から互いの子息の縁組を持ちかけられる。このとき関羽ははっきりと断っている。断るのが筋なのですが、関羽の性格からして「虎の子を犬の子にやれるか」と侮蔑した断り方をしたとも伝わっている。力を認めていない相手には敵でも見方でも容赦がない。

云长曰：“子瑜此来何意？”瑾曰：“特来求结两家之好。吾主吴侯有一子，甚聪明；闻将军有一女，特来求婚。两家结好，并力破曹。此诚美事，请君侯思之。”云长勃然大怒曰：“吾虎女安肯嫁犬子乎！不看汝弟之面，立斩汝首！再休多言！”遂唤左右逐出。<sup>158</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十三回 玄德进位汉中王 关云攻拔襄阳郡)

「同盟強化のための縁組みなど、両家の間で終わったことだ。よいか、孫家と劉家の間ではだ。この関羽雲長、劉備玄德麾下の一部将にすぎぬ。その部将との同盟強化とは、いかなる目的で言っていることだ？」

「関羽將軍は、一部将などとは申せません。蜀を背負い立ち、荊州を支配され、あまねく天下にその名声を轟かす、勇将中の勇将であります」

「私が、劉備玄徳の部将ではないと言うか。聞き捨てならぬぞ。孫権殿は、劉備に背をむけて呉へ来いと、この私に言われているのだな」<sup>159</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 北へ駆ける夢)

<sup>158</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、p.910。

<sup>159</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.240~241。

北方謙三『三国志』において、関羽は孫権のことを人前で辱めなかった。言葉によると、今の関羽は傲慢な態度をとっていない。諸葛瑾のお世辞に対しても心が動かない。自分はただ劉備麾下の一員の部将に過ぎず、蜀を代表するわけにはいかないといい、勝手に敵国と縁組などありえない話をするにはいけないと明らかに断った。このような答えは道理に根拠がある。劉備と張飛の間には親兄弟のような感情であるが、他人の前には君臣の理をはっきりと分けないといけない。理に縛られた関羽は愚直に見えるのではなかろうか。

呉の裏切りがなければ、関羽は荊州を全部制圧するところまでいったはずだった。関羽は、荊州を任せられてから死ぬまで、その間ずっと劉備に会っていない。ずっと離れたままだ。

心に、鬱屈したものがあつた。劉備と同じ戦場で戦えない。仕方がないことだとわかっていても、それが時々たまらないことに感じられた。<sup>160</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 たとえ檻褻であろうと)

劉備と離れて暮らすため、関羽の心の奥に寂しさは、あつたと思う。この寂しさは関羽が死ぬまで続けている。劉備とともに、闘うことができなかつた。張飛と、轡を並べることができなかつた。趙雲とも、会えなかつた。関羽が死ぬ前に、心の中にはこのような残念が存在しているかもしれない。しかし、一番気になるのはやはり兄劉備に、済まないと思うだけであろう。

江陵を、奪回する。

関羽が考えたのは、それだけだつた。

「関平、江陵に戻る。全軍の準備を整えよ」

「父上、徐晃に追撃を受けます」

「構わん。ぶつかって、突き破る。そして、江陵にむかってひた駆ける」

劉備は、こういう事態になっていることを、まだなにも知らないだろう。知れば、まず自分の身を案ずるはずだ。その時、江陵の城壁から顔を出し、無事だと

---

<sup>160</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.72。

言って安心させてやりたい。<sup>161</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 野に降る雪)

たとえ後ろに徐晃の追っ手があっても気にしない。今の関羽が考えたのは、江陵を奪回することだけである。この行動は今の戦況に何か影響を与えるではなく、ただ劉備を安心させてやりたい。関羽にとって、自分の安否も国の安否も肝心なことではない。乱世の中、彼が唯一心配したのは兄貴の劉備だけだ。北方謙三は死に直面するときに、劉備の安否をばっかり考えていた関羽の描写を通じて、関羽の劉備に対して一筋の気持ちをはっきり表現している。関羽の戦死の知らせを耳にした後、曹操の一言は関羽の人生を正しくまとめた。それは、

「劉備のために、闘っている。すべてが、劉備のためなのだ」<sup>162</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 北へ駆ける夢)

という。今まで、関羽がやった事は全て劉備のためだ。曹操が言ったように、関羽の劉備に対する忠誠心は一種愚直な状態に達している。結局、関羽の夢は劉備を天下の王者にすることである。劉備との出会いこそ、関羽にこのような美しい夢を与えたに間違いない。

### 3、日常生活の中：優しい心

一人で万人の敵を相手にすることができる大男関羽であるが、普通の人間と同様、日常生活の中に優しい心があらわれる。

庭の隅に、花が咲いている一角があった。雑草が多かった庭である。その花を見るのが、関羽の一日の愉しみになっていた。花の名など、知らない。知ろうとも思わない。ただ、花がなにかを自分に伝えてくる。この世には、心を動かすものがさりげなく存在していたりする、と花が教えてくる。戦続きの人生だったが、戦ばかりが人生でもないのだ。<sup>163</sup>

---

<sup>161</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.305。

<sup>162</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.273。

<sup>163</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.233。

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 北へ駆ける夢)

赤壁の戦い以後、篤き信任ゆえに益州制圧へ向かった劉備から遠方の荊州を任されるが、遂に劉備と戦場を共に馳せることができなかつた。荊州にいる間、関羽の心はどんなに寂しくて空しい、さっきすでに述べた。この時の関羽は兄と友達の思いを雑草の中、一輪の小さい花に託することしかできないらしい。この名前さえ知らない野花こそ、関羽の心を深く触れていた。自分の人生は戦争以外にも、このようにさりげない美しいものが存在していると関羽思っていた。『演義』には、このような優しい心を持つ関羽は見られない。

### 三、関羽の夢：劉備を王者にする

『三国志』と言えはまず思い出されるのが、劉備、関羽、張飛が「生まれた日は別でも死ぬ日は一緒だ」と誓い合う有名な「桃園の契り」だ。しかし、これは羅貫中の『三国志演義』による脚色で、無論、史実は異なる。三人の出会いから、義兄弟の序列を決めることまで、多くの異説があるが、北方謙三『三国志』における三人の出会いは極めてシンプルだ。

劉備が、盗賊に盗まれた六百頭の馬を取り戻す仕事を請け負う。その仕事に雇われた男たちの中に、関羽と張飛がいる。二人は信義を通して、馬を取り返した劉備に大変興味を持ち、楼桑村まで付いてゆく。そこで劉備は心に秘めた想いをはじめて余人に語る。天下平定。まるで夢物語のような話だった。しかし、劉備の夢は生涯を賭けられるものを探していた関羽と張飛の琴線に何か触れた。

「私と張飛を、その覇業に加えていただけませんか？」

……

「自分の出世だけを考える、つまらん武将の下で働くより、夢のあるところで働きたい。玄德様の夢を、わが夢にもできるという気がします」<sup>164</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

関羽と張飛は、劉備に尽くすことを誓う。単なる友情ではなく、義で結ばれた間柄だ。それは、「命を捨てても守らなければならない」関係であった。これから、劉備を天下人に

<sup>164</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.41~42。

するため、関羽は一生をかけて奮戦してきた。

劉備は益州を討伐するため、荊州を一番親しみ兄弟関羽に任せた。この間、関羽は外敵を防ぐため、軍の調練を繰り返すだけでなく、徴収した税金の余りを民に返すことによって、民心を落ち着かせた。そして頻繁に荊州の豪族と会い、民とも語った。時代にあった政策を行い、このような関羽は一人前の政治家と連想させた。しかし、関羽の考えとしては、これら仁政を実施するのはすべて徳の將軍という劉備の名声を守るためだ。

そして、人生の最期において、たとえ後ろに徐晃の追っ手があっても気にしない。関羽が考えたのは、江陵を奪回することだけである。この行動は今の戦況に何か影響を与えるのではなく、ただ劉備を安心させてやりたい。関羽にとって、自分の安否も国の安否も肝心なことではない。乱世の中、彼が唯一心配したのは兄貴の劉備だけだ。

関羽の戦死の知らせを耳にした後、曹操の一言は関羽の人生を正しくまとめた。それは「劉備のために、闘っている。すべてが、劉備のためなのだ」<sup>165</sup>という。確かに、今まで関羽がやった事は全て劉備のためだ。曹操が言ったように、関羽の劉備に対する忠誠心は一種愚直な状態に達している。結局、関羽の夢は劉備を天下の覇者にするることである。劉備との出会いこそ、関羽にこのような美しい夢を与えたに間違いない。

#### 四、関羽の死：安らかな死

『三国志』において、陳寿の関羽への評価は高くない。一人で万人の敵を相手にすることができる勇将であるが、剛情で自ら誇りを持ちすぎという欠点もある。彼の死をめぐる記述を見てみると、この欠点は簡単に見破れる。

先是、權遣使為子索羽女、羽罵辱其使、不許婚、權大怒。又南郡太守麇芳在江陵、將軍士仁屯公安、素皆嫌羽輕己。羽之出軍、芳、仁供給軍資、不悉相救。羽言「還當治之」、芳、仁咸懷懼不安。於是權陰誘芳、仁、芳、仁使人迎權。而曹公遣徐晃救曹仁、羽不能克、引軍退還。權已據江陵、盡虜羽士衆妻子、羽軍遂散。權遣將逆襲羽、斬羽及子平于臨沮。<sup>166</sup>

(陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書 卷三十六 關張馬黃趙轉第六)

<sup>165</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.273。

<sup>166</sup> 陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.941。

ここで、陳寿が評で指摘する関羽の弱点が露呈した。兵には優しいが、知識人には傲慢で自信家の関羽は、配下の糜芳と士仁に信頼されていなかった。そこを孫権に切り崩され、関羽は曹操と孫権の挟撃を受けて、戦死したのである。結局、自分の欠点のため死を招いたと言わざるを得ない。

『演義』は、『三国志』には記されない、英雄の死の場面を丹念に描いている。関羽の死に巡って、『演義』は第七十六回～七十七回までに二章で詳しく紹介した。

関羽の最期はこのほか壮烈で、死後も劉備の夢枕に立つ。そのほか、自分を陥れた呉の呂蒙に憑依して、荊州を奪ったことを祝う宴席で、孫権を罵る。呂蒙はその場に討ち倒れ、七つの穴から血を流して死んでしまった。さらに、洛陽で首実検した曹操が「羽将軍しばらくだった」と呼びかけると、関羽の髯が生きているように動いたので、曹操はびっくりして昏倒、これがもとで曹操は死ぬ。

一方、北方謙三『三国志』において、関羽が死に直面するとき、どのような気持であるか。そこに、北方謙三のどのような独特な創作手法が現れているのか。

関羽は、兵糧を口に入れ、湯で流しこんだ。躰が、少し暖まったような気がした。

「雪か」

白いものが落ちていた。江陵のあたりで、雪が降るのはめずらしいかった。関羽は、掌を宙に翳した。白い雪は、掌に落ちてきては、すぐに消えた。

「ところで、郭真、江陵の館の庭には、また花が咲くのか？」

「はい、今年の最後の花が」

「どんな色だ？」

「青です。抜けるような空の色です。この雪で、いたまないといいのですが」

「私には、あの花が慰めだった。次にはどんな色の花が咲くのかと、いつも愉しみにしていた」

……

「もういい。もういいのだ、赤兔。おまえは、私には過ぎた名馬だった」

首筋に、手を置いた。赤兔が、かすかに首を動かした。それから、膝を折った。青竜偃月刀を低く構え、関羽は敵にむかって歩きはじめた。

いい兄弟がいた。いい友がいた。そして、闘い、生きた。



雪。白い。ただ白だけの、原野。風はない。.....<sup>167</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 野に降る雪)

「野に降る雪」の場面は、北方文学の中でも最高峰に位置すると思っている。この文字を見ただけで心が痛む。荊州の別れから、死ぬまで劉備に会えなく、関羽はすべての感情を庭の名前も知らず花に託している。あの花は彼の荊州生活の中唯一の楽しみである。次はどんな色の花が咲くのかを一心に考え、まさか自分は別の人生があるかも想像している。北方謙三の人物設定で、もし劉備と出会えなければ、関羽はどのような人生を送るかと考えに値する。

理に縛られた関羽は、最も嫌った謀略による裏切りを最後に受ける。魏の司馬懿から呉の孫権に仕掛けられた策だったが、直接関羽を裏切ったのは、ともに劉備を主と仰ぐはずの臣下たちであった。

人間とは儂くも弱い生き物だ。争いもすれば、怠けもする。人の欲を否定し、青龍偃月刀さながらに剛直な理であろうとした関羽にとって、裏切った士仁も糜芳もあまりにも人間的過ぎた。窮地にあっても関羽は余分な食糧を民に分け与えようとし、もはやこれまでという状況に到っては生き延びさせるために兵を解いた。その仁者たる姿勢が、後世の人々から道神に祀りあげられた所以であろう。

北方謙三『三国志』の中、関羽は捕虜となっていない。雪の朝、関平、郭真とわずかな側近だけを従え、関羽は生き慣れた戦場へと馬を駆った。そして、人生の最期の瀬戸際、自分と一緒に戦ってきた赤兔馬を逃して、一人で敵陣に向かって歩いた。呂布に続く誇り高き死であった。

死の前の関羽は横柄な態度が見られず、孫権を罵ることもせず、ただ「いい兄弟がいた。いい友がいた。そして、闘い、生きた。」という思いを抱え、死に向かい。関羽の死はとても安らかで、少しの残念もない。北方謙三が描きたかった『三国志』は「夢を抱いた人々の姿」であり「夢を追い求める人々の姿」である。その夢は大きくても小さくなくても構わない。もちろん、その夢が叶うことなどなかなかあり得はしない。だが一方で、関羽が自分に言い聞かせたように、夢が純粋で美しいものならば、そこに辿り着くまでにどれだけ辛い思いをしよう、夢半ばにして倒れようと、それは幸福の生きている証である。

---

<sup>167</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.311~313。

## 五、毛本、吉川本と北方本における関羽像の相違

毛宗崗本『三国志演義』と吉川『三国志』そして北方謙三『三国志』の相違について、下の図表によって、明らかにすることができる。

毛本、吉川本と北方本における関羽像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』	北方謙三『三国志』
初登場	故郷で人を殺したから幽州涿郡に逃れてきて、劉備・張飛と出会った	張飛との比較を通じて、最初に穏やかな性格を与えられ、閑散とした場所に住んでいる	馬運びの仕事から三人が出会い 男と男の出会い
身の上	人殺し	寺子屋の先生	侠勇
人間像	万人敵、剛情な人、プライドもちすぎ	経・史に通暁する儒将 「忠」・「仁」を備える武士	仁者 情の深い人
死	矢傷、性格的欠陥 霊になり復讐する	天命に帰す	誇り高き 安らかに

表六（筆者作成）

図表の示す如く、三つの作品において、描かれた関羽のイメージには幾つかの違いがある。

まず、関羽初登場のシーンについては『演義』でのごく簡単な描き方に対して、吉川英治は関羽に好印象を与えるため、彼を張飛との対話から登場させることによって、張飛の焦りと違って、穏やかな人のように見せている。一方で、北方謙三は「桃園の契り」を削除し、「男と男の出会い」という設定で、劉備・関羽・張飛三人は義勇軍に応募する前に会っている。劉備の指揮下で馬運びの仕事を一緒にやってみて、お互いの器を計り合う。絆が結ばれるのは、その上で認め合うものがあつたとき。そして、三つの作品は関羽の身の上の設定に対しても、かなり異なっている。『演義』において、関羽は故郷で人を殺したから幽州涿郡に逃れてきて、劉備・張飛と出会った人殺しである。一方、吉川英治『三国志』の中で、関羽は塾の先生に早変わりして登場した。北方謙三も関羽を乱世の中、俠気に溢れる若者扱いする。

そして、作品中に現れた人間像について、『演義』の中の関羽は一万人の敵を相手にすることができる勇将である一方、最後まで劉備に忠義を尽くす人でもある。吉川英治は儒将

関羽と武士関羽という二つの新しいイメージを関羽に加えた。北方謙三『三国志』は関羽の心の中の世界の描写を通じて、新たな情の深い関羽のイメージが出来上がった。ほかにも俠気に溢れる俠勇の姿、流民や兵士を助ける仁者の姿がキラキラと輝いている。

最後、関羽の死を巡って、『演義』は第七十六回～七十七回までに二章で詳しく紹介した。関羽の最期はことのほか壮烈で、死後も劉備の夢枕に立つ。そのほか、関羽の霊が人にも乗り移り、孫権を罵り呂蒙を取り殺した。曹操も間接的に関羽の魂で死に向かった。吉川英治は物語の流れを再構築することを行い、物語の焦点を再び関羽に置いた。さらに、比較的完璧な関羽のイメージを作るため、関羽の矢傷による殺された死因も天命に帰すに書き直した。この二部作の関羽の死に関する描写に対し、北方謙三はまだ何か足りないと思う。彼にとって、関羽は美しい夢を持つ男である。その夢が叶わなかったにもかかわらず、夢を追求する過程は素晴らしいだ。だから、北方謙三が書いた関羽の死はとても安らかで、少しの残念もない。(表六)

### 北方謙三の関羽像の特質

北方謙三『三国志』において、関羽は主役として形作りされていないらしい。その主な原因は北方謙三の史書『三国志』への重視であろう。彼は作品中劉備の口を借り、関羽と張飛の見方を説明する。

豪放な性格を装っているが、張飛にはそういう細心さもあった。考えるのではなく、感じてやってしまうのだ。理詰めの関羽とは、そこが違っていた。

自分にむけてくる思いも、関羽の場合は一途な忠誠だが、張飛にはどこか肉親に対する愛情に似たものがある、と劉備は思っている。<sup>168</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 軍門)

それにもかかわらず、北方謙三は三つの異なっているイメージの関羽像を作り上げた。彼は関羽に乱世の俠気ある男、すなわち俠勇と呼ばれる身の上を与えた。そして、関羽に博愛且つ慈愛な心を与え、関羽を仁者のように描いた。情の深い関羽の人間像もとても新鮮である。

俠勇として、関羽はまず危険に陥る豪傑張飛を助け、乱世における俠勇の資質を初めて

<sup>168</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.36。

頭わせた。その後張飛とともに劉備の配下で馬運びの仕事をやり、お互いの器量を計り、実力を認め合った後、ついに三人は義兄弟の契りを結んだ。これは今も昔もおそらくかわらない、俠気にあふれる俠勇たちのやり方であろう。

仁者として、戦を決着つけた後、関羽は無意味の殺戮を禁じ、博愛の精神が現れる。そして、人生の最終段階において、麦城に孤立されても、洪水の被害で流民となる民に自分わずか兵糧を与えた。残った兵士たちにも兵糧を渡し、故郷へ帰ってと勧めた。関羽にとって、敵軍の兵士も自分の配下も民と同じ存在である。確かに新しい時代を作るため、戦をせざるを得ない。しかし、博愛・慈愛の心を持つ関羽には無意味な犠牲を見たくない。

弟分である張飛が、奥さんの董香にしても、結婚生活にしても、幸せに描かれている。これに対し、北方謙三も関羽の感情世界に重点を置き、情の深い人書き直した。血のつなだった関興を戦場でやすやすとしなせたくないため、武者修行で張飛のところへ行かせという関羽の親心が込められている模様。仁徳將軍劉備の名声を守るため、仁政を行い、民心を落ち着けようとする姿も、人生最大のピンチに陥り、何よりもまず劉備に安心させようとする姿も、これらすべて劉備への一筋の情の現れである。この感情はまるで愚直な状態になっている。

最後関羽の死について、傲慢ともいえる自尊心の強さのせいで、敗北を喫するという『演義』からの非難に対し、北方謙三『三国志』の「野に降る雪」の場面は、やはり涙なくしては読めないハイライトである。荊州の別れから、死ぬまで劉備と会えなく、関羽はすべての感情を庭の名前も知らず花に託している。ここを見るだけで、涙が抑えられない。そして、人生の最期の瀬戸際、自分と一緒に戦ってきた赤兔馬も逃して、一人で敵陣に向かって歩いた姿もなかなか悲壮感に溢れだす。

死の前の関羽は横柄な態度が見られず、捕虜にもならず、孫権を罵ることもせず、ただ「いい兄弟がいた。いい友がいた。そして、闘い、生きた。」という思いを抱え、死に向かいた。関羽の死はとても安らかで、少しの残念もない。美しい夢の持ち主である関羽、途中で倒れても、幸福な「生」だった。これこそ北方謙三『三国志』における呂布に続く誇り高き死であった。

## 第五節 北方謙三の曹操像

### 一、曹操の初登場：心が燃えた戦士

『演義』の中で曹操の登場を第一回に描いた。「正直张梁，张宝败走，曹操拦住大杀一阵，

斬首万余級，夺得旗幡，金鼓，马匹极多。」とごく簡単な描き方になっており、曹操は珍しい役と思わなかった。逆に、敗軍を追いかけ、大量的に人殺しをする行動も悪い印象を与えてくれた。

正直张梁・张宝败走・曹操拦住大杀一阵・斩首万余级・夺得旗幡・金鼓・马匹极多。<sup>169</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

二十九歳になっていた。

騎都尉（近衛騎兵隊長）である。二十歳で国孝廉に推挙され、順調に昇進してきた。峻巖に職責を果たすことで、多少は曹操孟徳という名は知られていたが、所を得たと思ったことはない。

騎都尉になっても、それは同じだった。

ただ、戦である。そしていま、自分で鍛えあげたというわけではないが、五千の兵を率いている。

……

心が燃えている。戦だ、と叫んでいる。

ただ戦をやりたい、というわけではなかった。しかし戦がなければ、自分のほんとうの力を人に知らせることはできないのだ。

乱世になってきた、と何度も思った。時が、自分を引き上げようとしている、という強い予感がある。いや、自信と言ってもいい。この時には、必ず乗ってみせる。<sup>170</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 砂塵遠く)

北方謙が描いた曹操初登場の場面を見てみると、最初から良い曹操像を見せてあげたいという気持ちがかかなり感じられる。北方謙三筆の下で、二十九歳の曹操はすでに抜群の業績と峻巖に職責を果たすことで、世の中に多少知られている。しかし、それだけじゃ足りない。曹操が目指したのは自分がこの時代を率いるリーダーになっていることである。そ

<sup>169</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.10。

<sup>170</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.50~51。

のため、自分は戦わなければならない。一度にならず二度三度と戦をすることを通じて、世に自分の存在を知らせていきたい。そして曹操自身もいつか自分は必ず成功することを信じている。この時代のトップの座に君臨する曹操は一体どのような奮闘史を書くのかという、われわれは思わずに楽しみにしている。

## 二、曹操の出自：卑しい血筋から這い上がる激動の人生

毛宗崗本『三国志演義』は、初登場の場面から、曹操を悪に描いていく。曹操出自にも、宦官の家系に生まれたことを記す。唐代以降、異姓養子は刑法により禁止されていたが、依然として明清時代にも続けられていた。しかし、それは悪である、という社会通念を利用して、毛宗崗本は、初登場の場面から、曹操を貶めているのである。さらに、「このような生まれの曹操が景帝の玄孫である劉備と同列に語れようか」と註釈で誹謗している。

官拜骑都尉・沛国譙郡人也・姓曹・名操・字孟德。操父曹嵩・本姓夏侯氏・因为中常侍曹腾之养子・故冒姓曹。曹嵩生操・小字阿瞞・一名吉利。<sup>171</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一回 宴桃园豪杰三结义 斩黄巾英雄首立功)

劉備は、中山靖王劉勝の後裔であるという。血筋そのものは、恐るに足らなかった。中山靖王となれば、数えきれないほどの数があるだろう。血筋がなんだ、という思いも曹操にはあった。父の嵩は大尉にまでなったことがある。大尉といえば名目上の軍の統轄者だが、その職を金で買ったとさえいわれていた。祖父の騰は宦官で、したがって嵩は養子である。

宦官の家系に生まれたということが、幼いころから曹操の心に影を落としていた。実力だけの時代が、もうそこまで来ている。二十歳のころから、そう思って生きてきた。だから、峻厳な軍人として貫き通して来た。<sup>172</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 砂塵遠く)

曹操の家は、宦官の家系である。養子は認められているので、宦官でも家系は残る。その家系が、曹操の心に影を落としていた。袁紹とは幼馴染であるが、

<sup>171</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.9。

<sup>172</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.56。

相手は名門中の名門という意識を、いつも拭いきれないでいた。<sup>173</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 天子崩御)

譙県にある曹家の財を、曹操はしばしば思い起こした。宦官であった曹操の祖父が蓄えたものが、いまの財にまで増えているのだ。穢らわしいという思いがあるが、それは抑え込んでいた。天下の平定のために、使い果たせばいい財なのだ。<sup>174</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 天子崩御)

『三国志演義』のように劉備の出自を上げようとする姿勢と違い、北方謙三の説により、中山靖王の程度の人は大勢にいる、そのため劉備の中山靖王劉勝の後裔という血筋は言い甲斐がない。すなわち、北方謙三には、劉備にせよ曹操にせよ、血筋について何も見せびからすものがない普通の人間だと主張する。ただ、宦官の家系に生まれたということが、幼いころから曹操の心に影を落としていたらしい。これと著しいコントラストを示しているのは幼馴染の袁紹である。相手は名門中の名門という意識を、いつも拭いきれないでいた。さらに、宦官であった曹操の祖父が蓄えた譙県にある曹家の財も、穢らわしいものと思う。ようやく実力だけの時代が来る、二十代頃の曹操は自分の人生を変え、宦官の悪名から抜け出すと決意した。曹操と自分の血筋の抗争は物語の始まりから始まった。

帝を擁したのが間違いだった、とは曹操は考えていなかった。少なくとも、袁家のような声望が自分にはない。劉備さえ持っている、血筋というものもない。あるのは、宦官の家の出身という、蔑視にも似たものだけである。そういう自分に、帝の存在は十分に役に立った。<sup>175</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 滅びし者遠く)

献帝の擁立は、名士の支持を回復する「切り札」であった。これにより曹操は、覇者となったのである。ここで、一般的に献帝の名より他の群雄に命令を下すとともに、「漢」の復興を大義とする名士の支持を回復できるという、曹操にとって有利な面を持つという考

<sup>173</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.108。

<sup>174</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.101。

<sup>175</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.316。

えがある。しかし、北方謙三が描いた曹操は、この献帝擁立の政策を自分の血筋を高める一つの手段として考えられた。この方法で自分と名門の隔たりを小さくする。ここから、曹操は自分の出自に対し、かなり気になることが窺える。

「さすがと言うべきでありましょう。名門に付けという意識が、豪族たちの間では強いようです。袁術が、どうにもならなくなり、血を吐いて死んだ時も、まだ五、六万の兵はいたようですからな。あれは、名門であるがゆえに、兵が離れなかったということでしょう」

「名門に、どんな意味がある、夏侯惇？」

「さまざまな、意味が。丞相は、不本意に思われるでしょうが、名門だということは、選ぶ時の基準になります。事実、最初に兵を挙げられた時、丞相は五千に過ぎず、袁紹は十万を超えていました」

「そうだったな」

冷静に言ったが、曹操の肚の底では、黒い怒りがわだかまったままだった。

「抗う者は、容赦はするな。斬り尽せ。このまま、一気に鄴を落とすぞ」

名門に人が集まるのなら、その名門は滅ぼしてやる。<sup>176</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 生者と死者)

四代続けて三公を輩出した名門袁家に生まれた袁紹は若く司隸校尉に任じられた。皇子の外戚にあった大將軍何信に信任され、宦官勢力による何進暗殺が起きると曹操と共に宮中の宦官大虐殺を行った。しかし、帝を擁護した董卓とそりが合わず洛陽を出奔し冀州にて挙兵。名門の名の下に、すぐさま十万の兵が集まった袁紹と比べ、自分側はただ五千人の兵士にすぎないという事実と直面し、曹操の怒りがこみ上げる。曹操は袁紹を倒し、名門を滅ぼしてやると誓っている。

勝ったのだ。館の庭をひとりで眺めたりしている時、曹操はしみじみとそう思った。

河北四州で、三十万の軍を率いて、袁紹はやってきた。

---

<sup>176</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.131~132。



若いころから、常に自分の前を歩いていた男だった。器量で劣るとは思って  
なかったが、それ以外の大きなものを、袁紹はしっかりと持っていた。後ろを歩  
くのは仕方がない、と思っていた時期もみじかくない。

その袁紹を、破った。<sup>177</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 三者の地)

河北四州を制し群雄最大の勢力を誇った大將軍袁紹は曹操に敗れた。戦いの後、曹操は  
とても喜んでいる。戦上で寡をもって衆に勝てるのみならず、やっと自分の前にずっと歩  
いた血筋のいい敵を超えられるからである。このような勝利は自分の覇の地位を築いただ  
けではなく、自然と自分の家柄と血筋も高めていた。

「許都の防備は、甘いか？」

「いや、丞相と袁紹の、武将としてのありようの違いが端的に出ているという  
ことです。丞相は、いつも攻めることを考えておられる。だから、許都の防備に  
腐心してはられません。袁紹は、所詮は守りの人でありました」

「そうだな。それが名門の生まれということであろう」<sup>178</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 制圧の道)

荀彧の話は曹操と袁紹、すなわち濁流と名門の違いをずばり言い当てる。武将として、  
曹操は袁紹より優れた部分は常に攻め態勢に持ちつづけている。確かに、袁紹に勝つ前に、  
曹操はずっと自分の身分の低さに気になっている。これは曹操の優勢でもあり、失うもの  
は何もない、思い切って戦をすることができる。逆に袁紹を見ると、名門の血筋にこだわ  
るあまり、時に理不尽な行動を起こし、自分の意に反する者田豊のような忠臣でも断罪し  
てしまう。失いたくないものが多すぎて、戦が怖くなってきた。

「ここに、私の青春があった。袁紹がいたし、袁術がいた。その上には、何進  
がいた。しかし、ほんとうに幅を利かせていたのは、宦官でもであったな。しか  
も、私は宦官の家の子であったのだ」

<sup>177</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.307。

<sup>178</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.194。

「そのようなことは」

「言っても、意味はない。ただ、洛陽にいと、苦い思いで過ごした青春を思い出す。名門の子を、憎んでいたような気もするし、羨んでいたような気もする」

179

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

曹操は最後に一度視察に赴くとき、自ら本音を吐いた。小さい頃洛陽にいる間は辛い経験だった。袁紹、袁術など名門出身の子供と比べ、自分は卑しい宦官出身である。憎しみというより羨んでいたような気がする。仮に曹操は宦官子孫の出身でなければ、この偉業を達成できるかどうかまだ疑問である。実は、このような出自は曹操を育成してきたと言わざるを得ない。この宦官の出自こそ曹操にもし自分の人生を変えようとしたら、絶え間ない戦いしかないと教えた。

### 三、曹操の人間像

#### (一) 戦士曹操

「乱世の奸雄」。曹操を、正史『三国志』で陳寿は、許子将という人物の言葉を借りてこう評した。対で語られている「治世の能臣」は背景に沈み、「徳の將軍」劉備に対する悪役曹操の世評がここに決することになる。しかし天下三分が成ったとき、曹操が華北全域を押さえ、後漢時代の十四州統一までわずかに迫ることができたのは、奸智に長けていたからなのか。曹操こそ、「三国志」という物語の中で、苛烈に戦うこと、戦い続けることに最も純粋な戦人だった。

董卓と死戦し、呂布を滅し、袁紹と拮抗し、劉備と争う。なぜそんなに戦うことを欲したのか。戦って何を得ようとしたのか。曹操という生き方を見てみよう。

#### 1、私欲なく奮戦する

黄巾の戦いを除き、曹操の人生において第一次正式作戦は董卓の討伐である。専横極まる董卓へ異を唱える群雄が、曹操の呼びかけに応じて各地より結集した。兵の数は総勢三十万を超す。盟主には西園八校尉の袁紹に決まった。

---

179 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.56。

次日、人報曹操追董卓、战于荥阳、大败而回。<sup>180</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第六回 焚金阙董卓行凶 匿玉玺孙坚背约)

「追撃せよ。全軍で、董卓を討ち果たすべきではないか。それが義軍であろう」

強硬に追撃を主張したのは、曹操ひとりだった。<sup>181</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 諸侯参集)

しかし、洛陽焦土を、いち早く見抜いた曹操は連合軍盟主の袁紹に上奏するものの、自分の利得ばかりを計る群雄に業を煮やし、単独で挙兵し洛陽を脱した董卓軍へ挑んだ。曹操には今は自分の利益を考える場合ではなく、義軍は乱臣董卓を討つべきだと主張する。しかし、本当に董卓を倒そうと思っているのは曹操一人しかいない。それでも、全軍出撃だ。『曹』と『忠義』の旗が並んで付いていく。これから、曹操は諸侯たちと全く違う道へ歩いて始まった。

「私も、負けた。完膚なきまでに、負けた。この姿を見れば、それはわかる。しかし、私は闘って負けた。そして諸君は、闘わずして負けたのだ。私は、闘わずして負けた諸君に、決別を告げる」<sup>182</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 諸侯参集)

追撃戦に負け、負傷した姿のまま軍議の場に戻った曹操は、諸侯に改めて呼びかけた。戦おう、勝つ手はまだある。それでも諸侯は動かなかった。諸侯の肚の内の言葉にすればこうなる。董卓は懲らしめるべきだが、拙速は愚だ。なにしろ我々はお前さんと違って、負けたら失うものが多すぎる。確かに、袁紹をはじめ諸侯の多くが官から任命された郡太守や州刺史で、地方に豊かで広大な支配地であった。

これを見破った曹操は独立宣言を発した。自分は私利私欲のためでなく、戦うべきときに戦う。お前たちとは違う。そして、滅びをかけても戦うという、曹操の生涯続くスタイル

<sup>180</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.68。

<sup>181</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.229。

<sup>182</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.238。

ルの自己確認だった。英雄とは、なすべきことをたとえ一人でもやり抜こうとする者のことである。その時、曹操は英雄への道を踏み出した。

## 2、兵を励まし陣頭に立つ

曹操が豫州北隣の兗州に拠点置くようになっていた一九二半年ば、黄巾の乱を起こした太平道の勢力が再び盛り返し、兗州の東で海沿いの青州から百万人の規模で兗州になだれ込んできた。それを青州黄巾軍と呼ぶ。

「私も、兵と同じように闘い、同じように眠る。全力を尽す戦とは、そういうものだ」

「それは、われらがいたします」

「大將が、先頭で闘っている。こんな時は、それが大事なのだ。これほどの大軍を目の当たりにすれば、兵に怯懦の心も芽生えよう。大將が先頭に立っていれば、いくらかでも兵を奮い立たせることはできる」<sup>183</sup>

(北方謙三、『三国志』二の巻 参旗の星 降旗)

青州黄巾軍百万を相手にも怯まず、曹操は自ら前線に立ち、兵と同じように戦い、同じように眠ると主張した。しかし、曹操は決して好きで最前線に立つタイプではない。ただ百万に近い段違いの兵力差を直面し、もし自分さえも恐れていて、尻込みすると、この戦いは始まる前すでに終わりだと曹操の心は明らかである。

前線に立つ、そのこと自体が軍の強さの一部になっていて、部下からはある意味信仰に近いほどの信頼を勝ち得ている。総崩れになって我を忘れていた味方に冷静さを取り戻すため、大勢の敵軍にびびる部下を鼓舞するため。軍の統率に必要なと見れば、曹操は必ず最前線に立っている。一将は最前線に立たないのが常識であるが、天才的軍人は常識にとらわれないから天才とも言える。この曹操こそ三国時代において指を折って数えることができる軍事的天才である。

## 3、すべてをかけて戦う

青州黄巾軍は、黄巾の乱と同じく、後漢王朝の終わりと太平道の時代の到来を叫ぶ民衆

---

<sup>183</sup> 北方謙三、『三国志』二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.88。

反乱勢力だ。しかし、漢の討伐部隊と長く戦ってきた上、正規軍を相手にした戦闘も経験していた。強かった。迎え撃った兗州牧の劉岱は、あっけなく返り討ちにあう。残された劉岱の配下は、曹操に兗州牧就任を要請した。守ってほしいということである。

曹操が動員できる兵力は劉岱軍を合わせても、三万にすぎない。しかも今回は前のように各地で蜂起した相手を個別撃破するわけではない。百万をまとめて相手にする戦いだ。考えどころだったはずだが、曹操は申し出に応じる。しかも撃って出て、三十倍を超える数の敵と対峙した。局地戦で勝利をおさめたが、すぐに膠着。

「死ねる時が、私は私の限界だと思っている。それまで、地を這っても闘う。今度だけは、力を出し尽くす。いや、力以上のものを出さねばならん。疲れて倒れる兵は、その場で殺せ。死するか闘うか。道は二つだけだ」<sup>184</sup>

(北方謙三、『三国志』二の巻 参旗の星 降旗)

三万の軍を率い、百万と称する青州黄巾軍と戦う。他人には不可能とされていたことが、曹操はどうしてもこの功績を残したい。これは自分の人生の転機だと信じていたのかもしれない。今回の生死を決める戦いにおいて、曹操は自分に対しても、兵に対しても、非常に厳しい。戦うか死するか、選択肢はこの二つしかない。群雄割拠した乱世にあって、最も果敢な戦いを見せ、まさに戦に生きた天才と呼ぶに相応しいのが曹操だ。彼の戦はいつも激しい。絶対自分に何の逃げ道を作らず、悔しい気持ちを残さないように奮戦する。路をすべて断たないと、この世界でトップを取れられないだと信じているのではないかと思われる。

こういう実例は確かに少なくない。劉備の首を取るため、曹操は袁紹との対峙の最中に三万の討伐軍を出してきた。

「夏侯惇將軍も？」

「いや、残していこう。ほかの部将の押さえに必要だろう？」

「袁紹が、その機を狙って攻め寄せたら？」

「滅びだな」

---

<sup>184</sup> 北方謙三、『三国志』二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.96。

「いいのですか？」

「何度も、滅びの淵には立ってきた」

「思い返せば、ここにいるのが不思議な気さえいたします」

……

戦のやり方は、たやすくは変えられない。孫策と連合して、曹操を攻める。その可能性が残っている間は、袁紹は自ら動こうとはしないはずだ。

それでも、賭けには違いなかった。自分を賭ける。それが、曹操には微妙に快感でもあるのだった。<sup>185</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 策謀の中の夢)

官渡で袁紹に圧倒されそうな時に、三万という大軍を再度出してきたのは、背後を衝かれるのがよほどこわいのであろう。さらに、この一軍は曹操の直属部隊と言ってもよかった。親衛隊は許褚の二千騎だが、それ以外ではその三万が直属で、官渡では夏侯惇の指揮下に置いてある。曹操自身もこのように直属軍を派遣すると、滅びを招くかもしれないとよくわかっている。しかし、これまで歩いてきた道は絶対平たくない。何度も滅びの淵には立ってきた。自分にとって何も恐ろしいことはないということだ。逆に、このように自分のすべてをかける戦闘方式を通じて、自分に快感を与えることができる。このような曹操は無謀すぎるじゃなくて、果敢にも言えない。もっと深い、なにかを持っている。恐るべきものを内に秘めながら、果敢を装っているだけだ。それは戦士としての覚悟だと私そう思う。あえてやる、機をじっと待っていて、そして、最も危険な賭けに挑むに違いない。

自分にできない賭けを何度かやり、それに勝って曹操はいま巨人として立っているのではないかと思われる。

#### 4、完敗しても立ち上がる

たとえ三国時代の覇者曹操であっても、敗れることも免れない。たとえば、以下の董卓に対する追撃戦には、十八路諸侯だれでも兵をとどめて進まない。曹操は自陣に戻ると五千の寡兵だけで出撃した。無謀な出撃だった。董卓軍の将、徐栄の大軍に遭遇し、敗れた。兵のほとんどを失った。自らも負傷して馬を失い、包囲され殺されかけたほどの、散々の負け戦だった。

---

<sup>185</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.174。

ここで死ぬのか。何度も思った。死ぬなら、それまでのものでしかなかったということだ。死にたくはない。だから、死ぬまで走り続ける。のどがひりついた。足がもつれる。死んでたまるか。声を出したが、ほとんど言葉としては聞こえなかった。

原野に出た。空は赤い。洛陽が燃えているのだ。その赤い空を見て、走る方向を決めた。自分は、まだ生きている。ほかの者は、死んだのか。ほんとうに潰走した時は、陽が落ちかかっていた。闇が、自分の兵のどれほどを救うだろうか。

倒れた。草に顔を突っこんだまま、もう起き上がりたくないと思った。それでも、手をつき、肘のばしていた。

月の明りはある。空の赤さもある。彷徨を間違えることだけではない。なにかを考えられるならば、その分走るのだ。生にむかって、走り続けろ。時々、闇が白くなるような気がした。剣だけは、まだしっかり握っている。

馬蹄の響き。一騎だ。いや、後ろから数騎が続いている。曹操は、剣を持ちあげた。刺し違えてやる。それが、曹操孟徳の死に方だ。叫び声をあげたかった。死にたくない、と叫びたかった。まだ、わずかしか生きていない。もっと、生きたいのだ。一步ではなく、千歩、前へ進みたいのだ。<sup>186</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 諸侯参集)

曹操は何度も転んで、また何度も頑強に立ち上がる。とにかく死にたくない、死ぬことも怖いと感じる。自分は決して怯懦な人じゃない。ただ自分の戦士としての人生が始まったばかりだから。一步ではなく、千歩、前へ進みたいのだ。自分が目指しているのは時代の波の頂点ではないか。そのため、わずかな戦で倒れてはいけない。今は敗れても関係なく、目の前ピンチを乗り越えれば、まだ何度も戦うチャンスがあるはず。それゆえに、いつか自分の存在の価値を証明することができる。

また、赤壁の戦いは、武人曹操の生涯のなかで最大の戦いの一つであり、その後のなりゆきに大きな影響をもたらしたものであった。しかし、その北から南に攻めた戦は完敗した。

---

<sup>186</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.232~233。

操坐于疏林之下・仰面大笑。众官问曰：“适来丞相笑周瑜、诸葛亮，引惹出赵子龙来，又折了许多人马。如今为何又笑？”操曰：“吾笑诸葛亮、周瑜毕竟智谋不足。若是我用兵时，就这个去处，也埋伏一彪军马，以逸待劳，我等纵然脱得性命，也不免重伤矣。彼见不到此，我是以笑之。”<sup>187</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第五十回 诸葛亮智算华容 关云长义释曹操)

あそこで死んでいれば、楽になったのか。首を取られ、塩漬けにして晒されても、やはり生きてることより楽だったのか。そもそも死んだ先に、楽などということがあるのか。

思い出すのは、足を取るばかりの、沼や湿地のあの泥だった。心は眠っていても、躰が動いた。躰が、生きることを欲していたのだ。死から、逃れようとしていた。

死とは、ただ心が死ぬということではないのか。躰は、いずれ死ぬ。躰が死んでも、心は死なないこともある。心だけが死んで、躰が活着ていることもあるだろう。<sup>188</sup>

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 わが声の飴する時)

石頭関で曹操率いる南征軍と孫権・劉備連合軍の戦闘が行われた。連合軍側の「火攻め」による奇襲作戦が成功、三十万に及ぶ南征軍はほぼ壊滅状態に陥った。丞相曹操はこの窮地を脱し、江陵方面へ逃亡したものと見られる。

『三国志演義』では、曹操は逃げ惑うとき、周瑜と諸葛亮は智謀に劣ることを忘れずにあざ笑う。その後すぐ一隊の軍が現れ、ビックリした曹操は慌てて馬に乗り、続けて逃げる。よく考えてみれば、このような危機に陥る曹操の行動は少し滑稽ではないか。

北方謙三はこのような不穏当な言動をする曹操を許さない。ただ諸葛亮の知略を強調し、曹操を貶める書き方は極端すぎるではないか。そこで、彼は苦境に陥り、懸命に脱出しようとしている曹操の姿を描き出した。駆けろと言われれば駆けたし、馬を降りろと言われれば、降りた。躰は動いた。気力が萎えることもなかった。ただ、頭は空白だった。夜を

<sup>187</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.620。

<sup>188</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.193。



徹して進む間、曹操の精も根も尽き果てた。自分の体ではない、という気がするほど疲れた。しかし、躰は、いずれ死ぬ。躰は死んでも、心は死なない。死から逃れて、もっと激しい戦をしようと曹操は決してそう思っていた。

このような曹操は相手の劉備までも彼を絶賛する。

「.....恐ろしいのは、負けても立ちあがる力が強いということだ。普通なら腰が砕けるところが、曹操は逆に踏ん張って強くなる。いままでに何度も負けているが、見事に強くなって立ち直っている」<sup>189</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 遠い雷鳴)

曹操は逆境に強い。たとえ何度も失敗しても、次々と勇気を奮い起こすことができる。この不撓不屈の精神こそ、劉備かつ群雄が備えていない資質である。

## 5、死に臨んでも戦事を聞く

北方謙三には、曹操こそ、三国時代の中で、苛烈に戦うこと、戦い続けることに最も純粋な「戦人」だった。曹操にとって、戦は彼に充足感を感じさせるだけでなく、しばらくの間長患い頭痛を全快することもできる。戦はすでに曹操の体の一部になってしまったかもしれない。

「夏侯惇。どこかで戦はないか？」

「ありませんな、殿下が寝ておられますので」

「戦があつたら、その様子だけでも聞きたいものだ。私は、もう馬乗れぬ。つまり戦場に赴けぬ。しかし、戦場にいる時よりも、よく見えるかもしれんぞ」<sup>190</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

年老いた曹操はすでに馬に乗ることもできない。自ら戦場に赴き、敵を倒すことができなくても、夏侯惇に戦場の情報を尋ねる。生きていれば、戦う。この国を一つにするまで、戦い続ける。躰が動ける状態で戦を止めるのは、生きながらの死だ。これは曹操の流儀で

<sup>189</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.51~52。

<sup>190</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.85~86。

はないか。確かに、夏侯惇が言ったように、曹操がいなければ、三国時代はそんなに多くの戦争がないかもしれない。同時に曹操は純粹すぎるほど純粹な戦士であるということを実証している。曹操が生涯に直接戦った戦闘は六十七。凄まじいばかりの数である。天は、曹操を生かした。生きて、闘えということである。

## (二) 明君曹操

曹操は武将としてだけではなく、政治的手腕や文人としても優れていた人であった。新興宗教に傾倒した民衆の心を引き寄せ、悪政の元凶であった官僚らを排除し、有能な人材を登用した。詩を吟じては曲にのせて詠い、また自ら孫子に注釈を加え、『魏武帝註孫子』を顕わすなど、文化の面でも貢献した。三国時代の英雄には、武勇だけではなくて、国を一つ作り上げるにふさわしい資質が求められる時代であった。その時代にあって曹操だけが突出して名君に相応しい資質を備えていた。

### 1、新たな国家観：歪められた国の形を正す

小説『三国志演義』では、曹操を漢の皇帝献帝を蔑ろにし、その実権を握って、邪魔する者はことごとく討ち取って、悪行を尽くした人物として描かれている。曹操は支配権を握り支配者として圧倒的な力をふるう一方、同時に多くの人間を傷つけた。『演義』で強調される曹操の残忍性・狡猾性は、儒教の忠節の対象であり、理想化されていた漢王朝の皇室に対しての行為に顕著に現れる。

操自封为大将军、武平侯.....自此，大权皆归于曹操：朝廷大务，先禀曹操，然后方奏天子。<sup>191</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第十四回 曹孟德移驾幸许都 吕奉先乘夜袭徐郡)

許昌に帝を迎えた。

許都と呼ぶようにした。官位も、漢室のそれにもとづいて決めた。

帝に力がないので、官位はすべて曹操の存在で権威を裏打ちされる。

自分がそれほどの存在だとは、曹操は考えていなかった。官位も、どうでもい

---

<sup>191</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.155。

いものだった。ただ、それを使うことで、さまざまな試みもできた。例えば、自ら大將軍に就いてみると、袁紹が横をむいた。それで、曹操は大將軍を袁紹に譲った。袁紹は、どうでもいいとは思いつつ、一応の序列程度は気にしているのだろう。第一の実力者ではあるが、それ以上朝廷に関わってこようとはしない。<sup>192</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 光の矢)

『三国志演義』において、曹操は権力に執着することが窺える。自らの大將軍という地位が、権力に見合っていないと考え、さらなる上の位につくことを求めたのである。まずは魏公になる。「公」という位は、「公・侯・伯・子・男」という五つの位の一番上で、臣下としては最上位ということになる。212年、曹操は「公」に封じられ、同時に「九錫」を受けられる。そして214年、曹操は魏王に即位しようとする。「王」というのは、「公」よりもさらに上の位で、皇族が封じられるものであった。曹操は、ついに臣下の枠を超えて、王になることを望む。

一方では、北方謙三『三国志』において、曹操は権力に対してそんなに切に望んでいないらしい。曹操から見れば、官位はどうでもいいものである。ただ、それを使うことで、さまざまな試みもできる。北方謙三は最初から曹操を弁護しようとしている。

腐った血だ。曹操はそう思いながら、帝を見ていた。漢王室の血は、衰えたのではなく、すでに腐っている。

……

もともと、この乱世は、漢王室の乱れからはじまったのではなかったのか。数万、数十万の兵が死に、民が苦しみ、国が衰えている。それでもなお、おのが栄華のために、乱世をさらに乱すのが帝というものなのか。<sup>193</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 策謀の中の夢)

曹操は乱世に生きて、この不安定な世こそ彼を英雄に育ててきた。その中に、宦官の子孫という出自もある程度の役割を果たしていた。このようにいろんなことで、彼に物事ははっきり認識する眼力を与えてきた。漢王室の血、すなわち劉姓という血筋はすでに腐っ

<sup>192</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.32。

<sup>193</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.167。

ている。今大事なのは漢王室の血を守るのではなく、それはどうでもいいことだ。一番肝心なことは乱世を治め、漢朝の綱領を正す。これは曹操の新たな国家観とも言えよう。曹操と、袁紹など諸侯との決別。それは「漢朝護持」という建て前を貫き通すかどうかをめぐる分岐でもある。国家観をめぐる分岐と言ってもいい。

曹操ですら、純粹に漢朝護持を思っていたわけではない。他に抛るべきものを持たず、尊皇という思いにかけられるしかない劉備とは違うのだ。何より、宦官や姦臣の専横、腐敗墮落を正す力も、意志もない王室の実態を見すぎてきた。血筋を引いていれば誰でもいいわけではない。ただ大事なのは歪められた国の形を正すこと。国の形の根本とは王朝である。その王朝が今危機に瀕している。従ってまず建て前でも漢朝護持を貫き通すべし。それが曹操の思いだったのではないか。

自分は不忠の臣か。曹操は、そう自問した。断じて、違う。腐った血を、いざ入れ替えようと思っているだけだ。それがこの国のためであり、民のためだから、そうする。<sup>194</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 策謀の中の夢)

この曹操はさらに自分の行動に正しい名分を立てた。自分は不忠の臣ではなく、すでに腐った血を入れ替えよう思ったが、「漢朝護持」を貫き通すべし。ここまで戦をやるのは国のためであり、民のためである。歪められた国の形を正し、民に平穏な生活を与えたいという気持ちはよく伝える。これは曹操の自己弁護だけではなく、北方謙三は曹操のために弁護していた。北方謙三が書き出した曹操はもう「乱世の奸雄」ではなく、「治世の能臣」の範囲も超えひいて「治世の明君」とも言える。

## 2、国を強くするため用いられた三つの手法

曹操の生まれたのは 155 年、死んだのは 220 年。二百年近く続いた後漢王朝のほぼ終わりの三分の一に、曹操の六十五年間の一生は含まれる。後漢後半の百年間は、「幼帝」が続き、統制力が弱まり、外戚と宦官の権力闘争に塗りつぶされている。外戚も宦官も、私利の追求にせめぎあうばかりであって、国家運営に関する高邁な精神などは微塵も読み取れない。地方豪族と役人による腐敗が広げられており、窮地に追い討ちをかけられた農民た

<sup>194</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.168。

ちはやむなく反乱を起こした。このとき、曹操は漢王朝の国力を回復するため、以下の三つの手法を取った。

### ①政治的基盤：勤勉に国を治める

北方謙三『三国志』を読むと、曹操は勤勉な君主の姿で人々の目の前に立っていることが窺える。

銅雀台の居室で、曹操はそれを感じとっていた。鄴にいる時の曹操の多忙は、並みの言葉では言い尽くせない。領土全域から、あらゆる報告が入っている。五ヶ所の者も、頻りに姿を現す。おまけに、各戦線からの注進が入る。どうすべきか、その場で決める。荀彧に判断させるもの、夏侯惇に回すもの。しかし、半分は曹操自身が決める。<sup>195</sup>

(北方謙三、『三国志』八の巻 水府の星 曇天の虹)

人は、有能・無能・勤勉・怠惰の4種類に分けられる、とするとき。トップには有能かつ勤勉な人間である。その下には有能かつ怠惰な人間であり、最下位は言うまでもなく無能かつ怠惰な人間を据えるべし。勤勉な人間はとにかく動く、休み無く動く。北方謙三が作り出した曹操はきっとそのような人である。かなり細かい書類まで自ら目を通し、朱を入れ、いちいち指示や、感想を書いていた。独裁というのは、結局自分がすべてやること。

曹操とは、純粋すぎるほど純粋だとおもわないだろうか。その純粋性はおそらく、曹操の出自に由来している。曹操は宦官の家系だった。宮廷の腐敗墮落、ひいては後漢の衰退の元凶とも目されていた、宦官。曹操には汚濁にまみれた家系に生まれたという思いがあったのではないか。そのコンプレックスが、曹操を宦官というものと対極にある純粋性のほうに駆り立て、根から国の腐敗を防犯していた。

淳于から、布令を出した。青州のみならず、河北、中原にいたるまで、すべて適用する布令である。役所の責任者は、月に一度ずつ、政事の欠陥を指摘するこ

---

<sup>195</sup> 北方謙三、『三国志』八の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.238。

と。それは、べつの部署の失政でもよい、という内容である。密告の奨励ではない。役人には、相互監視が必要だった。国が腐るのは、役人からなのだ。<sup>196</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 戦のみにあらず)

腐敗とは何であるか。一般的には、公務員や政治家が与えられた権限を濫用して私的利益を得ることを指す。後漢はその時代である。朝廷が外戚と宦官の闘争に明け暮れている間に、地方では豪族がひたすらその富を蓄積していった。中央で政権を握った者たちが、私利私欲に狂奔したのに応じて、各地の豪族たちも土地を兼併し、とめどなく肥大していったのである。土地を奪われた農民たちは、破産して流浪するほかなかった。たびたびの飢饉もかれらの困窮に追い討ちをかけた。ついに黄巾の乱が顕われた。曹操はその時代に生まれ、生きてきた。曹操は心からこの腐敗した国を痛恨している。だから、いまの時点では、自分が治める地域に役人の墮落を徹底的に防止している。その方法としては、役人間の相互監視が必要とされている。

先も述べたように、曹操は有能かつ勤勉な人である。このように賢明な政治を行いながら、連年の戦に赴くことは曹操の躰と精神的にいくら負担をかけてしまうか想像できないものである。一緒に仕事をやり、国を治める荀彧はその状況を見て、思わず曹操の躰の状況を心配している。

「しかし、丞相。連戦につぐ連戦でございます。少しは休まれた方がよろしいかと」

「袁紹が私に敗れたのは、連戦を嫌ったからでもある。袁紹がのんびりしている間に、私が大きくなってしまった。覇業は、そんなに楽なものではあるまい」

「丞相のお躰を心配しております」

「おまえは、やすんでいるのか、荀彧。許都にいる程昱や荀攸は。洛陽にいる郭嘉は。軍の再編をしている、夏侯惇は？」

「みんな、それぞれに、寝食を忘れて働いております」

「ならば、私も働こう。これ以上は申すなよ」<sup>197</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 戦のみにあらず)

<sup>196</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.276。

<sup>197</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.266~267。

確かに、連続した出征は必ず身に負担をかけるはずである。しかし、曹操は常に危機意識を抱える人間である。袁紹は連戦に嫌がって敗れることも目の前にある。袁紹と同じ失敗を繰り返さないため、大きくなればなるほど勤勉に努力しなければならない。曹操は若い頃董卓を討伐することを一生忘れることができない。そのとき、無謀な出撃のため、自分が窮地に陥っている。結局、自分の人生まだ始めてばかり、まだいろんなことをやりたい、時代の頂点に立ちたいという思いを抱えながら、命かけて奇跡的に脱出に成功した。曹操はあの時から自分の足りないところを知っていた。いわゆる苦勞すれば非才を補い、勤勉こそが才能の基礎であるということは曹操よくわかっている。政治に勤しむ、戦に勤しむ、曹操は人生の短さを知り、なるべく自分が支配できるすべての時間を使い尽くしたい。止まっていることのほうが危険であり、だから曹操は休まずに前へ進んでいる。

決裁すべきことが、かなりあった。細かいことは曹丕に任せているが、軍の関係から民政に到るまで、大事なところは眼を通さなければ気が済まなかった。<sup>198</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

ときの曹操はもう 66 歳の高齢で、細かいことは後継者である曹丕に任せるが、大事なことはまだ自ら処理しなければならない。自分が独裁者と絶対に認めないであろう。ただ自分が心を込めて治める地域に対して、すべての手を放して他人に任せると、安心できない。私の脳裏には、蠟燭の明かりで文書を読んで直したり指示を与えたりする曹操の姿が浮かんでくるばかりだ。勤勉の明君、曹操。

## ②軍事的基盤：軍を厳しく統御する

これまで、劉備対曹操の戦いは、ほとんどが劉備の負けで終わっていた。また、曹操は、赤壁の海戦では敗北を味わったものの、部下に任せた戦は除いて曹操本人が参加した陸戦では、ほぼ無敵状態を誇っていた。曹操軍の強さと厳格に統御されていることは密接に関係がある。

---

<sup>198</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.74。

冬の間、曹操は河北四州を駆け回った。移動は、平定戦の時以上だった。供は、許褚の三千騎だけで、一日に二百里（約八十キロ）駆けることも、しばしばだった。

それぞれの城の守兵は、いきなり曹操の訪問を受けることになる。

必要以上に、厳しくしようとは思わなかった。それでも、九つの城の守将の首を刎ねさせた。八人は、兵に降格した。曹操の眼には、甘すぎると見えた者たちだ。<sup>199</sup>

（北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 辺境の勇者）

二月に入ると、曹操は徐州・予州を駆け回った。さすがに、首を刎ねられるほど気を緩ませた守将はいなかった。三人ほどを、兵に落とすただけである。恐怖に近いものが、軍を支配していた。それも、仕方のないことだ。あとわずかの間なのだ。<sup>200</sup>

（北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 辺境の勇者）

一日に一度は、曹操は軍中の視察をした。あまりにひどい動きをする部隊は、指揮官の首を刎ねた。十六人の首は刎ねている。それでも、南征に領内を視察した時と較べると、耐えに耐えたのだ。<sup>201</sup>

（北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 千里の陣）

戦がないとき、曹操は常に自分の治める地域を巡視する。一日馬に乗り、八十キロの距離を走り続けることは結構大変であろう。ルーズな城将に対して首を刎ねるか兵に降格か選択肢はこの二つしかない。戦争が始まると、曹操はさらに一日に一度軍を視察する。あまりにひどい動きをする部隊は、指揮官の首を刎ねるに違いない。

曹操はなぜここまでするのか。彼は自分に厳しい人であり、役人に対しても容赦なく厳しく取り扱った。乱世を平定するためには、最も重視されている軍隊かつ武将たちをさらに厳しく統御しなければならない。曹操と城将たちの関係は、深刻な体罰に依存して維持されている。これは曹操が軍を治める一つの特色とも言えよう。

---

199 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.20~21。

200 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.28~29。

201 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.26。



五日進軍すると、一日の休息を与えた。二千名は、死んでいた。さすがに郭嘉は進軍の速度を落とすように願い出てきたが、曹操は許さなかった。

「兵の限界というものはある。それは、進軍の時などに揃っておくのだ。戦の最中にそれを見きわめようなどとしたら、大怪我を負うことになる。死んだ二千は、戦の時は最初に死ぬ兵だった。それも、味方の足を引っ張りながらだ。これから先五日の行軍で幽州に入るが、その時死んでいる兵はずっと少なくなっているはずだ」

郭嘉は、さすがに理解が早かった。弱い兵を選別して排除するには、適当な機会なのである。<sup>202</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 天地は掌中にあり)

曹操は戦術の実行は将軍の能力だけに頼りにはできないと知っている。戦術を最大限に実現させる強大な軍隊を作る必要もある。軍の質がよくなないと、戦局に致命的な影響を与えられる。そのため、曹操は軍を懐刀である夏侯惇に任せ、厳しく調練を繰り返すことによって、不敗の師を作ろうとしている。曹操自身も進軍中に軍を鍛えようとしている。五日間進軍すると、ただ一日の休息を与えた。2000名ほどの死者が出るにもかかわらず、断行する。この激しいスピードの進軍は弱い兵をふるい分けて排除するには、良い方法だと曹操は考えている。戦の前に、弱い兵を排除しないと、真の戦場に赴いて味方の足を引っ張り、より多くの死者が出ると予測できる。三国時代において、このように将軍と兵士を厳しく統御する人は曹操の右に出る者はない。

### ③経済的基盤：屯田の活用

屯田制そのものは、早く漢の武帝のころからあるにはあった。曹操もそれに範を仰いでいる。しかし先行する屯田は辺境地帯に限られたものであって、中国の内部で大規模に実施されるのは、曹操のときから始まる。

「屯田はどうだ、荀彧？」

荒れた田、持主がいなくなった田に、兵をいれて、開墾させた。調練ばかりを

---

<sup>202</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.126。

くり返すのが、兵ではない。米の増産の役にも立てたかった。それで、領地はずっと豊かになる。いずれは、許都の周辺だけでなく、支配地の全域にそれを拡げるつもりもあった。いや、一年二年の長期滞陣や、遠征も考えられる。兵が自分で米や麦を育て収穫すれば、兵糧の問題はずっと楽になる。

「まだはじめてばかりで、先は見えません。兵だけではなく、流浪の農民にも開墾の手助けをしてやれば、民は中原に流れこんでくる、と私は思います。そのために、耕地を貸す制度なども設けた方がよいかと」<sup>203</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 光の矢)

食糧問題はどの陣営にとっても、悩みの種であったようだ。長年続く兵乱とそれに追いつちをかける災害で、飢饉の絶える年がなかった。群雄の覇者となるためには、兵糧の確保が急務だったのである。

この曹操と荀彧が考えた屯田は軍屯と民屯という二つ方法がある。荒れた畑、持ち主がいなくなった畑に、兵を入れて開墾させた。この軍屯は兵士が農作を携わりつつ、事ならば戦役に出た。もう一つ民屯は土地を失った流亡農民たちに農地を貸与し、耕作にあたらせた。収穫のなかから、六割を税として徴収した。収入の半分という、ずいぶん酷なようにみえるが、流民に平穏な暮らしを与えている。社会不安定である理由は、流民が生活できないからだという、曹操は深く認識した。かれらが安定した資産を持てば、共産主義のような平等は必要ない。これが曹操の時代を創造する新しさである。

私見によれば、曹操から始まった屯田制の効果は、農業生産を飛躍的に増大させただけではない。政府の所有する公田の貸借関係を通じて、国家と農民が固定的な関係を結ぶことになったのである。この時点では、曹操の支配はまだ予州・兗州に限られていたが、その土地・人・財政という、国家の基盤となる三つの要素を、曹操は確実に手中に収めたのである。

### 3、特殊な宗教観：平和主義的な仏教を顕彰

漢末は戦乱の時代でもあったが、別の見方をすれば宗教の時代でもあった。体制が中から崩れ、お金と不正と力だけが支配する世の中なり、農民たちの多くが故郷を追われ、あてもなく生きることを余儀なくされていた。そうした未来の展望もない弱者たちの大きな

<sup>203</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.32~33。

拠り所になったのが新興宗教だ。

新興宗教や民衆の不安と誰もが無縁ではいられなかったこの時代の中で、人々と正面から向き合うことができた人物というのは、実は決して多くはない。劉備、孫堅、孫策、孫権、諸葛亮には、こうした集団と真剣に対決した記録がない。曹操だけだ。<sup>204</sup>

### ①戦闘集団になろうとする太平道を追放

『三国志演義』には、曹操を黄巾の乱の弾圧から登場させた。その以降、彼と太平道など新興宗教の関わりは一切言及しなかった。黄巾の乱は、張角がはじめた太平道という宗教教団が引き起こしたものである。太平道はおおくの初期宗教の例にもれず、民衆の病気の治療に重点をおいて、主として農民のあいだに広まった。

「私が、宗教というものを嫌っていることは、よく知っているであろう」

「だからこそです。宗教を認める方は、ひとつの宗教にはまりこんでいくかもしれない。それは、われわれの考えに反します。宗教を認めないのは殿の勝手です。心の中のことでございますから。しかし民が、宗教を持つのはどうしようもないことです」

それは、曹操にもわかっていて、自分の任地でも、眼に余る淫祀邪教は厳しく取締ってきたが、その過程で民の心を完全に支配はできないこともわかった。

205

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 砂塵遠く)

太平道及び新興宗教に対して、曹操は決して好きではなかった。初登場のとき、すでに騎都尉に任じられて、皇甫嵩・朱儁の軍に属して、潁川の黄巾軍攻撃に加わった。曹操から見れば、太平道は教団組織に力をいれた点が最も怖かった。張角はその教団を三十六方に分け、大小の「方」に指導者をおいた。民間の宗教組織は「淫祀邪教」などといわれて、曹操が警戒している。しかし、曹操は長年太平道との対抗を経て、宗教は民衆に必要とされていることを再認識した。眼に余る「淫祀邪教」を厳しく取り締まると、民の心を完全に失う恐れがあるとわかってきた。

<sup>204</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、p.160。

<sup>205</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.83。

「浮屠の教えは、ほかの宗教も認めます。そして、殿の宗教嫌いの部分にあまり触れない自信もあります。太平道と五斗米道も認めはしますが、どう扱うかは殿の勝手。浮屠は、ただ静かに心の平安を得るためにあるのです。それを、おわかりいただければ」

浮屠が、有力な宗教になる。それに対して、いくらかの力を支配者が持っている。宗教の扱いはそれが一番賢明なのかもしれない。……<sup>206</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 砂塵遠く)

曹操は冷静に現状を理解、分析し、石岐の提案を受け入れ、太平道など「淫祀邪教」と対抗する方法として、浮屠を引き上げた。基本的には宗教を認めない曹操が、早く「浮屠」だけは認めていた。浮屠とは「ブツダ」を漢音により当て字したもの、つまり仏教のことだ。町に寺院を立てることを許し、そこに集うことを許した。太平道や五斗米道とは違い、浮屠には軍事力がなく、宗教国家を作るという構想も持たず、平和的に信徒を増やそうとしていた。<sup>207</sup>

## ②青州黄巾の信仰のみ許す

黄巾の乱の後、曹操と太平道の戦いはまだ続けている。黄巾自体も中平元年その中核が敗れたのち、中平五年ごろ青州・徐州等で復活し、青州の黄巾は山東各地で活動したのち、初平三年になって、百万の衆をもって兗州に侵入した。

「殿は、はじめから民が生きるとはどういうことか、とわかっておられます。淫祀邪教を禁じられました。役人の不正を許されませんでした。それだけで、民は平穩に生きることができるようになりました。信仰とは、まさしくその平穩に生きることへの願い、と申せましょう。それは、太平道であろうと五斗米道であろうと、浮屠であろうと同じなのです。ただ、その願いだけでは人はばらばらです。それをひとつにまとめるのが、信仰とはかながえられませんか」

「民は、もともと平穩に暮らしておりました。それが、できなくなったので

<sup>206</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.83~84。

<sup>207</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、p.161。

す。豪族が土地を持ち、役人が税を搾るからです。土地のない農民に、生きる意味があるでしょうか。流民となり、そして賊となります。その時あるのは、わが子は平穩に暮させたいという思いです。自分は死んでも、わが子は平穩に暮させたい。そういう思いは、死ぬまで人を闘わせます」<sup>208</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 群雄の時)

曹操は、青州の黄巾軍百万と三万の軍勢で対峙し、膠着状態になったときに、荀彧が宗教というのは何なのか、を説いた。信仰とは、まさしくその平穩に生きることへの願い、と申す。もともと民が追求するのは単に平穩に生きることである。しかし、この時代には、宦官による専制政治、民衆に課せられる重税、加えて旱魃・疫病・凶作といった天変地異が重なって、民衆は苦しみのどん底をさまよっていた。平穩に暮らすことができない場合、民は流民となり、賊となる。そのとき、平穩に暮らせたいという気持ちが高まり、この信仰で各地の流民を呼び集められ、賊の軍を結成したわけ。

その後、再び活発化した黄巾軍に手を焼いていた曹操だが、この度青州百万の黄巾軍と講和した。講和にあたったのはこの荀彧しかいない。

「中黄太乙に対する信仰を、許されるのかどうか、この者たちにお伝えください」

「人はみな、平穩に生きたい。子を育て、畠を耕やし、実りに感謝したい。その心は、私にもわかる。太平道が徒党を組んで賊徒にならず、中黄太乙が心の拠りどころであるかぎり、私はそれを禁じはしない。太平道にかぎらず、中黄太乙が心の拠りどころである信仰は、すべて同じだ」

老人は、ずっと曹操を見つめている。

「この者たちは、戦の責めを負って、首を差し出すと申しております」

「誰も罰せぬ。黄巾軍の戦は、私欲によるものだと私は思っておらぬ。もし講和が成るのならば、罰することになんの意味がある。誰にも罪はない。強いて言えば、この国の政事こそが罪を負うべきであろう」

老人の表情は動かなかった。ほとんど瞬きすらもしていないように見える。

---

<sup>208</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.283。

「青州から溢れ出してきた者たちは、青州に帰してもよろしいでしょうか？」

「帰農せよ。日々の営みに戻れ。田畠は荒れ、二、三年は苦しいであろうが、それをしのぐのも人の生だ。私は、青州の政治を司ってはおらぬ。東郡の太守にすぎぬ。したがって、青州にたいしてなんの約束もしてやれぬ。もし私が青州の政治を司るようになった時は、民が平穩に暮せるために力を注ごう。その民は、すべての民だ。太平道の信徒であるとなかろうと、民は民だ。私が言えるのは、そこまででしかない」<sup>209</sup>

(北方謙三、『三国志』二の巻 参旗の星 降旗)

反乱を降伏させたい曹操は、そのときに恐らく宗教の本質的な部分を腹の底まで吸収せざるを得なかった。信仰のために命を賭けて戦う男たちがいる、その男たちを命賭けて支援する女性、老人、子供がいる。国家があつて人があると考えていた曹操は、国家よりも大切なものがあると考え人々がいることを自分は認めなければならないと悟った。人々が必要とするものは何なのか。食べることである、生活することである、生きることを楽しむことである。さらに、しみじみと生きていてよかったと思わせるものが必要とすれば、その中の一つに宗教があるのではないか。

ようやく曹操は民の義憤と心情を痛感し、民の信仰を許し、挙兵に及んだ罪状を不問とすることを申し出た。黄巾軍も、これを三月に渡って根気よく講和を説き続けた荀彧の人格に打たれ、申し出に応じて教練を受けた兵五万を曹操へ預けた。一年分の兵糧を与えられた黄巾軍は青州へ戻り帰農した。

曹操は勝った。転機とは、しかし勝ったこと自体ではない。勝った結果、青州兵の加入で、曹操は一躍、当時の群雄の中で最も有力だった袁紹に次ぐ軍事力を得た。

そのあたりの曹操と宗教団体の駆け引きは、みていると凄いと思われる。浮屠という新しいものを理解して、認めよう、と。こういう先見性みたいなものというのは、曹操は、いろんところで持っていたと思う。信仰を持っていなくても、信仰を持った人間の集団の力は認めていて、それをうまい具合に政治の中にかしていこう、という発想を持っていたと思う。

### (三) 孤高な覇者曹操

<sup>209</sup> 北方謙三、『三国志』二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.111~112。

## 1、孤高：同盟を結ばない

三国時代、とくに乱世において、自分の領土の安全を確保するため、群雄の中も同盟を結ぶ人は極めて少なくない。様々な勢力と軍事同盟を結び、有事の際には共同で軍事作戦をおこなうようになっている。たとえば、十八路の諸侯は同盟し、董卓を討伐する。袁紹は劉表と同盟し、袁術と同盟を結ぶ。呂布も一時的に劉備のもとにいった。その中、一番有名なのは劉備と孫権の同盟に違いない。同盟を結ぶことによって、強大な敵と対抗することができ、自分の利益を最大限に保たれる。この例外に当てはまる人はそれほど多くはない。

曹操は、誰と同盟を結ぼうとも考えていなかった。服従か死か。覇者の戦は、それだけを求めるべきだ。孫権が劉備と義兄弟になり、馬超と同盟したとしても、自分は誰とも結ぶ気はない。<sup>210</sup>

(北方謙三、『三国志』八の巻 水府の星 野の花)

さすがに曹操だけあって、相手はだれにしても同盟を結ばない。曹操には、覇者たる者は戦うしかない。相手にとっては、選択肢は服従か死か二つしかない。確かに、同盟関係を結ぶ相手は、どこの国でも良いというわけではない。その時点で、最も力のある国と同盟を結ばなければ、意味をなさないのである。弱い国同士で同盟を結んだところで、単なる弱者連合が生まれるに過ぎず、お互いに足を引っ張りあう可能性があるためにむしろ危険だ。しかし、曹操はこの点について、そんなに深く考えていないかもしれない。人生最初且つ最後に同盟を結んだのは董卓と戦うためである。そのうち、曹操は自分とほかの群雄の最大の違いを気づき、独立宣言を発した。他人は自分と一緒に戦をする資格がない。そして、独りで戦う、滅びをかけても戦うという、曹操の生涯続くスタイルの自己確認だった。

## 2、覇者：万人を屈服させる決意と詭計を弄せず

劉備は、徐州牧だった頃、放浪中の呂布を匿っていた。ところが、劉備が袁術と事を構えて小沛に居た時に、下邳で留守番していた呂布は曹豹の手引きで叛いて、劉備を襲い、劉備は袁術と呂布の挟み撃ちの形になる。劉備は、はらわた煮え練りかえるのを我慢して、

<sup>210</sup> 北方謙三、『三国志』八の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.62~63。

呂布とは和睦して、自身は客将として小沛に常駐して、呂布に徐州牧を譲る。しかし、密かに兵を集め、逆襲の準備をしていた劉備は呂布に察知され、大軍で襲われて勝てず、泣きべそかいて、曹操の元に亡命したのである。

操设宴相待，至晚送出。荀彧入见曰：“刘备，英雄也。今不早图，后必为患。”操不答。彧出，郭嘉入。操曰：“荀彧劝我杀刘备，当如何？”嘉曰：“不可。主公兴义兵，为百姓除暴，惟仗信义以报俊杰，忧惧其不来也。今玄德素有英雄之名，以困穷而来投，若杀之，是害贤也。天下智谋之士，闻而自疑，将裹足不前，主公谁与定天下乎？夫除一人之患，以阻四海之望，安危之机不可不察。”操大喜曰：“君言正和吾心。”次日，即表荐刘备领豫州牧。程昱谏曰：“刘备终不为人之下，不如早图之。”操曰：“方今正用英雄之时，不可杀一人而失天下之心。惟郭奉孝与吾有同见也。”<sup>211</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第十六回 吕奉先射戟辕门 曹孟德败师涪水)

「劉備のことか、荀彧？」

「御意」

「おまえのことだ。いまのうちに殺しておいた方がいい、と言いに来たのであろう」

「しかし、殺さん」

「人の下風に立つことを肯んじる、という人相ではありません」

「荀彧、天下を取るということは、ああいう男も思いのままに使いこなせるといふことだ。使いこなさせれば、国家の役に立つ。大きな力になるぞ」

「あの男さえも使いこなせてこそ、天下人ということですか」

.....

「そういう男を屈服させられないで、なんの天下だ。殺してしまえば、私は負けを認めたことになるのだぞ」<sup>212</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 情炎の沼)

「私の敵に回るな、劉備殿。これは、一度だけ言っておく」

<sup>211</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』上、齐鲁书社、1991年1月、p.187。

<sup>212</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.67~68。



頷いた劉備の眼の中に、強い光が束の間よぎったような気がした。い、やはり自立の意志が放つ光だ、と曹操は思った。

ここで殺せば、負けを認めること。曹操自身が、荀彧にそう言ったのだ。自分の言葉が、自分を縛ってきているのかもしれない。

「行かれよ。小沛で時を待たれるがよい」

頭を下げ、劉備が退出していった。

典韋を呼びかけた言葉を、曹操は呑みこんだ。

いつか、従わせてみせる。これこそが、王たる者が考えることではないのか。すべてを従わせた時に、はじめて王という名に値するのではないのか。<sup>213</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 情炎の沼)

呂布に敗れ、唯一の根拠地を失った劉備は許都へ曹操の助けを求めた。程昱はもとより劉備を殺す派である。荀彧はそれを賛成し、曹操に進言しに来た。しかし、「わしが人を裏切ることはあっても、人がわしを裏切ることは許さない」という流儀を持つ曹操はなぜ劉備を殺さなかったのか。それは郭嘉が「劉備は英雄だと評判の上、追い詰められてこちらに身を寄せたのです。彼を殺せば、殿の評判は落ちてしまいます。」と、劉備殺害に反対を示しているためである。曹操はもともと天下の名士を集め、覇業を全うしようとしている。劉備を殺すことがマイナスに働きかねないと判断したのだと考えられる。

一方の北方謙三『三国志』には、曹操は劉備を殺さず、自分の能力で相手に屈服させようとしている。この点においては、曹操の覇者としての自信を見せる。天下を取るということは、たとえ劉備にしても思いのままに使いこなせるということが必要不可欠である。人の落ちぶれる時に殺してしまえば、自分の失敗を認めたということになる。これは覇者たる者がすることではないと、曹操は確信している。ただ、曹操も劉備の危険さをよく知り、「自分の敵に回るな」と言い聞かせた。裏切らないならばよし、裏切るなら堂々と征伐できるというわけである。これこそは覇者のやり方である。

劉備ひとりを屈服させることもできずし、なんの天下か。そう思い続けた。間違っていない。天下を取るというのは、万人を屈服させることだ、と曹操は信

---

<sup>213</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.76~77。

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 夜が燃える)

赤壁戦いの敗戦後、曹操は深く反省した。天下が掌中にある。そう思った自分が甘すぎだった。その甘さが、結局は敗戦を読んだ。果敢な戦をする、と口で言っただけのことだ。内実は、三十万の大軍を擁し、その兵力を恃みにしていただけではないのか。天下分け目の戦いなのに、自分は果敢に戦わなかった。自分が目指すのはこの時代の頂点に立つ覇者になり、天下の万人を屈服させることだ。今更劉備を屈服させることさえできなかった。敗戦後の自己反省はよく孤高の心理状態を示している。たとえ一人でも逆らう人がいれば、天下に君臨する覇者には相応しくない。

このほか、関羽の死を巡って、曹操も覇者たる者の資質を見せてくれた。于禁を捕え、龐徳を斬り、関羽の手柄は中原を驚かせた。曹操も狼狽して遷都まで考えるほどであったが、曹操の配下の司馬懿と蔣済は、これ以前に和議を結んでいた孫権を利用して、長江南を領有することを条件に関羽を背後から攻撃させる策を提案し、曹操は孫権と密約を結んだ。その一方で、徐晃を派遣して曹仁を救援させた。これにより関羽は、逆に曹・孫両軍に挟撃されてしまうことになる。

さらに、曹操の配下の董昭は曹操に「樊城の将兵の士気を高めるためと、関羽の我が軍への戦意を喪失させるために、孫権が殿と同盟を結び関羽の背後を攻めることを、樊城の我が軍と関羽に漏らすべきです」と提案した。曹操もこの提案に従い、徐晃を介して樊城の曹操軍と関羽軍に孫権参戦の情報を伝えさせた。この情報を聞いた樊城の曹操軍の士気は大いに上がった。総じて、曹操の奸計は関羽の死を引き起こしたと言っても過言ではない。

ただし、覇者の戦ではない、という言葉も、曹操は呑みこんだ。

策だけで勝とうと、自分はしてこなかった。周囲の敵を受け、戦だけではとても切り抜けられないという時は、全知全能をふりしぼって、謀略もめぐらせた。しかし、結着は戦でつけた。それが覇者というものだ、と出てきたからだ。<sup>215</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 野に降る雪)

<sup>214</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.157~158。

<sup>215</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.293。

北方謙三『三国志』では、司馬懿の提案に対して曹操は困っている顔をしている。これは覇者の戦ではないと考えた。策だけで関羽を窮地に迫るのは自分らしくない。覇者というものは、戦で決着をつけないといけない。今まで、曹操は何十回の戦をし、悪たくみを使って勝利を収めるのは一度もない。これだけ見ると、曹操とは、純粹すぎるほど純粹だとおもわないだろうか。

さらに、関羽の死後、首は孫権の使者によって曹操の下へ送られた。首を送った理由はもしも関羽を呉が討ち取ったことが蜀に知れられたら蜀の劉備と張飛は死を覚悟で呉を攻める事は明白である。「関羽の死は呉のみの判断ではなく、魏も責任があったんだ」と言う責任の押し付けで、関羽の首を送ったのである。孫権は劉備の怒りが魏の方に向くかもしれないと願っているではなからうか。

操大喜・从其计・遂召吴使入。呈上木匣。操开匣视之・见关公面如平日。操笑曰：“云长公别来无恙”<sup>216</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十七回 玉泉山关公显圣 洛阳城曹操感神)

関羽を、あんなふうにならしてよかったのか、という思いが曹操につきまとっていた。すでに、群雄が割拠しているという状態ではない。天下は三分され、決戦の秋を迎えつつあったのだ。誰が勝つにしろ、力で結着をつけるべきだったのかもしれない。騙し討ちや裏切りなど、最後の覇権の争いでは意味のないことだ。実際に、呉が領土を拡げただけで、状況は再び膠着に入った。乱世が、まだ続く気配が濃厚である。

関羽が北進し、漢中の蜀軍が雍州に進出する。そこが、決戦の機だった。魏にとっては、非常に苦しい決戦になったことは、間違いない。しかし、そこを凌ぎきって勝ち抜けば、それで乱世は終わった。<sup>217</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

『三国志演義』では、曹操は司馬懿の提案に従い、関羽を手厚く葬ると決める。これに

<sup>216</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.956-957。

<sup>217</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.53。

よって、劉備からの恨みを再び孫権に移そうとしている。劉備と孫権の間に戦争が起これば、蜀が敗れようが呉が破れ様とも相当の打撃を受ける。それを喜ぶのが魏の曹操である。曹操はその期に一齐に攻撃をすれば曹操が天下を取る事になるに間違いない。いわゆる曹操は漁夫の利の漁師である。東呉の陰謀を見破り、やり返すとしよう曹操の気持ちがすつきりしていた。関羽の首に対して「雲長殿、あれからお変わりありませんか。」と悪ふざけに言っていた。

北方謙三『三国志』において、曹操はずっと関羽を詭計で死なせることに悩んでいる。ときは群雄割拠ではなく、すでに天下三分という形勢になった。覇者として、騙し討ちや裏切りなど、最後の覇権の争いでは意味のないことである。自分が望んでいる本当の戦は実力で決着をつけるべきだったと曹操は心の中に考えている。そして、もし呉との計画がないなら、漢中の蜀軍が雍州に進出し、天下分け目の戦だった。曹操にとって非常に苦しい決戦になるかもしれないが、勝ち抜けば乱世はその時点で終わるに間違いない。狐のような奸智はあるが、曹操は詭計を弄せず公明正大なるべき者である。ごとに乱世を鎮まるといふ点には、曹操の切実な気持ちはだれにも劣らない。これこそ覇者だ。この時代にあって曹操だけが突出して覇者にふさわしい資質を兼ね備えていた。

#### (四) 君主より男の友情を重視する曹操

北方謙三に描いた曹操は生き生きして、感情に溢れる男である。彼は自分のために一生懸命仕事をし、才能を尽くした臣下に対して本当の感情をむき出しにした。

##### 1、曹操と荀彧：才を尽くす友

荀彧は、字を文若と言ひ、161年から212年まで生きた人物である。曹操配下の軍師の中では、履歴が綺麗な人物であり、外見も行動も立派な正統派である。

この荀彧の最大の望みは、漢王朝を再興して再び、天下太平の世にする事である。そして自身が武将タイプではない以上は、それを可能にする英傑に出会い、そして参謀として天下獲りに協力する事である。荀彧は、この己の野望を達成する為に生き、そして皮肉にも、この野望の為に死を迎える事になる。

曹操はその頃、奮武將軍として東郡という所にいった。それを聞いた荀彧は、曹操に仕える為に袁紹の下を去る。曹操は、荀彧の聡明さを一目で見抜き、これを抱える事を喜ぶ。荀彧も、曹操の非凡な才能とカリスマ性に惹きつけられていて、この人物なら漢王室を再

興できると確信する。

曹操は荀彧を「我が子房」と呼んで重宝した。子房とは、漢を建国した劉邦の軍師、張良子房の事であるから、曹操は荀彧を自分が天下を取るに必要な人材であるという最大級の賛辞を送ったのである。曹操は、その内政から外交に至る全ての面において荀彧を頼りにする。

もともと仕えていた袁紹に見切りをつけ、荀彧は自分から曹操へと仕官した。以前から荀彧の才気を知っていた曹操は、即座に東郡の民政を任せる。出沒する黒山の賊徒を耐え抜いた荀彧は、さらに百万の兵力を持つ青州黄巾軍に対する講和に派遣される。三か月後、粘り強く説得に説得を重ね病に倒れた荀彧は、板に担がれて山を下りきた。しかし、曹操が出した条件を曲げることせず、青州の民との話し合いをまとめあげ、青州兵五万の徴用も同意させた。

荀彧は曹操のどんな無理難題にも取り組み、すべてを満足させる形でやってのけ、曹操に劣らぬ権謀を果たした。破格の禄も与えられたが、むしろ荀彧は乱世を終わらせるという目標のために働いていた。そういう意味での覇者が、袁紹ではなく曹操だったのだ。

しかし、いつの頃から、曹操と荀彧は互いの肚の内を読み合った。志が違う。しかし、目標は近かった。

荀彧は、根底に漢王室の復権という志を持っている。曹操の覇道が行き着くところもそこを考えているようなのだ。最後のところは、曹操と考え方が違う。しかしそれは、最後の最後のところだった。<sup>218</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 光の矢)

荀一門は、荀彧にしる荀攸にしる、帝への尊崇の念が強かった。漢王室の帝を頂点に戴き、その下で覇者が政事をなす、という考えである。<sup>219</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 策謀の中の夢)

「丞相のためというより、天下のためにやったことです。丞相に尽くすことが、天下に尽くすことだと、いまも私は信じています」<sup>220</sup>

(北方謙三、『三国志』五の巻 八魁の星 制圧の道)

<sup>218</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.33。

<sup>219</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.162。

<sup>220</sup> 北方謙三、『三国志』五の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.195。

曹操の幕僚の中で、帝に最も敬慕の情を抱いているのは、多分荀彧だろう。いまの帝というより、この国に帝が絶対的な権威として必要だ、と考えている。帝を擁して天下に号令せよ、と曹操に進言したのも、荀彧だった。それは曹操にとって大きな力となったが、同時に煩雑なことを抱える元凶ともなった。<sup>221</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 わが立つべき大地)

荀彧が望んでいるのは漢王室の再興である。そのため、乱世を終わらせなければならない。曹操は一人の覇者として、自分の戦で天下を平定することを望んでいる。この点について、二人は合意に達した。その最大の問題は、漢王室を擁護するかどうか。荀彧一族は帝への尊崇の念が強かった。漢王室の帝を頂点に戴き、その下で覇者が政事をなす、という考えを持っている。一方、曹操は国の形を正すことに重心を置き、すでに腐った漢王室の血はどうでもいいと考えている。曹操も、はじめから帝を廃して自分が帝位に昇ろうなど考えていたわけではない。反董卓連合軍を、檄文を發して全国から集めたのも若き曹操だった。一向に戦おうとしない群雄たちに苛立ちを覚えながら、洛陽を焼き尽くそうという董卓に「忠義」の旗を掲げて麾下五千だけで立ち向かっていた。だが、覇道を進むうちに、漢王室そのものの存続に価値を見出せなくなったのだ。結論から言えば、曹操と荀彧の目指す国家像が異なってきたからである。

劉備と諸葛亮は同じ志で結ばれた同志であったが、曹操とそれを補佐した荀彧の二人は、主従にあつて好敵手と言える間柄であった。熱烈な漢王室信奉者である荀彧と、曹操は次第に溝を深めていく。避けられない岐路にさしかかることは、二人とも承知していた。そして、曹操が必要としなくなったとき、自分が斬られることも荀彧にはわかっていた。

曹操は荀彧が病に伏したと聞くと、五錮の者を護衛につけた。だが、切れ過ぎる荀彧はそれを自分に対する清算と見て、毒をあおった。

荀彧が、読を呷って死んだのである。

なぜ、と考え、すぐに思い当たった。五錮の者に、身辺の警固を命じた。荀彧は、それを曹操の監視だと受け取ったのだろう。

軽率なことをしたのかもしれない。自分も、荀彧もだ。軽率というより、なに

---

<sup>221</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.97。

かが通じあわなくなっていた。いまになって、痛いほどそれを感じる。

……

一睡もせず、朝を迎えた。

それでも曹操は、陣舎の居室から一步も出なかった。荀彧の屍体というのが、どうしても思い浮かばない。

服従か死か。それとは違う思いで接していたのが、荀彧ただひとりだった、という気もしてくる。

従者が朝食を運んできたが、すぐに下げさせた。

陣舎の外では、動きはじめた兵の気配がある。晴れた日のようだ。明るい光が、かえってなにもかもを白々しく感じさせる。

曹操は、眼を閉じた。

荀彧は、どういう思いで自らの命を断ったのか。怒りか、絶望か、諦念か、曹操に対する抗議か、それともまるで別の、支えきれないほどの人生のむなしさに襲われたのか。

将兵を、多く死なせてきた。死については、心を動かさない。それはほとんど、習慣ようになっていた、と言ってもいい。荀彧の死だけが、なぜか心に重く沈殿し、うごめき、このままでは遠い死者の群れに入ることは決してない、という気がするほどだった。<sup>222</sup>

(北方謙三、『三国志』八の巻 水府の星 新しき道)

毒を呷って、荀彧としては当然の選択だったはずだ。投獄の恥辱など、荀彧の誇りが許すはずもない。服従か死か。そういう、曹操の人に対する接し方を、最も知っていたのは、荀彧だった。自分は荀彧を殺したのか、と曹操は思った。荀彧の自殺は曹操を悩みの淵に陥られた。

若いころから、一緒に闘った。曹操の闘いがなんのためか、誰よりもよく理解していた。ただ、帝に対する考え方が、根本のところの間違っていただけだ。青州黄巾軍と闘った時、講和の使者に立ったのが、荀彧だった。数か月、講和の交渉を続け、戻ってきた時は、はっとするほど髪に白いものが増えてきた。荀彧は命をかけて自分に天下を取らせるつもりだった。それを目的にすべての戦略を組み立て、時には自ら手を汚しさえした。荀彧は自

<sup>222</sup> 北方謙三、『三国志』八の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.282~285。

分のために才能を使い尽くした。曹操と荀彧は志ではなく、何かによって繋がっていた。まさか諸葛亮と龐統のように、ライバルでありながら味方でもある。良性競争の中で二人一緒に成長し、強くなる。私はあえてそれを男の友情と言おう。このような友達の死は曹操の心に大きな衝撃を与えた。

## 2、曹操と許褚：忠誠を尽くす猛将

北方謙三は小説に自分の創意を入り、劉備にとっての関羽と張飛のような存在を曹操にも与え、猛将・許褚にその役割を託した。そして、しゃべらず、笑わず、ひたすら曹操に随従し尽くすという設定の許褚に対し、曹操の本当の感情がおのずから現れる。

「私にとっては、いいことかもしれぬ。しかし、弔いたい。一緒に弔う相手としては、おまえしかおらぬと思った」

「いま、酒が」

「人は、死ぬのだな、虎痴」

「仕方がありません」

「三十六歳でも、死ぬ時は死ぬのだ。戦に勝っても、死ぬ時は死ぬ」

「仕方ありません」

「まったくだ。おまえは、自分が死ぬ時のことをかんがえたことがあるか、虎痴？」<sup>223</sup>

(北方謙三、『三国志』八の巻 水府の星 長江の冬)

「酒を相手をせよ、虎痴」

「はい、殿」

「おまえは、死なぬな。私より先に、死ぬことはないな」

「殿を守りすることが、私の仕事です。それ以上のことは、わかりません」

「そうだな。何度も私はおまえに助けられた」<sup>224</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 新たなる荒野)

<sup>223</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.117~119。

<sup>224</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.151。



曹操は悩みがあるとき、いつも許褚を呼んで一緒に酒を飲む。部下にとって、曹操は畏敬させる存在であろう。覇者は孤独に決まっている、本当の友達はいない、あえてつくる必要もない。たとえこのような曹操にも、彼の本音に耳を傾ける人が欲しいのだ。許褚はその存在である。あまり無口な人であるが、話すより相手の話を聞く、相手を話させることがもっと重要であることはよく知っている。そのため、曹操は酒を飲むとき、よく彼を相手にする。たとえば周瑜が死んだという知らせが耳に入り、曹操は許褚を呼んで一緒に用うことを行った。酒を飲んだ曹操は往事をしのび感慨にふける。

「虎痴」

そうすおは、許褚を呼んだ。用事があるわけではない。姿が見えないと、なんとなく落ち着かないのである。

許褚は、部屋の入口に立ち、すぐに姿を消した。いつも声の届ところにいる。それさえ知れば、曹操は安心できるのだった。<sup>225</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

曹操は一人で休むときはたまたま許褚の名を呼び、用事があるわけではない。ただ許褚の声を聞こえると安心して落ち着くことができる。曹操の生活は許褚と切り離すことができないほど繋がっている。このような依頼心は琴線に触れまくりそうな男同志の恋慕感情とも言えよう。この感情はなにものによって確立したのか。実は許褚は度々曹操の危機を救っている。曹操の暗殺を企んでいた人を殺し、馬超・韓遂の乱には一騎打ちで馬超と互角に渡り合い、単騎で曹操が彼らと会話する際でも常に目を光らせていた。更に曹操に信頼されるようになり、出入にも同行させて左右から離さなかった。許褚は虎のように力強く誠実な男である。彼は曹操のため忠義心を尽くし、曹操の本当の感情を得た。

「私が死んでも、おまえが後を追うことは禁ずる。許褚仲康として、自らの人生を生きよ。これは、私の望みだ」

許褚の眼が、曹操を見つめていた。

「言うことは、これだけだ。みんな退がってよい」<sup>226</sup>

<sup>225</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.53。

<sup>226</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.96~97。

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

これは曹操が死ぬ前に許褚とのやり取りである。自分の死は許褚に大ダメージを与える恐れがあるから、曹操は人生の最後の命令を下して、許褚によく生きなさいと伝えた。許褚の曹操に対する忠義心はありがたいものである。関羽と劉備の間の感情と近い、連年の戦いの中、二人はすでに君臣の感情を超えて男同志の友情が芽生えた。

#### 四、曹操の夢：天下の覇者になる

北方謙三『三国志』を見てみると、三国時代の中での本当の英雄というのは、曹操だったとしか思えない。覇者としての教養も備わっていた。赤壁で勝ってれば、曹操が明君として立ち、漢王室が腐敗し混乱したものを制圧して新しい国家を作ったのが、曹操ということになったと思う。

群雄割拠した乱世にあって、最も果敢な戦いを見せ、まさに戦に生きた天才と呼ぶに相応しいのが曹操だ。檄文を発して全国から集めたもの一向に戦おうとしない反董卓連合軍に苛立ち、洛陽を焼き払い長安へ逃げ延びようとする董卓軍を麾下五千で追撃した若き曹操は、とりわけ激しい。青州黄巾軍百万を相手にも怯まず、荀彧を送って粘り強く講和を求め続けた。負けぶりも激しい。渭水で鄒氏との情事の最中、偽降した張繡の手勢に襲われ、間一髪で脱出した。赤壁の戦いで襁褓のようになりながらの敗走など。しかし、曹操は逆境に強い。たとえ何度も失敗しても、次々と勇気を奮い起こすことができる。この不撓不屈の精神こそ、劉備かつ群雄が備えていない資質である。

曹操こそ、「三国志」という物語の中で、苛烈に戦うこと、戦い続けることに最も純粋な戦人だった。董卓と死戦し、呂布を滅し、袁紹と拮抗し、劉備と争う。なぜそんなに戦うことを欲したのか。戦って何を得ようとしたのか。

劉備ひとりを屈服させることもできずし、なんの天下か。そう思い続けた。間違っていない。天下を取るというのは、万人を屈服させることだ、と曹操は信じている。<sup>227</sup>

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 夜が燃える)

---

<sup>227</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.157~158。

それは天下の覇者になるため、戦い続けた。曹操が目指したのはこの時代の頂点に立つ覇者になり、天下の万人を屈服させることである。たとえ一人でも逆らう人がいれば、天下に君臨する覇者には相応しくない。このため、曹操はあえて落ちぶれて自分のところにさまよう劉備を殺さなかった。そして、関羽を詭計で死なせることにも深く悩んでいる。覇者として、騙し討ちや裏切りなど、最後の覇権の争いでは意味のないことである。自分が望んでいる本当の戦は実力で決着をつけるべきだったと曹操は心の中に考えている。狐のような奸智はあるが、曹操は詭計を弄せずに公明正大なるべき者である。ことに乱世を鎮めるといふ点には、曹操の切実な気持ちはだれにも劣らない。ただ果敢に戦いたい。非常に苦しい戦になるかもしれないが、勝ち抜けば乱世はその時点で終わるに間違いはない。これこそ覇者だ。この時代にあつて曹操だけが突出して覇者にふさわしい資質を兼ね備えていた。

## 五、曹操の死：名君らしい見事な最期

### (一) 死を恐れず

『三国志演義』第七十八回、曹操の死の場面にも、奸雄の最後に似つかわしく、いろんな逸話を取り込まれてさらに潤色を施されている。

忽闻殿中声如裂帛，操惊视之，忽见伏皇后、董贵人、二皇子、并伏完、董承等二十余人，浑身血污，立于愁云之内，隐隐闻索命之声。<sup>228</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第七十八回 治风疾神医身死 传遗命奸雄数终)

曹操には、緊張感はなかった。死がすぐそばまでやってきているのかもしれないとも思ったが、悲壮感もない。これまで何度も、死は曹操の頬を撫でた。また来ているのか、と思うだけである。<sup>229</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

まず伏后ら曹操に誅殺された者たちの亡霊が登場し、それから梨の木の精が全身血に染まった姿で曹操の夢に現われ、それがもとで病に就く。曹操は自分の人生において、数え

<sup>228</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.968。

<sup>229</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.84。

きれないほどやましいことをやったのも知っているはず。だから不安になる、夢の中に亡霊も現れ、死を恐れる。曹操の心の負担は、いかなるものか。一方、北方謙三『三国志』では、曹操は死に直面するとき、少しの恐れもなく、素直に受け止めた。人が死ぬことを恐れるのは、それにともなう絶望感や無力感、孤独感に対してである。しかし、曹操にとって、死亡は再び訪ねてくる一人の友達のような存在である。一人の戦士として、人生の道を歩いてきて、何度も死に神と顔を合わせるはずだ。この曹操は「死への準備」という教育を受けたではないか。死への教育は、積極的に生きるための教育でもある。曹操は一生をかけて奮戦してきた。彼にとって、人生は少しの残念もないから、ひとりでの死を恐れない。

## (二) 禅譲を禁ずる

『演義』は曹操の献帝への対応を悪意にのみ描く。曹操がその遺言にいても、遺される女性の身の振り方を細かく支持しながらも、献帝から禅譲を受けよとは命じなかったことについて、毛宗崗本第七十八回総評は、曹操の「偽」を強調する。

「ひとつだけ、気にかかることがある、夏侯惇」

「ほう、それは？」

「私が死んだあと、丕が帝位を篡奪せぬか、ということだ。いまの帝は、迫れば帝位を禅譲するであろう。しかしそれでも、篡奪としか見られぬ」

「魏王をお継ぎになることは、よろしいのですね」

「仕方があるまい。ほんとうはそれも好ましくはなかった。私が、公、王と昇ったのがよくなかった。丞相のまま、天下の統一を目指すべきであった。それなら、劉備が漢中王になることもなかった」

「王と帝位とはまた違うものだ、と私は思いますが」

「同じだ。劉備が、なぜ漢中王と自ら称したか。いまの乱世で、王など誰でもなれるものだというのを、天下に示したのだ。少々の力があれば、人に殿下と呼ばれるのはたやすいとなる。朝廷が、さんざん勿体ぶってくれた王の位を、劉備はなんの勝ちもないものとしてしまった」

「ならば、帝位でさえ」

「丕が、帝になってみろ。すぐに劉備も帝となる。そして、多分孫権も。陛下

と呼ばれる者が三名だ。これはもう、帝ではない。帝が不在のまま、乱世はさらに長く続くことになる。」

「それよりは、許都にまことの帝を擁立したままの方がよいと、殿下はおっしゃるのですな」

「大義名分は、常にこちらにある。帝さえ擁していれば」<sup>230</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

北方謙三『三国志』の曹操は常に合理主義だ。魏公・魏王やそれにとまなう特権も虚飾ではないのか。「官位も、どうでもいいものだった。ただ、それを使うことで、さまざまな試みもできた。」と、おそらくは曹操によって、それは徹底的に利用する価値があったから、その地位を受けたのであろう。それは群雄とか臣下にたいする対応にプラスになる点もあるが、究極的には天下の安定のために価値があるということではなかろうか。荀彧の死後、曹操はようやく献帝擁立の真義をわかってきた。もし自分あるいは息子の曹丕が帝と称えれば、その時点にほかの帝と称される人も現れるはずだ。いまの乱世で、帝など誰でもなれるものだということを、天下に示したのだ。これはもう、帝ではない。帝が不在のまま、乱世はさらに長く続くことになる。だから曹操は遺命で曹丕を魏王の位を継承すると命じ、帝を迫って禅譲をもらうことは絶対いけない。いつの頃から、曹操は自分が家族の名誉を回復する人で、きっと極悪非道のことをしてはいけないと自覚している。

### (三) 素朴な葬式

『演義』における曹操の遺言について、家の者や婢妾の身の振り方については詳しく言い渡しながら、七十二か所の偽りの墓を作りと命じ、一生他人を防備している。

操令近侍取平日所藏名香・分赐诸侍妾・且嘱曰：“吾死之后汝等需勤习女工・多造丝履・卖之可以得钱自给”又命诸妾多居于铜雀台中・每日设祭・比令女伎奉乐上食。又遗命于彰德府讲武城外・设立疑冢七十二：“勿令后人知吾葬处・恐为人所发掘故也。”<sup>231</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第七十八回 治风疾神医身死 传遗命奸雄数终)

<sup>230</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.88~89。

<sup>231</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.969。

遺令曰：「天下尚未安定・未得遵古也。葬畢・皆除服。其將兵屯戍者・皆不得離屯部。有司各率乃職。斂以時服・無藏金玉珍寶。」<sup>232</sup>

(陳壽撰 裴松之注、『三國志』魏書 卷一 武帝紀第一)

「天下は、まだ定まっておらぬ。私の葬儀は、簡素にやれ。任地にいる者は、そこで任務を全うさせよ。いつまでも、喪に服することはない。埋葬終えたら、喪も明ける。それでよいのだ。埋葬の時の私は、平服でよい。剣以外に、副葬品を入れてもならぬ」<sup>233</sup>

(北方謙三、『三國志』十の巻 帝座の星 冬に舞う蝶)

主を失ったあとの宮女たちの生活設計に心を勞し、履作りの職を身につけよと言っているのは、滑稽というよりも悲しい。死後の行方をいちいち気にしているのは、おかしくもあり、いたわしくもある。そして、銅雀台の妓女を朝晩にめしを供え、歌舞を行えと命じた。生を存分に生き続けた曹操には、死後の寂寞は耐えうるものではなかった。この生への執着こそ、いかにも奸雄曹操にふさわしいのではなかろうか。さらに、死後自分の軀を守るために七十二か所の塚を築き、死んだ後も世の人を迷わせる。

一方、曹操の死に巡り、北方謙三『三國志』は史書『三國志』の概要をそのまま引用した。天下はまだ安定していない。自分はそのために努力してきたのだが、まだその事業は終わっていない。これが死にゆく曹操の切なる思いのようである。そのために文武の官は現在の任務をそのまま続けよ。葬式も服喪も古式にのっとらず、思い切って簡素にする。戦士の最後にふさわしく、過剰な装飾を戒め、死者のための儀式より生者の生活に心を配って、合理的な処置をたくしたものである。

## 六、毛本、吉川本と北方本における曹操像の相違

毛宗崗本『三國志演義』、吉川英治『三國志』そして北方謙三『三國志』の曹操像の相違について、下の図表によって、明らかにすることができる。

<sup>232</sup> 陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』魏書、新華書局、1959年12月、p.53。

<sup>233</sup> 北方謙三、『三國志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.95。

毛本、吉川本と北方本における曹操像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』	北方謙三『三国志』
初登場	ごく簡単に触れ、珍しい役と感じられない	誇張の手法、燃え盛る火の中から英雄曹操が登場して、世の人々に新たな希望をもたらした英雄のように	自分のほんとうの力を世の人に知らせたい。 心が燃えた戦士
出自	中常侍曹騰の養子	再び相国曹参の末裔と強調する	卑しい血筋から這い上がる 激動の人生
人間像	奸雄、乱臣	臨機応変に長ける「詩人」、 人材を愛する「恋人」	命を賭けて奮戦する戦士 新たな国家観を持つ名君 同盟を結ばない孤高な覇者 臣下との友情を重視する人
最期	婢妾のことを考えてばかり、曹操の「儀」を強調する	全世界が沈黙した、風雲児である曹操を称賛する	死を恐れず 禪譲を禁ず 素朴な葬式

表七（筆者作成）

図表の示す如く、三つの作品の中に描かれた曹操のイメージがかなり離れている。

まず初登場のところを見ると、『演義』でのごく簡単な描き方に対して、吉川英治は読者に深いイメージを残すため、曹操の登場する場面を誇張の手法で描いた。曹操は燃え盛る火の中から登場して、世の人々に新たな希望をもたらしたと思われる。北方謙三『三国志』の文章は平板に見えるが、曹操の心の中の氣勢が盛んなさまをよく反映している。曹操は戦いを望み、自分の名を世間によく知られるように奮戦すると決意した。

続いて、曹操の出自について、『演義』が曹操は宦官の養子の子であることを強調し、曹操を貶めているに対して、吉川英治は宦官である曹操の祖父のことに言及せず、曹操が漢の相国曹参の後胤であることを強調することによって、曹操の出自を引き揚げようと努めた。北方謙三の筆の下で、曹操は非常に自分の卑しい出自を嫌がる。宦官の家に生まれたことは、旧時代の文化の束縛から自由であったことになり、それは曹操が新時代の覇者として自己を形成していくうえで、かえって有利に作用したであろう。

そして、作品の中に顕われた曹操の人間像について、『演義』は曹操を冷酷で残忍な悪玉

として描かれる。曹操の残忍性・狡猾性は、儒教の忠節の対象であり、理想化されていた漢王朝の皇室に対しての行為に顕著に現れる。吉川英治『三国志』では、曹操を温雅典麗、率直な性格かつ挫けない強靱な精神を持つ人書き換えた。そして、曹操の戦争を詩にたとえ、彼は臨機応変かつ果敢断行の資質を持つ詩人であると称す。さらに、『演義』の中にも窺える曹操の人材に対する意欲をさらに膨らませ、曹操は人材を愛するというよりも、人材に恋したのであったと主張した。北方謙三の『三国志』を読み、幾つかの曹操の新しいイメージを発見することができる。彼は命を賭けて奮戦する戦士であり、新たな国家観を持つ名君であり、同盟を結ばない孤高な覇者であり、臣下との友情を重視する人でもある。

最後には、三つの作品は曹操の死について、全く違った描きを通して、作者の立場ははっきり示している。『演義』には、曹操がその遺言においても、遣される女性の身の振り方を細かく指示し、禅譲の事は何一つ口にせず行動は彼の「偽」の面を顕すと強調し、曹操の奸雄のイメージをさらに深めていく。一方、吉川英治は彼の『三国志』の中で、曹操が漢の天下を奪ったことや曹操の奸雄の性格を非難していない。さらに、曹操の死について、吉川英治は自分の最大の感情を傾けて、彼の一生の功績を称賛し、そして哀惜の念を表した。北方謙三『三国志』はさらに曹操の明君イメージを詳しく表見した。まず曹操は死に直面するとき、少しの恐れもなく、素直に受け止めた。そして献帝擁立の真義をわかって、遺命で曹丕を魏王の位を継承すると命じ、帝を迫って禅譲をもらうことは絶対いけないと指示した。最後自分の葬式について、文武の官は現在の任務をそのまま続け、わざと任地から弔いに参列する必要がないと命じ、思い切って簡素にする。(表七)

### 北方謙三の曹操像の特質

曹操といえば、「奸絶（奸の極み）」と称される『演義』最大の悪役である。毛宗崗があえて悪役を三絶の一人に数えたのは『演義』における曹操の存在感と、毛宗崗の分析の鋭さを物語る。

北方謙三から見れば、曹操は『三国志演義』の中に描かれた中国の伝統的な奸雄ではなく、心の中に血が燃えたぎっている戦士である。曹操にとっての卑しい出自は、古い束縛から免れていたというだけでなく、もっと積極的な意味でも、彼が自分の人生を切り開いていくうえでの力となった。曹操は三国時代において、最も純粋な戦士である。群雄割拠した乱世にあって、最も果敢な戦いを見せ、まさに戦に生きた天才と呼ぶに相応しいのが



曹操だ。彼の戦はいつも激しい。絶対自分に何の逃げ道を作らず、悔しい気持ちを残さないように奮戦する。たとえ失敗したとしても、次々と勇気を奮い起こすことができる。この不撓不屈の精神こそ、劉備かつ群雄が備えていない資質である。

明君としての曹操は新たな国家観の持ち主である。漢王室の血、すなわち劉姓という血筋はすでに腐っている。今大事なのは漢王室の血を守るのではなく、それはどうでもいいことだ。一番肝心なことは乱世を治め、歪められた国の形を正すことであると曹操は信じている。彼は国を強くするため勤勉に国の政治を行い、軍隊も厳しく統御し、経済的基盤となる屯田制を幅広く実施した。さらに、ほかの群雄が恐ろしいと感じた新興宗教と真剣に対決した。方法としては、平和主義的な仏教を顕彰し、戦闘集団になろうとする太平道を追放する。そのほか、北方謙三『三国志』の中の曹操はあまり詭計を使うのが嫌である。覇者は戦で決着をつけなければならないという信念を持ちながら、劉備も含めて天下人を屈服させようと決意を固めた曹操は、素晴らしいではなかろう。さらに、自分に才能を使い尽くした臣下に対して、曹操と彼らの間に君臣の関係を超えて男の友情が芽生え、本当の感情がおのずから現れる。

曹操の死に対して、劉備は「手強いが、しかし惜しい敵を失った、と私は思っている。敵であったり味方であったりしたが、黄巾討伐のころよりこの乱世を生き抜いてきた、英雄の名にふさわしい男であった」<sup>234</sup>といい、曹操の人生を認めた。曹操は家門に天与の条件を恵まれなかっただけではない。戦士としての曹操は、若い時から赤壁の闘いに至るまで、何度も失敗を重ねている。けっして赫赫たる武勲ばかりに輝いていたわけではないのだ。にもかかわらず、かれは国の形を徐々によくし、のちの王朝にも影響を及ぼす政治手腕を發揮し、かつ臣下との友情を重視する明君でもあった。後漢末の混乱のなかから、彼は衆に抽んでいって、あらかじめ与えられていたマイナスの札をプラスに変えられた。まさに劉備が言った通り、曹操こそがこの時代の真の英雄である。

## 第六節 北方謙三の諸葛亮像

### 一、諸葛亮の初登場：知識の豊富な「無精者」

『三国志演義』の物語展開において、諸葛亮は重要な役割を担う存在である。彼が初登場するのは第三十八回、劉備の三顧の礼をうけたときのことである。もっとも、実際に登場するよりさきに、劉備は隱者の水鏡先生によって、「伏龍」なる逸材の存在をしらされ、

<sup>234</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.102。

ついで、曹操に母を人質にとられた徐庶が劉備のもとから去るときに諸葛亮を推挙し、諸葛亮こそかの「伏龍」であることを知った劉備は大喜びして、関羽と張飛をともない、さっそく襄陽郊外、隆中の臥龍岡に隠棲する諸葛亮を訪問するという流れである。北方謙三『三国志』における諸葛亮は、自分の食器も洗えない無精者として登場する。

不数里・遥望卧龙冈・果然清景异常。……遂上马・行数里・勒马回观隆中景物・果然山不高而秀雅・水不深而澄清・地不广而平坦・林不大而茂盛・猿鹤相亲・松篁交翠・观之不已。<sup>235</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第三十七回 司马徽再荐名士 刘玄德三顾草庐)

玄德见孔明身长八尺・面如冠玉・头戴纶巾・身披鹤氅・飘飘然有神仙之概。<sup>236</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第三十八回 定三分隆中决策 战长江孙氏报仇)

洗った手を拭いながら、諸葛亮は家の中に三人を導いた。少し高い床が作っており、真中に穴のようにして炉が切られていた。その炉に火を入れ、諸葛亮は小枝を燃やしはじめた。

「熱は上にいきます。それを考え低いところに炉を切り、床の下に熱が流れるようにしてあります。だから冬は、床の方から温かくなってくる。夏は、床と同じ板で閉ざしてしまえばいいのです」

「なるほど。これもよく考えてある」

張飛が、石で囲った炉を覗きこんで言った。

「ここで、煮炊きもできます。無精な私には、便利なものですよ」<sup>237</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

「孔明さん、お昼御飯だよ。お客が見えのようだからって、村の長が鍋一杯くれたよ。野菜を入れた粥で、岩塩もあるよ」

「おう、ありがたいな。ついでに、椀と箸の用意もしてくれないか、陳礼」

立ちあがりながら、諸葛亮が言った。

「孔明さん、また食器を洗っていないんだね。使ったら、必ず洗うこと。それ

<sup>235</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p. 454。

<sup>236</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p. 466。

<sup>237</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.73。

ぐらい、子供でもできるんだから」

「すまないな、陳礼。食事のあと、人間はとても怠惰になる。こんなのは、言い訳にもならないだろうが」<sup>238</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

最初の訪問の際、劉備が目にした諸葛亮の住まいは上のようなものだった。この描写につづいて、諸葛亮の隠棲地がいかに俗塵を排した清浄な雰囲気につつまれたものであるかを記されている。こうした描写を通じてあきらかになるのは、諸葛亮の住む臥龍岡が山の奥深くにある異界としての仙郷に擬されていることである。だとすれば、住人の諸葛亮はむしろ仙人ということになる。やは、その身長は八尺、つまり 185cm くらいで、頭には葛巾をかぶり、水鳥の羽で作られたコートを羽織り、まるで仙人のような存在である。

一方、北方謙三『三国志』では、諸葛亮を食器さえ洗わず無精者に変貌させた。昼食後、夕食後って勉強や何か作業をしようと思ってでもものすごい眠気が襲ってきて、全然集中できなかつたり、気づいたら寝てたというのは諸葛亮の日常生活であろう。まさか、彼自身も怠惰な人と認めている。無精者にとって、冬は一番恐ろしい季節ではないか。さすがに諸葛亮は高い床の真中に穴のようにして炉が切られていた。これで、冬のとくも床の方から温かくなってくるし、そのまま起きずに煮炊きもできるらしい。人は歩きたくないから、車が發明された。自分の両手で服を洗いたくないから、洗濯機が世に出る。世界の進歩と人間の怠惰の間に因果関係があり、さまざまに絡み合っている。北方謙三が描いた諸葛亮は怠ける者であるが、知識も豊富で、才能や腕前も秀でている發明家を連想しやすい。

## 二、諸葛亮の人間像

### (一) 煩悩な男

「三顧の礼」「水魚の交わり」「天下三分の計」などの言葉で有名な諸葛亮。『演義』では、類いまれな天才軍師として、仁愛の丞相として、また篤い忠義の人として描かれ、永く人々の敬愛を集め、語り継がれてきた。しかし、北方謙三『三国志』において、諸葛亮はときに悩んでいる人になり、優柔不断な性格もまわりの人に面倒をかけた。その第一の例が「三顧の礼」である。

<sup>238</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.75。

## 1、三顧の礼：三度も会談を行って悩みを解く

建安五年に曹操が袁紹を打ち破って覇権を手中にし、南進の機会を窺っていた。劉備は袁紹の陣営を離れて劉表を頼り、新野に居城を貰っていた。

この時期において諸葛亮は晴耕雨読の毎日を送っていたが、友人の徐庶が劉備の下に入りして、諸葛亮のことを劉備に話した。人材を求める劉備は徐庶に諸葛亮を連れてきてくれるように頼んだが、徐庶は「諸葛亮は私が呼んだくらいで来るような人物ではない」と言ったため、劉備は三度諸葛亮の家に足を運び、やっと幕下に迎えることができた。これが有名な「三顧の礼」である。

この三顧の礼ですが、周の文王が姜子牙を配下にしたときの故事に少々手を加えたものではなかろう。呂尚はわざと文王を無視していった。それは、礼節云々を見極めるためと行った理由ではないのである。自分を売り込むためである。自分が文王を待たせることによって、文王は釣りの邪魔をせずに礼節を尽くして賢人を招いたと言う噂が広まった。この行動によって主君の評判も上がり、またそのような行動を取り、主君の評判を上げた自身の評判も上がる、一石二鳥なのである。当時の諸葛亮は賢人ながらも知る人ぞ知る人物というレベルで、世間一般には無位無官の一般人にしか見えない存在であった。一方の劉備は随分前から各地の戦乱で戦ってきた將軍であり、その知名度は抜群に高かった。しかし、その劉備は自ら頭を下げてきたのだ。実際当人らの身分差や当時の価値観からすれば、目上の者がそこまでして身分の低い者を迎えようとするのは異例極まることである。

人は、自分を闊達だと言う。学を好み、出世や名利に媚びないと言う。闊達ではなかった。土は、それをよく知っている。世に出たいという思いもあった。しかし、愚かな者の下にはいたくなかった。

どこかで、心がねじ曲がった。それはよくわかっていた。時々、怨念のような言葉を土の中に埋めた。

.....

志は、あるのか。欲望ではなく、志と呼べるものがあるのか。それがあってなお、怨念の言葉を、上にむかって吐き出すことができるのか。あるのは、ただ詰めこみ続けた知識と、世にでられないという思いだけではないのか

.....

自分のように惨めさを舐め尽してきた者が、欲望を捨て去ることができるわけがない。しかし、欲望に支配されて生きたくもない。自分の怨念は、そこからも出てくるのだ、と孔明は思っていた。<sup>239</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

「闘ってくれ、私と」

「遅すぎます。私は、自分が生まれてくるのが遅かったのだ、と思っています」

「なにが遅いのです。遅いも早いもない。闘うことからしか、この国はなにひとつ生み出せないのですぞ」

「それでも、遅すぎます」

「そんなことはない」

「曹操に、勝てますか？」

「勝つために、孔明殿が必要なのだ」

「曹操は、すでに覇者となっております。人の多い北から中原にかけて、すべて制しているではありませんか。益、荊、揚、涼の四州は、いずれ曹操に靡きま

す」

「私は、靡かぬ」

「六千の軍勢が靡かない。それはただの叛乱にすぎません。しかも、小さな」

「叛乱ではありません。志があるかぎり、それは叛乱ではない」

「時の流れです、劉備殿。それすらも、お認めにならないのですか」

「志を、抱いた。傲慢なようだが、この国のために、民のために、志を抱いた。劉備は、顔を紅潮させたままだった。

「私は、この村で静かに生きます」<sup>240</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

「私のために、闘ってくれとは申しません。この国のために、民のために、闘っていただきたい。頼むしかない。ひたすら、頼むしかない」

劉備の肩がふるえている。頬が、涙で濡れていくのが見えた。床についた劉備の両手の間にも、滴り落ちている。

<sup>239</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.96~98。

<sup>240</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.110~111。

.....

「志の話を、お伺いいたしました」

劉備が、顔をあげた。瞬もしない眼から、涙だけが流れ落ちている。

「劉備様の、これまでの戦の話も、よく心に刻みこみました」

「私は、なにかを感じたのです。孔明殿の眼が、まるで涿県で筵を織っていたころの私の眼のようだ、とおもってしまったのです。闘うべきなのだ、この方は。理由もなく、そうってしまったのです。頼まずにはいられない。ここへ来ようとする自分を、何度止めようとしたことか」

「闘います、私は」<sup>241</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わが名は孔明)

これまでは、劉備がさんざん頭を下げ、孔明が「仕方なく」腰を上げたような筋になっているのが常であった。しかし、北方謙三『三国志』はその常識を覆した。

廬を三度訪ねてようやくあうことができたというのは『正史』にも記載されているが、たった一回の会談で双方の心が通じ合ったというわけではない。何度も会話し議論を重ねたうえで、互いに納得しあって配下に加えたと考えるのがました。そのため、北方謙三『三国志』には、劉備と孔明の三度の会談を設定された。

初めての訪問で、劉備は自分の志を訴えた。対面孔明は、あくまで冷ややかである。しかし、劉備が去った後、心が揺れる孔明が描かれる。学問もきわめた。孔明は自分も志があると思うが、それは欲の裏返しにすぎない。欲を捨てようと思ったら、それこそ司馬徽のように隠棲し、言葉を弄んで愉しむという生き方しかできない。しかし、欲に支配された自分は隠棲に相応しくない。ならば、世に出よう。しかし、世に出るのが遅すぎた。畑を耕し、立派な作物も作れるようになった。しかし、孔明の作物は大きさは立派だが味が無い。土を耕しながら、呪いを土に込めてきた。「このまま朽ち果てるのか...」どこかで、心がねじ曲がった。このときの諸葛亮はかなり苦しいように見える。

そして、第二回目の訪問について、劉備はまず自分の筵を織って生計を立てていた過去を語り、そしてもう一度志を述べた。この志は男の夢である。劉備は落ち込んだ諸葛亮を励まし続け、劉備若い頃の境遇は孔明の心の琴線に触れているようだ。いかに時代や文化が違うとはいえ、若くして素質もある人間が、世の中から隠遁したままじっとしてられ

---

<sup>241</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.114~115。

るはずがない。まして乱世である。チャンスがあれば、それに賭けてみたいと思う気持ちを必ず持っていたはずだ。曹操や孫権への仕官も視野に入れていただろう。同時に、曹操にも孫権にもすでに優秀な幕僚がいることもわかっている。曹操が天下を取ろうと、孫権がそれを押しとどめようと、結局は自分は出来上がりかけた容器の中で歯車として働くしかない。諸葛亮ほどの才能には、それがどれほどつまらない現実にもみえたことか。そうした諦念、別の言い方をすればプライドの高さが、青年孔明を山間の草廬に押し込めていたのだろう。そこに、まだまだ流浪の将軍にすぎなかった劉備がやってきて、不意打ちのように天下への夢を語ったのだ。その夢には具体的な目標がないものの志だけは強い。

最後に三度目の劉備来訪。読者はおよそ信じられない記述に出会う。「この声を待っていた」—まるで恋人を待ち焦がれる乙女状態である。これで、劉備が孔明を必要としていただけでなく、孔明もまた、劉備を待っていたことがはっきりわかる。劉備と孔明もやはり、ふたりでひとりなのである。さらに言えば、諸葛亮は劉備という人間のどこかに、やはりきちんと惚れていた。たとえ自分の心の中どれだけ満たされないものがあっても、たとえ相手がどれほど正しい理論を提示してくれたとしても、この人と自分は合わない、好きにはなれないという印象があれば、話はその場だけのものにおわってしまう。私はあえて劉備が持つそのものを夢のような志と言う。この男の夢こそは長年諸葛亮の心の悩みを解いていた。

## 2、漢中攻防戦：戦略が効を奏しない時は思い煩う

陽平関に拠っていた劉備軍が、天蕩山、定軍山の魏軍を討ち、四十万の兵を従えた曹操の親征軍と対峙した。諸葛亮は、自ら策を建てながら、そのタイミングを待ちきれず、押し寄せる曹操の大軍の圧力に負けて合図を早く出そうとしてしまう。

「曹操は、兵站の心配をしていません。犠牲を払うことも、意に介していません。私のこの作戦は、失敗だったのではないのでしょうか、殿。そう思われたら、すぐに私を処断してください」

.....

「もっといい方法が、あったのかもしれませんが」

「それを、戦場で考えてはならないのだ、孔明。戦場では、ただ闘うことに打ちこめばいい。大将のその態度で、兵の士気は違ってくる。二年三年の攻囲を受

けても、兵は耐えるのだぞ。雒城を守っていたのは、劉璋の息子のひとりだったが、一年耐えた」

「しかし、それは根較べのようなもので、これだけの攻撃に毎日晒されていたわけではありますまい」

「攻める側の気持も、私にはわかる。兵を失いたくない。それが第一なのだ。ということは、曹操は焦っている」

「なるほど。私そんなことさえも、考えられなくなっているのですね。これでは、軍師たる資格がありません」

「そうではない。お前がただの軍師なら、成都にいて、耐えよと言ってくるだけだろう。おまえは、兵たちとともに泥にまみれて闘っている。そのことは、今後生きる。闘う兵の気持が、誰よりもわかる軍師になるであろうかな。私の兵は、いい軍師に恵まれた」<sup>242</sup>

(北方謙三、『三国志』九の巻 軍市の星 漢中争奪)

四十万の敵軍と回る諸葛亮は、張飛と趙雲の騎馬隊を命じ、曹操に攻撃を加えながら、馬超と張衛らの山丘部隊に敵の兵站を乱すという命令も下した。兵站を完全に切らずに乱すというのは、諸葛亮の考えだった。曹操は同時に二つの戦局を配慮できないと思っている。しかし、攻撃によって陣構えに多少の乱れはあるが、張飛か趙雲が本陣を衝く隙はまったく見えなかった。兵站を乱すという戦略も効き目が現れなかった。二つ方面の戦いによって、曹操の苦しさは多少あるが、諸葛亮は逆に気持ちが押され始めたようである。諸葛亮はこれまで、生きるか死ぬかという戦の経験は、一度か二度しかないのだった。持久戦を経てようやく不安を抑えきれなくなっている。彼と劉備の話で、この時の孔明は少し焦り気味であり、悩みを抱えている。彼は自分の戦略が役に立たないと思って、戦争の勝利を得ることはできない。自責の念にかられて、劉備からの処罰を望んでいる。このような状況に対して、劉備は一人の年長者として諸葛亮を諭し導いている。ただ一人で雒城を一年間さえ守っていた劉璋の息子を例に、戦場では大将の態度はどんなに重要なことかと説明している。そして、諸葛亮は兵士と共に前線に赴く良い軍師だと絶賛している。今回の談話を以て、諸葛亮はついに心の疑惑と悩みを解消することができた。このようなところにも、決して完全無敵でなく、人間らしい諸葛亮像が現われていて、好感が持てるでは

<sup>242</sup> 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.221~222。



なかろうか。

### 3、関羽の死：仲間の死に対して自責の念に駆られる

劉備の臣下、義兄弟の縁を結んでいた関羽が、同盟を結んでいたはずの呉軍に攻められ、無念の死を遂げた。死因は傲慢な性格に帰結せざるを得ない。プライドの高い関羽は外交能力が備えていない。呉に劉備との同盟を重視する魯肅が居る間は、まだ何とか無事であった。魯肅が呉の反発を抑えてくれたからである。ところが魯肅の死後、孫権が自分の娘との縁談を持ちかけると、孫権からの籠絡により娘を奪われることを嫌った関羽が、使者をどなりつけて拒否したため、呉から強い反発を受けた。関羽と呉との関係は悪化していて、自ら死を招いた。北方謙三『三国志』における諸葛亮は関羽の没は自分の責任と考えているようである。

「諸将が集まっている。軍議をはじめたいのだが、孔明殿」

孔明が、眼を開き、ゆっくりと天井を見あげた。

「軍議で、私の処断を決定していただけますか、張飛殿。荊州のことは、私の見通しの甘さのために、起きたことです」

「そうかな。そう思われるなら、軍議で言えばいいことだろう。処断についても、そう提案されればいい」

「張飛殿の言われることが、大きいと思います。ですから、張飛殿に切り出していたきたいのです。私の罪は、万死に値すると」

「ごめんだな、俺は」

「ならば、自裁いたします」

「それにも、意味がない。小兒貴は、確かに蜀の柱であった。しかし、一部将でもあった。有力な一部将が、戦で死んだ。ただそういうことではないか」

「張飛殿は、本気でそう考えておられますか？」<sup>243</sup>

(北方謙三、『三国志』十の巻 帝座の星 烈火)

ここの諸葛亮は荊州に残した関羽の死を自分の立てた戦略の不備による失敗、と恥じ入る。なぜかという、自分の戦略の中に、同盟が破られることなど入ってはいなかっただ

<sup>243</sup> 北方謙三、『三国志』十の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.11~12。

ろう。そして、これまでの戦のひとつひとつをふり返ると、どこかで、急ぎすぎていなかったか。それが関羽を死なせた。関羽は誇りの人だった。書簡での助言など、不快にさせるだけだとわかっていた。しかし、自分は一度しか、関羽と話し合っていない。もっと多くを、語るべきだった。胸の中を駆け回る悔悟と煩惱は、草原に飛び出したモウコノウマのように、捕えることができない。諸葛亮は落ち込んで、軍議に出席することさえできない。思い悩んでいるより、ずっと自分を責めている。

その時、張飛は諸葛亮を説得しに来た。関羽の死は避けられないものであり、変えられないものである。あまりにも自分を責めないで、あまりにも自分を悩ませないで、ただそれを一人有能な部下が戦死したとすればいいのだと張飛言った。確かに、乱世では、めずらしいことではない。三十年以上も、戦場で生きてきた。死は、いつも古いもののようにそばにいた。よく生き、よく闘ってきたのだ。死は休息であり、安らぎでもある。張飛は決して関羽の死を気にしないではない。逆に、自分にとって関羽は誰よりも大切な存在に間違いない。しかし、今の張飛はあまりにも悲しすぎることはない。今は悲しんではいけないと張飛はよく認識している。

## (二) 不幸不運の戦略家

諸葛亮は、一般に負け知らずの天才軍師というイメージが組み上がってしまっている。赤壁の戦いで、一夜にして十万本もの矢をみつめた「草船にて矢を借りる」、七星壇で祈り東風を吹かせる幻術など、羅漢中の『三国志演義』によるところが大きい。それに比べると、北方謙三『三国志』における諸葛亮は、極めて人間臭い。

「自分の無能さを、いまさらながらに恥じます、私は。」

……

「私は、軍師なのでしょうか。それとも文官なのですか。趙雲將軍は、私をなんだと思っておられます」

「丞相は、諸葛亮 孔明殿です。それ以外のなんでもない。軍師であろうが、文官であろうが、孔明殿は孔明殿」<sup>244</sup>

(北方謙三、『三国志』十二の巻 霹靂の星 北への遠い道)

---

<sup>244</sup> 北方謙三、『三国志』十二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.163~164。

隆中の村に隠棲していたときも、学は立つが、自分の食器も洗えない無精者として登場し、日々悩む。劉備の軍師となってからも、荊州に残した関羽の死を自分の立てた戦略の不備による失敗、と恥じ入る。連戦連敗の孔明は、自信を失ってしまった。実は自分は軍師ではなく、ただ普通の文官に過ぎないかと疑い始めてた。何か神の如き軍略があるような。そういう軍略があれば、絶対に勝ってるはずである。史書によれば、やはり諸葛亮は、内政である。民政をやれば、相当優れた国家を作っていた、と思うような人である。しかし、劉備が死んでからどうするか、という問題のときに、益州をカチッと守れば、あれは天然の要塞みたいなものだから、そこを十年守れば相当強い国にできるわけだ。それでも、やはり出師の表というのを出して漢王朝を再興するため戦わなければならない、と悲劇的な理想を持ってしまった。諸葛亮にとって、軍事的なものに行かざるを得なかったという不幸はかなりあるであろう。

勝敗は、運でもあった。それを孔明は、数度の敗戦で心に刻みつけてきた。決して、万全だとは思わないことだ。どこかに隙がある、と常に考えおくべきだ。<sup>245</sup>

(北方謙三、『三国志』十二の巻 霹靂の星 天運われにあらず)

諸葛亮は失敗をいっぱいしている。ところが、大成功なんていうのは、あまりしていない。諸葛亮は、勝ってはいけなけれども、大きく負けてもない。これはある意味では、勝ったと言ってもいいぐらいである。私が見るかぎり、諸葛亮は少しでも戦術を持っている。しかし、いつもなにかが足りなくなり、いまひとつのところで勝利を逃がす。足りないのは、兵糧であり、兵数であり、優れた部下である。足りないものの中のひとつが足りていたら、諸葛亮は勝っている。さすがに運のない男だ。

生涯にかけて、究極の勝利を獲得するまでには至っていない。究極の勝利を掴むほどの国力がなかった。七年の間に四度、諸葛亮は北進を試みる。魏の司馬懿などが期待したように蜀は守りに入ることなく、何度も何度も魏領に攻め入った。そして、いつも何かが足りずに勝ちを得るところまでいかなかった。やはり運がなかった。そこまで行く軍事的才能がなかった。五十人で五百人をやつつけることは、可能といえば可能である。そういう点では、その才能はなかった、というふうに思わざるを得ない。いまに至るまで、世人が諸葛亮を仰いでやまないのは、彼が達成した業績にたいしてではない、彼が達成しようと

<sup>245</sup> 北方謙三、『三国志』十二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.196。

して達成できなかった「非運」に対してである。

### (三) 人材を見抜けない孔明

『三国志演義』は諸葛亮を戦略の神として描いた。彼唯一の失敗且つ最大の誤りが「泣いて馬謖を切る」で知られる街亭の戦いである。「出師の表」を奉り、長安奇襲をも睨んだ軍略を組みながら、諸葛亮は魏軍を引き留める大役に経験のない馬謖を抜擢してしまう。功を焦った馬謖の軍令違反により、軍略が足下から崩壊。その責任をとって、諸葛亮は丞相から三階級降格し、泣きながら息子同様に目をかけていた馬謖を打ち首にしなければならなかった。北方謙三にはその諸葛亮の涙が、自分自身を責めるものには見えなかった。

ひとりになると、孔明は眼を閉じた。

自分に、戦をする資格などがあるのか。その力があるのか。これまで、どれほどの屍を積みあげ、どれほどの血が心を染めたのか。志とは、それほど残酷なものなのか。<sup>246</sup>

(北方謙三、『三国志』十二の巻 霹靂の星 再起するは君)

高所に陣を敷くというのは、軍学にも則っており、優位に立つために決して悪い選択ではない。必要ならば水と食糧を前もって運び込んでおけばいいのだ。それをすることもなく、あえて、大軍に対して優位にも立てない場所に陣を敷くことを命じた諸葛亮の狙いは何だったのか。それはどう考えても、街亭を決戦の場所ではなく、ただ釘付けにするための場所として想定していたとしか思えないのだ。

もちろん真実は、歴史の狭間に埋もれてしまい、たどることも叶わない。馬謖は、軍令に背いた罪で断罪される。諸葛亮は泣きながら、それでも軍令を背いた馬謖の首を斬らなければならなかった。馬謖は本当に不始末をしでかしたのか、それとも最高指揮官の戦術に大きな落とし穴があったのか。北方謙三にはその諸葛亮の涙が、自分は人材を見分けることができない、蜀に勝利をもたらすこともできない、自分自身を責め続けるものである。

そのほかにも孫権という男を読み間違い、関羽の死を招いた。また、韓玄の首級をとって降伏した魏延を、諸葛亮は終生、生理的に受け付けず、それを自戒し続ける。

また人に対する甘さも、趙雲に指摘されている。

<sup>246</sup> 北方謙三、『三国志』十二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.241。

「確かにな。しかし、失敗はいつも一点なのだ。関羽殿の時は、孫権という男を読み違えた。殿の荊州攻めの時は、死んだ張飛の代わりに、そのまま陳礼を使った。そして今度は、大戦の経験のない者に、二十万の大軍とむかい合わせた」

「それが、天才のやることですか？」

「見えてくるものが、ひとつある。人に対して、どこか甘いのだ。自分より劣っている人間でも、大きく劣っているとは考えない。少しだけ劣っている、と思ってしまうのだ。だから、孔明殿に見込まれると、重いものを背負いすぎてしまう」<sup>247</sup>

(北方謙三、『三国志』十二の巻 霹靂の星 再起するは君)

三国時代において、曹操のような全てに秀でたトップは非常に少ない。たいていのトップは、人を使えればそれでいい。経営・運営の力なんていない。劉備は先祖の劉邦のように、英才というには程遠い人間だった。ただ、人物に華があり、周囲に才能が集まる存在だった。劉備は理想のトップであり、人を見る目があり、自在に使いこなせる器量の持ち主だった。

この曹操や劉備の人事の良いところはその出自を問わず、目的とする能力以外の欠点も気にしない点である。これは劉備がほぼ平民、曹操は宦官の子供という主流とはいえない出自だったため、実力主義というものに重点を置いていたからだと思う。しかしながら諸葛亮の人事はまず出自ありきという傾向がみられる。正史を見る限り、諸葛亮が実権を握って以降、彼が重用したのは荊州の知識者階層出身の人物である。馬謖は息子のような存在であることは言うまでもなく、陳礼も自分と一緒に隆中生活を送ってきたものである。要は自分の仲良しもしくは子分だけで蜀の政治を牛耳っていた。このような諸葛亮の人材登用はあまりにも甘すぎるのではなかろうか。さすが諸葛亮自身も「ふり返れば、人の起用で自分はいつも失敗している、と孔明は思った。馬謖がそうだった。李厳もそうだった。なぜなのかは、考え続けている。要するに、人を見る眼がない。」と思っていた。そもそも丞相の諸葛亮にとって人材の起用といった能力は必要不可欠なものである。それが欠けていると言うのは、彼の政治家としての資質にもある程度問題があった事を示していると思

<sup>247</sup> 北方謙三、『三国志』十二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.226。

われる。

#### (四) 知略と武力とを兼備する智将

諸葛亮と言えば『三国志』を知らぬ人でも知っている大天才、史上稀に見る逸材である。政治、経済に抜群の才幹を持ちながら同時に軍略にも通暁しているという恐るべき男である。彼は漢王朝再興を目指す劉備に三顧の礼で迎えられ、軍師を務める事になる。劉備の臣は大抵武将だから、軍師たるものは諸葛亮ぐらいだった。北方謙三『三国志』における諸葛亮は、重んじられている軍師だけではなく、馬も乗り敵と戦うことができる智将という存在である。

その例が諸葛亮の初陣である。諸葛亮は魯陽の南二十里のところに陣を敷いた。彼にとっては、はじめての実戦の指揮だった。

叫び声。敵の騎馬隊。およそ二千騎というところか。ぶつかった。先頭の四、五騎を、ぶつかった刹那に、趙雲は槍で叩き落としていた。孔明は、剣を抜いた。敵。ぶつかる。槍が、顔を掠めた。孔明の剣は、敵の胸に突き立っていた。引き抜くと、血が噴き出し、頭から浴びた。もうひとり、斬った。掌に、ずしりと手応えがあった。

これが、戦か。これが、人を斬るということか。それ以上、深く考える余裕はなかった。<sup>248</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 天地は掌中にあり)

実戦については、徐庶など、諸国放浪をして時には戦にも出る者に、いろいろきいてはいたはずだ。しかし、初めての戦である。心の底のどこかに、怯えがあったに間違いない。今まで晴耕雨読の毎日を送っていて、血を見たことさえあまりないのだと思いきや、初陣で孔明は趙雲の側を駆け、自ら剣をふるう。人を斬って、敵の血を浴びた孔明の姿は生き生きしている。普通に考えれば、戦士と同じように軍師が剣を振りまわせないではなからう。しかし、北方謙三が描いた諸葛亮は「知謀の士」といえども、武闘派としての側面を持っている。諸葛亮が初陣で剣をふるうのは、今日までに考えられない意表を突くシーンで新鮮だった。

<sup>248</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.168~169。

「野営で、酒を飲むことなど、ほとんどない。しかし、軍師殿を歓迎するささやかな宴も開きたい。兵たちもみんな、一杯ずつ飲める。それぐらいの量の酒だ」

「私は、三杯でも四杯でも飲みたい心境だ。なにしろ、はじめて戦に出て、人を殺した。頭から血を浴びた。忘れたいという思いと、快いという思いが同時にある」<sup>249</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 天地は掌中にあり)

戦の後、孔明が軍師であることは幕僚の方々に認められた。関羽らは軍師を歓迎するささやかな宴を開こうとしている。諸葛亮自身も大変喜んだ。なぜかというと、初めて戦に出て、人を殺した快いという思いがある。それは自分を長年の隠棲生活の悩みから解放され、心の中の鬱積を一気に取り除いた感じもしていた。新野の敗走は作戦だったという設定など、むしろそう考えたほうが理屈は立つという面もある。しかし、剣を振り、酒を飲む諸葛亮の人間臭いは極めて読者に好かれやすいではなかろう。

新野の戦のとき、見事な働きで猛将趙雲にも驚かせた諸葛亮は、自分の従者である陳礼に対して、兵法を学ぶ前に武器の遣い方を熟練してやれと教えた。

一心に槍を突き出していた陳礼が、ようやく周瑜に気づき、頭を下げた。劉備や諸葛亮は留守らしい。

「諸葛亮殿の従者であり、陳礼。槍をそれほど熱心に稽古しなければならないのか？」

「はい。軍学を学びたいと思っておりますが、武器も遣えぬ軍学では、戦の役にはたつまいと考えました」<sup>250</sup>

(北方謙三、『三国志』七の巻 諸王の星 夜が燃える)

軍学とは、用兵・戦術など、兵法に関する学問のことである。その兵法、戦術に関して学問を修めた者は一般的に軍学者と称した。しかし、諸葛亮から見れば、軍学はただの学問なのである。軍学が役に立つのは、たとえば砦の位置が、攻めやすく守りにくい場所に

<sup>249</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.175。

<sup>250</sup> 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.136。

あるから、謀事を警戒せよ、と教えてくれるところぐらいのものであろう。三国時代後期の戦いとなると、戦争において花形として活躍するのが周瑜をはじめとする知将タイプの人物が知略を尽くして指揮するといった戦争になっていくのである。知将とえば、基本的な兵法・戦術を身につけることは言うまでもなく、肝心なとき自ら戦場に立って敵と戦うこともできる。勇猛さや人格的魅力を持って兵たちを統率し、士気を盛り上げることによって戦いを勝ち抜くことが可能であった。つまり、この時期の戦争というのは戦術と同様に、兵の士気もそのまま戦況に影響する、そのため指揮官に求められる資質は知略、個人的武力や勇気、兵を鼓舞する人格といったものであった。

### 三、諸葛亮の夢：「天下三分の計」を実現する

群雄割拠の時代において、劉備軍に欠けていたものは何か。それは、戦略を持つ軍師であった。そのため、隆中の村に隠遁する諸葛亮を、劉備は三度訪ねている。いわゆる「三顧の礼」である。一度目の訪問では、漢王室再興の志を説く劉備の話は諸葛亮の心に響かなかった。二度目の訪問で、劉備は苴織りだったことを明かす。鬱々と苴を織って、売り歩いてきたことを。そして、再び劉備は志を語った。諸葛亮も男の夢というものが志ということがわかってきた。そして、三度目の訪いをうけた諸葛亮は、劉備の志をともにすることを誓い、「天下三分の計」という男の夢を言い出した。

眼を開き、孔明は炉の小枝の燃えさしを掴んだ。

「よろしいですか、殿。私の申すことを、よくお聞きください」

劉備が頷いた。

「天下三分の計」

「なんと」

「私が見るかぎり、劉備軍には戦術があって、戦略がありません。それが、大きく飛躍することができなかった理由です」

孔明は、床に燃えさしで線を描いた。この国のかたち。しばらく、二人でそれを見つめていた。<sup>251</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わがなは孔明)

---

<sup>251</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.116~117。



「天下統一は、遠い夢でありましたな、殿」<sup>252</sup>

(北方謙三、『三国志』十三の巻 極北の星 遠き五丈原)

そのとき、まだまだ流浪の将軍に過ぎなかった劉備がやってきて、不意打ちのように天下への夢を語ったのだ。その夢には具体的な目標がないものの志だけは強い。配下には軍師といえる人物がなく、劉備もそれをはっきりと自覚している。そして、何の実績もない自分の「天下三分」の考えに目を開き、その夢のためにもとに戦いたいという。劉備の死後、諸葛亮は隆中の村で劉備の志に誓った思いそのままに「出師の表」を奉り、命を賭して北伐に臨んだ。敗北を重ねても諦めずに立ち上がろうとする諸葛亮。これは劉備の遺志を継ごうとする執念なのか、それともかつて思い描いた「天下三分」・「天下統一」の夢をあくまでも自分の代で実現させたいという強い意志のあらわれだったのか。もちろん真実は、諸葛亮自分自身しか知らない。

男の夢に生きた。男の夢に殉じた。劉備も諸葛亮も、志半ばで倒れた。しかし、志を果たせなかったという無念さもない。力のかぎり、生きたから。

#### 四、諸葛亮の最期：夢を追い求める三国時代最後のカリスマ

魏を倒し、三国統一の夢に賭けていた蜀の丞相、諸葛亮が、魏軍と戦線を対峙していた五丈原で急逝した。享年五十四歳。諸葛亮はこのところ食欲もなく、死因は度重ねる北伐による激務から来る過労と思われる。『三国志演義』第百三回には、星座を観察し死期が迫ったことを直観した諸葛亮が、北斗星に祈り延命乞う儀式を行うさまが、克明に描かれている。それに対し、北方謙三『三国志』は怪力乱神を一切言及せず、諸葛亮の肉体の痛みを描きながら彼の内心を打ち明けさせた。

孔明曰：“吾素谙祈禳之法，但未知天意若何。汝可引甲士四十九人，各执皂旗，穿皂衣，环绕帐外，我自于帐中祈禳北斗……”孔明自于帐中设香花祭物，地上分布七盏大灯，外布四十九盏小灯，内安本命灯一盏……<sup>253</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第一百三回 上方谷司马受困 五丈原诸葛禳星)

<sup>252</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.310。

<sup>253</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.1288。

ひとりになると、孔明は居室の寝台に横たわった。呼吸が、ひどく苦しくなる。毎日ではなく、三日に一度ぐらいだが、立ってられないほどの苦しさに襲われる。<sup>254</sup>

(北方謙三、『三国志』十三の巻 極北の星 日々流れ行く)

全身の汗が、まだひいていない。呻き声をあげたくなるような痛みだったが、耐えていた。どれほどの時間、寝台に倒れこんでいたのだろうか。痛みはある、肩から胸にかけてあったような気がする。

呼吸が苦しくなったので、いつものことだと思い、うずくまろうとした。その時に、不意に痛みはじめてのだ。押し潰してくるような、締めあげられるような、どうにもならない痛みで、寝台に倒れこんだのだった。<sup>255</sup>

(北方謙三、『三国志』十三の巻 極北の星 遠き五丈原)

やっておかなければならないことが、なにかあったはずだ。

丞相の後継は、蔣琬、次に費禕。丞相になった者が、大將軍を決めるべし。

別の紙に、名を書いていく。雍州からの、撤退の順序である。<sup>256</sup>

(北方謙三、『三国志』十三の巻 極北の星 遠き五丈原)

ここに描かれる、諸葛亮の呪術的な祈祷の儀式にみられる北斗信仰も、実は道教的な発想にもとづくものにほかならない。仙郷もどきの臥龍岡の草廬といい、北斗信仰にもとづく延命の儀式といい、『演義』の諸葛亮は、その登場から退場に至るまで終始一貫して、道教的な神秘主義に濃厚に彩られているのである。

北方謙三は風を呼び人工獣を駆使し、北斗星に呪文を唱えて宿命を変えようとする、超能力のスーパーマン諸葛亮のイメージが真実感を持たないと考えている。その代わりに、彼は過労により病に倒れるにもかかわらず、病を押して軍務を処理する諸葛亮像を生かし、聞くも涙、語るも涙の忠義一徹の堅苦しい諸葛亮像を取り上げた。

漢王室復興を志す劉備に、諸葛亮は天下三分の計を提言する。一介の流浪軍から蜀漢の帝にまで導いた劉備の死後も、その遺志を継ぎ、度重なる北伐を繰り返した。敗北を重ねても諦めずに立ち上がろうとする諸葛亮。これは劉備の遺志を継ごうとする執念なのか、

---

<sup>254</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.272。

<sup>255</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.302。

<sup>256</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.311。

それともかつて思い描いた「天下三分」の夢をあくまでも自分の代で実現させたいという強い意志の現れだったのか。真相はただの諸葛亮自分自身こそ知っているかもしれない。死を前にしての、動揺はない。恐怖もない。自分の生涯を振り返ろうと思わなかった。ただ先に亡くなった劉備に「天下統一は、遠い夢でありましたな、殿」<sup>257</sup>と話しかけていた。

志に生きた。志に殉じた。劉備も、諸葛亮も、志半ばで倒れた。しかし、夢が叶おうが叶うまいが、そんなことはどうでもいい。思う存分生きてきた。このような諸葛亮は死んでもなお人の心の中で生き続けることができる。北方謙三の『三国志』も諸葛亮の死をもって終わっている。作者にとって、諸葛亮は決して三国時代の主人公たりうる最後の夢を持つカリスマだったに間違いない。

## 五、毛本、吉川本と北方本における諸葛亮像の相違

毛宗崗本『三国志演義』、吉川英治『三国志』そして北方謙三『三国志』の諸葛亮像の相違について、下の図表によって、明らかにすることができる。

毛本、吉川本と北方本における諸葛亮像の相違

	毛宗崗本『三国志演義』	吉川英治『三国志』	北方謙三『三国志』
位置づけ	「三絶」の一人	二大主役の一人 物語のターミネーター	最後の夢を追う人
初登場	仙郷に住む仙人	婦人好女の如く	知識豊富な「無精者」
人間像	魔術師、神仙のイメージ	繊細な心を持つ科学家 重厚な宰相 人道主義軍師	煩惱な男 不幸不運の戦略家 人材を見抜けない孔明 智将孔明
最期	退場するまで、神秘的なムードに包まれている	解釈を加え、合理化させたい	肉体的痛みを強調する 三国時代において夢を追う

<sup>257</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.310。

		国に尽瘁する名宰相	求める最後のカリスマ
--	--	-----------	------------

表八（筆者作成）

ご示したように、三つの作品の中に見せられた諸葛亮のイメージはかなり違う。

まずは諸葛亮の全書の中の位置づけから言うと、毛宗崗本『三国志演義』の中で、彼は「三絶」の一人「智絶」と称される。吉川英治『三國志』においては、主役の違いによって小説を前後二部分に分け、前半は曹操に主役を割り当て、後半に入ると、曹操に代わって諸葛亮が一躍主役になる。さらに、諸葛亮の死に伴って、物語も終末を迎えた。北方謙三の『三國志』は「夢を抱いた人々の姿」を描くものである。諸葛亮こそ三国時代において夢を追い求める最後の人物である。

続いて、諸葛亮の初登場について、『演義』は初登場から諸葛亮に仙郷に住む神仙のイメージを付与している。それに対して、吉川英治は「静かな眸」「細くふさいでいた睫毛」「余韻がある声」など描写を通じて、婦人好女の如く諸葛亮の姿を作り上げた。そして、北方謙三には諸葛亮を食器さえ洗わない「無精者」と設定した。

次に、両作品における諸葛亮の人間像については、『演義』において諸葛亮は超能力の仙人、あらゆることなき全知全能の魔術師として結実した一方、吉川英治『三國志』の中で赤壁戦いの時風を呼んでくる諸葛亮は繊細な心を持つ科学家となり、丞相府に閉じこもって五つの敵を撃退する諸葛亮は重厚な宰相になる。さらに、諸葛亮は週瑜、郝昭や曹真に対して、死ぬまで非難し、あまりにも残忍な手口をとる姿が見えなくなる。その代わりに、諸葛亮に人道的性格を与えることで、彼の正面的なイメージを確立した。これらと比べると、北方謙三『三國志』における諸葛亮は、極めて人間臭い。隆中の村に隠棲していたときも、学は立つが、世に出る勇気がなく日々悩んでいる。不幸不運の戦略家として、彼は劉備の軍師となっても、人材を見抜けなく、連敗を食い続けた。唯一の長所として、彼は知力と武力を両方備え、新たな時代の智将とも言える。

最後には、諸葛亮の死について、『演義』では、病状が悪化した諸葛亮は幕内に祭壇を築いて寿命を延ばす祈祷を行うなど、一連神秘的な行動をとる。一方、吉川英治はこの妖術を使う諸葛亮のイメージとストーリーが不合理なところに対して、自分の説明を加え、合理化させようとしている。そして、死の淵に立つにもかかわらず、諸葛亮はまだ軍務に忙

しく管理する姿も強調し、小説の最後において諸葛亮の忠誠一途のイメージを上げたことも見られる。北方謙三『三国志』において怪力乱神を一切言及せず、過労により病に倒れる諸葛亮の肉体的痛みを強調しつつ、病を押して軍務を処理する諸葛亮像を生かし、聞くも涙、語るも涙の忠義一徹の堅苦しい諸葛亮像を取り上げた。そして、死ぬ前に劉備との対話を通して、諸葛亮は三国時代において自分の夢を追う最後の一人だと主張した。これも北方謙三はなぜ諸葛亮の死を以て筆を置く原因である。(表八)

### 北方謙三の諸葛亮像の特質

『三国志演義』前半の主役が曹操と関羽であるならば、後半の主役は「智絶」諸葛亮である。小説の中、諸葛亮は軍師・参謀という枠を超え、むしろ神仙・魔術師的な活躍まで見せる超能力者として描かれている。吉川英治は諸葛亮の神仙のイメージを引き立たせるたくさんのエピソードに対して、合理性のある解釈を加えたり、一部を削除することを行った。彼が目指したのは、諸葛亮の人間性を取り戻すことである。

この二つの作品と比べると、北方謙三『三国志』における諸葛亮像は極めて人間臭い。諸葛亮が登場するあたりから、設定のリアリティにやや無理が出始める。隆中の村に隠棲していたときも、学は立つが、自分の食器も洗えない無精者として登場し、日々悩む。劉備の軍師となってからも、荊州に残した関羽の死を自分の立てた戦略の不備による失敗、と恥じ入る。また人に対する甘さも一つの欠点として、失敗を招き続けた。民政をやれば、相当優れた国家を作っていたと思うような人である。それが軍事的なものに行かざるをえなかったという不幸、熾烈に北伐を繰り返して一回の勝利も収められないという不運、といういは、北方謙三は書けたものである。そのほか、初陣で諸葛亮は趙雲の側を駆け、自ら剣をふるう。「知謀の士」といえども、北他謙三は智将としての側面を持たさずにはいられなかったのだ。いままでに考えられない意表を突くシーンで新鮮だった。最後に、吉川英治『三国志』の影響を受けているかどうかは知らないが、北方謙三『三国志』も諸葛亮の死を以て物語が終わっている。なぜかという、北方謙三から見れば、夢をもち、自分自身を生きることができた最後の三国時代のカリスマが、諸葛亮であるに間違いはない。

北方謙三の諸葛亮像は、これまでの超人的・神がかり的なものから脱し、人間・孔明の姿が生き生きと描き出されている。それはむしろ、今までの孔明像よりはるかに親しみやすい、共感を得るものとなっている。

## まとめ

北方謙三『三国志』は正史の『三国志』を原典としており、ストーリーの大綱は万世一系思想と易姓革命思想の対決を根幹としている。基本的な展開・人物描写は正史に準拠しながらも、適宜に独特のストーリー解釈を施すことで、歴史的リアリティよりも人物描写そのものに重きを置いた骨太な描写が特色。加えて『三国志演義』に見られるファンタジー色の強い描写や史書からの引用等は排除されている。節ごとの主要人物の一人称視点でストーリーが展開しており、主に劉備、関羽、張飛、諸葛亮、曹操、曹丕、司馬懿、孫堅、孫策、周瑜、陸遜、呂布、袁紹、張衛、馬超からの視点が描かれる。吉川英治『三国志』と同様、諸葛亮の死をもって本作は完結している。

## 一、人物描写の最高峰

### (一) より真実の人物像・戦場・筋を描き出す

北方謙三は三国志物語との出会いは高校時代に遡る。そのときの北方謙三は乱読家だったが、吉川英治『三国志』を読むことで、中国にもこのような面白い物語があると知っていた。しかし、小説家デビュー十年後には、三国時代を題材として創作する前に、北方謙三は吉川英治『三国志』に微妙な違和感があると感じていた。主に劉備に関する描写に顕われてくる。ある意味では中国の特徴的な誇張表現と言える。この疑問を抱いて、北方謙三は『三国志演義』の下敷きになっている陳寿の『三国志』と裴松之注『三国志』も目に通した。それをきっかけでより真実の人物像を書き出すと決めていた。彼は自分の『三国志』を創作するとき、独特な考えがある。『正史』は歴史そのものなので、大きなストーリーの流れはしっかりしている。その流れに沿いながら、ときに『演義』の物語も思い出しつつ、いろいろな人間が夢を見、生きて、戦い、滅びていくところを書くことに決心した。

北方謙三のハードボイルド小説のキーワードは、なんといっても「男」である。三国時代に生きた男たちは本当の姿はどのようなものであるか。史書『三国志』を基にして、創作を行った北方謙三『三国志』には、昔認識された人物像とまるで違った斬新なイメージをよく表している。関羽はもはや剛情な「万人敵」ではなく、慈愛に満ちた仁者に変わった。曹操も中国の伝統的な奸雄から、心の中に血が燃えたぎっている戦士に変身した。新たな国家観の持ち主である曹操は明君とも言えよう。諸葛亮像も、これまでの超人的・神がかり的なものから脱し、人間・孔明の姿が生き生きと描き出されている。北方謙三が目指したのは、一人一人の「男」の人間性を取り戻すことである。そのほかにも、もともと『正史』や『演義』には記述がほとんどない陣構えの方法にも力を入れ、よく書き込んでいる。兵糧や水、兵站についても、しつこいほどに何度も小説の中に書き込んだ。「三顧の礼」、「借東風」など有名なシーンについて再構築を行い、いきさつをリアルに描き出している。総じていえば、北方謙三『三国志』はより真実の人物像、より真実の戦場、より真実のストーリーの筋によって、組み立てられた新たな『三国志』とも言えよう。

### (二) 人物の心理描写を重んずる

北方謙三『三国志』は男っぽいところがいい。彼の考え方が、そのまま作品に表れている。女々しくない。卑しくない。男をどのように描こうか、というのが感じられるのだ。

北方謙三は十年以上にわたって、ハードボイルド小説を書き続け、人間の肉体的な痛み

と心の痛みの両面に目をむけてきた。この時代に登場する英雄たちは、すべて各々の悩みを抱いている。曹操は親友であり好敵手でもある荀彧に対して、手のうちようがない。関羽はせっかちな性格の持ち主であり、いつも自分の年老いたことを心配する。諸葛亮は無精者として登場し、日々悩む。そのほか、亡き母親への想いを抱いたまま成長した呂布の赤兎馬に抱く友情、乱暴に見せかける張飛が妻だけに見せる深い愛情、曹操の詠む詩に涙する許褚など、登場人物一人一人の心情の揺れ動きが丁寧に描かれており、作品を読んでいる最中に胸が熱くなることがしばしばあった。三国志の主要人物と筆者の創作人物が絶妙に溶け合っており、ある程度三国志を知っている人、また全然三国志の話を知らない人も楽しく読める歴史小説と言えよう。北方謙三『三国志』は最も登場人物が輝いている、『三国志』に関する人物描写の最高峰だと思う。

## 二、夢に生きる群像

北方謙三がこの物語を題材として描きたかった小説は、これまでも何度か述べたように「夢を抱いた人々の姿」であり「夢を追い求める人々の姿」である。その夢は大きくても小さくなくても構わない。

### 劉備の夢

「私は、この世を平定したいのだよ」

「どういう意味だ？」

「世が乱れている。だから平定して、民を安んじたいと、かねてから思っていた」

「意味はわかるが、しかしどうことだ？」

「天下を、平定したい。この国のすべてを平定して、漢王室をきちんと立て直したい」<sup>258</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

### 関羽・張飛の夢

「私と張飛を、その覇業に加えていただけませんか？」

……

---

<sup>258</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.38。



「自分の出世だけを考える、つまらん武将の下で働くより、夢のあるところで働きたい。玄德様の夢を、わが夢にもできるという気がします」<sup>259</sup>

(北方謙三、『三国志』一の巻 天狼の星 馬群)

#### 陳宮の夢

「夢を、託せなかったからですよ」

「大事なことだ。まことのことを言え」

「言っています。私は、平和になったこの国の政事に取り込んでみたいのです。いままでより、この国を栄えさせる力はある、と自負しています……」

……

「つまり、俺が王になり、その下でおまえが政事を担うということか？」<sup>260</sup>

(北方謙三、『三国志』二の巻 参旗の星 黒きけもの)

#### 呂布の夢

「陳宮、戦には勝つぞ。たとえ倍する兵力を曹操が擁していたとしてもな。俺は戦にいってきた。これからも、そうだ」

「殿が戦に生きてくださるかぎり、私はその戦のために後方で全力を尽くします」<sup>261</sup>

(北方謙三、『三国志』二の巻 参旗の星 黒きけもの)

#### 張衛の夢

教祖を守る人間が、必要なのだ。教祖の弟の自分は、そのために生まれてきたのだとも思える。そして、夢。たぶん、父が、そして間違いなく母が、抱き続けていた夢。五斗米道の国を造る夢である。<sup>262</sup>

(北方謙三、『三国志』三の巻 玄戈の星 情炎の沼)

#### 孫権の夢

「私も、夢は持っています。兄上が平定されたところを、私が立派に治める、という夢です。それが天下ならば、天下を立派に治めてみせます」<sup>263</sup>

(北方謙三、『三国志』四の巻 列肆の星 風哭く日々)

---

<sup>259</sup> 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.41~42。

<sup>260</sup> 北方謙三、『三国志』二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.162。

<sup>261</sup> 北方謙三、『三国志』二の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.164。

<sup>262</sup> 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.79。

<sup>263</sup> 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.242。

## 諸葛亮の夢

「よろしいですか、殿。私の申すことを、よくお聞きください」

劉備が頷いた。

「天下三分の計」

「なんと」

「私が見るかぎり、劉備軍には戦術があって、戦略がありません。それが、大きく飛躍することができなかった理由です」

孔明は、床に燃えさしで線を描いた。この国のかたち。しばらく、二人でそれを見つめていた。<sup>264</sup>

(北方謙三、『三国志』六の巻 陣車の星 わがなは孔明)

「天下統一は、遠い夢でありましたな、殿」<sup>265</sup>

(北方謙三、『三国志』十三の巻 極北の星 遠き五丈原)

ご示す如く、中には曹操や孫権のように「天下をとる」という夢を持つ男もいた。劉備のように「漢王朝の復興」を夢見た男もいる。関羽や張飛、さらには陳宮のように「兄貴を天下人にする」「呂布を天下一の武将にする」という、自分が見込んだ男をとことん補佐することに生き甲斐を見つけた男もいる。「戦って勝ちつづける」のが夢だった呂布もいる。「先立った孫策との夢を叶えたい」と闘った周瑜もいれば、「天下三分を実現したい」と戦いつづけた諸葛亮もいる。そして『正史』『演義』には名は出てこないものの、ここに名を挙げたような時代のカリスマたちを、自分ができる仕事や役割を通して支えた無名の人々もいる。ほかに、時代を超越して、何かを見出しそれを追求する人物もいたはずだ。

そうした大小無数のさまざまな夢や志が、乱世の中で有機的に結びつき、最初は微々たる動きだったものが手探りで生きていくうちに次第に共鳴しあい増幅し、何か大きな動きになっていく。もちろん、その夢が叶うことなどなかなかあり得はしない。むしろ叶わないことのほうが多い。だが一方で、夢が純粹で美しいものならば、そこにたどりつくまでにどれだけ辛い思いをしようと、夢半ばにして倒れようと、それは幸福な「生き」だったのではないと思われる。このために、関羽・曹操そして諸葛亮ら三人は死ぬ前に少しも恐れていない。三人の中、誰でも一生をかけて夢を追い求めた。だから、静かに死を受け入

<sup>264</sup> 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.116~117。

<sup>265</sup> 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.310。

れることもできる。北方謙三『三国志』は「男と男の出会い」から始まり、劉備・関羽・張飛の出会いと言うまでもなく、劉備と曹操、呂布との間の苛烈な殺し合いですら、出会いというものの一つの形である。そしてその結果として、北方謙三は儚く美しい夢の追う図絵を描き出した。この美しさを「滅びの美学」とも言えよう。

### 三、諸葛亮の死を物語の完結とする

北方謙三『三国志』は、諸葛亮の死をもって終わっている。だが、実際の三国志は、この後にまだ膨大な物語を残している。次の世代の中心になるのは、五丈原で諸葛亮と対峙した司馬懿とその一族である。それにもかかわらず、北方謙三はあえて諸葛亮の死を以て筆を置いた。

吉川英治『三国志』の影響をうけているかどうかは知らないが、北方謙三から見れば、自分自身を生きることができた最後の三国時代のカリスマが、諸葛亮であるに間違いはない。魏の司馬懿も英傑には違いないが、はたしてそうした意味での「夢」というものを持っていたのか。蜀の姜維は猛将には違いないが、その戦いの果てに目標となる世界の様子が浮かんでいったのかどうか。諸葛亮死後の時代には、国内を固めるとか、権力争いを生き抜くというような、どこか内向きで、自分自身の無理を強いて生きているような人物像が目立つ。国家の存在が重くなるのに反比例して、人々の夢が次第に小さなものになり、その純粋性が失われてくる。歴史的読み物としてはおもしろいが、小説にはそれが合わない。

したがって、大きな夢の象徴だった諸葛亮の死で、北方謙三の『三国志』は終わらざるを得なかったのだ。

## 第三章 陳舜臣『秘本三国志』<sup>266</sup>

### 第一節 「秘本」と名付けた理由：私的な三国志物語

陳舜臣は1924年、神戸に生まれる。大阪外語大学印度語部を卒業した。同校西南アジア研究所助手を勤めるが終戦によって辞職し、家業の貿易に従事した。1961年、『枯草の根』により江戸川乱歩賞を受賞した作家生活に入る。代表作に『阿片戦争』、『太平天国』、『秘本三国志』、『小説十八史略』などがある。『秘本三国志』は『文芸春秋』で1974年から1977年まで連載された。「秘本」と名付けた理由については、作者はあとがきで以下のように書いている。

---

<sup>266</sup> 陳舜臣の『秘本三国志』（文芸春秋、全6巻、1974~1977）、初版が1974年~1977年。

これはあくまでも「私の三国志物語」である。題の「秘本三国志」は、オール讀物に連載するにあたって、編集部が考えてくれた。「秘」の字にあまりこだわることはない。このタイトルは、作品の出来の良し悪しは別として、陳舜臣にしか書けない三国志物語、というほどの意味にとっていただきたい。<sup>267</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』六 あとがき)

編集部が考えた名前であるが、陳舜臣はそれを自分しか書けない三国志物語と考えている。三国時代の根本史料は「三国志」、「後漢書」「資治通鑑」三種である。陳舜臣は 20 世紀の後半を生きる人間の目で、1700 年ほどまえの時代を書こうとしたのである。陳舜臣は三つの史料に基づき、自分流に読み自分流に解釈し、そして推理を交えて物語を作った。「秘」にめぐる意味は二つあると思われる。一つ目は、作者の独創性が物語の隅々まで浸透されている。物語は、張魯の母親・少容から始まる。最初から最後まで、五斗米道の教母が歴史の第三者というような俯瞰的な目で見つめ続ける。孫堅の玉璽発見とか、王允の連環の計とか、曹操の青州黄巾賊鎮圧とか、主だった三国志のエピソードのそこかしこに教母が絡んでいる。二つ目は、三国時代に纏わる幾つかの秘密の真相を明らかにする。「借東風」のような怪力乱神の話を削除し、「七擒七縱」、「死せる孔明生ける仲達を走らす」などエピソードに対して、推理を進め、自分なりの解釈を行った。これこそ、陳舜臣にしか書けない三国志物語であり、陳舜臣にしか解釈できない歴史の真実でもある。

## 第二節 宗教的な描写：五斗米教の人間救済の重視

五斗米教の教母として、少容は仏教に触れる。その素晴らしさを認め、良いところを吸収しつつも五斗米道独自の路線を歩む事になる。

仏教は魂の救済に大きなウエートを占める。権力者と結びつくこともあるが、それは寺を建てる資金の調達など、あくまで宗教活動のために留まる。しかし、少容は戦乱の世をいち早く修復することが先決と判断した。魂の救済より命の救済を重視したためである。仏教では死後の世界や輪廻を説くが、五斗米道では現世での幸福に重きをなす。つまり、死んでしまっただけは何もならない。魂の救済とはいっても、命がなくては全くの無意味である。

少容は張魯に教団を預け、自らは陳潜を連れて、旅の生活に入るようになった。

---

<sup>267</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』六、中央公論新社、2009年3月25日、p.295。

## 一、曹操のために青州兵を降服：人の命を救う

乱世を修復するには、天下が統一されねばならない。それは自分では無理なので、器を持った人物を物色してその者に助力し、中華を統一させ、平和を実現する。初めて少容の視線に入ってきたのは曹操である。

「鮑信どのおの遺体を、青州黄巾軍からひきとって、曹操どのおに渡したいのでございます」

少容はすこし間のびのした声で言った。言っている内容と、声の調子がいかにもちぐはぐである。

.....

「なぜこの話を持って来られたのか？」

「人助けでございます」

「誰をたすけようと？」

「あなたさまをお助けいたしたい。そして、青州黄巾軍の人たちもお助けいたしたい、そう思ってでございます。わたくしども、五斗米道は、人を助けるために、いろいろなことをして参りました」

「助けてほしいと頼んだおぼえはない」

「頼まれて助けるのは、次善の行為でございます。わたくしどもにとって、頼まれないで人助けをすることこそ、理想とするところでございます」

「さて、わしをどんなふうに助けてくれるのかね？」

「兵の数でございます。これまで、あなたさまは、兵力を集めることに四苦八苦致されました。...他人から借りたり、募兵に行って、だまされたり。ご苦心のほど、よそながら見て同情いたしております」

と、少容は言った。

曹操は苦笑した。

.....

「人助けか。.....」

(陳舜臣、『秘本三国志』二 背後に雷鳴あり)

仏教関係者と異なり、少容は政局に積極的に手を伸ばし、乱世を早く終結させる。そのために、少容は奔走するのであった。各地を渡り歩き、少容は曹操こそそれに足る人物として、彼の事業に手を貸すことになる。では、少容は曹操のために何をやり遂げたか。

曹操軍と青州黄巾軍の交戦中に、陳潜は曹操に少容を紹介した。自分は曹操のことと青州黄巾を助けに来ていると少容自らははっきりと表す。具体的な方法としては、仲介の労をとって、二つの勢力の間に契合点を探している。それは「中黄太乙」を認めるかどうかということにある。このとき、曹操は地方に割拠する群雄の一人ではあったが、他人の兵を借りたり、わざと人目につく戦いをしたりで、かなり背伸びをしていたようだ。即刻少容の提案に乗り、お互いに相手の存在を受け入れ合う上、三十万の青州黄巾軍は自分の傘下に入ることができた。これは後、曹操は群雄割拠の中で、頭角を現す最大の資本にもなっている。

少容は一体何故このように肝心なときに曹操の前に現れていたのか。曹操はその時代を統一させる英雄の一人であるが、寿張の戦いを聞いた少容はこれ以上多くの人命を失われたくないため、連合のことを考えるようになった。その原因を究明すると、五斗米道および教母・少容は魂の救済より命の救済を重視したためである。これは仏教を学んだ結果でもある。一日も早く乱世を終わらせるため、少容は最も賢明な曹操を選び、彼のために青州黄巾を遊説した。曹操の強きは、これより始まる。

## 二、諸葛亮に劉備を推薦：平和な国の実現

各地を渡り歩き、少容は曹操こそ器を持った人物として、彼の事業に手を貸すことになるのだが、もう一人、気にかかる人物がいた。それは劉備である。話は諸葛亮の初登場にさかのぼる。

彼女は近辺の田舎もまわった。襄陽の西に隆中という田舎まちがある。そこへ行く途中の道ばたで、一人の青年が、池に向かって釣糸を垂れているのが見えた。

---

268 陳舜臣、『秘本三国志』二、中央公論新社、2009年3月25日、pp.234~237。

少容はなんとなく、そののんびりした風景に惹かれ、

……

「釣れました？」

と、少容はにこにこ笑いながら声をかけた。

「女文王がかかりかけました」

……

「お名乗りいただきましょう」

少容はあらためて言った。

「諸葛亮、字は孔明。琅邪の者でございます」

諸葛亮は信じられなかった。<sup>269</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』四 天下三分の計)

以上は諸葛亮の初登場のシーンである。中国と日本を問わず、各版本の『三国志』の中には、諸葛亮は荊州で弟と共に晴耕雨読の生活に入り、好んで「梁父吟」を歌っていたという。つまり、隱棲の生活を送りながら、自分を認める賢明な主君を待っている。しかし、陳舜臣の『秘本三国志』において、諸葛亮は自ら進んで、五斗米教の教母を待ち受けていた。

「天下を三分けましょう」

と諸葛亮は言った。

「天下三分？」

「三分の一ぐらいなら、どうやらたばねて行ける人間がいるでしょう。たとえば、中原の曹操と江東の孫権など。天下を統べる器量人ではありませんが、まず三分の一はまかせることができます。……天下統一を前提にして、それまでのあいだ、それを三分して、数十年のあいだ、人民がすこしはらくに暮せる安定した状態をつくりだいたいものですよ。目下の急務はこちらのほうで、天下統一は性急であると申すほかはありません」<sup>270</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』四 天下三分の計)

<sup>269</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』四、中央公論新社、2009年3月25日、p.176。

<sup>270</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』四、中央公論新社、2009年3月25日、p.181。

『三国志演義』の流れとしては、劉備の配下には関羽、張飛のような勇猛な武将はいたが、参謀はいなかった。諸葛亮の評判を聞いた劉備は、それまでこれといった実績のなかった諸葛亮を、三顧の礼をもって迎え入れたのである。当時、曹操は天下統一に最も近い存在であった。それにもかかわらず、諸葛亮は三顧の礼にこたえ、「天下三分の計」を説き、劉備の陣営に投じた。

一方、陳舜臣の『秘本三国志』では、諸葛亮は最初に「天下三分の計」を話した相手は劉備ではなく、五斗米道の教母・少容に変えられた。曹操に天下を統一の望みを託した少容のやり方に対して、諸葛亮は異なる見解を持っている。彼からみれば、少容のやり方は少々性急です。天下が統一されることは、誰もが望みません。しかし、それは難しいです。何故かという、英雄が多すぎる一方抜群の英雄が見つからない。曹操は天下人としての力量に不足はないものの、孫権も侮りがたく、その勢力を飲み込むのは難しい。その中にあと一つの勢力を加えてほしいと諸葛亮申した。天下を統一させる器量人があらわれる前に、まず天下を三分して、数十年の間、民が少しは楽に暮らせる安定した状態に達することができる。この考え方は、一日も早く世間に穏やかな生活環境を与えたいという五斗米道の趣旨に合致している。少容もはやく彼の「天下三分の計」を認めたが、曹操・孫権ともう一方の勢力に、五斗米道を充てることを拒否した。別れ際に劉備の名を言い出し、諸葛亮に助言を与えた。これこそが天下三分の計、その第一歩なのであった。

### 三、徐州大虐殺を阻止：軍事行動を止む

初平四（193）年、曹操は、父曹嵩が徐州牧陶謙の部下に殺されたことをきっかけに、徐州を攻める。そこで、悪名高い徐州の軍民の大虐殺を行った。この徐州攻めの中で、曹操は各地で男女合わせ数十万人規模の住民を殺戮し、さらに犬や鶏まで残らず殺したため、泗水の流れが堰き止められるほどであったという。徐州への敵討ちは曹操の個人的感情の爆発である。彼がした、数少ない失敗の一つである。

「青州兵三十万は、天下をおさめるための人数でございました。彼らのたましいは、わたくしがお預かりしたと申し上げたはずで。みだれた天下を一つにおさめ、人民を安心立命させるための三十万でした。それなのに、彼らはあなたの個人の怒りをなだめるためにつかわれています。そればかりか、過ぎる所、みな



殺しというのでは、曹公が天下統一の志を棄てたとしか考えられません。残忍な支配者には、人民が背をむけます。民の心がはなれて、なんの天下統一でしょうか？これでは約束が違います」

.....

「わかりましたか？」

少容が声をかけると、曹操はたちまち正常に戻った。口をへの字にまげて、

「わかった。.....二つの緊急の用があるときいたが、第一のことはわかった。第二の用件とは？」

「いますぐ兵を退いて、兗州に戻りなさい」

と、少容は言った。

「どうして？」

「あなたのお膝元で、謀反がおこります」

.....<sup>271</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』三 天日、ために暗し)

曹操にとって、父は本当に愛することができる親だったのである。自分の拠点ができ、落ち着ける状況になったので戦乱から避難していた父を呼び寄せ、これから親孝行でもやろうと思った矢先の無残な死は、曹操を激発させるのに充分であろう。戦略的に言えば、大失敗だ。ひょっとして中原の秩序回復ができるリーダーになれるかもしれないと周囲に思われていたのに、この見境ない大虐殺で大きな失望を買い、陶謙側劉備からの援助と呂布の兗州進攻によって撤退した。

曹操の徐州進攻について、少容は強い反対を示した。彼女はいきなり曹操に天下を望まれる志があるのか、それを尋ねた。確かに、過ぎるところ、みな殺しというのは賢明ではなく、非常に乱暴・残忍のやり方である。このような打つ手を取る人は天下人にはなれない。単なる人民を裏切って、残忍な支配者に過ぎない。さらに、30万の青州軍は自分の怒りを宥めるために使うことも最初の約束と違う。この30万の兵士たちは乱れた天下を一つにおさめ、人民を安心立命させるための存在であると少容は曹操に説教した。これを聞いた曹操は不思議な表情をして、自分の間違いを知ったような気がする。これは『三国志演義』には見えない光景である。曹操としても、極めて珍しい表情と言える。

---

<sup>271</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』三、中央公論新社、2009年3月25日、pp.73~77。

### 第三節 推理小説の視線：合理的な解釈を加える

#### 一、七擒七縦：親しい間柄の芝居

諸葛亮の雲南への南征は、北伐のための重要なステップであり、是非とも興味深く描かねばならない話であった。現に『三国志演義』では第八十七回から第九十一回の五回分をこの話に当てている。南蛮の王、孟獲が蜀に対し反乱を起こし、諸葛亮がその平定に向かい、孟獲を七度捕らえ、七度放ち、孟獲を心服させ、蜀に対して二度と反乱を起こさないことを誓ったという。

そんなある日、南中から孟獲が成都に出てきて、孔明に面会をもとめた。

「うまく行っていますか？」

と、孔明は訊いた。孟獲はいま西南夷の首長として、蜀の南方を治めている。

「どうやら、おかげさまで」

と、孟獲は答えた。

諸葛孔明と孟獲は、肝胆相照らす仲であった。戦ったあと、そうなったのではない。戦うまえからそうであったのだ。

—無駄に人命を失われる。なんとかならないものか？漢人官吏の搾取さえなくなれば、われらはほかに望みはない。この騒乱をうまくおさめる手だてはないものか？

孟獲はひそかに、孔明にそんな相談をもちかけた。孔明が一晩考えた末の作戦が、あの『七縦七擒』の芝居であった。敵も味方も、これには感動するにちがいない。この劇的を演出で、ことはおさまったのである。<sup>272</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』六 西南に風疾し)

実はこの「七擒七縦」のエピソードはあくまでフィクションであり、史実ではない。南伐作戦はあくまでも、軍事制圧が目的でなく、安撫を主目的にして、南夷の反乱の基本的な解決を狙った。「心を攻めるを上策、兵を攻めるを下策」に基本政策を置いた遠征である。力による暴力的な反抗心を生む支配でなく、心から恭順を誓わせるための作戦なので、電光石火の力攻めでは作戦の意図ははたせない。

<sup>272</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』六、中央公論新社、2009年3月25日、pp.149~150。

陳舜臣も当然このことを知っている。そもそも、南蛮地方の人間離れした化け物じみた書き方をされる、可哀想な孟獲が学習能力のない人間では、南蛮大王などと呼ばれるわけがない。『三国志演義』の蜀偏重主義の書き方の犠牲者になっただけである。そこで、陳舜臣は諸葛亮と孟獲は昔からお互いに心や知り合っている仲間に書き直した。孟獲はひそかに諸葛亮に南に反乱が起こる相談をもちかけた。無駄に人命を失われたくないため、作戦としては、孟獲と一緒に「七擒七縱」の芝居を演じた。

## 二、顔良を斬る：劉備に崇られて死んだ

関羽の武勇を強調する場面のもう一つとして、建安五（200）年の白馬の戦いが『三国志』の中に記録される。それは関羽の武が輝く場面であるが、その記事は、わずか19文字に過ぎない。

羽望見麾蓋、策馬刺良於万衆之中、斩其首還。<sup>273</sup>

（陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書 卷三十六 関張馬黄趙傳第六）

これに対して、『演義』は、「戦場に出ていただくことで主人の消息が掴めるかもしれません」との劉備の二夫人の言葉を掲げ、関羽が曹操のために戦ったわけではないことを確認した上で、関羽の「武」を次のように描写している。

关公奋然上马,倒提青龙刀,跑下土山来,凤目圆睁,蚕眉直竖,直冲坡阵。河北军如波开浪裂,关公径奔颜良。颜良正在麾盖下,见关公冲来,方欲问时,关公赤兔马快,早已跑到眼前。颜良措手不及,被云长手起一刀,刺于马下。忽地下马,割了颜良首级,拴于马项之下,飞身上马,提刀出阵你,如入无人之境。河北兵将大惊,不战自乱。<sup>274</sup>

（罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第二十五回 屯土山关公约三事 救白马曹操解重围）

正史の19文字をもとに、見事に強調して創作されている。関羽は呂布の遺品であった赤兔馬を駆って突入し、1万人以上の兵士の壁を、駆け破った。そして、顔良を反撃の間もなく打ち取り、首級をあげて、曹操軍に戻った。

<sup>273</sup> 陳壽 撰 裴松之 注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.939。

<sup>274</sup> 羅貫中 著 毛宗崗 評訂、『三国演義』上、齊魯書社、1991年1月、p.305。

読者はこのシーンを読んで、思わず関羽の勇猛に心服されているに違いない。しかし、関羽と張飛は確かに「万人敵」と称されるが、簡単に十万人の敵陣の中に自由に出入りすることはできないはずだ。まして敵陣の真ん中にいる大将を 1 ラウンドで殺されることはとても無理だ。

劉備は顔良の出発のとき、わざわざ見送りに行き、

「曹操陣営には、私の義弟にあたる関羽がおります。先の徐州戦で、曹軍に下邳城を囲まれ、やむなく降伏したのですが、その関羽から密使が参りました。関羽は曹操から二万の軍勢を授けられておりますが、私が袁將軍にあると知り、こんどの戦いで我がほうに寝返ると申ししてきました。戦線で会われましたら、なにとぞ彼の帰順をうけいれていただきたい。なお、これは秘密のこと。事前にもれたなら、関羽は曹操に兵をとりあげられること必定。.....貴下の幕僚にも内密に願いたい」

「心得た」

.....

「案ずるに及ばぬ。わしは単騎、関羽めを降してみせるほどに。.....そこ退け！」

.....

「関羽、よく参った。玄德どのから聞いておったぞ」

と顔良は馬をとめて言った。大声を上げたのだが、それは関羽にしかきこえない。関羽はその真っ赤な顔に白い歯をみせた。歯がキラと光った。

つぎの瞬間、関羽の右手がさっとうごいた。右手には長刀が握られていたのだ。

..... 275

(陳舜臣、『秘本三国志』四 黄河を渡るべきか)

陳舜臣の推理によると、顔良は当時袁紹軍の客将だった劉備から、関羽の人相風体を聞かされており、もし出会ったなら、すぐに劉備の下に来るように伝えてほしいと頼まれている。このため関羽と距離が近づいても、話しかけようとするのみで応戦しようとしなかったため、斬り捨てられたことにされてしまっている。このような解釈を通して、関羽は百万軍の中に將軍の首級を取ることはできなくなったが、物語の経緯は一層明確になって

---

275 陳舜臣、『秘本三国志』四、中央公論新社、2009年3月25日、pp.107~110。

きた。

### 三、孫権との決裂：呂蒙の仕掛け

219年、劉備が漢中王を称し、関羽は前將軍・仮節に任じられた。このとき、荊州を治めていた関羽は、隣国の呉国君主である孫権から互いの子息の縁組を持ちかけられる。

云长曰：“子瑜此来何意？”瑾曰：“特来求结两家之好。吾主吴侯有一子，甚聪明；闻将军有一女，特来求婚。两家结好，并立破曹。此城美事，请君侯思之。”

云长勃然大怒曰：“吾虎女安肯嫁犬子乎！不看汝弟之面，立斩汝首！休再多言！”

遂唤左右逐出。 276

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第七十三回 玄德进位汉中王 云长攻拔襄阳郡)

関羽ははっきりと断っている。断るのが筋なのですが、関羽の性格からして「虎の子を犬の子にやれるか」と侮蔑した断り方をしたとも伝わっている。力を認めていない相手には敵でも見方でも容赦がない。ここまで読んでくると、関羽は強気だと思うが、「虎の子を犬の子やれるか」と突っぱねることはいささかひねくれている。しかも、「犬の子」というのは孫権の息子のこと。もう完全に喧嘩を売っている。「東呉と和せよ」という諸葛亮の助言はわすれたではなかろう。しかし、いくら劉備と義兄弟であっても、今回の件は少なくとも国のことだ。大局を知らないにもほどがある。やはり、陳舜臣から見れば、関羽はどのように言い返すのは想像できない。

いくら呂蒙が反劉備であっても、主君の孫権が親劉備であってはどうにもならない。親劉備の魯肅が、ながいあいだ主流であったので、孫権もしぜん、どちらかといえば、親劉備的な心情をもっていた。だから、呂蒙の計画のなかには、主君孫権の心をいかに反劉備、したがって反関羽にむけるか、という問題が含まれている。

.....

—関羽の娘を登さまの嫁にしてはいかがでしょう。たいへんな美女ときいてお

---

276 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』下、齐鲁书社、1991年1月、p.910。

りまするが。

と、説いた。

—ほう、それはわるくないのう。

孫権は賛成した。

……

孫権はさっそく、この縁談を進めるために使者を出した。

呂蒙はすかさず、関羽の身边に放っている密偵に、つぎのような話を、関羽の耳に入れるようにさせた。

—孫権は稀代の漁色家で、関羽の娘が絶世の美少女であるときき、側室に所望したいと思っている。だが、自尊心の強い関羽がそれを許しそうもないので、長男の正妻に迎えるという口実なら、彼女を呉に連れてくることができると考えた。呉に連れ込んでしまえ、もうこっちのものだ。……<sup>277</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』五 関羽敗れたり)

呂蒙は魯肅と違い、反劉備派であった。昔から、呂蒙は関羽を仮想の敵として扱われている。各方面から関羽を研究してきた。しかし、いくら呂蒙が劉備を反対するとしても、孫権は劉備に親しんでいれば、何にもならない。そこで、魏の司馬懿の提案を採用し、縁談のこじれにとって、孫権を関羽嫌いにさせる。孫権に孫登と関羽の娘の姻戚の話を勧めながら、関羽の身边に放って密探を通じて、孫権は関羽の娘を欲しがって、縁談の話で関羽を騙し、娘を呉に連れ側室にしたいと関羽の耳に流し込んでいた。これを聞いた関羽は怒らないわけにはいけない。孫権の使者が要件の半分も言わないうちに、孫権を罵りながら、使者を蹴とばした。これより、孫権と劉備の同盟関係は実質的にきれたという。呂蒙の策は効を奏し、孫権陣営内の反劉備派はついに台頭した。

#### 四、酒を煮て英雄を論ずる：呉越同舟的な盟約

三国時代において前半最大のライバルは曹操と劉備である。しかし、陳舜臣の『秘本三国志』では、曹操と劉備という敵対する者同士が裏でこっそり気脈を通ずるといふ八百長試合のような関係が、頻繁に描かれる。

『三国志演義』の第二十一回には、「酒を煮て英雄を論ず」というエピソードがある。曹

<sup>277</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』五、中央公論新社、2009年3月25日、pp.289~291。

操とともに食事をしていた劉備が曹操に「この乱世に英雄と呼べる人物は誰か。」と質問され、様々な群雄の名前を挙げるも、曹操に反論され、最期に曹操に「この世に英雄は君と余だけだ」と言われ、内心を見透かされた劉備は思わず箸と匙を落としている。ここで、劉備は、折りよく鳴った雷鳴にかこつけて蹲り、「私は雷が怖いのです」と嘘をつき、首尾よく曹操の警戒心を解くという有名な話である。

「呂布は子供のようであった。しかし、わしは呂布の言葉をきいて、ふと思ったのじゃが.....この腕白の呂布と組んだところで、天下が取れるわけではないかという人物の顔が、あのとき、わしの脳裏に浮かんできた。.....何者であるか、想像できるかな？」

「さあ.....何者でございましょうか.....」

「それはのう。は、は、は.....ほかでもない、おぬしじゃよ、劉玄德じゃよ」

.....

「わしはいまさら、騎兵隊長と組んで天下を取ろうなどとは思っておらぬわ。騎兵隊も、所詮、腕力ではないか。わしはその限界を知っておる。べつにそんなものと組むことはない。わしが組みたい相手は、腕力ではなく、これだよ」

曹操は右手の人差指で、自分のこめかみをつついた。頭脳だ、と言いたいのであらう。

.....

「.....頭脳が、せめて二つに分かれてくれておればと、しみじみそう思うことがある」

と、曹操は言った。淡々とした口調である。

.....

「いや、わしの陣営にいては、頭脳が重複して、勿体ないのだ。.....わしが組みたい相手の頭脳は敵の陣営にいなければならんのだ。.....わかるかな？」

曹操は肩を揺すった。

「敵のなかに.....」

劉備は軽くうなずいた。輪郭がしだいにはっきりしてきた。<sup>278</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』四 劉備造反す)

---

<sup>278</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』四、中央公論新社、2009年3月25日、pp.74~76。

この曹操と劉備の対話内容を見ることによって、彼らの間にこっそり気脈を通じることがわかるであろう。その後、曹操は袁術を阻止のために、劉備を徐州方面へ派遣した。当時、曹操の目の前の大敵は袁紹である。そのため、劉備を袁紹の陣営に送り込む。しかし、曹操の客将である劉備がそのまま袁紹のもとに走っても、疑われるはずだ。だから、わざと曹操に謀反して、曹操に手痛い打撃を与えた。この策を取ることで、敵の動きを知り、それをもとにはかりごとをめぐらして、味方に有利になるように敵を操ることもできる。こうすると、関羽はどうして袁紹の猛将である顔良を簡単に斬ったかということも受けられる。ほかにも、曹操と協力し、董承ら密詔グループを裏切る。許都にある反曹操勢力を一網打尽にして、曹操の憂いを解消してあげた。

実は、当時の劉備はどう考えても独力では天下は取れないという自覚を持っている。そのため、曹操の力を借りねばならない。曹操も曹操で、袁紹という敵との対決をひかけて、協力者を必要としている。劉備として、利用されるであろうが、利用できるのだ。劉備一人で司令官と参謀長を兼ねていた。彼がこの兼職から解放されるのは、諸葛亮を得てからであった。

#### 第四節 批判的な描写：少容と「三絶」を主として

##### 一、少容：虚構の主人公

毛宗崗本『三国志演義』の主役は「三絶」（曹操、関羽、諸葛亮）、吉川英治『三国志』は二大英雄（曹操、諸葛亮）を中心に、北方謙三『三国志』は最も力を入れ、描き出したのは曹操などと違い、陳舜臣の『秘本三国志』は主人公に宗教活動家を配してその視点で世の中を見る、というかなり異色なものとなっている。

陳舜臣の『秘本三国志』は少容と陳潜との対話を冒頭に掲げる。物語の主人公はいきなり最初から登場した。

蒼天はすでに死せり

黄天まさに立つべし

そんな呪文のような言葉が、東のほうで流行っているという噂があった。

「それは、みんながおおっぴらで唱えているのですか？」



張魯の母の少容は、東から帰ってきた陳潜にそう尋ねた。<sup>279</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』一 黄天立つべし)

時代には、五斗米道という宗教がある。道教の流れを汲み、人々の救済を目指して組織である。張角による太平道とは、兄弟の関係にあるといってもよい。五斗の米と引き換えに医療行為を行い、ちょっとしたトリックにより施術者への信頼を増幅して治療の効果を上げ、その名を広めていた。その指導者は張魯である。実質的にはその母・少容が教団の取るべき道を選択し、導いてゆく。

五斗米道の張衛の妻について、張魯の母と確かにあるが、名は詳しく知らない。ここに陳舜臣は彼女に「少容」と名付けた理由は陳寿の『三国志』の関係からである。

張魯母始以鬼道・又有少容。<sup>280</sup>

(陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書 卷三十一 劉二牧傳第一)

佗授以漆葉青黏散。漆葉屑一升・青黏屑十四兩・以是為率・言久服去三蟲・利五臟・輕體・使人頭不白。

文帝典論：「甘陵、甘始亦善行氣・老有少容。」<sup>281</sup>

(陳壽撰 裴松之注、『三國志』魏書 卷二十九 方技傳第二十九)

『三国志』の『蜀書』に、彼女のことを「又た少容有り」と述べているところから、それを名前に採った。さらに、魏書の「華佗伝」と裴松之の注により、「少容」の意味は若い容貌を指すことがわかりやすくなる。

そこで、陳舜臣の『秘本三国志』では、「十七で張魯を生んだ少容は、いま三十代の半ばのはずだが、どうみても二十代にしかみえないのである。」<sup>282</sup>と述べ、少容は年のかわりに、若くに見えてくることを強調した。

作者の言葉によると、「三国志は異能、奇才の人物によって彩られているが、張魯の母を

<sup>279</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』一、中央公論新社、2009年3月25日、p.7。

<sup>280</sup> 陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.867。

<sup>281</sup> 陳壽撰 裴松之注、『三國志』魏書、新華書局、1959年12月、pp.804～805。

<sup>282</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』一、中央公論新社、2009年3月25日、p.10。

そのなかにいれないのは、これまでの物語作家の不明というべきではなかろうか。」<sup>283</sup>と記している。物語当初は張魯の幼馴染・陳潜を主人公としているが、次第に彼は脇役へと転落してしまう。少容が一躍小説の主人公になり、物語的時間の進行と全体的な構成の大きなポイントになっている。彼女をはじめとする人たちは、三国時代における群雄を巡り、いろいろな点から考察する。

## 二、不徳な関羽

陳舜臣『秘本三国志』の登場人物の描写に関しては、これまでの常識に外れるほどではないが、ただ関羽がかなり雑魚化されており、彼の嫌な性格を強調されている。

### (一) 花嫁略奪

『三国志演義』は「桃園の誓い」から始まる。序盤に登場する劉備・関羽・張飛の三人が、宴会にて義兄弟となる誓いを結び、生死を共にする宣言を行ったという逸話のことである。これは正史『三国志』にない逸話であって創作上の話であるとされており、劉備が二人に兄弟のような恩愛をかけ、関羽・張飛は常に劉備の左右に侍して護り、蜀漢建国に際して大いに功績があった、という史実に基づいて作られた逸話である。最も印象に残る場面の一つと言える。

先頭の男が、片手で青竜刀を軽がるとふりまわし、

「ざまぁみやがれ！つべこべ抜かさずに、その女郎をこちらに渡せ」

と、大声で咆え立てた。

……

「腰を抜かしたやつは助けてやる。のこのこ出てくるやつは、鞆丸ぶち割ってくれるぞオ。さあどうだ！」

童顔の巨漢がそう言うと、いやに耳の大きな男が横から出てきて、

「女を置いて、さっさと消え失せろ！失せくさらんか、下郎ども！」<sup>284</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』一月氏の美女)

<sup>283</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』一、中央公論新社、2009年3月25日、p.56。

<sup>284</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』一、中央公論新社、2009年3月25日、p.92~93。

陳潜の加わる一行が孫堅の元に嫁入りする令嬢を送り届ける途中、花嫁を奪いに現れるのが劉備一党である。「女を置いて、さっさと消え失せろ！」と、ヤクザなセリフを吐く劉備。「鞆丸ぶち割ってくれるぞォ。」と、下品な言葉使いをする関羽。衝撃的な初登場である。

『三国志演義』は言うまでもなく蜀漢を正統としている。劉備はまるで聖人のようである。粗暴な振る舞いはたいてい部下の張飛あたりのせいにして、劉備がそれで悩むように描かれている。関羽もみずからの持つ武芸のすべてをかけて信義に生きている。彼の愛読書は『孫子』ではなく『春秋左氏伝』であった。当時トップクラスの武将であるにも関わらず、愛読書は兵法書でなく左伝であることは興味深いである。兵法書は、戦場において、あるいは政略において敵に勝利することを目的としています。左伝はそこから一歩も二歩も引いて、春秋時代の人物たちが何を考え、どのような行動原理にもとづいていかに行動したか、が記されている。関羽としては、目の前の戦場より、歴史のなかで自分の存在意義をどのように立てるか、を常に考えていた人ではないかと思われる。このような蜀を代表する二人の義兄弟は花嫁略奪など、品の悪いことをすることには考えられない。柄が悪い。しかも、それを装っているのではなく、根っから品が悪いのである。

## (二) 横恋慕

『三国志演義』では、関羽の愛情生活を描くことはない。吉川英治『三国志』において、関羽の赤兔馬との愛情が素晴らしい。北方謙三『三国志』の中の関羽は、なによりも自分の兄貴劉備を愛することをなんとなく読者に訴えかける。これらはすべて予想範囲以内のことと言うならば、陳舜臣『秘本三国志』の中では、関羽と貂蟬が恋をする設定は非常に驚く。

関羽がふつうの女に惚れたのであれば、義兄として劉備も、その仲をとりもってやるのにやぶさかではない。だが、劉備がにらんだところによれば、関羽が惚れたのは、たいへんな女だったのである。

貂蟬。—劉備から徐州を横取りした、あの呂布の女なのだ。たしかに、いかにも相手が悪い。

五斗米道の教母少容とその弟子の陳潜が、貂蟬を連れて徐州へやってきたのは、つい数カ月前のことであった。

.....

関羽はそのとき、貂蟬をひと目見て、恍惚となったのである。

( 丈夫たる者は、志を四海のばさねばならぬとっておったが.....それだけが男の道ではないのかもしれない。たとえば、このようなうつくしい女とともに暮らせるのであれば、封侯や將軍の地位など、すて去ってもよいのではあるまいか )

彼はそうおもった。 285

(陳舜臣、『秘本三国志』三 英雄が多すぎる)

関羽は初めて貂蟬に会ったときから、彼女と恋に落ちた。貂蟬さえ自分の側にいれば、將軍の地位などは何も捨て去ってもいいと関羽は思っていた。しかし、当時の貂蟬はまだ呂布の妻である。関羽は、四六時中脳裡から去らぬ美女貂蟬を、呂布の側から奪い取ろうとさえ考えている。下邳城を奇襲し、女を奪って風の如く去り、あとで誰の仕業であったか、わからぬようにするつもりであった。そのため、連れていた部下も、選りすぐった二十数名に限った。結局失敗した。しかし、関羽は諦めない。呂布の妻であった貂蟬を何度となく娶りたいと曹操に申し出ました。

実は、正史において関羽は呂布に仕えていた秦宜祿の妻である杜氏を、自分の妻として娶りたいと曹操に申し出すことは記されている。

蜀記曰：曹公與劉備圍呂布於下邳・關羽啓公・布使秦宜祿行求救・乞娶其妻・公許之。臨破・又屢啓與公。公疑其有異色・先遣迎看・因自留之・羽心不安。此與魏氏春秋所說無異也。 286

(陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書 卷三十六 関張馬黄趙傳第六)

劉宋に生きた裴松之は、曹魏を正統とする必要はなかった。蜀漢を正統とする必要もなかった。したがって、関羽伝に注記する書籍も、関羽の都合のよいものばかりではない。人妻に懸想して何度も曹操に頼んだ挙句、横取りをされてしまう関羽は、人間らしく魅力的であるが、『三国志演義』はこの話を採用しない。清廉潔白なイメージの関羽には似つかわしくない説である。神が人妻に横恋慕しては困るのであろう。陳舜臣の推理はこの記事

285 陳舜臣、『秘本三国志』三、中央公論新社、2009年3月25日、pp.197~198。

286 陳壽撰 裴松之注、『三國志』蜀書、新華書局、1959年12月、p.939。

によるものかもしれない。

### 三、善良な曹操

『三国志演義』の影響によって悪役としての評価が定着した曹操であるが、陳舜臣の『秘本三国志』では、曹操を善悪あわせた人間に描いている。『秘本三国志』において、曹操は徐州大虐殺および朝廷内反曹勢力の肅清も行ったが、感情に富んで人間的な人でもあった。毛宗崗本『三国志演義』で、曹操に泣くことはあるが、それはすべて他人に見せるためであると評されている。陳舜臣の『三国志』で、曹操という男に心から泣かされた。胸が熱くなった。読み進むにつれて、曹操孟徳という人間が立ち上ってきた。大変人間らしいのである。

#### (一) 鮑信の死に泣く

曹操は戦の中で命の危険に幾度となく遭遇し、その都度彼の家臣である典韋や許褚などの武将に助けられている。家臣に迷惑ばかりかけている曹操は、家臣の他にも自らの命の危機を助けてもらった事があった。その曹操を救い出した人物の名は鮑信という。西暦 192 年、青州では、黄巾賊が再び勢いを盛り返し、各地で猛威を奮った。兗州の刺史である劉岱は、これを迎え撃つが、大軍の前に呆気なく敗れ、戦死した。その後、曹操は兗州牧となり、青州の黄巾と激しく戦い、鮑信を失った。

操领了圣旨・会同鮑信・一同兴兵・击贼于寿阳。鮑信杀入重地・为贼所害。操追赶贼兵・直到济北・降者数万。操即用贼为前驱・兵马到处・无不降顺。不过百余日・招安到降兵三十余万、男女百余万口。操择精锐者・号为“青州兵”・其余尽令归农。操自此威名日重。<sup>287</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第十回 勤王室马腾举义 报父仇曹操兴师)

『三国志演義』は鮑信の死について、極めて簡単に書いた。確かに、曹操と鮑信は何の関係もなく、鮑信の死に対しても悲しむ理由がない。しかし、陳舜臣の『秘本三国志』において曹操は鮑信の死に号泣した。

---

<sup>287</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.107~108。

曹操は盟友鮑信の死に、心を曇らせていた。

すくなからぬ懸賞金をかけて、鮑信の遺骸をもとめたが、どうしてもさがしだせない。黄巾軍が彼の遺体を収容して行ったとしか考えられない。

とはいえ、壮烈な戦死を遂げた盟友をとむらわねば気がすまない。曹操は工人に鮑信の木像をつくらせ、それをまつり、その前で声をあげて哭いた。

「鮑信の遺骸があらわれたなら、もういちど葬儀をしよう。これはむしろ、わし自身の心をしずめる葬式なのだ」<sup>288</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』二 背後に雷鳴あり)

実は劉岱が死んだ後、鮑信は東都に急行して、曹操の出馬を要請した。朝廷の威令は届かないので、刺史や太守という地位は、実力者が勝手についたのである。この期にのって、曹操は兗州の主になった。おそらく、兗州を制することは曹操の覇業の第一歩です。兗州をおさめることは天下をおさめる基になる。曹操は各地の群雄から一步抜きこんでる事が出来たのも鮑信のおかげと言っても過言ではない。しかし、戦いの最中、鮑信は不慮の敵との遭遇に、曹操を守って戦死し、ここで曹操は挙兵以来、ずっと共に支え合ってきた大切な盟友を失ってしまう。そのため、緊迫している戦時でも鮑信の亡骸を賞金を出して求めた。しかし、亡骸得られず、曹操は大いに悲しみ、鮑信の姿に似せて木を刻み、それを祭って泣いた。

## (二) 関羽の死に悲しむ

『三国志演義』では、関羽の死後、首は孫権の使者によって曹操の下へ送られた。首を送った理由はもしも関羽を呉が討ち取ったことが蜀に知れられたら蜀の劉備と張飛は死を覚悟で呉を攻める事は明白である。「関羽の死は呉のみの判断ではなく、魏も責任があったんだ」と言う責任の押し付けで、関羽の首を送ったのである。孫権は劉備の怒りが魏の方に向くかもしれないと願っているではなかろうか。これに対して、曹操は司馬懿の提案に従い、関羽を手厚く葬ると決める。これによって、劉備からの恨みを再び孫権に移そうとしている。劉備と孫権の間戦争が起これば、蜀が敗れようが呉が破れ様とも相当の打撃を受ける。それを喜ぶのが魏の曹操である。曹操はその期に一斉に攻撃をすれば曹操が天下

<sup>288</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』二、中央公論新社、2009年3月25日、p.233。

を取る事になるに間違いない。いわゆる曹操は漁夫の利の漁師である。東呉の陰謀を見破り、やり返すとしよう曹操の気持ちがすっきりしていた。関羽の首に対して「雲長殿、あれからお変わりありませんか」と悪ふざけに言った。

操大喜・从其计・遂召吴使入。呈上木匣。操开匣视之・见关公面如平日。操笑曰：“云长公别来无恙”。<sup>289</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』第七十七回 玉泉山关公显圣 洛阳城曹操感神)

いまから二十年まえ、劉備が曹操に敗れて袁紹のもとへ走ったとき、関羽は曹操側の捕虜となった。曹操は関羽を偏将軍に任じた。白馬の合戦では、関羽は曹操の部将として、袁紹の猛将顔良の首をあげた。その後、関羽は旧主であり義兄である劉備のもとへ走った。僅かのあいだだが、曹操は関羽と主従の関係もあった。

(野戦の将軍そしてはすぐれていた。果敢であり、決断力は抜群だった。……)

曹操は関羽の才能を評価していた。惜しい人物を殺した。—関羽の首のことを読んで、曹操は目がしらが熱くなるのをおぼえた。

(ふしぎな。……目が赤くなっておられる)

……

詩人として、曹操はとうぜん感情のはげしい人物だが、天下の覇者として、彼はその溢れんばかりの感情を、けんめいに抑えてきた。涙ぐむすがたなど、めったに人に見せたことはない。<sup>290</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』六 ああ四百年)

一方、陳舜臣の『秘本三国志』では、曹操のところに孫権からの一通の手紙が届いた。読み終わって、曹操は関羽の才能を高く評価し、彼の死は惜しいことだと思った。特に関羽の首のことを読んで、僅かの間、関羽と主従の関係をもったことを思いながら、感に耐えぬ、目頭が熱くなってきた。詩人として、曹操は感情の激しい人である。曹操にとって、他に何の理由もなく、関羽はこの世の英雄として、丁重に葬るべきであると主張した。陳

<sup>289</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演义』下、齐鲁书社、1991年1月、pp.956-957。

<sup>290</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』六、中央公論新社、2009年3月25日、p.22。

舜臣の書き直すことによって、曹操は冷血・身勝手な性格から抜け出し、感情にもろい人になった。

#### 四、縦横家である諸葛亮

『三国志演義』の世界で、諸葛亮が魔術師としての力を発揮する場面は、枚挙に暇がないほど見られる。その登場から退場に至る終始一貫して、軍略の神様のような存在であった。聞くも涙、語るも涙の忠義一徹の堅苦しい諸葛亮より、風を呼び人工獣を駆使し、北斗星に呪文を唱えて宿命さえ変えようとする、超能力の諸葛亮に人気があったのは想像にかたくない。

清の歴史家章学誠は、『三国志演義』を評して「七割は史実だが三割が虚構で、読者を混乱させる」と述べ、歴史家らしく虚構の要素が多いことに苦情を呈している。陳舜臣も歴史小説家として、読者に真実な諸葛亮を還元している。諸葛亮は人が驚くような奇策を思いつくタイプではなく、国際あるいは国内の情勢変化を洞察することに長け、巧妙な弁説で形勢や国益を左右することができる縦横家に変身した。

##### (一) 芝居を演じる

曹操は長坂橋の戦いで劉備の追撃に失敗したものの、荊州の北部をその領土に加えた。曹操が次に狙うのは孫権の治める呉である。

その呉では、曹操 100 万の軍が攻め込んでくるという情報に参謀会議は大騒ぎになり、「交戦か、和平か」で群臣の意見が分かれた。内政の重鎮である張昭は和平を主張するが、軍事担当の周瑜が判断を決めかねているなか、呉主の孫権はどうすればよいのか決断がつかない。そこで、軍師の魯肅は、曹操と何度も戦ったことのある劉備のもとへ赴き、曹操がどんな人物かを尋ねることにした。この時に面会したのが諸葛亮である。

魯肅曰：“适间所嘱，不可有误。”孔明点头应诺。引至堂上，孙权降阶而迎，优礼相待。施礼毕，赐孔明坐，众文武分两行而立。鲁肃立于孔明之侧，只看他讲话。孔明致玄德之意毕，偷眼看孙权：碧眼紫须，堂堂一表。孔明暗思：“此人相貌非常，只可激，不可说。等他问时，用言激之便了。”<sup>291</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』第四十三回 诸葛亮舌战群儒 鲁子敬力排众议)

<sup>291</sup> 罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、pp.535~536。



『三国志演義』では、諸葛亮はある秘策をもって、魯肅とともに呉へ向かう。しかし孫権と会う前に、張昭を筆頭とした和平派の群臣につかまる。群臣は諸葛孔明を不利な立場に追い込もうと議論をしかける。「曹操 100 万の軍に勝てるのか」と問えば、「烏合の衆でしかない曹操軍をわが君はおそれない」と言い返す。「城を失い、我々東呉にたよるつもりでいるおまえたちがそのようなことを言っても、お笑い種だ」とあざ笑えば、「我々劉備軍は兵力が少なくても曹操と戦うつもりでいる。あなたたち東呉の軍は兵力も兵糧も充分なのに、曹操をおそれ、自分の主君にむかって、膝を屈して降伏しろというのか」と激をとばす。こうして群臣は全員次々に諸葛孔明に言い負かされてしまった。議事堂に通された諸葛亮は孫権の参謀たちとの舌戦を見事に制し、孫権と面会した。孫権は諸葛亮の言葉に心を動かされていた。しかし、まだ曹操との決戦に踏み切れないでいる。そこで、諸葛亮は呉国外交責任者の周瑜に持ちかけることを助言した。ようやく、同盟を結ぶことができた。

一方、陳舜臣の『秘本三国志』では、呉の群臣と舌戦をする前に、諸葛亮は既に孫権と会うことができ、さらに二人にはある共同の認識を達するという設定にした。

「将軍はすでに心に決しておられましようが、しばらくは諸将の面前にては、迷ったようすをなさるよう」

「迷ったふりをしろと申すのか？」

……

「芝居をなさませ、芝居を」

「芝居か？わしは芝居だのやったことがないわ」

「さようございましょうか？ま、けっこうです。おそれながら、この孔明、芝居のご指南を申し上げます。よろしゅうございますか？」<sup>292</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』五 赤壁の天も焦げよ)

『秘本三国志』の中の孫権は明朗で度量があり、思いやりが深く決断力にも富んでいた。彼は最初から戦いを決意した。曹操に降った場合、徹底抗戦を唱える魯肅と周瑜が決定に従うとは考えられない。彼らは軍を率いて去り、東呉政権は瓦解する。本当の平和が訪れ

<sup>292</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』五、中央公論新社、2009年3月25日、p.23。

ることではない。したがって、群臣と弁論する前に、諸葛亮は最初に孫権と合意済だという。しかし、諸葛亮はまだ東呉の和平派の群臣と舌戦を交えた。それはなぜかという、東呉の将兵を興奮させるためである。さらに、諸葛亮は孫権の演技の指導をした。幕僚諸将の目には、彼は和平か主戦か、どちらかに決しかねて、迷っている将軍のように見えた。いよいよ結果発表の日に参りました。孫権が「曹操と戦うことに意を決したぞ！」と叫んで、居並ぶ呉の要人たちは、興奮の渦の中に巻き込まれた。この決意の表明は劇的な効果をあげた。

## (二) 八百長の戦い

全百二十回の『三国志演義』は、「死せる孔明生ける仲達を走らす」の場면을第百四回に描く。司馬懿が天文により諸葛亮の死をしりながらも、「六丁・六甲の法」を警戒しながら追撃する。設定することより、木像を見て逃げ出す伏線を張る。そのうえで、追撃してまた司馬懿を姜維が迎え撃ち、諸葛亮の木像を見た司馬懿が仰天して逃げ出すという。諸葛亮が生前に立てておいた計略によって、「死せる孔明」がいかにも「生ける仲達」を走らせたのか、きちんと説明する。

戦いは、軍を退くときが最も難しい。後ろからせめられると全滅することもある。そのため殿軍が大事なのだが、諸葛亮の将軍としての優れた点は、撤兵の際に兵を損なわないところにある。北伐はすべて成功しなかったが、一度として撤兵に失敗したことはない。『三国志演義』では、人である諸葛亮が、死ぬ間際まで漢復興の志を捨てず、兵を損なわないように、人智の限りを尽くして、死後の準備をしたことが語られる。しかし、陳舜臣の推理により、これは諸葛亮と司馬懿の八百長だ。そもそも、この二人はずっと前から呉越同舟の関係で結び付いている。

「退却にあたって、なによりもおそろしいのは、敵の攻撃である。退却を敵に悟られたなら、敵は嵩にかかって攻めてくるだろう。敵に悟られないためには、退却作戦は、まず攻撃から開始することだ。……」

孔明の頬に微笑がうかんだ。

これは、じつは苦笑であった。蜀軍の退却を、魏の司馬仲達が追撃するはずはない。司馬仲達の地位は、いま魏の朝廷のなかで、きわめて微妙なところである。朝廷としては、おの実力者を早く粛清したいが、彼がいなければ、大きな戦争が

できない。彼のほかに、彼ほど有能な指揮官はいないのだ。

魏に大敵が存在するあいだ、司馬仲達は肅清されることはない。仲達にすれば、蜀は大敵として存在しつづけてもらわねばならない。蜀の退却を追撃すれば、潰滅的な打撃を与えるかもしれないが、そうなれば、自分の手で自分の首をしめるようなものだ。<sup>293</sup>

(陳舜臣、『秘本三国志』六 夢は五丈原)

話は諸葛亮の北伐の最初に遡り、司馬懿の特使として張魯が会うために来た。張魯の話によると、魏における司馬懿の立場はかなりつらいところがある。有能な大臣は諸刃の剣であった。王朝のためにめざましい働きをしてくれるかもしれないが、王朝を乗っ取ってしまうかもしれないのである。司馬懿は魏から警戒されて、蜀に勝ったら、司馬懿の命は危ういところに至る。一方、もし諸葛亮は五丈原で司馬懿に勝ったら、長安まで進攻しなければならぬ。これは国の財力と国力が疲弊することを招き、結局蜀国は自ら滅亡するかもしれない。お互い利害関係を分析したうえで、双方は密かに同盟を結ぶことに決めた。

それから、蜀と魏の軍隊は国境の紛争において互いに勝負がある。不要の流血は避けられる以上、蜀国も生きていくことができ、司馬懿も肅清される恐れがない。このまま何回の虚々実々の戦いを経て、諸葛亮は病気で床についた。死ぬ前に姜維と楊儀に退却策を口述したが、蜀軍の退却を、司馬懿が追撃するはずはないとよく分かっている。蜀が存在するあいだ、司馬懿は肅清されることはない。司馬懿にとって、蜀軍の安全撤退に協力しなければならぬ。しかし、敵軍の総撤退を見張ったまま追撃しないことも朝廷からの疑いを招くがちだ。そこで、諸葛亮は司馬懿の立場をよくするために、撤退の際、陽動作戦をとることに決めた。

---

<sup>293</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』六、中央公論新社、2009年3月25日、pp.284~285。

## まとめ

陳舜臣『秘本三国志』は『三国志演義』を基に書き直したものではなく、彼がまったく独自の視点から、この時代を書いた三国志物語である。その理由を一言でいうと、『秘本三国志』が実によくこの時代の相を描いていることにある。動乱の時代であったことは、誰もが知るところであるが、これに当時抬頭しつつあった道教教団と仏教教団に属する人々の活動に虚構を交えて織り込み、歴史小説の手法と推理小説の視線によって、時代の空気と乱世に生きざるを得なかった人々の苦痛の姿を描き出した。単なる英雄豪傑の活躍する物語に終始せず、今日的な歴史小説として書いたところに、この作品は他の三国志物語から一頭地を抜く存在としたのである。これこそ、陳舜臣にしか書けない三国時代の物語で

ある。彼の主な創作視点は以下の通りに纏めることができる。

## 一、宗教の慈悲心を貫く

陳舜臣の作家生活の原点の一つは、戦乱体験であった。『秘本三国志』は、正統派歴史小説であると同時に、近現代という時代にたいする陳舜臣の熱い思いが濃厚に反映している。1924年、陳舜臣は神戸の中国人家庭に生まれた。父祖の故郷は台湾にあった。その後、第二次世界大戦が起きる。生まれ育った神戸の町は、戦災で焼け野原となる。近現代の激動を生き延びた陳舜臣は、時代に対して熱い思いを抱いた。なぜ近現代はこのような時代になったのか。人間はどうしたら民族や出自の壁を乗り越えて、真の平和を勝ち取ることができるのか。陳舜臣文学の底流を貫くものが、この真摯な問いかけである。『秘本三国志』にも彼の熱い思いが秘められている。

そこで、『秘本三国志』には一風変わった狂言回しが登場する。漢中の五斗米道の首領張魯の母少容は三十代半ばだが、信じられないくらい若くに見えるという想定である。黄巾の賊と言われる太平道が武装革命を起こすと違い、五斗米道は、非戦の福祉国家を作るのが目的で、少容は天下を平和にしてくれる英雄を求めて、たえず旅をして情報を集めている。各地を渡り歩き、少容は曹操こそこの乱世を修復することができる人物として、彼の事業に手を貸すことになったが、曹操は天下人としての力量に不足はないものの、孫権も侮りがたく、その勢力を呑み込むのは難しいと判断した。そこで、少年の諸葛亮が現れ、少容天下三分の計を披露し、曹操・孫権ともう一方の勢力に、五斗米道を加えてはどうかと言う。少容はこの申し出をきっぱり断り、別れ際に「劉備はどうでしょう」と付足気味に助言を与える。これで、天下三分の幕を上げた。

その後、天下は三分され、戦争の頻度やその地域は限られてくる。真の平和とは呼べないが、次善の策としての三国鼎立にはまず成功したと言ってよい。その頃には、五斗米道や仏屠の教えが大陸全土に広まっていた。少容、陳潜の奔走や努力の結果である。

陳舜臣は自分の平和への渴望を少容に託した。政局に積極的に手を伸ばし、乱世を早く終結させるため、少容は奔走するのであった。戦争を止めさせ、平和を実現する。これが少容の基本方針であり、陳舜臣の心の奥に切実に渴望しているものでもある。

## 二、虚構と真実の融合

『秘本三国志』の二つ目の特徴は、表面上は史実に忠実に出来事を追いながら、その裏

事情を大胆に創作しているところ。

陳舜臣の『秘本三国志』において各章の末尾に「作者曰く」というコメントがついている。その中には、史料をもとにして、歴史人物と事件を改めて判断を下した。例えば、曹操が呂伯奢の家族を誤って殺してしまう話に巡り、陳舜臣は『魏書』、『世説新語』と『雑記』を挙げて、『三国志』と比較しながら、曹操の罪を雪いだ。物事の成り行きに従わず、勝手なことも言わない。小説を読むと同時に、歴史に対しても深く理解することができた。陳舜臣は曹操という歴史人物に対して、好感を持っているかもしれない。確かに、『三国志演義』は曹操に対する描写は過激すぎる。そのため、曹操は多くの誤解を受けた。陳舜臣は自分の『秘本三国志』を通して、曹操の真実の姿を明らかにしようとする気持ちはわかりやすいであろう。これに対して、雑喉潤は『三国志と日本人』の中に、「地下の曹操は、後世に知己を得たと、にんまりしているかもしれない。」と評している。

さらに、陳舜臣の『秘本三国志』は曹操と劉備、諸葛亮と司馬懿など、敵対する者同士が裏でこっそり気脈を通ずるといふ八百長試合のような関係が、頻繁に描かれる。

例えば、「酒を煮て英雄を論ず」において、曹操は劉備に、二人が協力して英雄をつぎつぎ消していくと提案した。それには二人一緒にいては無理だ。相手の陣営に潜り込んで、敵のようなふりをしながら、内部から相手を崩してゆくという戦略だった。これによって、白馬の戦いで、関羽が袁紹配下の猛将顔良を一刀のもとに切って落とすことができた。これは袁紹の勢力をそぐための劉備の謀略だった、と推理する。そして、献帝の曹操暗殺の密詔も、「奸雄曹操打倒」のポーズをして、劉備が袁紹の陣営から発表したものだから、許都の曹操の暗殺計画の一味は、劉備を除いて一網打尽に殺され、曹操側内部の反対勢力は一掃された。

そして、曹操と劉備が相次いでこの世を去った。諸葛亮は、後主劉禅に「出師の表」を献じ、北の魏を討とうと出陣する。そのとき、張魯が司馬懿の密使として諸葛亮に会いに来た。魏の朝廷の中での司馬懿の地位は、微妙なものであった。蜀に大勝すると、朝廷は彼を肅清かねない。もし蜀が勝つと、魏の首都まで攻め上るには莫大な軍備と兵糧が必要で、かえって国力を傾ける恐れがある。お互い無用な損失を避けるため、ここは勝負なしの持久戦で対応することに合意した。さらにその司馬懿が、諸葛亮が死んでいると百も承知の上で、だまされたふりをして撤退するところで、物語が終わる。

作者は得意の推理小説の書き方をとり、史実に基づいて、合理的に推理を進めた。長い間、日中読者に困らせる三国時代のいくつかの疑問解き明かしたことができた。

### 三、独創的な人物像

『秘本三国志』の主人公が、劉備でも曹操でもない。漢中の五斗米教団の長である張魯の側近陳潜とその母親少容である。物語は、陳潜が張魯の母少容の指示を受け、太平道の教祖張角と接触するところから始まっている。『三国志演義』では悪役として描かれている五斗米道・太平道が、物語の中心になるわけである。少容と陳潜は非戦の福祉国家を作るために、中国各地を旅しながら、三国時代の鍵を握るさまざまな人物と関わりを持つ。

『秘本三国志』の中の曹操像は、正史『三国志』『後漢書』『資治通鑑』の記述や、作者自身の人間洞察・見識をもとに練り上げたものである。歴史観や人物評価は、基本的に正史『三国志』を踏襲している。また『三国志演義』が採用した後世的な潤色や脚色は、一部の例外をのぞき排除力をあわせ、時代を変えてゆく様を描くことにある。作者独自のフィクションも含むが、史実を曲げたり、史書の記述と矛盾する設定はない。そのため、曹操は「乱世の英雄」として、時代の先を歩く合理主義者として描かれている。また感情に富んだ彼の横顔を描くことにも力点が置かれている。

『三国志演義』で、山西省解州出身の武人・関羽が一番の英雄として美化された。しかし、『秘本三国志』の序盤から登場する劉備・関羽・張飛三兄弟は、他の三国志物語のそれとは大きく違っている。陳潜の加わる一行が孫堅の元に嫁入りする令嬢を送り届ける途中、花嫁を奪いに現れるのが劉備一党である。「女を置いて、さっさと消え失うせろ！」と、ヤクザなセリフを吐く関羽たち、地の分でも「根っから品が悪い」などと描写されていて、どう見ても、ただのならず者である。その後、関羽はさらに人妻貂蟬に横恋慕をし、死に直面すると精神的崩壊する様子もなかなかみっともなかった。

民間においては、孔明の軍略を褒め称え、神秘化している。しかし、『秘本三国志』では、戦は素人の諸葛亮を描き出した。正史では、諸葛亮の扱いは、途中から劉備陣営に加わった文士である。補給や兵士の訓練などを含め、国力の増強に尽力した。木牛流馬や兵器など様々を発明した。しかし、臨機応変の才に乏しく、軍権を握ったのも劉備の死後のことである。陳舜臣の『秘本三国志』では、諸葛亮の外交面の素晴らしさを詳しく叙述している。とくに、諸葛亮と司馬懿の八百長の試合を丁寧描いた。戦をしたいが、機会を得ず、戦の素人のまま死を迎えた諸葛亮の姿が印象に残っている。

他にもサディスト張飛、実は平和主義者の孟獲、悪知恵に長ける劉備とか、イメージを裏切るキャラクターが続々登場し、目に触れ耳にするものすべてが新しく変わる感じを下

さった。

## 第四章 日本近代における『三国志演義』の研究

### —「三絶」を中心に

#### 第一節 曹操の人物像について

本節は、主に渡辺義浩、金文京、井波律子ら三人の曹操に関する論考を中心にして、著者の著作視点を明確にするうえで、かれら三人の曹操についての研究の特色が一体どこにあるのか、また中国史上代表的な「悪役」として位置付けた曹操の本当の人物像はどうなるか、ということについて、実証的に解明していきたい。

曹操をひどい悪役に書かれた『三国志演義』は、後世、読者へ与えた影響は、非常に大きいと思われる。ここで、渡辺義浩氏は曹操の真の人間像を究明するために、『三国志』の



中の曹操像を取り上げて、『三国志演義』と比べながら、史書を忠実に正しく解釈することを行った。

そして、金文京氏の曹操に関する先行研究には、曹操の「悪」を二つ意味に分けて、特色な観点を論じたうえで、曹操を悪化される最も重要な「呂伯奢を殺し」事件を加え、『三国志演義』に於ける曹操は「奸絶」としての顔は如何に出来上がるのか、ということをも明らかにした。

最後には、井波律子氏は裴松之注『三国志』、『世説新語』などの『演義』に関する、古い史書の中の逸話を羅列し、『演義』はどのように諸書からヒントを与えられ、曹操に悪イメージを付けられるのか、ということについて、実証的に解明した。さらに、井波律子氏は曹操の奸雄と英雄という両面性をもつことを示したうえで、『演義』は曹操のプラス面にも提示していた意義も明らかにした。

本章においては、まず諸先行研究を参考として、渡辺義浩の論じた、『三国志演義』と『三国志』の中の曹操像を説き、そして異なった曹操像をもとにして、これに金文京氏と井波律子氏の独創的な「解説」を加え、近代日本における、曹操という歴史人物は一体奸雄であるか、それとも英雄であるか、ということをも明らかにしようと思う。

## 一、 渡辺義浩の曹操像

### (一) 『三国志演義』の曹操像について

#### 1、曹操の出自

京劇の臉譜では、関羽は赤、張飛は黒、そして曹操は白である、白は不吉と悪を象徴する、『演義』における曹操は、まさに悪の代表である。曹操が最初に『演義』の悪役となったのは宦官曹騰の孫という出自に起因する。『演義』は曹操初登場シーンの紹介で、宦官の家系に生まれたことを記す。

ここで劉備と曹操の生い立ちが語られる。一方は幼いころよりすでに偉大で、一方は幼いころよりすでに奸悪なのである。一方（の劉備）は中山靖王の末裔で、もう一方（の曹操）は中常侍（宦官が就く最高位。曹騰も就いていた）の養孫である。（両者の）高低がすでに分かる。（第一回総評）

唐代以降、異姓養子は律（刑法）により禁止されていたが、依然として明清時代にも続

けられていた。しかし、それは悪である、という社会通念を利用して、毛宗崗本は、初登場の場面から、曹操を貶めているのである。<sup>294</sup>

曹操は「奸絶」と称される『演義』最大の悪役である。なぜかという、曹操こそは、正義陣営の親分である劉備の前に立ち塞がるライバルであること、漢王朝を終わらせた真の篡奪者であること、そして宦官曹騰の孫という出自などに起因すると思われる。『演義』は曹操初登場シーンの紹介で、宦官の家系に生まれたことを記す。この生まれの曹操が景帝の玄孫である劉備と同列に語れないであろう。

## 2、曹操の性格

曹操は支配権を握り支配者として圧倒的な力をふるう一方、同時に多くの人間を傷つけた。『演義』で強調される曹操の残忍性・狡猾性は、儒教の忠節の対象であり、理想化されていた漢王朝の皇室に対しての行為に顕著に現れる。

『演義』の第二十回では、呂布に徐州を奪われた劉備が曹操に身を寄せると、曹操への対抗手段を得た献帝は、劉備を大観迎する。漢帝室の系図を読み上げさせた献帝は、劉備を自分の叔父として皇叔と呼んだ。曹操は面白くない。ある日、献帝の狩りに同行した曹操は、天子の弓矢を取り上げて鹿を射る。万歳を唱える臣下の慶賀を、天子を遮って自分が受けた。臣下が顔色を変える、それを監視するのである。これに最も憤った者は献帝であった。悲憤慷慨した献帝は、皇后の父である伏完と相談し、曹操誅伐を命じた密詔を縫い込んだ玉帯を車騎將軍の董承に下賜した。董承は、王子服・馬騰などの同志を集め、血盟を結ぶ。

劉備も見咎められた。万歳を受ける曹操に、関羽が斬りかかろうとしたのである。慌ててこれを抑えた劉備は、曹操の弓の腕前を褒めた。董承より密詔を見せられ、血盟に加わってからは、畑仕事に精を出して韜晦に努める。曹操に呼び出された劉備は、「天下の英雄は、君とわたしだけだ」と探りをいられる。あっと驚いた劉備は、思わずはしを落とすが、たまたま響いた雷鳴にかこつけ、その場をごまかすことができた。<sup>295</sup>

また第六十六回では、伏完の造反計画が露呈した際、捕らえられた娘の伏皇后に対して曹操自らが罵倒し、その場で打ち殺させるという残忍さを見せ、毛宗崗も註釈で痛憤して

---

<sup>294</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、頁75。

<sup>295</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.83。

いる。この件は裴注の『曹瞞伝』を元に作られた場面であるが、曹操自らが皇后を罵倒して殺害させたとするのは『演義』の創作である。

『演義』はこのように、曹操の献帝・漢室への対応を悪意にのみ描く。曹操がその遺言においても、遺される女性の身の振り方を細かく指示しながらも、献帝から禅譲を受けよとは命じなかったことについて、毛宗崗本第七十八回総評は、「臨終の遺命は、禅譲よりも大事なことはない。それなのに家の者や婢妾の身の振り方については詳しく言い渡しながら、禅譲の事は何一つ口にせず、後世の人々に、自分は国を篡奪する心がないのだと信じ込ませ、子孫は悪名を蒙るけれども、自分はそうならないように避けようとしたのである。……曹操はまことに奸雄の最たるものである。曹操の生涯には真実などなく、死に及んでもなお偽りであったことは、(禅譲を隠すために言い遺した夫人や妾に) 香を分け履を売れとした遺言がまさにそれである。」と言いながら、曹操の「偽」を強調する。

曹操が創り上げたこの漢を篡奪するマニュアルは、「魏武(魏の武帝と追尊された曹操)の故事」と呼ばれて、中国における禅譲のモデルとなった。<sup>296</sup>

こういった漢室への悪行は、ライバル劉備が漢室の末裔という高貴性を受け継いでいるのと対照的に、ことさらに篡奪者としての悪印象を植え付けるための措置でもある。『演義』編者にとって王朝篡奪は許し難い悪行であり、憎悪の対象は曹操しかいない。

## (二)『三国志』の曹操像について

近年、曹操に対する評価が大きな振幅で揺れ動く要因の一つとして、曹操という人物のスケールの大きさと多面性が挙げられた。正史『三国志』の著者である陳寿は、曹操を「非常之人」と評している。この時代の他の人物に比して、曹操は群を抜いた存在である。

### 1、兵法家としての曹操

曹操には大きく分けて3つの顔がある。第一に挙げられるのは軍略家としての顔である。

#### ①書物の編纂

曹操にとって天下分け目の戦いは官渡の戦いであった。赤壁の戦いで大打撃を被った印象をうけるが、曹操は「赤壁では疫病が流行って死者が多くなったので兵を退いた」敗戦後も言い続けた。むろん、負け惜しみであり、天下統一が赤壁の敗戦で頓挫したことは事

<sup>296</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.84。

実である。敗因は、慣れない水戦と油断にあらう。

曹操、というよりも、それまでの中国史では、戦いは騎兵を切り札とする陸戦で決するものであった。長江流域の勢力が、黄河を支配した勢力を水戦で破ったことは、赤壁の戦いを始まりとする。華北を中心とした黄巾の乱、および折からの地球規模での気候変動による寒冷化は、長江流域の人口を増加させていた。長江中下流域を支配する孫呉、上流域を支配する蜀漢が、曹魏に対抗して三国鼎立を実現し得た地球環境上の理由である。諸葛亮と魯肅は、かかる中国史上の大きな変革期に適合した戦略として、目的と手段は異なれ「天下三分」の戦略を掲げるのである。

また、後に劉備が支配する益州からは、劉璋が曹操に恭順の意を示すため軍隊を派遣していた。荊州を支配していた劉表の水軍が曹操に降服しただけではなく、孫権の一族からも内応者が出ていた。圧倒的に優勢な状況の中で、曹操に油断がなかったと言えは嘘になる。その証拠に、曹操は赤壁の戦いに火攻めで敗れている。自らが研究し、注釈をつけた『孫子』<sup>297</sup>が深く警戒すべきとしている戦法である。

『三国志演義』では、蜀の使者張松に、曹操の才能を誇るため、楊脩が書物を見せる。全十三篇、用兵の肝要な方法をすべて述べてあるという。「これは丞相が、古のことを参考にしながら現在を基準とし、『孫子』十三篇にならって著されたものである」と、楊脩は紹介する。これが『三国志演義』の創作した『孟徳新書』である。史実でも、曹操は『孫子』『呉子』の兵法に基づき自ら兵書を著し、配下の諸将が曹操の「新書」を規範と仰いで各地を転戦した。この「新書」の名は『兵書接要』というが、すでに散逸している。『三国志演義』は、孟徳が著した「新書」であるから『孟徳新書』と名付けたのである。<sup>298</sup>

君主個人の兵学研究の成果を部下の将軍に持たせ、統一的な作戦行動をとらせたということは、長い中国歴史の中で、曹操以外には見出せない。

さらに、『兵書接要』のあと、曹操の兵学家としての功績は孫氏の兵法に注釈を入れて、一つの文献に纏め上げたことが一番大きいと思われる。その成果は『孔子』注として今日に伝わっている。

曹操は『孫子』注の序文に、自分はこれまで数多くの兵書を博覧したが、孫武の『孫子』が最も優れている、と記す。そして、『孫子』の兵法の極意は、緻密な計算の後に慎重に軍

---

<sup>297</sup> 『孫子』(そんし)は、紀元前500年ごろの中国春秋時代の軍事思想家孫武の作とされる兵法書。武経七書の一つ。古今東西の兵法書のうち最も著名なものの一つである。

<sup>298</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.90~91。

を挙げ、錯綜した状況を明察・深謀するところにある。あやふやな知識で軍事を語るべきではないので、これまでの注を退けて自分が注を作る、と執筆動機を述べている。<sup>299</sup>

兵書『孫子』を現在残る13篇に編纂した曹操はそれほどまでの兵学者としての力をもっていることは確かである。彼の『孫子』注は、最善の解釈として、こののち『孫子』を読む者が必ず参照する書物となった。

## ②優れた統御術

曹操が兵法家として素晴らしいところの2つ目は、帰順された軍隊・武将への統御術である。

### I、軍隊・将軍への統御

初平(191)二年に、兗州牧となった曹操は、青州黄巾と激しく戦いをしている。やっと、黄巾を済北に追い詰め、戦士三十万・非戦闘員百万を降服させ、そこから精鋭を集めて「青州兵」を組織した、と『三国志』武帝紀は記録する。

青州兵はこの後、曹操の直接的な軍事基盤となり、曹操の覇権実現を支えていく。だがその反面、曹操直属軍であるためか、青州兵は特権意識を持ち、友軍を略奪するなどの横暴を行うこともあった。これに対して曹操は、青州兵の横暴を許さなかった于禁の対応を称賛し、青州兵を庇うことはなかった。これとは逆に劉璋は、青州兵と同質の直属軍である東州兵の横暴を容認して政権を弱体化させている。<sup>300</sup>このように曹操は、軍隊を厳格に統御できている。

そして、曹操は武将への統御については、すべての降服された将軍は、一万を超える兵力を率いることは少なく、曹操期の方面軍司令官は、ほとんど曹氏一族と親族の夏侯氏で占められていた。また、李典が同族と配下の者一万三千人余を鄴に徙すことを願い出て、曹操に観迎されたように、将軍と配下の兵力とが個人的に結びつき、地方で割拠することは警戒された。<sup>301</sup>

これこそは『孫子』研究の第一人者である曹操の統御術である。曹操は、軍隊だけではなく、平定した各群雄の将軍や降服・随従した自立勢力を厳格に統御できた。

<sup>299</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.92。

<sup>300</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.45。

<sup>301</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.46。

## II、適材適所

曹操がこと戦役において、袁紹・呂布・袁術ら他の群雄と比べ瞭然として勝っていた部分は、部下の進言・献策を的確に見極めて取捨選択し、利己心無しに受け入れる能力と言える。多くの重要な戦役においては、それらによって曹操が一時不利な状況から勝利を収めた例が少なくない。

例えば、中原の覇権をかけて袁紹と戦った「官渡の戦い」において、両軍は陣地をめぐって、長期戦が始まった。しかし、戦いの長期化により、曹操軍では兵糧輸送が滞り始める。さすがの曹操も弱気になって、留守を預かる荀彧に撤兵すべきか否かを相談した。荀彧は情報を分析し、勝利を確信していたので、抗戦を続けるよう曹操を励ました。兵糧に苦しんだのは袁紹軍も同じである。袁紹は淳于瓊に輸送隊を迎えに行かせた。このとき、袁紹に献策を無視され続けた名士許攸が、曹操に帰順する。袁紹は、どの名士の献策に従うべきか、判断できなかつたのである。

許攸は、淳于瓊が烏巢で守る兵糧を攻撃することを曹操に進言する。その信用性を危ぶむ声もあったが、荀攸と賈詡の勧めもあり、曹操は精鋭を率いて烏巢を攻撃、淳于瓊を破り兵糧を焼き払った。袁紹は、淳于瓊を救援する一方、曹操不在の官渡を張郃・高覽に攻撃させる。しかし、淳于瓊の敗退を聞いた張郃たちは曹操に降服、袁紹軍は総崩れとなり、官渡の戦いは曹操の勝利に終わったのである。<sup>302</sup>

しかし、曹操は利害が絡まないと厳しい対応を取る事も少なくなく、不遜な態度をとったことを理由に許攸を処刑したこともある。

このような、曹操は適材適所もわきまえており、『魏書』には「任された将兵は立場をよく理解し、自らの武と奇策をもって難に向かった」との記述が残る。荀彧によれば、曹操軍の軍法軍令は明白で、賞罰も的確に行われていた。

### 2、政治家としての曹操

曹操の政治的功績として代表的なのは、献帝の擁立、新しい「屯田制」の施行と「文学」の宣揚である。

#### ① 献帝擁立

---

<sup>302</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』（講談社、2012年6月）、p.53。

話は父曹嵩の死に遡る。曹操が河南の兗州に進出すると、袁術は曹操を攻撃する。迎え撃つ曹操は、匡亭の戦いで袁術を大破し、九江まで追い詰めた。これに対して、徐州牧の陶謙が、曹嵩を殺して報復する。徐州を劉備に譲ったため、『演義』ではよく書かれる陶謙であるが、史実では、名士を弾圧して商人を厚遇するなど、公孫瓚と同質の政権構造を有する袁術派であった。

曹操は父の死に冷静な判断などできなかった。復讐のため徐州に侵攻、民を含めた大虐殺を行っていく。これは曹操生涯の汚点となり、また名士の失望を招いた。焦った曹操は、虐殺を批判した兗州名士の長老辺讓を殺害する。完全な逆効果であった。第二次徐州遠征の際をつき、兗州名士の陳宮は、曹操の旧友張邈とともに、呂布を引き入れ兗州で反乱を起こす。この曹操最大の危機に、拠点を守った者が、荀彧・程昱と夏侯惇であった。一年あまりをかけて兗州を回復した曹操に、荀彧が正統性の回復の切り札として提案したこと、それが献帝の擁立である。

同じころ、袁紹は献帝を擁立するようにとの沮授の献策を却下していた。自らが擁立した皇帝を殺害することは、義帝を殺害した項羽が圧倒的な強さを持ちながら、やがて劉邦に敗れたように、自滅を招くからである。そのため曹操は、自分の代には漢を滅ぼせなくなった。それを承知のうえで、なお荀彧の進言に従ったのは、徐州での虐殺の汚名返上のため、そして新たな拠点の維持のための英断であった。荀彧の影響力により潁川郡を固めた曹操は、張楊を通じて使者を派遣、董昭の口添えもあって献帝を迎えることに成功する。献帝を迎えた曹操は、洛陽を制圧し、司令校尉・録尚書事となり、のち司空・車騎將軍を兼任する一方、このことにより、漢の復興を大義名分として掲げ、名士の支持を回復することができた。<sup>303</sup>

献帝の擁立は、名士の支持を回復する要因であった。ただし、この件は二面性を持つ。曹操にとって、献帝の名により他の群雄に命令を下すとともに、「漢」の復興を大義とする名士の支持を回復できるという有利な側面を持つ。一方、曹操は、これ以後勢力を拡大するとともに、「漢」を背負って、漢室復興を掲げ続けなければならない。言い換えれば、曹操はこれから漢を滅ぼせないのである。

## ②屯田制

拠点を豫州に遷した曹操は、権力の基盤である農民支配を確立するため、許の周辺で屯

<sup>303</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.85。

屯田制を開始する。屯田とは、戦乱のために耕すものがなくなった農地を官の兵士が農民を護衛して耕させる制度である。曹操までの屯田制は兵糧を確保するため、駐屯地で軍隊が戦闘時以外に耕作を行う軍屯であった。軍屯は、中国の各時代のみならず世界各地で行われている。これに対して、曹操は、軍屯だけではなく、一般の農民に土地を与える民屯を行った。

これまでも、豪族の大土地所有により土地を失った農民が流民化し、社会が不安定になったことに対し、土地所有を等しくしようとする政策は、何回か試みられてきた。しかし、それらはすべて失敗している。みんな豪族の大土地所有を制限し、その土地を貧民に分配しようとするものであった。しかし、支配領域の有力者を殺して財産を分配すれば、統治が流動化する可能性があり、そもそも殺せる保証もない。

そこで曹操は、豪族や名士の持つ大土地には手をつけず、戦乱で荒廃し放棄された土地を整備して流民を呼び寄せ、種籾を与え、耕牛を貸して、かれら自身に稼がせ、その収穫の六割を税として徴収した。社会が不安定である理由は、大土地所有者がいるためではない。流民が生活できないからである。かれらが安定した資産を持てば、共産主義のような平等は必要ない。これが曹操の時代を創造する新しさである。<sup>304</sup>

この先進的な屯田制によって潤沢な食料を抱えることになった曹操は、各地の民衆を大量に集めることができるようになった。さらに、後漢の群雄割拠の中でそれほど出自動的に有利ではない曹操が、他の群雄を退け勝ち残る理由の一つとなった。曹操の死後も財政を支え続ける。

### ③唯才主義

赤壁の戦いに敗れた曹操は、天下の統一よりも内政に重点を置くようになる。儒教によって守られている「聖漢」を変革するためには、儒教の枠内に止まる猛政を推進するのみならず、儒教に挑戦していくことが必要となる。このために、曹操の掲げた人事基準が唯才主義である。

(建安)十五(210)年春、(曹操は)令を下して言った、「……もし必ず〔廉潔な士であってはじめて起用すべきだとすれば、斉の桓公はいったいどうして天下の覇者となれたのか(廉潔ではない管仲を用いたからである)。いま天下に粗末

<sup>304</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.86。



な衣服を着ながら玉を抱いて渭水のほとりで釣りをしている（太公望呂尚のような）者がいるはずないと言えようか。また嫂と密通し賄賂を受け取り（食欲ではあるが、陳平のような才能をもちながら）、（陳平を見出した魏）無知にめぐり合っていない者はないだろうか。二、三の者よ、わたしを佐けて下賤の地位にいる（才能のある）者を明らかに宣揚せよ。〔唯才〕能のみを（基準として）挙げよ。わたしはその者を用いよう。』（『三国志』武帝紀）

曹操は、管仲のように食欲であっても、陳平のように嫂と密通し賄賂を受けても、〔唯才〕だけを基準に察挙を行うことを天下に宣言した。これは、明らかに儒教からの逸脱である。そのうえで曹操が、儒教を相対化するために選んだ文化、それが「文学」である。

唯才主義は、恣意的で統一的な基準が存在しなかった名士の人物評価への挑発でもあった。名士の主観的な鑑識眼は、果たして有能な人材を見分けられるのか。漢の儒教が前提としていた、人の「性（生まれながらの性質）」と「才（発揮できる能力）」との一致、それは自明のことなのか。こうした曹操の問いかけに対して、名士は自分たちの人物評価を理論化する必要に迫られた。やがて議論されていく「才性四本論」（才と性が一致するか否かを論ずる）は、これに答える一つの試みである。<sup>305</sup>

曹操は弛緩してしまった後漢「儒教国家」と対立し、儒教に拘らず、自分の君主権力を確立できる新たな国家を目指した。漢を支えていた儒教の枠組みを打倒するため、曹操は新たな人事基準を掲げた。これが、魏公就任から本格化する漢篡奪への動きであろう。

### 3、文学家としての曹操

#### ①「建安文学」の興隆

名士を成り立たせているものは文化である。儒教の優越性を梃子に文化的諸価値を専有する名士に対抗するためには、新たな文化的価値を創出し、名士のそれを相対化するか、すべての価値を群主権力に収斂する必要がある。曹操は儒教を価値と中核に置く名士に対抗するため、新たな文化的価値の創出を試みていた。それが「文学」である。

文学を宣揚した曹操ですが、彼自身も文学者としての顔を持っています。曹操は文人たちと文学サロンを形成し、当時軽んじられていた民間の形式である五言詩（五字を一句とする詩の形式）を主とする「建安文学」を打ち立てました。

<sup>305</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.66。

中国史上初の自覚的な文学活動と評される建安文学を主導した者は曹操である。儒教一尊の後漢において、文学は政治や道徳に従属し、文学者は卑しい俳優と同列の扱いを受けた。そもそも「文学」という言葉自体が、曹操のときには、儒教を意味する概念であった。

現在では中国文学の起源とされている、周代の詩を輯めた『詩経』は、詩が成立した時の原義とは異なり、その詩を政治的に解釈することで儒教経典の一つとなっていた。曹操は、それを踏まえただけで、新たな文化的価値として詩を宣揚し、楽府（楽曲を伴う詩）によって自らの正統性と志を詠いあげたのである。そうした行為もまた、『尚書』舜典の「詩は志を言う（詩言志）」という儒教の経義に則したものであった。<sup>306</sup>

曹操は文学者としてのすごいところは、全く新しい文化を創造するのではなく、名士の存立基盤である名声の価値の根底に置かれた儒教を踏まえながら、「文学」を宣揚したところにある。その結果、名士は「文学」を無視できなかった。

曹操自身も「苦寒行」「短歌行」などのすぐれた作品を残しています。曹操の楽府は、相和歌に分類される。相和歌は、笛を中心とした七種の楽器を伴った音楽で、宮中の宴会で演奏される。曹操は、自らが周の文王であることを歌っていた。文王の子である武王は、殷を滅ぼして周を創設する。「自分（曹操）は周の文王であり、天子（献帝）を奉ずるが、子（曹丕、武王に準える）には天子の地位を譲るように」。このような詩を宴席で歌われた献帝の胸中は、いかなるものであったろう。楽府は、大勢で唱和する。群臣はあまねく、これを唱和させられたのである。易姓革命の正統性を歌で言祝がされたと考えてよい。曹操の「文学」は、自分の正統性を奏でる手段として、そして、儒教を超える新たな価値として宣揚されたのである。

曹操は、それを明らかにするために、人事の基準を「文学」に変えようとした。文学者の丁儀を丞相西曹掾（人事官）に就け、「文学」を基準とした人事を始めたのである。後漢の郷挙里選は、孝廉など儒教的な価値基準により官僚を選出していた。このため、知識人はみな儒教を学んだ。この基準を「文学」に変えることより、その価値を儒教を超えるものにしようとしたのである。<sup>307</sup>

このような曹操のサロンから発展した建安文学は、中国史上、最初の本格的な文学活動と評される。曹操は自ら五言詩の楽府を作成し、志と正統性を高らかに歌った。それまでも、自分の内的な価値基準において、文学を最高の価値に据える者はいた。しかし、唐

<sup>306</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.70。

<sup>307</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.76。

以降の科挙のように、詩作などの文学的才能が評価されて、高い官職に就き得る状況は、曹操から始まる。曹操は、五官将文学など文学を冠する官職を創設し、文学の才能を基準に就官させた。

## ②後継者問題

実は曹操の後継者は、すんなりとは決まらなかった。曹操は多くの跡取りに恵まれたが、とくに文学に秀でた曹植を寵愛し、曹操が名士層に対抗するための文化的価値として文学を尊重すればするほど、後継者争いで曹植が有利となるのであった。一時は後継者に擬するほどであった。名士層の根底にある儒教的価値基準では、長子が後継者となるべきであった。荀彧の娘婿として荀彧・荀攸なきあとの潁川名士の中心であった陳羣は、儒教の経義に基づき、長子である曹丕の後継指名を積極的に支援する。

曹操は悩んだ。果敢な曹操が、後継者の指名という権力者にとって最も重要な決断を遅らせた理由は、曹植の文学的才能により「文学」の地位を確立して、名士に名士層に対抗するという魅惑的な選択肢に目が眩んだからである。しかし、赤壁の戦いで敗退し、その結果、蜀漢・孫呉政権が力をつけたことで、名士層の協力を断ち切って、君主権力の確立を目指すことはできなかった。

結局、曹操は曹丕を後継者に指名する。この曹操の迷いは高くついた。曹丕は、自分を支持してくれた名士層に借りを作ることになった。曹丕が後漢を滅ぼして曹魏を建国する際に陳羣の献策により制定された九品中正制度は、その現れと考えてよい。この制度を利用して、のちに司馬氏が台頭して、曹氏の政権を奪い、西晋を建国することになるのである。<sup>308</sup>

今の人の考えによると、後継者は長男優先ではなく本当に優れた息子に継がせるべきというのが基本だったのである。しかし、当時儒教の経義に基づき、曹操は長子である曹丕への後継指名も英断である。それでも、曹操が「文学」を宣揚して、儒教に対抗したことは無意味ではなかった。その後、曹丕の漢魏革命を推し進め、魏の建国のきっかけともなる。

## 4、新たな時代を創造した英雄

---

<sup>308</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.90~91。

## ①律令体制

律令制の祖形は、古く秦・漢期まで遡るともいわれているが、当時は単行の法令あるいは必要に応じてそれらを集成・整理したものに過ぎず、まとまった法典の形式は取っていなかったと考えられている。厳密に言えば、律令制は中国の魏晋南北朝時代において出現し、徐々に形成されていった。後漢末期から戦乱の時代が長く続き、中国の社会は混乱を極め、ほとんど崩壊に至っていた。こうした社会の再建のため、魏に続く諸王朝は、王土王民の理念による統治を指向するようになったのである。

曹魏は、戦乱によって耕作者がいなくなった田地を人民に支給して軍糧を徴収する屯田制と、兵役義務を持つのは兵戸であり他の一般戸と区別する兵戸制を採用していた。また、税制としては、土地面積ごとに一定額の田租を賦課する定額田租と、戸ごとに物納を課する戸調を行っていた。これらの制度は、その後の諸王朝も継承してゆき、律令制の基礎を形成することとなった。明帝の時代に魏新律が編纂されて初めて律の法典化が実施されたものの、令に関しては州郡令・尚書郡令・軍中令に分かれており法典としては不完全なものであった。魏の次の西晋は、土地制度は占田・課田制を新たに布き、兵制・税制は前代の兵戸制・戸調制を概ね継承した。西晋の 268 年には泰始律令が制定され、これが最初の律令法典だとされている。この後、名君の呼び声高い唐の太宗李世民が布いた律令体制こそは、この曹魏の政策を発展させたものであった。

## ②五言詩

前漢の時、民間の歌謡を収集する楽府という役所が設けられ、そこで集められた歌謡、あるいはそれ以後の歌謡は「楽府」と呼ばれた。楽府は詩に楽曲が伴ったものであったが、やがてその楽曲は失われ、楽辞と題のみが伝えられた。楽府では句の長短が不揃いのものがあり、これは雑言詩と呼ばれる。また前漢の民間歌謡から一句が五音にそろえられた五言詩が生まれ、後漢になると文人が五言詩を作り始めた。

実はこの五言詩の定型が成立したときを確知することはできない。後漢の末「建安時代」(196-220)の文人たちがこれを作りはじめた。「古詩一九首」などはこれに先だつらしい。それは「楽府」の民謡の形式にいきさか手を加えて成ったものと考えられる。建安時代、曹操、その子丕、植らをめぐる宮廷文人の一团を「建安七子」とよぶ。彼らの作品は民謡の形式に古典の用語を加えたものであった。五言詩の句形と脚韻の原則とは、このころ確立された。

唐の時代に入ると詩は宮廷を離れ、李白、杜甫、王維らによる詩の黄金期が築かれた。唐代の詩のことを唐詩と呼び、特に盛唐の李白・杜甫の詩は後世「詩は必ず盛唐」と呼ばれるように、模範とされたが、この五言詩を文化として高く評価することを始めた者こそ曹操である。

『三国志演義』の影響によって悪役としての評価がほとんど定着してしまった曹操であるが、結局後世に素晴らしい「体制」・「文化」を遺した。ついに毛沢東が中華人民共和国を建国した後、彼の主導の下、曹操再評価運動が大々的に行われた。三国時代だけではなく、長い歴史の中に曹操を位置づけた時、「乱世の奸雄」曹操の「奸」は、「英」となる。新たな時代を創造した曹操は、三国時代を超えて高く評価されるべき英雄なのである。

### (三) 渡辺義浩の曹操像の特質

この渡辺先生の論じる曹操像に拠れば、小説『三国志演義』と史書『三国志』の中、曹操についての人物描写が大分違うことがわかった。

『三国志演義』の世界で、曹操がもっとも憎々しげな奸雄の貌をあらわした姿で描かれるのは、彼の卑しい出身から始まった。さらに、献帝、伏后や劉備など漢王朝の人々に対して、彼のやり方は冷血・利己イメージがくっきりと示した。『演義』は、こうした逸話をのっけから羅列することによって、残忍な、利己的な曹操像を、読者の脳裏にインプットするのである。

史実の曹操には、皇帝である献帝を蔑ろし、権力を握っていた事、徐州に於ける虐殺、名士たちを処刑した事、名医と言われた華佗の殺害など、儒教思想的に非難されるべき行為が見られるが、時代が下るにつれ、このような苛烈な処置が強調され、様々な業績は陰に隠れていくこととなる。

実は、史書に由来する曹操の優れた面の記載は少なくなかった。戦場で鮮やかな詩賦を詠み、関羽への思慕を隠さず、能力重視で人材を活用する姿勢など、スケールの大きな戦略家としての側面、人材を貪欲に求める名君としての魅力も随所に織り込まれている。ことに、渡辺先生が曹操を最も高く評価する理由は、文学の宣揚である。曹操は、儒教の価値を相対化するために文学を用いた。これは一般人では思いつかない恐るべきやり方であろう。曹操自身も「短歌行」などの名作を残しているが、曹操の文学から始まる建安文学は、中国史上最初の本格的な文学活動である。

曹操の後世への影響について、名君の呼び声の高い唐の太宗李世民が布いた律令体制は、

太宗が一から創造したものではなく、彼の政策を発展させたものである。唐に全盛期を迎える五言詩もまた、文化として高く評価することを創めた者も、曹操こそである。毛沢東が中華人民共和国を建国した際、曹操の再評価を命じたように、三国時代だけではなく、長い歴史の中に曹操を位置づけた時、曹操の「奸」は「英」であることが分かるであろう。

## 二、金文京の曹操像

### (一) 曹操の「悪」

臉譜<sup>309</sup>は、京劇の特徴が非常によく出ている特別な化粧法である。歌舞伎の隈取りに似ているが、それは役者が色と形で自分の顔をキャンパスにして描きだすものである。そこには、中国人の持つ色に対するイメージ、形に対する感覚が表現されているのである。

隈取りは、どんなに色を使っても、臉紋がどんなに複雑になっても、必ず一種類の主色で、人物の個性を表す。至誠、赤誠である関羽は紅で、廉直、正義の裁判官である包公は黒である。そして、白には猜疑、陰謀の気象が宿る。奸智に長けた武将は白を使う。曹操など典型的である。薄い白は必ずしも大「悪」という訳ではない。眉や目が細く描かれていればいるほど、奸計に長けた大「悪」人である。

実は、中国語の「悪」には二つ意味がある。一つはワルイ、もう一つはツヨイ。したがって曹操はワルイやつであり、ツヨイやつである。ちなみに「善」にも実は二つ意味がある。すなわち一つはヨイ、もう一つはヨワイ。「怕恶欺善」は、「悪をおそれ善をあざむく」ではなく、「強きをおそれ弱きをあなどる」という意味である。ではヨイひとでヨワイひとは誰か。言わずと知れた劉備である。劉備が「善」である以上、曹操は「悪」であらねばならぬであろう。そうでなければ『演義』の世界は正立しない。曹操が「悪」でなければ、劉備はただのヨワイひとではないだろうか。

歴史上の曹操は、たしかにツヨイやつであった。しかし、果たしてそんなにワルイやつでもあったかといわれると、実は疑念が残る。ツヨイゆえにワルイ、という論理が多分に働いているような気もするのである。

たしかなことは、曹操はツヨイやつであったと同時に、当時一流の詩人、文化人であったことである。赤壁の戦いの前夜、かれが槊を横たえて歌った、例の「月明らかに星稀に、鳥鵲南に飛ぶ」というあの詩は、たしかに曹操の自作であった。戦いには敗れ、すっかり

---

<sup>309</sup> 臉譜(れんぷ)は、京劇における隈取。もと仮面劇に由来するもので、色には赤、白、黒、黄色、緑などがあり、豪傑役や道化役あるいは動物役が顔に施すもの。

ワルイやつにされてしまったが、小説のなかで自作の詩を披露することができたのであるから、もって暝すべしであろう。文学に無縁な劉備などは論外としても、孔明はせっかく「梁父吟」という詩を作ったのに、小説のなかではそれを歌わせてもらえなかった。彼の岳父、黄承彦が婿の作として吟じた「梁父吟」は、なぜか全然別の詩である。詩人がワルイやつであったとしても、一向に構わないであろう。<sup>310</sup>

## (二) 呂伯奢事件の真偽

小説『三国志演義』は、三国時代に取材した作品である。したがって中の内容は、むしろ三国時代の歴史事実にもとづいている。しかし、中に書かれていることがすべて歴史事実と合致しているとは言えない。

こころみに三国時代の実録である陳寿の『三国志』と『三国志演義』をつきあわせてみれば、大部分の人物と事実の流れは一致するものの、事件の細かい経緯となると、事実とくい違うもの、あるいは史書には全く見えないフィクションが意外に多いことに気がつくであろう。清代の歴史学者、章学誠は、これを「七分実事、三分虚構」(『丙辰札記』)と言って、読者を惑わすものだと非難した。

しかし文学作品、ことに『三国志演義』のように民間の講談に起源をもつ通俗文学の世界では、それではこまるのである。そこでの物語は、誰でもが読めば容易に納得できる明らかな因果関係のもとに語られ、しかも読者の興味を引っぱってゆくだけの魅力をそなえていなければならない。そのためには史実をさまざまなかたちでアレンジし、場合によってはフィクションを用いることも必要となってくる。<sup>311</sup>

その手法として、大きな史実のなかに小さなフィクションを効果的に加えるのが著しい。これも史実の利用にはちがいないが、一連の史実のなかに一部だけフィクションを加えることによって、テーマや人物像を強調する画竜点睛的な効果をもつ。たとえば、曹操が呂伯奢を殺した話がよい例である。

### 1、史実に加えられたフィクション—呂伯奢殺し・陳宮

この帰郷の際の有名な逸話が呂伯奢の家族の殺害である。董卓の暗殺に失敗して逃げた曹操が、身をよせた父の友人、呂伯奢の家で、疑心暗鬼からあやまって家族を皆殺しにし

<sup>310</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.169~170。

<sup>311</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.16~17。

たうえ、わざわざ酒を買いにいった呂伯奢の命までもうばい、「むしろ我れをして天下の人に負かしむるも、天下の人をして我れに負かしむなかれ」とうそぶく話は、曹操という奸雄の正体を読者の前にはじめてあばいてみせる印象的な場面である。

曹操が呂伯奢の家族をあやまって殺したことは、『三国志』の「武帝紀」の裴松之注に引く『世語』や孫盛の『雜記』に見える。しかし、その後に呂伯奢までも殺したとは両書ともに書いていない。これは『演義』の創作であるが、さらに、曹操の冷酷さを強調されることに役に立つであろう。

ちなみに、『演義』ではこの時、陳宮が同行しており、曹操の言葉を聞いて愛想を尽かしてしまうということになっているが、これもフィクションである。陳宮はもと曹操の配下であったがのちなぜか曹操を裏切って呂布についてしまう。史書では裏切りの理由がはっきりしないので、『演義』は、曹操の正体を知りながら彼を見逃した中牟県の役人を陳宮ということにし、陳宮を曹操と同行させて呂伯奢殺しを目撃させ、呂布への寝返りを合理的に説明したのである。『演義』が史料をよく読みこんで周到に話を組み立てることを示すよい例であろう。<sup>312</sup>

## 2、複数の史実からの選択—史実と真実

曹操が呂伯奢の家族を誤って殺してしまう話が、『世語』と孫盛の『雜記』にもとづくことはすでに述べた。しかし『三国志』「武帝紀」の注では、実はもうひとつの異説をあげている。それは王沈の『魏書』に見える話である。

太祖（曹操）は、董卓の計画は必ず失敗に終ると判断したので、けっきょく任命に応じず、郷里に逃げ帰った。数騎の供をひきつれ、旧知の間がらにある成皋の呂伯奢の家にとちよった。呂伯奢は留守で、その子ども達は食客とぐるになって太祖（曹操）をおどかし、馬と持ち物を奪おうとした。太祖（曹操）はみずから刀を手にして数人を撃ち殺した。

王沈（魏）、『魏書』

そこでは呂伯奢の家族が曹操を脅して、馬と荷物をとったので、曹操はやむなく彼らを殺したということになっているのである。先の話とはまるであべこべであろう。『三国志』

<sup>312</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、p.36。



の注は両説を併記するだけで、どちらが正しいとも言っていない。<sup>313</sup>しかし、『魏書』とは、王沈によるもので、魏の高貴郷公（曹髦）の頃の著作で、当時の権力者司馬氏の意向に沿った記述と評されていますが、もちろん魏を正当化する記述になっています。当然曹操も正当化されている。この『魏書』の記述は、曹操によるこの事件に対する弁明を記述したものと考えてよいでしょう。

これまで史実とフィクションを分けて論じてきたが、両者の境界は決してはっきりしたものではない。特に『三国志』の場合、晋（265—420）の陳寿が本文を書いたあと、劉宋（420—479）時代の裴松之（372—451）が当時のこっていたさまざまな文献を整理して注釈を施している。『三国志』と同じく正史に列せられた『史記』『漢書』『後漢書』にも注釈はあるが、それらはみな音義の注、すなわち難しい字の意味や発音についての注釈であり、事実については人名、地名などの説明があるにすぎない。これに対して裴松之の『三国志』注には、音義の注もないではないが、その大部分は当時存在した他の文献によって陳寿の本文を補い、あるいは異説を述べたものであった。彼が引用した文献は二百十種にものぼり、その分量も本文に数倍する膨大なもので、そのなかにはさまざまなレベルのフィクションが含まれていたのである。この裴松之の注は『演義』の作者が物語を組み立てるうえで重要な資料になっている。右の呂伯奢についての二つの記述の場合もむろんそうであって、どちらが正しいかはおろか、そもそもこの話が事実であるかどうかさえ保証のかぎりではないであろう。

いわゆる史実というのは、『三国志』の本文や裴松之の注、さらに『後漢書』『資治通鑑』などの史書に根拠を見いだせるという意味でのカッコつきの「史実」にすぎない。ただし『演義』がそのようなカッコつきの「史実」を選択する場合、その基準は、どれがただしいかではなく、すでに見たように、どれが『演義』の主題もしくはそれが思い描くイメージにふさわしいか、この場合で言えばどちらの方が曹操という人物の本質をよりすどく反映した行為であるか、という点にあった。つまり『演義』が目指そうとしたのは、客観的、歴史的事実よりは、むしろ主観的もしくは芸術的真実であったと言える。そして、そのような芸術的真実の地平から見れば、史実とフィクションの境界は、自ずと消滅するであろう。<sup>314</sup>

<sup>313</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.36～37。

<sup>314</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.37～38。

### (三) 金文京の曹操像の特質

金文京氏の曹操についての研究にある特色及びその独自の観点、以下の如く、纏めることができる。

#### 1、「悪」の解説

金文京氏による「悪」の解説は、単にワルイについて定義することに止まらずに、さらに進んで、「悪」の持つもう一つ重要な意味を指摘された。それは軍事家・政治家として曹操のツヨさである。ツヨイゆえにワルイ、という論理が働いていると思われる。この論理が近代における、曹操の評価に対する観点を転換し、曹操の悪化を雪ぎ、その積極面を力説することができる、と思われる。

#### 2、フィクションの使い方

金文京氏は曹操に対して、最も悪役に書かれたエピソード「呂伯奢殺し」を取り上げて、虐殺者としての曹操の『三国志演義』での悪役化を分析することによって、事件や人物について史実とフィクションとの関係を述べてきた。両者の境界は決してはっきりしたものではない。さらに、史実とフィクションの比べることによって、『三国志演義』を創作ときに、作者が「史実」選択する場合、その規準も明らかにした。それは正しい史実を選ぶより、どれが『演義』の主題にふさわしいかあるいは人物の本質をより鋭く反映した行為であるか、という点である。したがって、『演義』は曹操の人物像を強調ため、大胆かつ細心の工夫をこらし、フィクションを加えることは理解しやすいであろう。このような金文京氏の曹操の文学性についての論説は、凡その他の論考に見られぬ優れた観点であると言えよう。

### 三、井波律子の曹操像

#### (一) 曹操奸雄伝説のルーツ

##### 1、裴松之の注

陳寿の『三国志』は信頼性の乏しい情報を極力排して簡朴明解な記述を行ったものである。そこでこの簡潔さを補うため、南朝宋の裴松之（372～451）が200種余の資料を精査し、陳寿の記述の遺漏を補い、誤りを正し、さらに異聞を収集、これらをすべて収録して、最後に論評をくわえるという方針で注釈を行った。

膨大な資料を駆使する裴松之の注の特徴は、それが言葉の注釈だけではなく、あくまで事柄の注釈だということである。彼はたんねんに異聞を収集し、ひとつの事柄について複数の記録が存在する場合は、必ずこれを全部収録した。彼の注釈の中から、後世、民間の三国志物語に取り込まれ、『演義』へと受け継がれていったものが少なくなかった。ここで、曹操の悪役ぶりの極めつきとして、呂伯奢一家の惨殺を挙げてみよう。

中平六年（189）、董卓が洛陽を制圧したさい、当時、典軍校尉として洛陽にいた曹操は、董卓の暴挙に反発し、その誘いの手をふりきって洛陽を脱出、追手を避け間道づたいに故郷の沛国譙（安徽省亳県）へと向かった。この曹操の逃避行について、陳寿の本文（「魏書」武帝紀）はこう記す。

董卓は、太祖（曹操）を驍騎校尉に任命するよう言上し、彼と今後のことを相談したいと思った。太祖はそこで姓名を変え、間道を通って東に帰った。関所（虎牢関）を出て中牟を通過するとき、亭長（行政単位のひとつである亭の責任者）に疑惑をいだかれ、県役所まで連行された。町のなかで人知れず曹操だと見わけた者がおり、頼みこんで釈放してやった。

ここでは曹操は完全に受け身の逃亡者として描かれており、逃避行の途中における彼自身の行動についてはいっさい言及されな。この陳寿の『三国志』の記述に対して、裴松之は三つの異聞を併記する。

『魏書』にいう。太祖（曹操）は、董卓の計画は必ず失敗に終ると判断したので、けっきょく任命に応じず、郷里に逃げ帰った。数騎の供をひきつれ、旧知の間がらにある成皋の呂伯奢の家にとちよった。呂伯奢は留守で、その子ども達は食客とぐるになって太祖（曹操）をおどかし、馬と持ち物を奪おうとした。太祖（曹操）はみずから刀を手にして数人を撃ち殺した。

『世語』にいう。太祖は呂伯奢の家にとちよった。呂伯奢は外出していたが、五人の子は皆、家にいて、主人と客のあいだの礼儀も備わっていた。太祖は自分が董卓の命令にそむいていたから、彼らが自分を始末するつもりかと疑いを抱き、剣を揮って夜の中に八人を殺害して去った。

『雑記』にいう。太祖は彼らの用意する食器の音を耳にして、自分を始末するつもりだと思い込み、夜のうちに彼らを殺害した。そのあと悲惨な思いにとらわれ、「わしが人を裏切ることがあろうとも、他人にわしを裏切らせはしないぞ。」といい、かくして出発した。」

その第一は魏の王沈の『魏書』から採録したものである。前章も述べたように、この王沈の『魏書』は完全に魏寄りの立場に立つものである。彼は建国の祖たる曹操への遠慮もあり、あくまで曹操の正当防衛という目線で描く。それに対し、西晋の郭頌が著した『世語』では曹操の猜疑心が強調され、悪人性が浮上してくる。さらに、三番目の異聞、東晋の孫盛が著した『雑記』を見てみると、曹操の奸雄性を象徴する最も有名なせりふまで盛り込み、さらなる非情さを強調している。

裴松之は何のコメントもつけず、ただこの三種の異聞を併記しているにすぎない。しかし、ここには、魏の王沈の『魏書』から西晋の郭頌の『世語』へ、さらには東晋の孫盛の『雑記』へと時代が移るにつれて、小説的な脚色が付け加えられ、次第に曹操奸雄伝説が形成されていく過程が如実に示されている。<sup>315</sup>

それでは、蜀漢正統論を標榜して劉備に肩入れし、曹操に悪役をふりあてる『三国志演義』は、この呂伯奢殺し事件をどのように描いているだろうか。

三日のあいだ旅をつづけ、成皋のあたりまでやって来ると、日が暮れかかった。相すおは鞭をあげて林の奥をさし、陳宮にいった。「このあたりに姓は呂、名は伯奢という人がいて、私の父の義兄弟だ。そこへ行ってうちの家族の安否をたずね、一晩泊めてもらおうと思うが、どうだろうか。「たいへんけっこうです」。

二人は屋敷の門前で馬を下り、中へ入って呂伯奢に挨拶した。呂伯奢はいった。「朝廷からおふれがまわり、おまえを緊急逮捕しようとしているそうだが、おまえの父はすでに避難して陳留に行った。おまえはどうしてここまで来られたのか」。曹操はこのまえの話をして、「もし陳県令でなければ、とっくに体をバラバラにされているところでした」と告げた。呂伯奢は陳宮に頭を下げ、「甥があなたとめ

---

<sup>315</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.15。

ぐりあわねば、曹氏一族は滅んでいたことでしょう。どうかおくつろぎになって、今晚は拙宅にお泊り下さい」といって、すぐに立ち上がって奥へ行った。しばらくして出て来ると、陳宮に向かって、「うちにはよい酒がありませんので、西の村まで行って一樽買ってきて、ごちそうします」といい、そそくさと驢馬にまたがり出かけて行った。

曹操は陳宮とともにしばらく座っていたが、ふいに屋敷の裏で刀をとぐ音がした。曹操は言った。「呂伯奢は私の本当の親類ではないし、さっきここから出て行ったのもあやしい。こっそりようすを探ってみよう」。二人して足音を忍ばせ、居間の裏へまわると、「縛って殺したらどうだ」という声がする。曹操は、「やっぱりだ。いまもし先に手を下さなければ、必ずつかまってしまうぞ」というや、陳宮とともに剣を抜いてとびこみ、中にいた者を男女を問わず皆殺しにし、つづきさまに一家八人を殺した。生きのこった者はいないかと台所まで捜しに来ると、なんと豚を一匹縛りあげ、いまにも殺さんばかりにしてあるではないか。陳宮は、「孟徳（曹操のあざな）どの、あなたは気をまわして、悪気のない人々をまちがってころしてしまっただけだ」といい、二人してあわてて屋敷を飛び出し、馬に乗って出発した。

二里も行かないうちに、ふと見ると呂伯奢が驢馬の鞍に酒がめを二つぶらさげ、手に果物や野菜をさげてやって来て、呼びかけた。「甥御どの、県令どの、どうして行ってしまわれるのか。」「おたずね者の身ゆえ長居はいたしかねます」と曹操。「すでに家の者に豚を一匹さばかせ、おもてなしするように命じてあるのに、甥御どのと県令どのには、どうして一夜の宿をいやがられるのか。どうか速かにお戻り下され」。曹操は呂伯奢にかまわず、馬に鞭うち先へ進んだ。数歩も行かないうちに、突然、剣を抜いて後戻りし、呂伯奢に呼びかけた。「そこへ来るのは誰だ」。呂伯奢が振り向いた瞬間、曹操は剣をふるって呂伯奢を驢馬から切り落とした。仰天した陳宮はいった。「さっきはまちがっただけだが、これはどういうわけですか。」「呂伯奢が家に着いて、大勢の者が殺されているのを見たなら、どうしてそのまま引き下がろうか。人を集めて追いかけて来れば、きっと災難にあうだろう。」「いけないと知りながら、わざと殺すのは、はなはだ道にはずれています」。これに答えて曹操はいった。「わしが天下の人を裏切ることがあろうとも、天下の人にわしを裏切るような真似はさせぬ」。陳宮は黙り込んだ。

『演義』描くところの呂伯奢一家殺人事件では、孫盛の『雑記』の曹操の名セリフがまことに効果的に転用され、場面をきめているさまがみてとれよう。こうして『演義』は、時代が下がるとともに、どぎつさを増してゆく裴松之注の諸書の曹操奸雄伝説を、巧みに利用しながら、さらに念入りな虚構化をほどこすのである。<sup>316</sup>

みたどおり、『演義』ではこの事件の経緯をさらにふくらませ、曹操が呂伯奢一家を誤って皆殺しにしたのみならず、後難を恐れて、なにも知らなくて酒を買いに行っていた好人物の呂伯奢本人まで殺害する展開とし、虚構性の増幅はここに現れる。これによって、度し難い冷血漢曹操のイメージがくつきりと浮き彫りにされる仕掛けなのだ。さらに事件の目撃者として元中牟県令の陳宮を配することで、曹操の残虐性を解説する恰好のエピソードに昇華させた。

## 2、『世説新語』

このように『三国志演義』において極端化される奸雄曹操像が、はっきりと形成されはじめるのは、先にあげた孫盛の『雑記』がその顕著な例であるように、時代的には東晋になってからである。<sup>317</sup>東晋時代に成立した、当時の逸話や噂を集めた『世説新語』<sup>318</sup>でも曹操のずる賢さが強調される。『世説新語』のその内容から三十六篇に分けて編纂したものである。基本的に小説集であり、史実とは言い難い話も少なくない。一方、その時代に生きた様々な人物の言動や思想を知り、同時代の世相を掴む上で貴重な書物と言え、取り上げられた人物が後代いかなるイメージを持たれていたかを推測することもできる。その中の第二十七篇である「仮譎篇」には、狡知に長けた者が他人を欺く逸話が収められているが、曹操にまつわるエピソードが次のように多く収録される。

魏の武帝（曹操）は行軍中に、水のある道筋からはずれてしまい、全軍の兵士はのどがカラカラに乾いてしまった。そこで〔曹操は〕命令を出していった。「前

<sup>316</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.19。

<sup>317</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.20。

<sup>318</sup> 『世説新語』とは、中国南北朝の宋の劉義慶が編纂した、後漢末から東晋までの著名人の逸話を集めた小説集。

方に大きな梅林がある。甘酸っぱい実がたわわになっているから、渴きを癒すことができるぞ」。兵士たちはこれを聞くと、みな口から唾が出てきて、まんまと前方にたどりつくことができた。

この曹操がのどの渴きを訴える兵士に対し、前方に梅林があると騙して唾を生じさせ、渴きを癒した話について、『演義』は以下の如く述べている。

玄德（劉備のあざな）は曹操の疑いをそらすため、住居の裏庭に野菜を植え、手ずから水をやって栽培し、曹操の目をくらます手だてとした。関羽と張飛の二人が「兄貴は天下の大事に心をとめず、いやしい者の業を習っておられる。これはどういうわけか」といっても、「おまえたちの知ったことではない」と相手にしないので、二人はそれ以上何もいわなくなった。

ある日、関羽と張飛の外出中、玄德が裏庭で野菜に水をやっていたところ、許褚と張遼が数十人を引き連れて現れ、「丞相（曹操）のご命令です。どうかすぐお越しください」という。玄德は驚き、「なにか重大なご用でしょうか」と聞いたが、許褚は「わかりません。ただ呼んで来いと仰せです」という。玄德はやむなく二人について丞相の役所に出頭し、曹操にお目どおりした。

曹操が笑いながら、「家でたいへんなことをしておられますな」といったので、玄德は肝をつぶして顔が土気色になった。曹操は玄德の手をとり、ずっと裏庭まで行くと、「玄德どの、畑仕事も楽ではありませんな」といった。玄德はやっと安心して、「つれづれの暇つぶしをしているだけです」と答えた。曹操は、「たまたま枝の梅の実が青々としているのを見て、ふいに去年、張繡征伐に向かったとき、途中で水がなくなり、兵士全員のどがカラカラになってしまったことを思い出した。あのとき、わしは一計を生じ、鞭で虚空を指さして、「前方に梅の林があるぞ」といってやった。兵士はこれを聞くと、みな口のなかに唾をだし、おかげで渴きをとめることができた。今この梅を見ると、愛でずにはいられない。それに作らせておいた酒もちょうどできあがったゆえ、貴殿を招いてあの亭で酒を酌もうと思ったのだ」といった。玄德はすっかり落ち着いた気持ちになった。（第二十回）

建安四年（199）、呂布が滅亡したあとも、引き続き曹操のもとに身を寄せていた劉備を

相手に、曹操自身が述懐するというかたちで、このエピソードを巧みに利用している。付言すれば、このとき劉備は献帝をかつぎ、曹操に対する軍事政変を計画する董承らとひそかに交渉していた。

ここで、『世説新語』の短いエピソードは、『演義』の具体的な状況設定のもとで、見事に生かされるのである。『世説新語』でかたちづくられる奸雄曹操のイメージが、どれほど『演義』にヒントをあたえたか、この一例をもってしても明らかであろう。

ちなみに、『世説新語』のこの梅林のエピソードは、『演義』に先立ち、三国志物語の古い書物を伝える『三国志平話』の中でも取り入れられる。<sup>319</sup>

そのほかにも『世説新語』には、『演義』にそのまま流れ込んでいった曹操に関するエピソードがいくつもみられる。たとえば次のように。

魏の武帝（曹操）はいつもいっていた。「わしの眠っている最中にみだりに近づいてはいかん。近づけば斬ってしまうが、無意識なのだ。お付きの者どもはくれぐれも注意せよ」。その後タヌキ寝入りをしていると、寵愛している者の一人がそっと布団を着せかけた。そこですぐさま斬り殺してしまった。この後、睡眠のたびにお付きの者で近づこうとする者はいなくなった。（仮譎篇）

暗殺の危険を未然に防ぐために、曹操は一芝居うったわけだ。陰険かつ非情、血も涙もない冷血無情な曹操の一面を極端化したこのエピソードを、『演義』はその第七十二回において巧みに取り入れている。

曹操は暗殺されることを恐れ、いつも側近の者に、「わしは夢のなかでよく人を殺してしまうから、わしが眠っているとき、おまえたちは決して近寄るな」と、申し付けていた。ある日、帳のなかで昼寝している最中、掛け布団が床に落ちた。お付きのひとりがあわてて掛けようとした瞬間、曹操は飛び起きて剣をふるい斬り殺したあと、また眠り込んだ。しばらくして起きると、驚いたふうを装い「誰がわしの家来を殺したのか」と尋ねた。人々がわけを説明すると、曹操は激しく泣き、手厚く葬るようにと命じた。誰もが曹操は夢のなかで殺人を犯したのだと

---

<sup>319</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.23。



信じたが、楊脩だけはその真意を悟り、葬儀のときに柩を指さしながら、「丞相が夢のなかにおられたのではなく、君こそ夢のなかにおられたのだ」といった。曹操はこれを聞いて、「愈よこれを悪む（ますます楊脩を憎悪した）」のだった。

この「仮譎篇」から由来する逸話は、曹操が普段から憎んでいた小才の利く楊脩を処刑した逸話を載せる。きっかけは漢中攻略に失敗した曹操がつぶやいた「鶏肋」という語を楊脩が勝手に解釈したことに曹操が激怒したためであるが、それ以前から曹操が楊脩を憎んでいた原因として『演義』ではいくつかの逸話をあげる。部下に作らせた庭園を見た曹操が門に「活」と一字だけ書いて去ったのを楊脩が「闊（ひろい）」と看破し「庭が広すぎる」意味だと周囲に解説した件、また酥（乳製品）の瓶が献上された際に曹操が蓋の上に「一合酥」と書いたのを楊脩が「一人一口の酥」と解説した件、最後に夢のなかの殺人の件などを曹操が小癩に思ったという。

これらはいずれも『世説新語』「捷語篇」に由来する逸話である。このような逸話群により、『演義』はどのように『世説新語』のエピソードを巧みに利用しアレンジしながら、曹操の奸雄性を補強する、という手法は明らかであろう。<sup>320</sup>

さらに、この事件により、曹操は身の回りの重臣や身内すら疑った、性格の悪いイメージも描かれます。なぜかという。外敵や小役人ならば、曹操が寝ていようが起きていようが、そもそも近づけないと思われる。曹操は周囲に言った「わしの眠っている最中にみだりに近づいてはいかん。近づけば斬ってしまうが、無意識なのだ。お付きの者どもはくれぐれも注意せよ」ということは、彼の重臣に暗殺される対策でも言えよう。

## （二）魅力的な憎まれ役

『演義』は曹操の初登場の場面で、次のように述べている。

〔皇甫嵩と朱雋の率いる軍勢に敗れた、黄巾軍のリーダー張角の弟張梁・張宝が血路を開いて逃れようとしたとき、一隊の人馬が行く手をふさいだ。〕先頭にあらわれた一人の大將は、身長七尺、目は細く髯は長く、官は騎都尉、沛国譙の人で、姓は曹、名は操、あざなは孟徳という。曹操の父曹嵩は、もと夏侯という姓

<sup>320</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.27。

だったが、中常侍（宦官）曹騰の養子となったため、曹の姓を名乗るようになった。曹嵩の子が曹操であり、幼名を阿瞞、またの名を吉利ともいう。（第一回）

身長八尺の劉備に比べれば、161センチの曹操は見劣りのする風貌とも言えよう。さらに、宦官曹騰の孫という出自はどうもいかがわしいである。<sup>321</sup>

陳寿の『三国志』「魏書」武帝紀では、その家系は名臣曹参の裔を称しており、父の曹嵩が三公である太尉を務めた経歴をもつという具合に、曹操の家系を昇格させることに努めている。しかし、曹操は小男であったことは、すでに『世説新語』の「容止篇」の中にも見える。

魏の武帝（曹操）が匈奴の使者を引見しようとした。彼は自分の体つきが貧相で遠い国の使者を威嚇する迫力がないと思い、崔琰を身代わりにし、自分は刀をもって座の横に立った。引見がすむと、間諜にたずねさせた。「魏王はどうだったか」。匈奴の使者は答えた。「魏王の風采はたいへんりっぱです。しかし、座の側で刀を持っていた人こそ英雄です」。武帝はこれを聞くと、追手を出してこの使者を殺させた。

『世説新語』に崔琰を代理に立てた話があるから、曹操の冷酷非情をはっきり示した一方、曹操の外見が冴えなかったのは、本当であろう。このエピソードに基づいて、『世説新語』から『演義』にいたるまで、小説では貧相な男としての曹操のイメージがこうして定着していることは明らかであろう。しかし、京劇など芝居では、憎憎しい迫力を出すために、曹操は堂々たる体格の役者が演じる。<sup>322</sup>

このほか、曹操は若いころ放蕩者であり、叔父を騙して、父曹嵩は叔父の言葉を信用しなくなり結果になる。そして、後漢の人物鑑定家の許劭は曹操を「治世の能臣、乱世の奸雄」と評し、それを聞いた曹操が大笑したという逸話もある。さらに、曹操は若いころから、法律や刑罰を重視する法家思想の信奉者であり、洛陽北部尉に着任すると、違反者に対して厳しく取り締まった。その任期中に、霊帝に寵愛されていた宦官の叔父が門の夜

<sup>321</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.127。

<sup>322</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.129。

間通行の禁令を犯したので、曹操は彼を捕らえて即座に打ち殺した。このため法の禁を犯す者は現れなくなったという話も記されている。

この一連の話は『演義』の独創ではなく、いずれも『三国志』武帝紀の裴松之注に見える諸書から、そのまま引用したものである。最初の二つは、たしかに曹操の奸雄性を示したが、三番目の話は、宦官と深い家系の出身であるにもかかわらず、法律を犯すものに対して、厳しく処罰した曹操の姿を描くものである。

これら一連の逸話を見ると、『演義』は最初から、すでに曹操と言う人物の奸雄と英雄という両面性を提示した。

『演義』の世界で、曹操の奸雄性がもっとも露わなのは、漢王朝の皇室に対しての行為に顕著に現れる。中で最も怒らせるのは伏皇后を殺す件である。

『演義』の第66回では、献帝の腹心・宦官の穆順は、密書を髪にかくした。曹操が身体検査をしたが、見つからなかった。曹操が解放しようとしたとき、風で穆順の冠が飛んだ。穆順が冠を後ろ前に被ったのを見て、曹操は不審に思い、果たして密書を発見した。伏完の造反計画が露呈した後、捕らえられた娘の伏皇后に対して曹操自らが罵倒し、その場で打ち殺させるという残忍さを見せられる。

この件は裴注の『曹瞞伝』を元に作られた場面であるが、曹操自らが皇后を罵倒して殺害させたとするのは『演義』の創作である。こういった漢室への悪行は、ライバル劉備が漢室の末裔という高貴性を受け継いでいるのと対照的に、ことさらに篡奪者としての悪印象を植え付けるための措置でもある。ところが『演義』は、漢王朝に対する曹操の残忍性を強調されながら、颯爽感のある英雄としての曹操の姿も綿密に書き込んで、物語がおもしろくなる。<sup>323</sup>

曹操と関羽の因縁はとても深い。傑出した人材をどうしても手の中に入れてたい曹操の姿は、『演義』の随所に見られる。関羽に対して、曹操がずいぶんの力を入れたが、劉備との絶対的な信頼関係があるので、結局関羽は曹操の配下にはなれなかった。それにもかかわらず、関羽は曹操から受けた恩義を報いるため、華容道で曹操を見逃した。こうした関羽の潔さに力を込めて描けば描くほど、拮抗して曹操のキャラが上がる。悪役らしからぬプラスのイメージが、曹操に乗っていく。

このほかにも、『演義』の随所に、悪役らしからぬプラスのイメージをもつ曹操の姿が見

---

<sup>323</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.134。

られる。たとえば第五十六回では、建安十五（210）年、赤壁の戦い後、天下統一計画は頓挫したとはいえ、北中国を完全に制覇しつつける曹操は意気軒昂、根拠地の鄴に銅雀台を建築し、百官を集めて宴会を催し、その勢力を誇示した。ここで、多くの官僚が詩を捧げ、中には曹操を天子として尊ぶ意を含む作品が多かった。これに対して、曹操はつぎのように返事した。<sup>324</sup>

曹操はこれらの詩を逐一よみおえると、笑っていった。「諸君の作品はすばらしいが、ほめすぎた。私は愚かな人間で、考廉に推挙され出仕したが、その後、天下大乱になると、故郷の譙県から五十里ほど東の地に書斎を建て、春と夏は読書、秋と冬は狩猟をしてすごし、世の中が落ち着いてから出仕するつもりだった。そのとき思いがけず朝廷からお召しがかから、典軍校尉に任じられた。かくして思いを改め、ひたすら国家のために賊を討ち手柄を立て、死んだあと墓前に『漢の故征西将軍曹侯の墓』と記されれば、それで本望だと思うようになった。思えば、董卓を討ち、黄巾の賊を掃討してこのかに、袁術を除き、呂布を破り、袁紹を滅ぼし、劉表を制圧して、天下を平定するにいたった。身は宰相となり位は人臣をきわめたのだから、このうえ何を望むことがあろうか。もし国家に私という者がいなかったならば、いったい幾人が帝と称し王と称したか知れない。私の勢力が強いのをみて、異心を抱いているとみだりに推測する者もいるが、とんでもない誤りである。（以下略）」

曹操の「死んだあと墓前に『漢の故征西将軍曹侯の墓』と記されれば、それで本望だと思うようになった」という話において、彼は率直に自己を語っているに間違いはない。さらに、曹操は「笑っていった」とされるのは、劉備が泣くのと対照的である。『演義』を英訳したモスロバートが指摘したように、具体的な身振りを利用して、キャラ立てが狙われている。<sup>325</sup>曹操は華容道で笑うたびに伏兵に遭う、銅雀台の落成式でも、長い自慢話を笑いながら語った。

この銅雀台の覇権や関羽に対するときの態度から、浮かび上がってくる乱世の英雄のイ

<sup>324</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.134~135。

<sup>325</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.137。

メージと、伏皇后を殺しの件の際の、残忍な曹操のイメージには、あべこべになることはたしかである。それでは、『演義』はなぜ、曹操のメリットを描いたりするのだろうか。

ここで考えられるのは、『演義』は、陳寿の『三国志』に基づいて、物語世界を構築するために、曹操描写についてこれらを用いると、自ずと実像としての曹操のプラス面もスポットを当てざるをえなくなるという、単純な事実である。『演義』が曹操の奸雄性を強調し、劉備の善玉性と対照させる一方、曹操のメリットや魅力にも取り上げて、曹操の奸雄と英雄という二重性をもつ存在としてえがいているところにこそ、『演義』の文学的成熟が認められるのである。<sup>326</sup>

### (三) 井波律子の曹操像の特質

井波律子氏の「曹操」研究の特色及びその特色の観点を、以下の通りに纏めることができる。

#### 1、奸雄化の過程

井波律子氏の論じる曹操像を見ることによって、曹操の奸雄化の過程を明らかにすることができる。

まず陳寿は、曹操が基礎を築いた魏を継ぐ晋に仕えた史官であるため、曹操に不利益な記述を行うことはなく、正史では曹操はまだ悪玉ではない。しかし当時から曹操の良くない噂は広まっていたようで、裴注の段階では様々な逸話が記載されている。井波律子氏は一連の逸話の中で、最も有名な「呂伯奢殺し」事件をめぐって、裴松之注の中の3つの異聞を提示した。『演義』のこの事件についての記録も含め、時代を経るに従って小説的な脚色が加えられ、次第に曹操という人物の奸雄伝説が形成されていく過程が如実に示されている。

さらに、東晋にうまれた小説的エピソードを中心として編纂された『世説新語』の中にも、曹操の奸雄性をはっきり示したエピソードが数多く収録される。これら『世説新語』において、採録された曹操奸雄伝説は、変形されながら『演義』の物語に組み込まれ、悪役曹操像を補強する重要な素材となってきた。

---

<sup>326</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.138。

## 2、曹操の両面性

曹操は果たして奸雄なのか、それとも英雄なのかという点について、井波律子氏は奸雄であり、英雄である曹操像を提示した。これこそ正に彼女の独自の解釈である。

井波律子氏は曹操の悪い面と良い面について、幾つかの逸話を羅列し、奸雄と英雄というアンビバレントな両面性を分けて論じたうえ、乱世の英雄曹操のイメージと残忍な曹操のイメージの間の落差を示された。

さらに、曹操を悪役として位置づける『演義』が曹操のメリットを描き所以も述べた。『演義』は正統的な歴史資料を取り込んだ。そのため、実像としての曹操のプラス面が取り込まれた。これは『演義』の矛盾ではなく、文学的成熟であることを言明した。

### 第二節 関羽の人物像について

本節は、主に渡辺義浩、金文京、井波律子ら三人の関羽に関する論考を中心にして、近代日本における、関羽信仰の受け入れ、及びその人物像の変遷を明らかにしようとするものである。

まず、日本における「関羽」という人物の研究について、渡辺義浩氏の著書である『関羽 神になった「三国志」の英雄』が存在する。彼の関羽に関する先行研究には、概ね古来中国において関羽の人物像の変遷と関羽信仰の形成二つに分けて論じた。具体的に言えば、渡辺義浩氏は、史書『三国志』と小説『三国志演義』の中の関羽像を取り上げて、その異同を比較しながら、時間の経つとともに関羽像の変遷及び関羽信仰の流行を明らかにした。

そして、『三国志演義の世界』の作者金文京氏は、最初はただ蜀の名将である関羽の神へ昇進する所以を分析していた。さらに、金文京氏から見れば、日本における関羽という歴史人物の地位とその普及状況は、中国や朝鮮と違って、信仰の対象とは言えない。中華街にある関帝廟も、ほとんどの日本人にとっては、ただの好奇心の対象にすぎないという論説を相続き提出した。

最後には、井波律子氏は『三国志演義』の中で、文学的な視点から「関羽」に関する描写を捉え、虚構に満ちた関羽の義・勇を示されている。また、神としての関羽のイメージは、長い時間帯にわたる民間伝承のおかげであると強調した。

本章においては、まず先行研究を参考にして、『三国志』と『三国志演義』の中の関羽像を解き明かす、そして異なった関羽像をもとにして、これに諸先賢の「解説」を加え、関

羽は一体どのようにただ一人の人間から神へ変身するのか、ということを究明し、また日中両国における、関羽という歴史人物の位置づけの異同を明らかにしようと思う。

## 一、渡辺義浩の関羽像

### (一) 関羽像の変遷

#### 1、陳寿の『三国志』の関羽像について

『三国志』全体（全六十五巻）でいうと三十六、蜀書で言えば巻六に張飛・馬超・黄忠・趙雲とともに、その筆頭として伝が立てられている。その位置は、劉備の臣下としては、巻五に記される諸葛亮に次ぐ。関羽は、劉備にとって最も重要な武人である、と陳寿が認識していたことの現れである。

しかし、関羽伝は、わずか九五三文字の記録に過ぎない。それでも、扱いは丁重な方で、同じ巻六に収録される趙雲伝は、わずか二四六文字しかない。武人の比重は、この程度であった。ちなみに、諸葛亮伝は、子の瞻の部分を含めずに、四三一〇文字もある。かれらと知識人との関係は、次のように記録される。

張飛はかつて劉巴の家に遊びに行ったが、劉巴は張飛と話もしなかった。張飛はこのため怒ってしまった。そこで、諸葛亮は劉巴に次のように言った、「張飛は武人ですが、あなたを敬愛しているのです。あなたが、高い志を持ちのことはわかりますが、どうかもう少し下の者にも優しくしてあげてください」。劉巴は答えた、「立派な人物が世の中で生きる理由は、天下の英雄（ここでは武力的なそれではなく、名声の高い知識人）と交際するためである。どうして、『兵士』（兵隊野郎）と共に語ることなどできようか」。

（『三国志』劉巴伝注引『零陵先賢伝』）

諸葛亮や劉巴のような知識人にとって、張飛などは「兵士」に過ぎず、共に語るに足る存在ではなかったのである。それでも張飛は、劉巴のような知識人に迎合し、その反動なのか、兵士には厳しく、部下をよく鞭で打った。張飛の最期は、それを恨んだ部下の寝返りによる。一方、関羽は、兵士に優しい反面、知識人に対抗意識を持ち、自らも晩年『春秋左氏伝』を学んだ。しかし、荊州の陥落は、その対抗意識から部下の麋芳や士仕を軽んじ、それを恨んだかれらが、呉の呂蒙に降服したことによる。したがって、陳寿の関羽評

価は高くない。

（陳寿の）評にいう。関羽と張飛はともに「万人の敵」（一万人に匹敵する）と称され、世の「虎臣」であった。関羽は曹公（曹操）に（顔良を斬る手柄で恩に）報い、張飛は義により厳顔を積し、ともに国士の風がある。しかしながら、関羽が剛情で自ら誇りを持ちすぎ、張飛は乱暴で恩愛をかけず、その欠点のために敗れた。道理から言って当然である。

（『三国志』関張馬黄趙伝評）

関羽・張飛を「万人の敵」と称した者は曹魏の程昱、「熊虎」と称した者は孫呉の周瑜と呂蒙である。陳寿は、かれらの言葉で関羽と張飛の武力を表現した上で、関羽の曹操、張飛の厳顔への対応を評価する。その一方で、かれらの敗退理由も正確に叙述し、関羽の剛情と張飛の乱暴を批判する。公正な、ただしその結果として、後世に神となる人物へのそれとしては、冷淡な評価と言えよう。<sup>327</sup>

陳寿の『三国志』は、唐代に「正史」と定められた史書である。正史とは、「正」しい「史」書という意味ではない。その正しさを曲げて、国家の「正」統を証明するための「史」書である。このため、すべての正史は、紀伝体<sup>328</sup>という体裁をとる。陳寿は、曹魏から禅譲を受けた西晋に仕えた史家であるため、『三国志』は曹魏にのみ本紀が設けられる。劉備も孫権も列伝に、すなわち体裁上は、曹魏の臣下として記録されているのである。

しかし、季漢の旧臣であった陳寿は、孫権の死去は「薨」<sup>329</sup>と記し、孫権が皇帝位に即いたことを否定しているのである。これに対して、曹魏の諸帝の死去には「崩」の字を用い、正統な天子であることを示している。興味深いのは、劉備の死去の時、陳寿は「殂」<sup>330</sup>と記されている。ここで、陳寿が後世に伝えたいのは劉備が堯の子孫、すなわち漢の後継者であることにほかならない。

<sup>327</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.27。

<sup>328</sup> 紀伝体とは、本紀（皇帝の年代記）と列伝（臣下の伝記）から成る史書の体裁で、正史を編纂する国家から「正統」と認識される皇帝の年代記が本紀に記される。

<sup>329</sup> 『春秋』（儒教の経典である五経の一つ。孔子が編纂したとされる魯の国の年代記。年表形式の編年体に孔子の毀誉褒貶が含まれているとする）の義例（表見方法の規範）では、「薨」は諸侯の死去に用いる言葉である。

<sup>330</sup> 「殂」とは、『尚書』（五経の一つ。堯・舜・禹などの伝説的な皇帝の事績をまとめた経書）で、堯の死去に用いている言葉である。



このため、自らも蜀漢の臣下である陳寿が、関羽への評価は、的確なものと考えてもよい。陳寿が関羽のために筆を曲げる必要性はないからである。一方で、その子孫が権力の座にあるなどの理由により、差し障りがあって陳寿が書けないことも多かった。

## 2、裴松之注『三国志』の関羽像について

劉宋に生きた裴松之は、曹魏を正統とする必要はなかった。かと言って、蜀漢を正統とする必要もなかった。したがって、関羽伝に注記する書籍も、関羽の都合のよいものばかりではない。

『蜀記』にいう。曹操が劉備とともに下邳城に呂布を包囲したとき、関羽は曹操に言った、「呂布は秦宜禄を史者として（袁術に）援助を求めにいかせておりません。わたしは、かれの妻（杜氏）を娶りたいと思います」。曹操はこれを許可した。（呂布が）敗れると、（関羽は）また何度も曹操に言上した。曹操は（関羽が繰り返すので、秦宜禄の妻が）さぞかし美人であろうと思い、先に使者を送り、迎え入れて顔を見ると（美人だったので）そのまま彼女を手許に置いた。関羽の心は落ち着かなかった。この記事は、『魏氏春秋』と同じである。

（『三国志』関羽伝注）

裴松之は、ここで言及する『魏氏春秋』のさらに詳しい叙述を魏書の明帝紀にも引用しており、関羽が人妻に未練たらたらだったこの話を事実と考えているのである。『蜀記』・『魏氏春秋』という性格の異なる二つの史料に明記されているからである。人妻に懸想して何度も曹操に頼んだ挙句、横取りをされてしまう関羽は、人間らしく魅力的であるが、『三国志演義』はこの話を採用しない。神が人妻に横恋慕しては困るのであろう。<sup>331</sup>

このように、陳寿の『三国志』は、裴松之の注を含めて、関羽をそれほど高くは評価しない。これでは、神格化されることは難しい。関羽の神格化は、史書の記述に直接基づくものではないのである。それでは、『三国志演義』は、関羽をどのように描いているのだろうか。

## 3、李卓吾本『三国志演義』の関羽像について

<sup>331</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.33。

吉川英治の『三国志』も含めて、江戸時代の湖南文山の『通俗三国志演義』は、李卓吾本（正式名称は、『李卓吾先生批評三国志』）をもとに作られた。このため、現在流行する毛宗崗本では削られた「漢寿亭侯」に係る虚構を残している。

（顔良を斬った功績に対して、関羽を寿亭侯に封建させ、その印を届けさせた  
が、受け取ってもらえなかった）曹操は、関羽が印面を見てから辞退したと聞いて、誤りに気づき、印を改鋳した。「漢寿亭侯之印（漢の寿亭侯の印）」、すなわち  
関羽が曹操ではなく、漢から諸侯に封建されたことを明らかにしたのである。関  
羽は印面を見ると、丞相（曹操）は、わたしの心事をよく知っておられる。そう  
言って、今度ははやく印を受け取った。

（李卓吾本『三国志演義』第二十六回 雲長 延津に文醜を誅す）

関羽の漢への忠と曹操の関羽への思い入れをよく表現する「漢寿亭侯」の虚構を今の中国人がほとんど知らないことに対して、日本人がそれを熟知しているのは、湖南文山の『通俗三国志』が李卓吾本からの翻訳だからなのである。<sup>332</sup>

#### 4、毛宗崗本『三国志演義』の関羽像について

##### ①許田に打囲す

『三国志演義』の完成版とされる毛綸・毛宗崗父子がまとめた毛宗崗本は、清の康熙五（1666）年以降に成立した。かれらは、李卓吾本を底本として記事や文章の誤りを正し、不合理な記事を削除した。その一方で、毛宗崗本は、これまでの『三国志演義』に含まれていなかった三国の物語を新たに挿入し、自らの批評を加え、物語の首尾一貫を整えて、『三国志演義』の面目を一新した。

建安三（198）年、呂布の征討を劉備と共に行うなど、曹操は身を寄せてきた劉備を優遇した。しかし、信賴していたわけではない。あるとき、曹操はくつろいだ様子で劉備に言った、「いま天下の英雄は、ただ君と僕だけである。袁紹などは、ものの数ではない」。探りを入れられた劉備は、思わず箸を落とした。ここまでが『三国志』先主伝の記述である。裴注に引く『華陽国志』は、そのときちょうど轟いた雷鳴に託つけて、劉備は箸を落とすほどの動揺ぶりを取り繕うことができた、と伝える。こうした緊張関係は、曹操の専制に

<sup>332</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.41。

反対する、董承を中心とする朝臣のグループが、劉備に接近していたことにより生じていた。

『演義』は、それらの史実を踏まえた上で、献帝が曹操討伐の密詔を出す契機として、「許田討囿（許田に打囿す）」という虚構を創作する。

曹操に身を寄せた劉備は、献帝の大歓迎を受けた。漢帝室の系図を読み上げさせた献帝は、劉備を自分の叔父であるとし、皇叔と呼んだ。曹操はおもしろくない。ある日、献帝の狩りに同行した曹操は、天子の弓矢を取りあげて鹿を射た。さらに皇帝が射たと思い、万歳を唱える臣下の慶賀を、天子を遮って自分が受けた。

（『演義』第二十回 曹阿瞞 許田に打囿す）

曹操はあえて献帝に無礼な振る舞いをする事で、自分の専制に対する反発をあぶり出そうとしたのである。関羽には、そうした曹操の意図など関係なかった。天子の弓矢を取りあげて鹿を射、万歳を唱える臣下の慶賀を受けた曹操の無礼に、関羽は我慢がならなかった。

劉備の後ろに控えていた関羽は憤然として、蚕のような眉をきりきりと逆立て、切長の眼尻を張り裂けんばかりにして、青龍偃月刀を片手に馬を躍らせて曹操を斬り棄てようとした。劉備はそれを見て、あわてて手を振り目くばせした。関羽は兄のこの態度に、逸る心をじっと抑えた。屋敷に戻ると、関羽は劉備に言った、「曹操の仕打ちは天子を天子とも思わぬもの。それゆえ、わたくしが討ち果たして国の害を除こうとしたのに、兄者はなぜ止められたのですか。」「『投鼠、器を忌む』と言うではないか。曹操は天子のすぐお側におり、腹心の者どもがまわりを固めている。そなたが時の怒りにかられて軽率な振舞いに及び、万が一仕損じて天子を傷つけるようなことともなれば、かえってわれらが罪に陥されてしまうではないか。」「しかし、今日あの国賊を殺しておかなければ、のち必ず悪事を働きましょう。」「このことはしばらく胸におさめておけ。きっと口外するではないぞ。」

（『演義』第二十回 曹阿瞞 許田に打囿す）

関羽は、曹操の殺害を劉備に止められた。毛宗崗本は、第二十回「曹阿瞞 許田に打囲す」の総評で、

関羽が曹操を殺そうとしたのは、人臣として大義を明らかにするものである。劉備が殺そうとしなかったのは、君父のための謀は万全でなければならないからである。君側の悪を除くことは最も難しい。前後左右、みなその腹心爪牙であるため、これを殺せば我が身に禍が及ぶだけでなく、君父に及ぶ可能性がある。

と述べ、関羽の行動が人臣としての大義ではあるが、劉備の判断を正しいとする。その典拠とされているものが、関羽を止める劉備のセリフの中に出てくる「投鼠、器を忌る」である。二人それぞれの行動が正当化される。<sup>333</sup>

## ②漢に降るも曹に降らず

### I、関羽の降服条件

毛宗崗本は、関羽を三絶の一人「義絶」と位置づけ、その義を称えるため、多くの虚構を採用している。なかでも有名な物語は「漢に降るも曹に降らず」である。

劉備は、献帝に歓迎され、董承とともに曹操打倒の機を窺う。「いま天下の英雄は、ただ君とわたしだけである」と腹を探られた劉備は、建安三（198）年、曹操のもとを逃れ、かつて支配していた徐州を拠点に曹操から自立する。袁紹と対峙中の曹操が対応できないと判断したためである。ところが、曹操は、劉備の予想に反して自ら攻め寄せた。劉備は敗れ、袁紹のもとへ落ち延びていく。下邳城にいた関羽は孤立し、抗戦を諦めて降服した。劉備の妻子を守っていたのである。

曹操は、関公の旧友である張遼を使者として、関公に降服を迫った。関公は、曹操に降服する三つの条件を示す。「第一に、わたしは皇叔（劉備）とともに漢室を扶けることを誓った者ゆえ、わたしが降るのは漢帝だけにであって、曹操にではないこと。第二に、二人の嫂（劉備の夫人）には皇叔の知行を賜り、いかなる者も門内に立ち入るのを禁ずること。第三に、皇叔の所在が明らかになり次第、たとえ千里万里の遠方といえども、直ちに馳せ参ずること。この三つに一つが欠

<sup>333</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、pp.64~66。

けても、断じて降参いたさぬ」。(第二十五回)

張遼に対して、関羽が三つの条件を出して降服することは、嘉靖本から変わりはない。毛宗崗は、これら三つの条件を①君臣の分を弁ずるもの、②男女の別を厳しくするもの、③兄弟の義を明らかにするものと評している。張遼から報告を受けた曹操は、①に対しては、「わたしは漢の丞相であり、漢とは即ちわたしである」として、②と共に問題としなかった。③には難色を示したが、結局三つの条件を受け入れ、関羽を降服させる。

毛宗崗本は第二十五回の総評で、「漢とは即ちわたしである」という曹操の言葉を「これは奸雄が人を欺く言葉である」と厳しく非難する。曹操は漢ではなく、漢の献帝を操る逆臣であり、劉備こそが漢である、と毛宗崗本は考える。「関羽は劉備を漢と認識しており、曹操を漢とは考えていない。すでに①漢に帰して曹に帰せずと言っている関羽は、結局③劉備に帰して曹操には帰さないのである」という。すなわち、関羽が、奸賊曹操に降服することなどはあり得ず、①「曹ではなく漢に降服した」その「漢」とは劉備のことであり、その行方が不明であったため、一時曹操に属したに過ぎない、と主張しているのである。かなり観念的な議論であるが、毛宗崗本は、すでに神として信仰されていた関羽の降服を義によって説明しようとしているのである。<sup>334</sup>

## II、劉備に帰参する義

関羽が劉備に帰参することを『演義』が義として絶賛する理由は、三国時代において、あるいは長い中国の歴史において、主君が敗れても見捨てず、優遇されても元の主君に帰参した事例がきわめて稀なためである。たとえば、項羽を破った漢の劉邦の武将韓信は、もともとは項羽の部下であった。それが劉邦の厚遇を受け、項羽を討つ主力となった。あるいは、毛宗崗が生きた清の中国統一には、明からの降将呉三桂の果たした役割が大きかった。しかし、こうした敵から帰参した功臣は、悲惨な末路を辿ることも多かった。韓信は劉邦に、呉三桂は康熙帝に殺害されている。かれらの生き方に義がなく、主君もその才能を統御できなかったためである。

これに対して、曹操は降服までの経歴よりも人物の才能を重視し、才能のある者は高く用いた。また、曹氏・夏侯氏以外の者に、原則として一万人以上の兵力を任せることはな

---

<sup>334</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.141~143。

く、武将の統御を厳格に行った。このため、曹魏を代表する武将となった帰参者は多い。

中国では、日本の江戸時代に宣揚された忠義のように、主君を変えないことを必ずしも義とは考えない。それどころか、正しくない国や君主に仕えることを恥とする。

（孔子が言った）危うい国には行かず、乱れた国には留まらない。天下に道があれば表に立つが、道のない時には隠れる。国に道が行われているのに、貧しくてしかも低い地位にいるのは恥である。国に道が行われていないのに、富んでしかも高い地位にいるのも恥である。（『論語』八佾）

孔子は、危うい国や乱れた国には仕えなくてよいと明言している。春秋時代の孔子がいう国とは、秦や漢といった統一国家ではない。三百以上もあった春秋時代の邑のことであり、それは後漢末の群雄よりも小さな単位となる。それが乱れていれば、留まる必要はないとするのである。<sup>335</sup>

このため多くの武将が、群雄のもとを去り、曹操に従った。その中、関羽だけが劉備のもとに戻って行った。毛宗崗をはじめとする「三国志」マニアが、関羽の義を絶対視する理由はここにある。

### III、曹操は関羽への評価

『演義』は、三つの条件を受けて関羽を降服させた曹操が、多くの恩恵を与えて関羽を引き留める様子を重ねて描く。それらの恩恵の中で、関羽が喜んだものは、かつて呂布が乗っていた赤兔馬だけであった。劉備のもとに千里を馳せて帰ることができる、と関羽が喜んだとするのである。さらに、関羽が義の実現のために払う努力を虚構として加えていく。「千里走単騎（千里単騎を走らす）」である。関羽が劉備のもとへ向かう街道の守備兵への連絡が遅れたため、関羽は単騎で五つの官所を突破して六人の将を斬ったうえで、劉備に帰参した、とするのである。この件について、曹操は「かれはかれで自分の主君のためにしていることである。追ってはならぬ」という言葉がある。曹操に辛い毛宗崗本も、この場面だけは、「関羽が豪傑の中の豪傑であるため、奸雄もこれを愛した。曹操は奸雄の中の奸雄である。」と、曹操を高く評価する。

---

<sup>335</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.143~144。

### ③義もて曹操を見逃す

『演義』のクライマックス赤壁の戦いで、諸葛亮と周瑜の暗闘という主題のもと、「借東風（東風を借りる。諸葛亮が火攻めに必要な東南の風を呼ぶ）」など六つの虚構を組み合わせ、赤壁の勝利を劉備集団の力によるものとする。その中の一つが、関羽にとって最も重要な虚構、「義もて曹操を釈つ」である。

赤壁で敗れた曹操は、退路を予測した諸葛亮の伏せた趙雲・張飛によって散々打ち破られ、華容道で関羽の待ち伏せに遭う。兵が疲弊の極にあった曹操は、死を覚悟する。しかし、程昱は、かつて関羽にかけた恩に縋るべきだと勧める。

曹操はうなずき、直ちに馬を進めると雲長に会釈していった、「將軍には、その後お変わりないか」。雲長も会釈を返して、「このたびは軍師の命により久しく丞相をお待ちいたしておりました」。「わたしはこのたびの合戦に敗れて兵を失い、かかる窮地に至ったが、將軍には昔日の情義に免じて、この場を見逃してほしい」。

「わたしは丞相の厚恩を蒙ったことはありますか、すでに顔良・文醜を斬って白馬での危地をお救いし、ご恩を報じました。今日は私情は許されませぬ」。「貴殿が、五ヶ所の関で守将を斬られた時のことをまだ覚えておられるか。大丈夫たる者は、信義を重んじるもの。『春秋』に造詣の深い貴殿のことゆえ、庾公之斯が子濯孺子を追った時のことをご存知であろう（衛の庾公之斯は、鄭の子濯孺子を追い討ちしたが、子濯孺子の肘が悪く弓の引けないことを聞き、また自らの弓の師の師であったため、公私の狭間に悩み、鏃を抜き取った矢を四本射かけて引き返し）」。

雲長は、義を重んじること山の如き人であったから、かつての日、曹操から受けた幾多の恩義、そして五関の守将を斬った時のことを思い起こして、心を動かさぬはずはない。その上、曹操の軍勢が戦々恐々、みな涙を浮かべているのを見ては、惻隱の情を禁じ得なかった。そこで馬首を返すと、「散れ」と手勢に命じた。言うまでもなく、曹操を逃そうという心からである。曹操は雲長が馬を返すと見るや、間髪を入れず、大将たちとともに一斉に駆け抜けた。

（『演義』 第五十回）

中国近代小説の祖である魯迅は、『中国小説史略』の中で、

曹操は赤壁で敗れたが、孔明は曹操の天命が尽きるはずのないことを知って、ことさらに関羽に華容への道を遮らせ、曹操を逃がすようにした。それなのにまたわざと軍法に従うことを求め、起誓文を入れたうえで行かせた。この叙述は孔明については狡猾さだけを示しているが、関羽の気概は凜然たるものがあり<sup>336</sup>

と述べる。諸葛亮を狡猾に見せる逆効果を生みながらも、関羽の気概凜然と表現することを『演義』は優先させたのである。<sup>337</sup>

## (二) 関羽信仰の形成

日本の中華街でも、関聖帝君として祭られている関羽は、道教の神である。道教は、福(子宝)・禄(財産)・寿(長生)を求める現世救済の多神教である。三国より始まる魏晋南北朝時代(220~589)に著された道教經典の『真靈位業図』には、原始天尊を最高神とする道教の神々が、ピラミッド型に位置づけられている。その最下位は、俗世で功績のあった人物が、冥界の官吏とされている。そこには、劉備・曹操を筆頭に荀彧・諸葛亮・司馬懿、徐庶までもが掲げられているが、関羽と張飛は含まれない。知識人ではないからであろう。魏晋南北朝期には、傑出した武将の力を「関・張の勇」と称えるほど、関羽は有名になっていた。それでも、信仰の対象ではなかったのである。<sup>338</sup>

### 1、関羽信仰の始め

#### ①天台宗玉泉寺

関羽は、唐代に初めて神として祀られた。関羽終焉の地に近い湖北省当陽県の城西三〇里にある玉泉寺で、仏を守るための伽藍神<sup>339</sup>として祀られたのである。

玉泉寺に設けられた、伽藍神としての関羽を祀る廟は、顕烈廟と呼ばれた。そもそも玉泉寺は、天台宗の祖智顛が開いた寺であるが、こののち関羽信仰の中心地の一つとして発

<sup>336</sup> 魯迅著 中島長文訳：『中国小説史略』、平凡社東洋文庫、1997年6月、p.363。

<sup>337</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.148~149。

<sup>338</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.156。

<sup>339</sup> 日本の寺院で「〇〇天」と呼ばれているバラモン教系の神々と同じ。



展していく。

## ②武成廟の従祀

玉泉寺の祭祀は私祭であるが、五年間だけ国家によって祭られたこともある。太公望呂尚<sup>340</sup>を祭る武成廟に、従祀されたのである。

天寶一四（755）年からの安史の乱により、唐の国力が衰えたことを憂う徳宗は、上元（760）年、太公望を武成王に封じて太公廟を武成王廟に昇格、孔子を祀る文宣王廟と同格とした。その際、文宣王廟に孔門十哲が従祀されていることに倣い、古今の名将一〇人を武成王廟の従祀とした。十名とは、孫武（孫子）・呉起（呉子）・田穰苴・楽毅・白起・韓信・張良・諸葛亮・李靖・李勣であり、魏晉南北朝時代からは、諸葛亮のみが選ばれている。

関羽が武成廟に従祀されたのは、建中三（782）年、古今の名将六十四人の一人に選ばれ、蜀前將軍漢壽亭侯として初めて国家により祀られた。これが、関羽の武神としての国家祭祀の始まりである。ただし、従祀された三国時代の武将は関羽だけではない。諸葛亮はもちろんのこと、張遼、鄧艾・張飛・周瑜・呂蒙・陸遜・陸抗・羊祜も祀られている。唐代における関羽は、いまだ結出した信仰を集める神ではなかった。しかも、従祀は、貞元二（786）年には中止されている。関羽が武神として官祭された時期は、極めて短期間に過ぎない。

唐代において関羽は、その終焉の地に近い玉泉寺で伽藍神として祀ることが始まったが、国家に祀られた時期は五年間と短かった。また、後世主流となる道教系の関羽祭祀は行われておらず、未だ本格的な関帝信仰は見られないと言えよう。<sup>341</sup>

## 2、国家の守護神

関羽の地位が高くなるのは、宋代からである。宋の皇帝たちは、北方民族に追い詰められた時ほど、関羽に高い称号を加えていき、それは以降の歴代皇帝に継承された（表「関羽の神号」を参照）。宋代に関羽信仰が進展した理由は、複合的である。

その重要な理由としては、宋の軍事行動への加護が挙げられる。中国歴代国家の中で相対的な軍事力が最も弱かった宋は、北宋の時には北方から遼、西方から西夏の、南宋の時

<sup>340</sup> 日本では、釣り人の代名詞だが、本来は周の武王を助けて殷を討ったとされる軍師。

<sup>341</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.145。

には北方から金の圧迫を受け、元によって滅ぼされた。そうした中で、宋は、弱体な軍事力を補うため神々に祈り続けた。

唐代より関羽を祭ってきた玉泉寺は、戦いのたびに宋から保護を受けた。たとえば哲宗が「顕烈」という扁額<sup>342</sup>を賜与したのは、父神宗のヴェトナム遠征の際、関羽が顕れて烈しく戦い、窮地に陥った宋軍を救ったことへの返礼である。

北宋の末期、軍事行動が増加すると、関羽の地位は、さらに高められていく。北宋最後の皇帝となった徽宗は、崇寧元（1102）年、関羽を「忠恵公」に封建したことを皮切りに、大観二（1108）年には「武安王」に、宣和五（1123）年には、「義勇武安王」へと封号を加える。公から王へと爵位がたかめられただけではなく、武徳を象徴する字面が加えられていることが分かる。<sup>343</sup>

信仰の高まりとともに、神号の字数が増え、神位があがる。

関羽の神号

関羽の神号	王朝	皇帝	年号
忠恵公	北宋	徽宗	崇寧年間
武安王	北宋	徽宗	大観年間
義勇武安王	北宋	徽宗	宣和年間
壯繆義勇武安英済王	南宋	孝宗	淳熙年間
顕霊義勇武安英済王	元	文宗	天歴年間
壯繆義勇武安顕霊英済王	明	憲宗	成化年間
三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君	明	熹宗	天啓年間
忠義神武霊祐関聖大帝	清	高宗	乾隆年間
忠義神武霊祐仁勇関聖大帝	清	仁宗	嘉慶年間
忠義神武霊祐仁勇威顕関聖大帝	清	宣宗	道光年間

表九<sup>344</sup>

<sup>342</sup> 寺院などに飾られる額装された書。

<sup>343</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.148。

<sup>344</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.147。

これらの王号封建の祭典儀礼は、すべて玉泉寺の顕烈廟で執行されたため、顕烈廟は救国済民の官営祈願所となり、関羽は宗の軍事行動に加護を与える武神として、国家の公認のもと、崇められるようになったのである。

しかし、南宋において、諸葛亮もまた「威烈武靈仁濟王」に封建されているように、国家の守護神を同姓でも同郷でもない関羽に限定する必要はなかった。関羽信仰の広がり、軍事行動との関わりだけでは説明できない。<sup>345</sup>（表九）

### 3、塩池の神

解県にうまれたこと、これが関羽を財神とした。関羽の出生地の解県には、今も宋代初期に創建された関聖廟が残される。北宋において関羽信仰が広まり、最大の理由は、山西商人の関帝信仰にある。

#### ①山西商人との結びつき

関羽の出身地である解県が、中国最大の塩の生産地である。塩の専売は古来国家の盛衰にも係るほどの重要な財源となっていた。塩は生活必需品であったため、価格の上下にかかわらず必要不可欠である。

宋代における塩の専売方法は、塩の生産・運搬・販売を国家が行う榷塩法に基づき、厳格に行われた。唐までの古代国家は、農業生産に国家存立の基盤を置いていたが、宋以降の中世国家は商業を重視し、その利益を国家が独占することに意を注いだのである。しかし、軍事的に弱体であった宋は、慢性的に軍事費が不足し、商人の助力を求めることが多かった。やがて塩の専売は、塩を払い下げる時に徴税し、後は商人に任せる通商法へと移行する。これにより、勢力を拡大したものが、山西商人<sup>346</sup>である。<sup>347</sup>

山西商人は、商売の際に同郷の関羽を守護神として崇拝した。儒教において貶められている商人の守護神として、「義」の神である関羽を掲げ、自らの地位の宣揚を目指したと考える。宋の財政の八割は軍事費に当てられ、税収入の五割を塩税が占めた。それを扱う山西商人は、莫大な財を築きあげる。その守護神であったからこそ、宋は、戦いに際して関

<sup>345</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.158。

<sup>346</sup> 山西商人とは、山西省および陝西省出身の商人・金融業者のことで、明・清時代には、南方の新安商人と並んで、中国商業界の二大勢力となった。

<sup>347</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.160。

羽に祈りを捧げた。関羽信仰は、商人と国家権力が癒着するための手段として拡大した。

348

## ②塩池の守護神

山西商人発展の源となった河東の塩池（解池）は、東南に長く（東西約二〇キロ、南北約四キロ）、禁堰と呼ばれる堤防に囲まれ、北堤には三つの門が穿たれていた。

禁堰を築いた目的は、盗賊の侵入を防ぐことはもちろんのこと、何よりも淡水流入の防止にあった。北方は高く南方が低いという塩池の傾斜を利用して、塩田は北岸に造成されている。唐以降、河東塩池の製塩は、塩水を塩田に流入させ、中條山脈から吹き寄せる、夏秋の強い季節風（塩南風）で蒸発させて塩を凝結させる、天日の製塩法により行われてきた。宋以降には、製塩技術や経営方式に改良が加えられたが、天日と季節風という、自然力に依拠する解塩の製法に基本的な変化はなかった。

したがって、順調な天候を祈るため、塩池には廟が設けられ、神が祀られた。池神廟は、池神を祀る正殿の塩池神廟を中心に、西側に季節風が吹き出す場所と考えられていた中條山の洞窟の神である塩風神・風洞神、東側に中條山の神を祀っていた。やがて、ここに塩池の守護神と考えられるに至った関羽の廟が加えられていく。<sup>349</sup>

宋を滅ぼした元では、税収の八割を塩税が占めた。そうした中、山西商人の信仰を集める関羽は、塩の生産を邪魔する蚩尤神と戦う姿を演じる戯曲「関雲長 大いに蚩尤を破る」のあらすじは、次のとおりである。

宋のころ解州の塩池は涸れ始め、塩の収入が少なくなっていた。皇帝が使者を派遣すると、城隍神（土地神）を名乗る老人が、「塩池の害は、かつて黄帝（中国の伝説上の最初の皇帝）に敗れた蚩尤神が起こしている」と教える。これを聞いた侍臣の王欽若は、「蚩尤は邪神であり、信州龍虎山の張天師（道教の教主。曹操に降服した張魯の子孫）に命じてこれを平定させるべきです」と上奏した。召し出された張天師は、「死後、神となった忠烈の士の中でも、蜀将関羽は忠勇を兼備しています」と薦めた。まもなく美しい髯をした武人が空から現れ、勅命を受け

<sup>348</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日）、p.162。

<sup>349</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.164。

た。塩池の上を黒雲が覆い、空中に戦いの音が響きわたる。やがて雲はおさまり、人々が見ると、池の水はもとのように満々とたたえられていた。

(『関帝録古記』「関雲長 大いに蚩尤を破る」)

塩商である山西商人の守護神としての関羽像が分かりやすく描かれている。山西商人は、商売先に関羽を勧進し、その劇を演じさせ、自らの守護神に祈願するとともに、その信仰を人々に伝えた。<sup>350</sup>

関羽は、こうして山西商人によって次第にその信仰を拡大し、国家や仏教伽藍神の守護だけではなく、商人の神である財神となり、様々な威力を持つ神へと変容していく。

#### 4、儒教の神

##### ①孔子と並ぶ

前述のように、関羽が武成廟に従祀されたのは、建中三（七八二）年、古今の名将六十四人の一人に選ばれ、蜀前將軍漢寿亭侯として初めて国家により祀られた。

しかし、北宋の司馬光は、『資治通鑑』の中で、武成廟に従祀される孫子・呉子以降の武将たちを「武」と呼ぶに足らないと次のように述べている。

(『論語』陽貨篇に)「君子に勇氣だけがあり義がなければ、乱を起こす。小人に勇氣だけがあり義がなければ、盜賊となる」とある。もし専ら勇力だけを教え、これに礼儀を知らしめなければ、何を仕出かしてしまうであろうか。孫子・呉子より以降は、みな勇力により互いに戦い、騙し合いにより互いに高みに立とうとした。(太公望の武成廟に従祀されている者たちを) どうして聖賢の門(である孔門)に準えて教え、「武」というに足りるであろうか。それを強引に(孔門の)十哲にあわせ、後世の学者の師とした。もしも太公望に魂があるならば、かならずや(孫子・呉子などと)共に祀られることを羞じるであろう。

(『資治通鑑』卷二百十三)

司馬光は『論語』陽貨篇の言葉を引用しながら、単に勇氣であるだけの武将は乱を起こ

<sup>350</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.160~161。

すだけであるとし、勇だけではなく「義」を兼ね備えなければ、「武」と呼ぶに足らない、と主張する。<sup>351</sup>こうして「武」という理念の中に、儒教的な倫理・道徳が求められるようになっていったのである。

曹操から「義」を称えられた関羽は、『春秋佐氏伝』を愛読していたことが『三国志』の裴注に明記される。関羽の「義」は、儒教を学んだ結果、身につけた「義」である。したがって、儒教的な倫理・道徳を備えた儒教の武神として相応しい資格を持つ。

もちろん、安史の乱の際に唐を守ろうとした張巡や、南宋を攻撃する金を破りながら、和平を望む秦檜に殺された岳飛など、儒教的な「忠」を体現する武将は存在した。関羽とともにかれらを祀る「双忠廟」や「三忠廟」もあった。しかし、関羽は単に「忠」であるばかりか儒教に基づく「義」を兼ね備えていた。このため清は、山西商人との結合のため、自らの守護神とした関帝の赤い顔は、「忠義」・「誠実」の色であるとされ、『春秋』を読む関羽像は、「春秋の大義」を体現する姿の象徴とされたのである。

雍正帝は、雍正八（1730）年、各地の関帝廟を「武廟」と呼ぶように命じ、孔子の「文廟」と並立させた。ここに関羽は、孔子と並ぶ聖人となった。洛陽の関羽の墓を「関林」と呼ぶのは、孔子の墓を「孔林」と呼ぶことと同じである。中国では、聖人の墓を「林」と呼ぶが、それは関林と孔林だけに用いられる。

道光年間（1821-1850）には、関羽は、孔子と同じように「夫子」と呼ばれた。武廟には、主神の関羽の両脇に、養子の関平と従者の周倉が祀られる。この二人は、関羽が劉備に忠義を尽くしたように、最期は関羽に殉じた。主従一体となって「忠義」を体現するもの、それが「武廟」なのである。儒教神としての関帝信仰は、こうして完成した。<sup>352</sup>

## ②乾隆帝の宣揚

雍正帝の子であり、清の最大領土を築き上げた乾隆帝は、関帝への信仰がきわめて篤かった皇帝の一人である。領土拡大のため、戦争を繰り返した乾隆帝は、その勝利を守護神の関帝に祈った。さらに、乾隆帝の文化事業として最も有名なものは「四庫全書」の編纂である。これは中国における最大の図書編纂事業である。すべての本を集めた目的は、文化の振興だけではなく、異民族支配への抵抗思想を抹殺するための検閲にも置かれていた。

<sup>351</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.190。

<sup>352</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、pp.191~192。

その中、乾隆帝は史書『三国志』について、関羽を良く描くために、歴史書を改竄せよ、と命令を下しているのである。

関帝は当時、忠義の志篤く立派なお方であった。しかるに、史書における関帝の諡号は、良いものとは言えない。陳寿は蜀漢を嫌っており、『三国志』の内容も偏見に満ちている。成祖章皇帝（順治帝）は、かつて関帝を「忠義神武大帝」に封建し、その天晴な志を称えておられる。朕は乾隆三十二（一七六七）年、ここに詔を下し、「靈祐」の二字を加えて敬意を示す。……現在編纂中である「四庫全書」では、愚かな習慣に従うことなく、『三国志』における関帝の諡号を「忠義」と改めるように。

（『四庫全書総目』巻首一）

皇帝として、これは最も慎むべきことであった。それにもかかわらず、関羽を篤く信仰する乾隆帝は、父の雍正帝が「武廟」で「忠義」の儒教神として祀ることを定めた関羽の諡を「武廟」での称号にあわせて、史書でも「忠義」と改名させた。この結果、「四庫全書」に収録された『三国志』関羽伝は、「関羽に追諡して忠義侯という」と陳寿の原作が改められている。国家の正統性を証明する史書としての正史の性格がここにも現れる。<sup>353</sup>

このように、乾隆帝は史書の記録を改竄するまで、儒神である関帝の「忠義」を明らかにした。皇帝が宣揚したことによって、関帝信仰がさらに中国隅々まで行き渡った。

それでも、関帝は当初から持っていた守護神としての役割を怠っていたわけではない。清の嘉慶年間において、関帝は守護神として、民に基盤を置く道教結社である白蓮教を中心とする宗教反乱鎮圧に大活躍したこともあった。嘉慶帝は、乱を平定後、関帝に「仁勇」の封号を賜与した。この結果、関帝の封号は、「忠義神武靈祐仁勇関聖大帝」（表 関羽の神号に参照）となった。「仁」という儒教を代表する徳目から成る封号を追加することによって、関帝が武神でありながら、儒神としてさらに明確に位置づけた。

## 5、世界中の関帝信仰

世界三大宗教と呼ばれる宗教がある。すなわち仏教、イスラーム、キリスト教の三教である。この中でイスラームとキリスト教、そして三大宗教ではないがユダヤ教は同じ旧約

<sup>353</sup> 渡辺義浩：『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.194

聖書に端を発する一神教である。当然、数からいえば、この一神教を信仰する人が最も多いものと思われる。

しかし、世界の最も多くの地域で信仰されている、ということからいえば関羽も引けをとらない。世界中には華僑と呼ばれる中国人移住者が存在する。それら華僑の信仰の対象となっているのが関羽であり、昔から中国・台湾で最も盛んに信仰されている神の一人が関羽である。関羽は死後神格化を重ね、現在では関聖大帝として道教の重要な神様となっているのである。

### ①台湾の竜山寺

台湾では、仏教と並んで道教が盛んであり、関聖帝君への信仰も篤い。首都の台北駅から西に二つ、竜山寺という駅がある。ここには、観音と媽祖を祀っている竜山寺があるが、竜山寺の一番奥の後殿には、赤い顔に長い髯の関帝が祀られている。道教は、多神教であり、道教の神々を祀るだけでなく、観音など本来は他の宗教の神を取り込んでいることも多い。廟に祀られる複数の神のなかで、関帝の優先順位は高い。もちろん、関帝を主神として祀る関帝廟も無数にある。台湾で最も有名な天行宮という関帝廟は、台北随一の人出を誇り、その近くの地下道には、占い師が多く集まっている。<sup>354</sup>

### ②日本の関帝靈籤

関帝の導きを自らの行動指針にしていた者は、賊や民に止まらない。乾隆帝の命を受けて「四庫全書」編纂の総責任者となった紀昀は、関帝靈籤（関帝のおみくじ）に高い関心を示していた。かれの随筆『閱微草堂筆記』の中で、当時における関帝廟の賑わいとその御神籤の盛行も記されている。

紀昀が感心している関帝靈籤は、江戸時代の日本にも入り、流行している。新井白石は、子女の婚姻問題の解決に第十八箋が役に立ったと記し、『南総里見八犬伝』を著した曲亭馬琴も関帝靈籤の愛用者であったことが『馬琴日記』よりわかる。京都大学人文科学研究所には、享保10年に、書林天王寺屋市郎兵衛が刊行した和刻本の『関帝靈籤』が所蔵されており、江戸時代によく読まれたことを今日に伝えている。<sup>355</sup>

この関帝靈籤は、現在の日本でも抽くことができる。さらに、横浜の関帝廟は、ウェブ

<sup>354</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.135。

<sup>355</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.215。



サイト上で、「神筭式おみくじ」として、簡単におみくじを抽けるようにしている。

### ③関帝信仰と華人

世界の中でも有数の強さを誇る華人のネットワークは、生きていく手段として作られた。華人のネットワークは、「幫」と呼ばれる同族・同郷・同郷の連帯組織が中心となる。なかでも、同郷者相互の信用は厚い。「幫」の信頼を得られれば、全世界の同郷者の協力が得られる。同郷者が各地にチャイナタウンを作っていれば、グローバルに人的ネットワークは広がる。

だが、各国のチャイナタウンは、一つの「幫」だけで形成されていることは少ない。同郷や同業ではない場合、相互の信頼関係を築くために、一つの方法が、「義」の神である関帝廟での誓いである。<sup>356</sup>

華人ネットワークの中心とする関帝廟は、単に関羽を祀るだけではなく、墓地の管理から貧困者の扶助、商業活動から国籍証明書の発給まで、あらゆる機能を果たしているのである。関帝廟が、こうした機能を果たせた理由は、関羽が持つ「義」を基にした信頼関係である。「義」絶関帝の前で誓うという行為が、相互の信頼関係を生み出していたのである。

### (三) 渡辺義浩の関羽像の特質

渡辺義浩氏が論じる関羽についての人物像は、私たちにかく作品の中で、いくつかの関羽像を取り上げた。

最初に、『三国志』を著した陳寿は、関羽への評価は高くなかった。彼の評にいう、関羽は傲慢でプライドが高すぎるために敗退した、と記されている。性格面の特徴としては、自尊心が非常に高い事が挙げられる。しかし、「万人の敵」の將軍ともあり、関羽の豪勇は、後世に伝説を生んだ。その武力により、唐初には関羽終焉の地に近い玉泉寺の伽藍神となり、国家が祀る武成廟にも従祀されていく。そして、劉宋に生きた裴松之は、われわれに人妻に未練の関羽像を取り上げた。このような史書に関する関羽像に対して、『三国志演義』における関羽の事績は、虚構に溢れていた。関羽の漢への忠を表現するため、作者がわざわざ「漢寿亭侯」のような架空の事件を作り上げた。さらに、義を表現「許田に打囲す」「漢に降るも曹に降らず」「千里単騎を走らす」「義もて曹操を積つ」のうち、史実に基づくものは、ほとんどない。「義絶関羽」の人物像は、『演義』編者にとって最も思い入れが込め

<sup>356</sup> 渡辺義浩:『関羽 神になった「三国志」の英雄』、筑摩書房、2012年10月12日、p.221。

られた産物であった。

この一連の作り話のおかげで、武人としての関羽をさほど尊重しなかった陳寿の『三国志』から、関羽を「義」絶と描く毛宗崗本への展開は、その間に関羽の地位が武将の一人から神へと昇り詰めていった。最初の仏を守るための伽藍神から、成長を挙げた山西商人との結びがあるため、宋代には、国家の守護神として、関羽に対して封号を賜与することが繰り返され、塩池を守る財神としての伝説も生まれていく。さらに、清によって「文」の孔子と並び称される「武」の儒神として国家に祀られる。

今の世代には、関帝廟が世界各地のチャイナタウンの中に建立されているように、関帝信仰、あるいは関帝廟は華人の人的ネットワークの中心に置かれる。世界各地で活躍する華人の強固な人的ネットワークの根底には、「義」と「信」がある。それを体現するものが、世界各国のチャイナタウンに鎮座する「義」絶の関聖帝君なのである。

## 二、金文京の関羽像

### (一) 神になる所以

#### 1、虚構に満ちた関羽像

『三国志演義』の人物を論じる時、なぜ劉備でなく、孔明でなく、関羽から始めるのか。それは、関羽こそがこの物語のかくれた主人公、いや真の主人公と言ってもよい、と思えるからである。魯迅は『中国小説史略』の中で『演義』の人物描写を評して、「劉備の温厚長重を表そうとするあまり偽物くさく、諸葛の知謀を述べて妖怪じみている。ただ関羽については特に優れた表現が多く、その武勇の有様も場面場面で目に見るようだ。」<sup>357</sup>、つまり劉備は温厚にみせようとしてかえって偽善者のようになり、孔明の智者ぶりはまるで妖術使いかと思われる。ただ関羽だけが見事な描写で、その正義感あふれる勇者ぶりがまのあたりに見えるようだ、と言った。<sup>358</sup>

実際『演義』と『三国志』を比べて見ると、その関羽のかっこよさの大半が、実は絵空事だと言ってもよい。まず関羽といえば青竜刀、そして赤兔馬であるが、このふたつからしてすでに何の根拠もない。次に数々の名場面、「温酒華雄を斬る」「文醜を斬る」「五関に六所を斬る」「華容道に曹操を釈す」これが全部つくり事であった。

<sup>357</sup> 魯迅著 中島長文訳：『中国小説史略』、平凡社東洋文庫、1997年6月、p.361。

<sup>358</sup> 金文京：『三国志演義の世界』【増補版】、東方書店、2010年5月、p.154。

## ①漢寿亭侯

毛宗崗本以前の張尚徳本などのテキストは、関羽が曹操のもとにいた時のこととして、次のようなエピソードが見える。

関羽が袁紹の猛将、顔良を討った功に報いるため、曹操は関羽を寿亭侯に封じ、印をおくるが関羽は受け取らない。そこで上に漢の一字をつけて、漢寿亭侯としたところ、関羽は喜んで拝受したというのである。いわゆる「漢に降るも曹に降らず」という関羽の面目を示す話である。

関羽が寿亭侯となったのは事実だが、この場合、漢寿は地名（今の湖南省）、亭侯は侯の階級の一つである。したがって、漢の寿亭侯ではなく、漢寿の亭侯である。このエピソードは、むしろこの誤解にもとづくものだが、しかし元明時代には、むしろこの誤解の方が通解であったらしく、例えば、明の初期、洪武二十七年（1394）に南京に建てられた関羽の廟には、「漢の前將軍・寿亭侯」とかかれており、ずっとのちの嘉靖十年（1531）になってようやく誤りに気付き、訂正したという。清代の人である毛宗崗は、この誤りを知っており、自分のテキストからこのエピソードを削ってしまった。

## ②燭を乗りて旦に達る

『演義』は、三つの条件を受けて関羽を降服させた曹操が、多くの恩恵を与えて関羽を引き留める様子を重ねて描く。実は曹操は恩恵だけではなく、関羽を色仕掛けの罠にはめて、劉備に帰参できなくさせようとしたこともある。それに対して、関羽の対応が、「乗燭達旦（燭を乗りて旦に達る）」である。関羽が降服して許に向かう道すがら、曹操は降服条件の二であり、「二人の嫂（劉備の夫人）には皇叔の知行を賜り、いかなる者も門内に立ち入るのを禁ずること。」を関羽自ら破らせるため、劉備の夫人と関羽に一つ部屋を与えた。

途中、宿場に着くたびに、曹操は君臣の礼を乱させようとして、関公を二人の嫂と同室させたが、関公は燭を手にして、夜の明けるまで戸外に立ちつくし、疲労の色をいささかもみせなかった。

（『演義』第二十五回 土山に屯し、関公三事を約す）

関羽は、曹操による色仕掛けに全く動ずることはなかった。それどころか、自ら戸外に立ち続け、自らの約束を守る「義」を示し続けた、とするのである。

この二つの話について、毛宗崗は、凡例の中で次のように述べている。

一、俗本（毛宗崗本までの『三国志演義』）の記事には誤りが多い。「昭烈 雷を聞いて筋を失ふ」や「馬騰 京に入りて害に遇ふ」・a「関公 漢寿亭侯に封ぜらる」のような記事は、みな古本（毛宗崗本が、かくあるべしと考える『三国志演義』。実際に古い本に照らし合わせているわけではない）とは合わない。……いま、すべて古本に従ってはっきりと定めた。

一、記事には欠かすことのできないもの、たとえば、b「関公 燭を乗りて旦に達る」・「管寧席を割り坐を分く」・「曹操 香を分け履を売らしむ」・「于禁 陵廟に画を見る」・「武侯夫人の才」・「康成の待児の慧」・「鄧艾鳳兮の対」・「鐘会の不汗の答」・「杜預の『左伝』癖」のような記事は、俗本ではみな削り去って叙述していない。いますべて古本に従ってこれらの記事を記し、読者が全貌を窺うことができるようにした。……

毛宗崗は、凡例において書き換えた記事の具体例として二三ヶ所を指摘しているが、そのうち、a「漢寿亭侯」というエピソードは関羽の漢臣としての義がよく表現された虚構であるが、毛宗崗本は「漢寿」という地名を「漢」と「寿」に分ける誤りを許さなかった。b「燭を乗りて旦に達る」は、曹操が劉備の中を割くために企んだ色仕掛けの罠を関羽が一蹴する物語である。この物語では、曹操の「不義」と関羽の「義」とが対比される。史実に合わないとしてa「漢寿亭侯」の虚構を削除する一方で、これまでの『三国志演義』には無かった架空の物語を関羽の義を表現するため、毛宗崗本はb「燭を乗りて旦に達る」を加えているのである。

これ以外、「貂蟬を斬る」や「玉泉山に聖を顕す」などは言うまでもない。残ったのは「顔良を斬る」「骨を刮って毒を療す」それに「水にて七軍を淹す」そのぐらいなものである。そのうえ関羽の第一部下、周倉も架空の人物、息子の関平は本当は実子なのに、小説ではなぜか義理の間柄になっている。こうやってひとつずつボールをはいでゆくと、ついには陳寿が彼を評した「剛にして自ら誇り、短をもって敗を取る、理数の常なり」、つまり剛情で傲慢な欠点のために自滅したのは当たり前だ、という冷酷な言葉が待ち受けている。

関羽は三国時代の実在した人物であり、『三国志演義』においても重要な役割をはたしている。『三国志演義』にみえる関羽の活躍は、当然この時代を対象とする正史、陳寿の『三

国志』に立てられた伝の記載を襲っている。しかし文学作品、特に『三国志演義』のような物語は、誰でも読めば容易に納得できる明らかな因果関係のもとに語られ、しかも読者の興味を引っぱってゆくだけの魅力を備えていなければならない。そのためには史実をさまざまな形でアレンジし、場合によっては虚構を用いることも必要となってくる。

## 2、財神としての関羽

関羽が実像をはるかにこえて立派に描かれているのは、むしろ彼が神となったからである。関羽は関公となり、関王となり、ついに関帝となって、文の孔子とならぶ武神の頂点に立った。勇将ではあっても必ずしも良将ではなかった関羽が、なにゆえこのように尊崇されたのであろうか。兄の劉備さえ神でないのに、自分が神になっては、義理にもとるではないか。関羽はいったいどうして神になったのか。

現在でも関羽は中国国内においても、世界各地の中華街でも、「財神」として崇拝されている。本来、地方政権の一介の武将でしかない関羽が、財神として崇敬されるようになったのは、山西商人の活動が大きく影響している。

関羽の故郷は、山西省解州（現在の運城県）であった。解州には、中国最大の塩湖として古来有名な塩池がある。内陸部では、塩はしばしば貨幣として使用されるほどの貴重品となる。そこで解州一帯の人々は、古来塩の製造販売に従事する商人となった。漢になると、塩は国家の専売品となる。塩の専売は莫大な利益を政府にもたらした。それによって、塩商人の勢力も拡大し、政府の庇護のもとに活動を全国に広げ、金融にまで手を伸ばして、中国全土の経済権を制覇するまでいたった山西商人となっている。この後、中国の軍事、経済、政治まで動かした存在となってきた。

郷土意識の強い中国人のよい例として、彼ら山西商人は、同郷の偉人である関羽を守護神として崇拝していた。関羽信仰の主体が商人であったことが、武将関羽が財神に変化した原因となる。

## 3、神格化の過程

中国では古くから政府が宮中で軍神を祭る習慣がある。その初代は、黄帝と戦って敗れたとされる神話中の人物、蚩尤である。漢の高祖も天下統一後さっそく蚩尤を祭っているのである。唐になると、周王朝の創立を助けた太公望、呂尚にとってかわられ、呂尚はさらに武成王という称号をあたえられた。次の宋代には、国家の祭祀は武成王にささげられ

るが、民間から関羽の存在が厚くなって、政府はついに彼を武安王に封じた。

その後、関羽の地位が上昇し、ついに武成王の権威を圧倒して、関羽信仰が全国に広まっていく。明の万歴四十二年（一六一四）には、「三界伏魔大帝神威遠振天尊関聖帝君」という称号をもらい、そしてついに清初にいたって、「忠義神武関聖大帝」として、三代目軍神に就任した。

## （二）日本の関羽ブーム

### 1、関羽ブームの始め—浄瑠璃と歌舞伎

芝居の世界で「三国志」が扱われた早い例として、まず宝永六年（1709）大阪嵐座上演の歌舞伎『三国志』、ついで初代竹田出雲の第一作で、享保九年（1724）、大阪竹本座初演の人形浄瑠璃『諸葛孔明鼎軍談』があげられる。後者は、劉備と曹操がそれぞれ黄巾族の首魁、張角の首を朝廷に献上したことから、その真偽をめぐる争いが発端となり、劉備と皇后の密通を疑った霊帝が誤って皇后に殺され、劉備が逃亡する話や、曹操のもとに身を寄せた関羽が、曹操に忠義の姿勢を示すため弟の関良を殺す話、司馬徽の娘、金糸蓮と玉芙蓉がそれぞれ司馬仲達と諸葛孔明に嫁ぎ、どちらも夫のために父を軍師に招こうとしたため、司馬徽が両目をくりぬき二人の娘にあたえる話、関羽の関所を通過する話などがつづき、最後は孫堅の仲裁で、劉備、曹操、孫堅がみな皇帝となって天下を三分するという筋建てで、一部『通俗三国志』の内容や文章に依拠したところもあるが、全体としてはまことにもって荒唐無稽な話である。架空の女性を多数登場させているのは、それ以前の歌舞伎『三国志』で仲達、孔明両夫人の活躍が評判になったためというが、『風流三国志』など女性を主役とするのちの「三国志」パロディー物の先駆けといえよう。

この作品でもうひとつ注意すべきは、題簽にみえるその完全な外題を「三国志大全諸葛孔明鼎軍談」ということである。明の嘉靖三十二年（1553）刊の戯曲選集『風月錦囊』後編巻二に「三国志大全」がある。これは「三国志」に関するさまざまな芝居の一部を抜書きしたものだが、中に関羽が貂蟬を斬る話や関羽の関所破りなどを演じる幕をおさめる。貂蟬を斬る話は、女性と残酷さが一体になっている点、日本の浄瑠璃や歌舞伎の趣向と共通するものがあり、本作品となにか関係があるかもしれない。

この作品は歌舞伎に翻案されなかったが、のちにその前半の内容をあつかった墨川亭雪麿作、歌川国貞画、天保二年（1831）刊の合巻『世話字綴三国志』では、挿絵の人物が、関羽と孔明は七代目市川団十郎、劉備は三代目坂東三津五郎、曹操は三代目中村歌右衛門な

ど、すべて当時人気の歌舞伎役者の似顔絵になっている。

歌舞伎と「三国志」の関係では、「歌舞伎十八番」の「関羽」が有名だが、これは元文二年（1737）二代目市川海老蔵（団十郎）主演、江戸河原崎座でえんじられた『関 月仁 景清』で、海老蔵の畠山重忠が関羽に、市川団蔵の悪七兵衛景清が張飛に扮したのが始まりで、これが好評であったため、団十郎は、元文四年の『瑞樹太平記』、また寛保二年（1742）の『東山殿旭扇』でも関羽に扮した。のち天保三年（1832）にいたって、七代目団十郎が十八番を制定したが、その中に「関羽」がある。ただしこれは、関帝廟の扉を開けて現れた関羽が、「漢の寿亭侯関羽、字は雲長、今、日の本に霊を現し、奸佞邪悪の輩を唯一拉ぎに取拉がん」と名乗るが、その正体は景清であったというもので、一種の劇中劇もしくは変化物として関羽を登場させたにすぎず、「三国志」の物語を演じたわけではない。<sup>359</sup>

## 2、関羽の流行

「歌舞伎十八番」の「関羽」は、江戸時代における関羽ブームのひとつの現れである。それ以外、『演義』の完訳である湖南文山の『通俗三国志』が、元禄四年（1691）に京都の本屋、栗山伊右衛門によって刊行された。これは日本語に完訳された初めての外国小説であった。底本は李卓吾評本であるとされる。首巻「或問」には、

予、異域ノ人ニ遇テ、関王ノ事ヲ問シニ、安南、琉球、女直、朝鮮、呂宋、暹羅ノ諸国モ尽ク廟宇ヲ建テ祭ヲナシ、凡ソ事不レ祈ト云コトナク、関爺々ト号シテ所レ乗ノ舟ミナ像ヲ設ク。

と、東アジア諸国における関羽信仰の広まりを述べた後、「近来ソノ廟ノ記ヲ見ルニ曰ク」として、出処を示さずに朝鮮の柳成竜「記関王廟」を全文引用している。これについて、長尾直茂氏は、『三国志演義』が朝鮮から対馬経由で京都に伝わり、それが『通俗三国志』につながった可能性を示唆された。<sup>360</sup>

この記事による、関羽についてのふたつの情報が得られる。ひとつは、異域の人の言として、安南（ベトナム）、琉球（沖縄）、女直（満州）、朝鮮、呂宋（ルソン）、暹羅（シャ

<sup>359</sup> 金文京：『三国志演義の世界』【増補版】、東方書店、2010年5月、p.282。

<sup>360</sup> 長尾直茂：『「通俗三国志」述作に関する二三の問題』、『国文学論叢』26号、上智大学国文学会、1992年。

ム、現在のタイ)にまで関羽を祀る廟があり、航海の守護神であるという説、もうひとつは柳成竜の「記関王朝」である。

前者はいわば東アジア海上貿易による関羽信仰の広まりを反映したものであるが、ただし関羽は水害を鎮めるなど水神的性格はもっているものの、航海の守護神として船にその像が祀られることはない。これより以前、日本に亡命した明の朱舜水と水戸藩の小宅生順の間答で、媽祖と関帝についての質問に対して、朱舜水は、媽祖は海道を専管する神で、船の東西洋往来をつかさどり、関帝は蜀漢の関羽で、万歴帝によって協天大帝に封じられたと述べている。これからすると、『通俗三国志』は、関羽と媽祖を混同したのかもしれない。

いずれにせよ、その後は長崎の中国商人や黄檗僧を通じて伝来した中国の珍しい神という点に興味が集まり、『三国志演義』の流行や唐話ブームなどの波に乗って、知識人、文人層の間に関心が高まった。京都の儒者、伊藤東涯の「関公賛」(『紹述先生文集』巻十二)には、関羽が曹操に降服した際の三つの約束や、秉燭達旦など、『演義』にもとづくと思われる話題が詠まれているが、その後も青龍刀や赤兔馬など、『演義』や関帝信仰にちなむ漢詩、賛が数多く作られる。その流行は歌舞伎や講談によって、さらに庶民層にも広まり、たとえば江戸、浅草の奥山に巨大な関羽の籠細工が見せ物として展示されるなど、多くの民衆に親しまれた。

このように関羽は、知識人、庶民の双方によって親しみ深い存在となったが、本質的には日本とは直接関係のない、したがってまた信仰の対象とはなりえない、単なる異国趣味の域を出なかったとも言える。江戸後期に大阪の町人が設立した学校、懐徳堂の中心人物であった中井竹山は、自分の誕生日が関羽と同じ五月十三日であったことから、同関子と名乗り、「髯公同物」という印を彫った(大阪大学懐徳堂文庫所蔵)。竹山にとって関羽は、文人趣味の一題材にすぎなかったであろう。しかし自分を関羽と同定するようなことは、中国では絶対にありえないことであった。

現在、横浜や神戸、長崎などの中華街にある関帝廟は、すべて在日華僑が建立したものである。ほとんどの日本人にとっては、好奇心の対象、または観光スポットにすぎないであろう。このことは関羽だけでなく、日本人の『三国志演義』にたいするスタンスをはしなくも物語っている。<sup>361</sup>

---

<sup>361</sup> 金文京：『三国志演義の世界』【増補版】、東方書店、2010年5月、p.285。



### (三) 金文京の関羽像の特質

金文京氏の論じる関羽像を見てみると、日本・中国の二ヶ国は、物語としての『三国志演義』を愛読し、深く受容を続けていることが分かる。ただし、二国の『三国志演義』は、すべて同じというわけではない。その違いを生み出している最大の要因、それが関羽である。

金文京氏は、まず『三国志演義』の関羽像について、いくつかの名場面を取り上げた。それら名場面が神としての関羽を支持されているが、実はみんな作り話である。蜀漢を建国した劉備の一武将を神に昇格させる担い手として、まことに素晴らしい手法である。

そして日本の関羽ブームから言えば、元文2年(1737)には江戸で、二代目市川團十郎主演による『関羽』という歌舞伎の演目が初演されており(のちに市川家歌舞伎十八番に選定される)、庶民レベルまで三国の英雄の名が定着していたことがうかがえる。書物について、『演義』の完訳である湖南文山の『通俗三国志』が、元禄四年(1691)に京都の本屋、栗山伊右衛門によって刊行されたことがわかる。その後、日本に於ける関羽像は、黄檗僧が信仰の対象たる伽藍神としてもたらした関羽像を始め、『三国志演義』の流行や唐話ブームなどの波に乗って、知識人、文人層の間で関心が高まった。

もちろん、横浜の中華街には、壮麗な関帝廟があり、いつも参拝客で賑わいを見せている。横浜だけではない。神戸・長崎といった華人の暮らす町には、関帝廟が華人社会の中心に鎮座している。しかし、関帝を信仰する日本は大勢じゃないと思う。関羽信仰との関係が薄い日本人は、関羽の特別扱いに違和感を覚えるのである。

## 三、井波律子の関羽像

### (一) 関羽はいかに描かれたか

#### 1、関羽の武

##### ①華雄を斬る

こうした関羽描写の代表的なもののひとつは、関羽が『演義』の世界に颯爽と登場、最初にその超人性をみせつけるシーンである。中平元年(184)、宦官を滅ぼすため、外戚の何進が董卓をはじめとする地方の軍を都に呼び寄せたためである。何進が宦官に殺される混乱の中、宮殿より連れ出されて彷徨っていた少帝と弟の陳留王(のちの献帝)を保護した董卓は、軍事力を背景に皇帝を廃立する暴挙を行った。これに対する、各地の群雄が集まり、袁紹を盟主とする連合軍が結成された。このとき劉備・関羽・張飛も旧知の北平太

守公孫瓚について出陣、連合軍に参加した。

しかし、董卓軍の猛将華雄が無敵の強さを発揮し、孫堅（孫策・孫権の父）を破られ、命からがら逃げ出す始末。これに対して、袁紹が「わしの大將の顔良と文醜がまだ到着しないのが残念だ」といった瞬間。

その言葉が終わらないうちに、きざはしの下で、一人の者が大声で呼ばわって進み出た。「それがしが出陣して華雄の首を取り、おん前に献じましょう」。人々が注目すると、その人は身の丈九尺、髯の長さ二尺、丹鳳の目、蚕の眉、顔は重棗のように赤黒く、声は大鐘のごとく、すつくと陣幕の前に立っている。

袁紹が誰かと尋ねると、公孫瓚は「劉玄徳の弟の関羽です」と答えた。袁紹はまた現在の官職をたずねた。「劉玄徳に隋従し馬弓手をつとめております」と、公孫瓚が答えると、陣幕のなかにいた袁術が大声で怒鳴りつけた。「おまえは、われら諸侯に大將がいないとばかにするのか。弓手の分際で、暴言を吐きおって。こやつを叩き出せ」。曹操はあわてて制止した。「公路（袁術のあざな）どの、お怒りめさるな。この者は大言を吐く以上、必ず腕に覚えがあるのだろう。ためしに出馬させ、もし敗れたならば、そのとき責めても遅くはありますまい」。袁紹はいった。「弓手ふぜいを出陣させれば、必ず華雄に笑われようぞ」。「この者の姿たちは、ただものではない。弓手だと華雄にわからはずがない」と曹操。関羽は「もし敗れたならば、それがしの首を斬ってください」という。曹操は熱く酒を盃につがせ、飲ませてから出陣させようとしたところ、関羽は、「酒はひとまず、ついでままにしておいてください。それがしはすぐ戻ってまいります」といい、陣幕を出ると刀をひっさげ、ヒラリと馬に飛び乗った。諸侯たちは、関の外で陣太鼓がさかんに鳴り響き、関の声がドッとあがって、天くだけ地くずれ、山々を揺り動かさんばかりであるのを聞くと、みなびっくり仰天した。ちょうどようすを探りにいかせようとしたとき、鈴の音とともに馬が中軍に到着、雲長（関羽のあざな）が華雄の首をひっさげ、ドサリと地上に投げ出した。酒はまだ温かいままだった。

（『演義』第五回 矯詔発せられて諸鎮 曹公に応ず）

袁紹を盟主とする諸侯連合軍荒れ狂う華雄に押しまわれ、打つ手も尽きたとき、のち

に「美髯公」と呼ばれるごとく、長く美しい髯をなびかせ、熟した棗のような赤い顔した偉丈夫関羽が颯爽と登場、温めた酒がまださめないうちに、こともなげに華雄の首を打ち取り凱旋する。このくだりの描写には強烈なインパクトがあり、関羽という人物のずば抜けた劇的キャラクターを鮮やかに浮き彫りにする。<sup>362</sup>

『平話』にはこの話はみえず、また、陳寿の『三国志』にも、董卓軍の猛攻により連合軍の先鋒隊の孫堅が敗走するという記述があるだけで、このシーンには関羽も張飛もいっさい登場しない。

『演義』がここで、関羽の見せ場を作ったということは、表現が際立って文学的だといふのみならず、実は、『演義』世界の全体構造にも大いに関係をしているのである。見ての通り、袁術や袁紹が関羽の地位の低さを言い立て、華雄と戦う資格がないとしたことを止め、関羽に戦う機会を与えて、酒を振る舞った曹操の面子を立てた。曹操が関羽に惚れ込む伏線である。両者の死去まで描かれ続ける関羽と曹操の因縁はここから始まる。

## ②顔良・文醜を斬る

関羽の武勇を強調する場面のもう一つとして、建安五（200）年の白馬の戦いが『三国志』の中に記録される。それは関羽の武が輝く場面であるが、その記事は、わずか一九文字に過ぎない（[] 内容が原文）。

関羽は顔良の麾蓋（旗印と傘）を望み見ると、馬に策ち顔良を多くの兵の中に刺し、その首を斬って帰った〔羽望見麾蓋、策馬刺良於万衆之中、斩其首還〕。

（『三国志』関羽伝）

これに対して、『演義』は、「戦場に出ていただくことで主人の消息が掴めるかもしれません」との劉備の二夫人の言葉を掲げ、関羽が曹操のために戦ったわけではないことを確認した上で、関羽の「武」を次のように描写する。

関公、勇躍馬にまたがって、青竜偃月刀を片手に山を駆け下り、切れ長の眼をかつと怒らせ、太い眉をきりりと逆立て敵陣に駆け入れれば、河北の軍勢はわっと

<sup>362</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日 第1刷発行、2011年12月5日 第16刷発行、pp.87~89。

波のようにわかれるところを、顔良目指して殺到した。顔良は、絹傘の下にあったが、関公がすさまじい勢いで突き進んで来たので、声をかけようとした時、赤兔馬（関羽の馬）は早くも眼前に迫り、刀を構えるいとまもなく、雲長（関羽のあざな）の刀一閃して馬下に斬って落とされた。関公ひらりと飛び降りてその首を掻き斬り、馬首に括りつけるなり馬に飛び乗って、敵陣を駆け出でたが、その勢いあたかも無人の境に行くが如く、河北の将兵はただただ仰天して、戦わずして総崩れとなった。

（『演義』第二十五回 白馬を救いて曹操 重囲を解く）

このシーンについて、関羽の武が正史の十九文字をもとに、見事に強調して創作されている。『演義』はさらに、関羽の武を引き立てるために、史実では関羽に殺されていない袁紹の武将文醜も、張遼・徐晃を破ったのち、関羽に斬られたことにしている。

ここで注目されるのは先に取り上げた第五回の曹操と関羽の出会いのシーンで、すでに袁紹が自慢の大將として顔良と文醜の名を口にしており、それがこのくだりの遥かな伏線となっていることである。ことほどさように、『演義』の複線の張り方は周到をきわめており、前後の叙述が共鳴しあうべく綿密に計算されているのだ。<sup>363</sup>

## 2、関羽の義—『演義』独創の名場面—華容道

『演義』世界の中で、関羽と曹操にまつわる因縁の糸を詳しく辿ったのは、名場面第五十回「雲長、義によって曹操を釈つ」しかない。

赤壁で敗れた曹操は諸葛亮の張った網にかかり、行く先々で、待ち伏せをしていた趙雲および張飛の部隊の襲撃をうけたが、血路を開いて辛うじてこれを振りきり、疲労しきった敗残の三百余騎を率いて逃避行をつづけ、華容道にさしかかった。

また数里も行かないうちに、曹操は馬上で鞭をあげてカラカラと笑った。大將たちが「丞相、どうしてまたそんなに大笑いなさるのですか」と尋ねると、「人はみな、周瑜や諸葛亮は智謀に優れた者だと申して居るが、わしの目からみれば、結局は無能の者どもだ。もしこの地点に一隊の伏兵をひそませておけば、われら

<sup>363</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.92。

は皆、手をつかねて捕虜になるよりほかあるまい」といった。

その言葉が終わらないうちに、ドーンと砲声が鳴り響き、両側から五百の抜刀した突撃隊があらわれ、大将の関羽が先頭に立って、青龍刀をひっさげ、赤兎馬に跨がって、行く手をさえぎった。曹操軍はこれをみると肝をつぶし、顔を見合わせるばかり。「ここまで来れば、命がけで決戦するしかない」と曹操。「たとえ勇氣はありましても、馬の力が衰えておりますゆえ、どうしてこれ以上戦えましようぞ」と大将たち。と、程昱はいった。「それがしは、雲長は上の者には傲慢だが下の者には憐み深く、強者はバカにするが弱者は虐げない男だと、よく知っております。恩と怨みははっきり区別し、その信義の厚さはもとより明らかです。丞相は昔、彼に大恩をほどこしていらっしゃるのですから、今、ご自身でお話になりましたならば、この危機を脱することができましよう」。

曹操はこの言葉に従い、ただちに馬を走らせて前方に向かい、身をかがめてお辞儀していった。「將軍、一別以来、お変わりはないか」。関羽も身をかがめお辞儀を返していった。「それがし軍師の命をうけ、久しく丞相をお待ち申しておりました」。「わしは戦いに敗れ危機に陥り、事ここに至ってもはや逃れる道もない。どうか將軍には昔のよしみを重んじて下され」。「いかにも昔、それがし丞相より大恩を被りましたとはいえ、顔良・文醜を討ち取り、白馬の危機を救ったことで、すでにご恩返しをさせていただきました。今日のことにつきましてはどうして私情によって公事を廃することができましようぞ」。「五関の守将を斬ったときのことをお忘れか。りっぱな男は信義を重んじるもの。將軍は『春秋』に深く通じておいでなのだから、庾公子斯が子濯孺子を追った故事を、まさかご存知ないわけはあるまい」。

関羽は義理を山よりも重いとする人であったから、かつて曹操から受けた幾多の恩義、はたまた五関の守将を斬殺したとき曹操が咎めなかったことを思い出すと、どうして心を動かさずにいられたろう。また、曹操軍の人々の、恐れおののき涙を流さんばかりのさまを見ると、ますます辛さがつのるのだった。そこで関羽は馬の首をめぐらし、「散らばって間をあける」と突撃隊に命じた。これは明らかに曹操を見逃そうという意味である。曹操は関羽が馬をかえしたのを見るとすぐさま部将たちとともにドッと突き進んだ。関羽が振り向かいたとき、曹操はすでに部将ともども囲みを通過したあとだった。

関羽が一喝すると、曹操の武将はみな馬から下り、地にひれ伏して涙を流したので、関羽はますます辛くてたまらなくなった。ためらったちょうどそのとき、張遼が馬を飛ばして駆けつけてきた。この姿を見ると、また昔馴染みへの思いがわいてきて、フツとためいきをつき、とうとうのこらず見逃してしまった。

(『演義』第五十回 関雲長 義もて曹操を釈つ)

この場面の関羽は圧倒的にすばらしい。嘆願する曹操、地にひれ伏し涙ながらに慈悲を乞う曹操の将兵、そして旧友張遼の懐かしい姿。これを見た関羽は心の葛藤のはてに、曹操の追撃という公的な至上命令をしりぞけ、あえて私の感情、私の論理に基づき、恩義ある曹操を救った。その潔くも根源的なやさしさが、ここでひとときわ輝くのである。<sup>364</sup>

この『演義』の華容道の名場面は、陳寿の『三国志』には全く見えず、完全なフィクションである。ただ、『演義』はこの関羽の最高の見せ場に先立ち、全知全能の諸葛亮は、義理固い関羽がきっと曹操を見逃すだろうと予測しながら、天文を観察すると、曹操にはま滅亡する気配がみられないから、わざと関羽に人情をまっとうする機会を与えたのだとしている。この点に注目して、華容道の場面を『演義』の文学性を示す最高のものだと称賛する魯迅は、

この叙述は孔明については狡猾さだけを示しているが、関羽の気概は凜然たるものがあり…<sup>365</sup>

と指摘している。魯迅のいうとおり、傑出した関羽描写にくらべれば、諸葛亮についての叙述は、蛇足だといわざるをえないだろう。

実は、関羽の見せ場たるこの場面を称賛するのは、一人魯迅にとどまらない。たとえば、『演義』をふくめ中国の古典小説に総じて点の辛い大学者の王国維（1877～1927）もまた、『文学小言』のなかに、「『三国志演義』には純文学の資格はない。しかし、関羽が曹操をはなつくだりの叙述は、大文学者でなければ、とうてい成しえないものである。『水滸伝』描くところの魯智深、『桃花扇』描くところの柳敬亭・蘇昆生らの行為は、いうまでもなく

<sup>364</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.97～98。

<sup>365</sup> 魯迅著 中島長文訳：『中国小説史略』、平凡社東洋文庫、1997年6月、p.363。

少しも意味がない。とはいえ、その自己の利害を顧みない態度に、私は無限の興味を覚え、無限の敬意を抱くのである。ましてや関羽のように雄々しい人物に対しては、いうまでもないことだ。これぞまことにカントいうところの、実践理性が宇宙人生の根本をなすということではあるまいか。」と述べて、高く評価するのである。華容道のシーンこそ、『演義』のうちでもっともレベルの高い文学性にあふれたものであることは、まず間違いない。『演義』では関羽がひとときわ輝いてみえるのも、実は、その行動の軌跡をたどる描写力や表現方法の素晴らしさによるところが大きいと思われる。<sup>366</sup>

## (二) 神と化した関羽

### 1、靈験を顕す

曹操と孫権の挟み撃ちにより死去した関羽の魂は、なおこの世に残り、まず荊州当陽県の玉泉山に飛んで行く。かつて関羽が五関を破り六将を斬ったとき、関羽を助けた普淨に、関羽を成仏させるのである。

しかし、悟りの境地に達したとされるわりには、その後も関羽の怨霊は猛威を奮い、崇りつづける。まず、関羽を陥れた呉の呂蒙に憑依して、荊州を奪ったことを祝う宴席で、孫権を罵る。

(孫権が荊州を奪った功績を称え、呂蒙に) 手ずから酒を注いでやると、呂蒙はそれをいただいて呑もうとした。ところが、突然杯をその場に叩きつけると、孫権の胸ぐらを取って大音声に、「碧眼の小僧、紫髯のネズミ野郎。わしが誰だかわかるか」と言った。諸将が仰天して救いに馳せつけるとき、呂蒙は孫権を押し倒し、のっしのっしと孫権の席に上がって腰を下ろすと、両の眉をきりきりと逆立て、皆を決して大喝した。「わたしは黄巾を破ってよりこの方、天下を縦横すること三十余年、いま貴様の奸計に掛かったとはいえ、生きて貴様の肉を食らうことが叶わなくなった上は、死んで呂蒙の魂を追いかけてやる。われこそは漢寿亭侯関雲長なるぞ」。仰天した孫権が、あわてて一同を率いてひれ伏すところ、呂蒙はその場に討ち倒れ、七つの穴から血を流して死んでしまった。

(『演義』第七十七回 玉泉山に關公聖を顕す)

---

<sup>366</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.100。

関羽の霊が呂蒙に乗り移ったのだ。こうして関羽の霊に崇られた呂蒙は、たちまち身体中から血を流して息絶えてしまう。このシーンを転換点として、以後、『演義』世界の関羽は、戯劇の英雄から崇り神へと変身するのである。<sup>367</sup>

## 2、曹操の死因

関羽を恐れ、また劉備の報復を恐れる孫権は、その怒りを曹操に向けるため、関羽の首を木箱に入れ、曹操に献上する。

曹操が箱を開くと、関公の顔は生きているがごとくである。思わず笑って、「雲長殿、その後お変わりなかったか」と、その言葉も終わらぬうち、関公の口が開き目が動いて、髪も髭も逆立ったので、あっと驚いて倒れた。諸官が駆けつけて助け起こせば、しばらくして気を取り戻した曹操は、一同を見やって言った。「関將軍はまことの天神である」。呉の使者も、関公の霊が人に乗り移り、孫権を罵り呂蒙を取り殺したことを言上したので、曹操はますます恐れて犠牲を屠って霊を祀り、香木で軀を刻んで、王侯の礼をもって洛陽の南門外に葬った。諸官にも柩を送るよう命じて、曹操は自ら祭主となって、荊王の位を遺贈し、役人を派遣して墓守をさせることにした。

（『演義』第七十七回 玉泉山に関公聖を顕す）

関羽と対面した曹操は、自分から話しかけている。しかも、「雲長殿、その後お変わりなかったか」という言葉は、華容道で関羽に見逃してもらった時、最初に呼びかけた、「將軍、その後お変わりなかったか」とほとんど同じである。ここで再会した曹操に対して、呂蒙を取り殺し、孫権を押し倒した関羽は、劉備と蜀漢にとって最大の敵であるはずの曹操に、若干手加減しているけれども、結局、それ以来、弱り目に崇り目、悪いことつづきで重態に陥り、とうとう、がつて残忍な殺し方をした後漢の献帝の妻の伏皇后らの亡霊に悩まされながら、この世を去ってしまった。

関羽と曹操の因縁は、ここに幕を下ろす。

---

<sup>367</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、頁104。



### (三) 民間伝承を取り込む

こうして死後ルサンチマンの権化となり、あの世の果てから蘇って憎むべき者につぎつぎと制裁をくわえる祟り神としての関羽のイメージは、長い時間帯にわたる民間伝承を吸収しながら形成されたものにほかならない。

例えば、関羽が玉泉山に「顕聖」したという伝承はずいぶん古く、すでに六世紀末の隋王朝初頭からみられる。それから、ときの経つとともに、民間伝承の中で関羽はますます神格化された。宋代になると、山西商人の信仰を集める関羽が、塩の生産を邪魔する蚩尤と戦うという伝説が生まれた。さらに、南宋に入ると、関羽は「壯繆義勇王」と称号され、国家の祭祀が始まった。十五世紀後半、明の成化年間には「関聖大帝」となり、十七世紀前半、清の順治年間には「忠義神武関聖大帝」となって、国家を守る最高位の軍神に上昇されるのである。

そして、関羽のもう一つ面目である財神から言えば、彼の出身地が大いに関わりをもつ。関羽の出身地の解県は、実は、歴代王朝を通じて強大な経済力を誇った塩商のメッカ山西省に位置する。この山西商人が地元の英雄関羽を守護神と崇めたことが契機となって、関羽はやがて広く商人層全体の守護神と化していったのである。

関帝廟に祭られる関羽の像は、「重棗」のような赤い顔をしておく。この顔が重棗のように赤いとされるのは『演義』の独創ではなく、その根源には奇怪な民間伝承があった。それは、関羽が故郷で、土地の娘を凌辱しようとする太守の息子を殺害、追われて逃亡する途中、聖母廟の傍らにある泉で顔を洗ったところ、顔が真っ赤に変色し、このおかげで見破られずに関所を無事通過することができた、というものである。義人関羽は天の加護を受け、赤い顔の神に変身したのだ。この伝承は山西省一帯に流布されていたものだという。

368

『演義』はこうして盛り場の講談のみならず、土俗的な民間伝承をも吸収し、畏敬をこめて「まつろわぬ神」としての関羽像をも、その物語世界の中に取り込んでいった。

### (四) 井波律子の関羽像の特質

井波律子氏は関羽の記事をめぐって、『演義』は人物を描くときの文学性を強調された。

---

<sup>368</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.109。

まず、『演義』では、関羽の武を引き立てるために、様々な工夫が施されている。本来別人が挙げた功績を関羽に移し替える作業もある。たとえば董卓の部将華雄を斬る功績は本来孫堅のものであったが、『演義』は、この孫堅の功績を取り上げ、関羽のために、「温酒斬華雄」という名場面を用意する。関羽は、熱い酒がまだ温かいうちに、敵の猛将華雄を斬るという離れ業を行い、その武力を諸侯に見せつけるとともに、曹操が関羽の武に惚れ込む伏線として機能させている。また曹操に降った関羽が白馬の戦いで、袁紹の部将顔良を斬ったことは正史にも記されるが、その後さらに文醜まで関羽が斬ったとするのは『演義』の創作である。武神・軍神として関羽の武を強調するため、虚構を盛り込んだ。

そして「義」絶たる関羽にとって最も重要な虚構が、「義もて曹操を釈つ」である。赤壁の戦いにおいて諸葛亮は、関羽が以前曹操から恩義を受けていたことを知りながら曹操の追撃を命じた。しかし関羽は華容道で敗残の曹操と旧友張遼の姿を見てみると、情義からあえて曹操を見逃すのである。それまで丁寧に叙述されていた関羽と曹操の因縁を伏線として形成された非常に感動的な場面であり、毛宗崗は総評でこの場面における関羽の「義」を絶賛している。魯迅も『中国小説史略』でこの場面について、「『演義』は劉備の温厚篤実を強調しすぎて、偽善者のようになった。諸葛亮の多智を形容して、妖怪みたいになった。だが関羽については、義勇に富んだ風格がすばらしい」と指摘された。さらに、中国の古典小説に総じて点の辛い大学者王国維も「文学小言」でこの件について、「大文学者ならではの為し得ない」とレベルの高い文学性を賞賛している。「義絶」関羽の人物造形は、『演義』編者にとって最も思い入れが込められた産物であった。

これまでに称揚された関羽は、孫権や曹操の挟み撃ちを受け、最期を迎えた後、まさに「神化」する。普淨によって頓悟したはずの関羽ではあったが、『演義』におけるその後かれは荊州攻めの総大将の呂蒙にとりついて殺し、ついでに孫権をののしったのみならず、魏の曹操のもとでも害をもたらし、曹操の死と間接的な関わりがある。こうして「義絶」の関羽はようやく死後崇り神となった。民間伝承の影響でさらなる「関聖帝君」への崇拝を生み、のち各王朝の武神・軍神となり、各商業の財神になり、現在も世界中の関帝廟で祀られている。

これまで見てきたように、華容道のシーンに強調される、現実存在としての人間の根源的なやさしさにあふれた関羽像、と「顕聖」するときの、不気味さに満ちた恐ろしい関羽像。この現実性と超現実性の両極端、両義性を包含したところに、物語文学としての『三

『三国志演義』の世界は正立させられると思われる。<sup>369</sup>

読者を笑わせて解放する張飛の『平話』から、読者を泣かせ緊張させる関羽の『演義』へ。小川環樹氏によれば、この変遷は小説の儒教化という圧力の影響だそうだ。混沌から秩序へ、士大夫の価値観が押し出された結果である。

### 第三節 諸葛亮の人物像について

本節は、主に井波律子、金文京、渡辺義浩ら三人の諸葛孔明に関する論考を中心にして、近代日本における、諸葛孔明に実像あるいは位置づけを明らかにしようとするものである。

まず、毛宗崗本『三国志演義』において、諸葛孔明は「三絶」の一人として強調され、全知全能の魔術師として描かれた。ここで、井波律子氏は各時期の書物の中、諸葛孔明初登場のシーンを巡って、魔術師的イメージが如何にして付与されてきたのかということを中心に明らかにした。

そして、金文京氏の諸葛孔明に関する先行研究には、陳寿の評を取り上げて、われわれは素顔の諸葛孔明をみることができる。そして、有名な戦争を解析することによって、諸葛亮の科学者としての顔をはっきり示した。さらに忠臣としての諸葛亮像のほか、もうひとつの孔明像を提示した。

最後には、渡辺義浩氏は諸葛孔明と劉備の間のせめぎ合いを中心にして、君臣間の政権競争を示した。そして、諸葛亮の死に巡って、時代の経つにつれ、諸葛亮が人間から神、さらに「智絶」な軍師へ戻る経過を明らかにした。

本章においては、まず先行研究を参考にして、近代日本における、諸学者の諸葛孔明に関する論考を比較しながら、彼らのそれぞれ研究の特色及びその特殊な観点を明らかにしようとするものである。

#### 一、井波律子の諸葛亮像

##### (一) 第二世代の中心人物

『三国志演義』の校訂者毛宗崗によれば、『演義』には「三絶」、つまり三人の傑出した登場人物が存在するという。「智絶（知者のきわみ）」の諸葛亮、「義絶（義人のきわみ）」の関羽、「奸絶（悪人のきわみ）」の曹操の三人が、これにあたる。これはさすがに的を射

---

<sup>369</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.112。

た卓見である。なぜなら、かれら「三絶」こそ『演義』の世界を動かす真の主演なのだから。

三人のうち、関羽と曹操は第一回から登場、はなばなしい動きを示して、『演義』前半の世界をリードする。ところが、関羽は第七十六回で孫権に殺され、曹操は第七十八回で病死、というふうには、『演義』全百二十回のほぼ三分の二あたりで、関羽と曹操はあいついで退場してしまう。また、やはり第一回から登場する劉備と張飛も、劉備が第八十五回、張飛が第八十一回で死亡、『演義』世界から退場する。こうして『演義』第一世代のスターたちは、物語がほぼ三分の二まで進行した地点で、みんな退場してしまうことになる。

これに対して、残る「三絶」の一人、諸葛亮一物語の主演としては、『演義』の世界に初めてお目見えするのは第三十八回、物語が三分の一まで進行した地点である。五丈原で絶命し、『演義』世界から退場するのが第百四回。このあと『演義』はまっしぐらに終幕に向かう。

こうして主要人物の配置から、『演義』が全体として三部構成になっていることが、よみとれる。つまり、第一部は関羽、曹操を中心とする第一世代のみで編成され、第二部で、第二世代の主演たる諸葛亮が登場、第一世代と交差して、徐々にその比重を増し、第三部にいたり、第一世代がことごとく退場するや、諸葛亮の一人舞台になる仕組みなのだ。

これを『演義』のプロットにあてはめれば、第一部では、後漢末の群雄割拠の乱世の中で、ライバルをつぎつぎに滅ぼした曹操がトップに躍り出て華北を支配し、はじき出された劉備は居場所がなくなり、荊州に逃亡するまでが描かれる。ついで第二部では、ジリ貧状態の劉備が「智絶」の諸葛亮を軍師に迎えて上昇気流に乗り、呉の孫権と組んで曹操の江南制覇にまったをかけ、みるみるうちに荊州から蜀へと勢力を伸ばして、念頭の自立を果たす顛末が描かれる。第三部では、軍師として劉備を動かす役割であった諸葛亮が、劉備没後、一転してみずから動く主演になり、これまた第二第三の世代になった曹氏の魏に果敢な挑戦を行なうさまが描かれるのである。<sup>370</sup>

こうしてみると、ほかならぬ諸葛亮の存在が、『演義』の物語的時間の進行と全体的な構成の大きなポイントになっていることが、よくわかる。

## (二) 全知全能の魔術師

---

<sup>370</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.152~153。

## 1、主役の描かれ方

『演義』の物語展開において、諸葛亮は以上のように、まことに重要な役割を担う存在である。では、『演義』は、どのようにこの重要人物諸葛亮のイメージを形作っているのだろうか。

先述のとおり、『演義』世界に諸葛亮が初登場するのは第三十八回、劉備の三顧の礼を受けたときのことである。もっとも、実際に登場するよりさきに、劉備は隱者の水鏡先生（司馬徽）によって、「伏龍」なる逸材の存在をしらされ（第三十五回）、ついで、曹操に母を人質にとられた徐庶が劉備のもとから去るときに諸葛亮を推挙し、諸葛亮こそかの「伏龍」であることを知った劉備は大喜びして（第三十六回）、関羽と張飛をともない、さっそく襄陽郊外、隆中の臥龍岡に隱棲する諸葛亮を訪問するが、二度とも不在だった（第三十七回）、というぐあいに、『演義』は、念の入った導入部を準備している。徐々にムードを盛り上げ、じらされた読者の期待と好奇心が最高潮に達したときに、おもむろに諸葛亮を登場させるという、心憎い手法を用いるのだ。このとき、読者は、諸葛亮との面会を渴望する劉備と、完全に一体化するという寸法である。

最初の訪問のさい、劉備が目にした諸葛亮の住まいは次のようなものだった。

次の日、劉備は関羽、張飛および従者を連れて隆中にやってきた。はるかむこうの山の麓で、数人の農夫が鋤をあげて畑を耕しながら、歌っている。

天は車のまるい蓋のよう

地は基盤のよう

俗人は黒白を区別し

あわただしく出世だ恥辱だと大騒ぎ

出世した者は心安らかだが

恥辱を受けた者はきっと苦しいことだろう

南陽に隱者がいて

たっぷり眠り、飽きることなく寝転がっている

これを聞いた劉備は馬の手綱を引き、農夫にたずねた。「その歌は誰がつくったものか」。「臥龍先生がお作りになったものです」。「その臥龍先生のお住まいはどこじゃ」。「この山の南にずっと連なる丘が、臥龍岡でございます。丘の手前のまばらな林のなかに、草ぶきの家がありまして、それが諸葛先生のお住まいでござ

います」。劉備は農夫に礼をいい、馬に鞭うって道をいそいだ。数里もいかないうちに、臥龍岡がみえてきた。いかにもすがすがしい風景である。(第三十七回)

この描写につづいて、諸葛亮の隠棲地がいかにも俗塵を排した清浄な雰囲気につつまれたものであるかを、綿々と歌い綴った長い詩が記される。こうした描写を通じて明らかになるのは、諸葛亮の住む臥龍岡が山の奥深くにある異界としての仙郷・仙界に擬されていることである。だとすれば、住人の諸葛亮はむろん仙人ということになる。<sup>371</sup>

さらに、『平話』では諸葛亮の初登場のシーンで、「諸葛亮はもともと神仙（仙人）である」とズバリ言いきっている。さすが『演義』はそこまで単刀直入ではないものの、いまあげた例のように、あらかじめ諸葛亮に神仙的イメージを付与しようとしており、その点で、『平話』の設定をそのまま踏襲していることは明らかである。<sup>372</sup>

また、同じく諸葛亮を超越的な存在とみなすことは、六朝時代から始まっている。たとえば、南朝劉宋の志怪小説集『異苑』（劉敬叔著）につきのような話がみえる。

蜀の臨邛に火の噴き出る井戸があり、漢王朝が隆盛なときには、真っ赤な炎を盛んにあげていたが、〔後漢の〕桓帝や靈帝のころになると、火の勢いがだんだん弱くなり、諸葛亮が一目見ると再び盛んになった。蜀の景耀元年（二五八。実際には炎興元年〔二六三〕）、ある人がこの井戸にたいまつを投げ込むと、たちまち火が消えてしまった。この年、蜀は魏に併合された。

五行説からいえば、漢王朝は「火徳」にあたる。だから、この不思議な火の井戸は、衰微した漢王朝が、その末裔である劉備の蜀王朝を支える諸葛亮によって「再興」され、諸葛亮がいなくなったあと、完全に消滅してしまうことを象徴しているのである。<sup>373</sup>

以上の三つの話は、六朝時代から今にかけて、諸葛亮が超越的な力をもつ存在と目されていることは、明らかであろう。

---

<sup>371</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.156。

<sup>372</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、p.157。

<sup>373</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.157~158。

## 2、伝説のルーツ

こうした諸葛亮超能力者伝説、ひいては仙人伝説が生まれるには、それだけの理由があった。

周知のように、諸葛亮は木牛・流馬や強力な弩などの新兵器をつぎつぎに発明した、抜群の科学的才能の持ち主であった。これがまず彼に魔術師的イメージを付与することになったことは、推測にかたくない。

しかし、さらに一步すすめてみると、魔術師あるいは仙人諸葛亮のイメージは、三国六朝時代を通じて知識層に深く浸透し、一世を風靡した「天師道」との関係で、生じてきたのではないと思われるふしがある。「天師道」は、後漢末の乱世をもたらす引き金となった、「黄巾の乱」のリーダー張角の唱えた「太平道」とは別系統でながら、やはり同じく道教の一派にほかならない。表面的には、「太平道」が民衆を教化の対象とするのに対し、「天師道」は上層階級の知識人を対象とするのが、めだった差異である。

この「天師道」は、不老不死を求めて山中で薬草を摂取するなど、きわめて仙人志向の強い宗教であった。乱世に疲れ、現実社会からドロップアウトすることを願った知識人の多くは、「天師道」の説く逸脱の原理に強く魅きつけられた。『演義』描くところの諸葛亮の隠棲地、臥龍岡の雰囲気は「天師道」が理想とする仙郷そのものだといっても過言ではない。

さらに注目されるのは、諸葛亮の出身地の山東省琅邪が、「天師道」のメッカだったことだ。実は琅邪は、古代から神秘的な術を操る方士の多い土地柄である。かの秦の始皇帝もここで方士の徐福らと出会い、その言葉を真にうけて大船団を仕立て、仙人が住むという幻の「東海の三神山」のありかを探究させたのだった。こうした方士の伝統が脈々と伝えられ、「天師道」に結びついたともいえよう。ちなみに孫策を崇り殺した于吉も、琅邪出身の道士だった。諸葛亮が、この濛々と神秘的なムードの立ち込める「天師道」の本場、琅邪の出身だったこと。山中（臥龍岡）での隠棲という独特の生活形態。こうした点から見ると、諸葛亮自身、「天師道」となんらかの関わりがあったと考えるほうが、むしろ自然であろう。付言すれば、隠棲中の諸葛亮が好んで歌ったとされる歌謡「梁父吟」も、もともと山東一帯に伝わる挽歌だという。挽歌を歌いつつ山中に住む琅邪出身の隠士。これはもう完全に「天師道」の世界である。

とはいえ、実際に諸葛亮と「天師道」との関わりを証明する歴史的資料はみあたらない。

ただ少なくとも、いまあげた断片的な事実から、諸葛亮と「天師道」的な神秘主義を結びつけ伝説化する傾向が、六朝時代を通じてしだいに広まって行ったことは、まずまちがいないと思われる。こうして仙人化された諸葛亮像が、やがて民間芸能の世界でさらに誇張され、『平話』やこれをうけついで『演義』において、超能力の仙人、なさざることなき全知全能の魔術師として結実したのである。<sup>374</sup>

### 3、魔術師の事績

『三国志演義』では、諸葛亮の魔術師的イメージがふくらまされ、綸巾を戴き羽扇を手にして四輪車に乗り、鬼神や天候をも操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死にを知る事が出来るといったほぼ完璧な人物として描写されている。例えば、「借東風」、「八陣の図」、「空城の計」など有名なエピソードが数えきれないほど見られる。

#### ①七擒七放

このように数ある『演義』の魔術師諸葛亮の描写のなかでもハイライトになるのは、なんといっても第八十七回から第九十一回まで、えんえん五回にわたって繰り上げられる「南中征伐」のくだりである。225年、北伐に先立ち、諸葛亮はかねて不穏な動きを示していた南中の諸郡を平定するため、自ら軍を率いて出撃した。南中の原住民は少数異民族であり、そのリーダーの孟獲は勇猛をもって鳴り響いていた。諸葛亮は、この孟獲を七たび擒え七たび釈放して心服させ、みごと南中を平定することに成功した。この話は陳寿の『三国志』「蜀書」諸葛亮伝にはみえず、裴松之の注に引く『漢晋春秋』に、ごく簡単に記述されるのみである。

諸葛亮は南中に到達するまで、行く先々で勝利をおさめた。孟獲という者がいて、異民族の原住民にも漢人にも心服されていると聞き、懸賞金をかけて生け捕りにし連れて来させた。捕えたあと、陣営の中を見学させ、「この軍はどうだ」と尋ねた。孟獲は「以前は時事情がわからなかったために敗北しました。いま陣営をみせていただきましたが、こんな程度なら、必ず簡単に勝利をおさめられます」と答えた。諸葛亮は笑って釈放し、もう一度戦わせた。七たび釈放し七たび擒え

---

<sup>374</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.158~159。



て、諸葛亮はなおも孟獲を釈放しようとした。孟獲は止まって去ろうとせず、「公は天の威光をおもちです。われら南人は二度と背くことはないでしょう」といった。

この『漢晋春秋』の簡潔な叙述がいつしか途方もない空想を呼び、宋元の講釈師の手で思いきり誇張され、魔術師諸葛亮に縦横無尽の活躍をさせる、ファンタジックな「七擒七放説話」と化した。『演義』はこれをさらに膨らませ、七回繰り返される釈放劇において、これでもかこれでもかと、新手の魔王を援軍にえて挑戦する孟獲を、諸葛亮が大魔王よろしくつぎつぎに打ち破る顛末を委曲を尽くして描いており、魔法物語としての成熟度の高さがある。<sup>375</sup>

ひとつ例をあげてみよう。五度目の釈放のあと、孟獲は猛獣使いの魔王木鹿大王と手を組み諸葛亮軍に猛攻をかけた。これにはさしもの名将趙雲や魏延もてこずり、敗退してしまう。このとき、諸葛亮はひそかに準備していた二十輻の車のなかから、彩色した木製の巨獣を取り出した。火薬を仕込んだ巨獣の内部には、十人の兵士を収容することができた。兵士と火薬を内包した恐るべき巨獣百匹を指揮して、諸葛亮は木鹿大王と孟獲に決戦を挑む。

次の日、孔明は兵を進めて、〔木鹿大王の本陣である〕洞窟の入り口に陣とった。これをみた蛮兵が洞窟に入り、蛮王に報告した。天下無敵を自負していた木鹿大王は、さっそく孟獲とともに洞窟のなかの兵士を従え出撃した。孔明は綸巾をかぶり羽扇を手にし、道袍を身につけて車上に端座している。孟獲は指さしていった。「車にのっているのが諸葛亮だ。あいつをつかまえたら、こっちのもんだ」。木鹿大王は口のなかで呪文を唱え手にした鐘を振った。たちまちはげしい風が吹き出し、猛獣が突進してきた。孔明が羽扇をさっと揺らすと、その風はあべこべに木鹿大王の陣営に吹き付け、蜀の陣中から作りものの巨獣がどっと飛び出した。木鹿大王の本物猛獣は、蜀軍の巨獣が口から火焰を吐き、鼻から黒煙を出しながら、体にぶらさげた銅の鈴を鳴らし、牙をむき爪を張って向かって来るのを見ると、前進することができず、いっせいに洞窟のなかに逃げ込み、かえって無数の

---

<sup>375</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.161~162。

味方の兵士を踏み倒してしまった。(第九十回)

器械仕掛けの猛獣は使うわ、羽扇を揺らして風の向きは変えるわ、ここでの諸葛亮は魔術師そのものである。<sup>376</sup>ここで『演義』は、民間で流布する神秘的な諸葛亮のイメージを、史実に合わせて矯正するどころか、むしろ強化して物語世界に組み込んだことがわかるであろう。

## ②五丈原の終焉

南中を平定し、後顧の憂いを断った諸葛亮は、後主劉禪に「出師の表」を捧げ、蜀の建興六年(228)春、関中に向けて出撃、魏への正面切った挑戦を開始した。これを皮切りに、小刻みに出兵を繰り返したが、思わしい戦果をあげるにはいたらない。北伐の執念に燃える諸葛亮は、それまでの失敗の経験を踏まえ、木牛・流馬の新兵器を発明するなど満を持して、彼にとって最後の出陣となる第六次北伐にふみきった。建興十二年(234)二月のことである。かくして武功郡五丈原に本陣を敷き、魏軍を率いる司馬懿に合戦を挑んだが、司馬懿は守りに徹して応じない。膠着状態がつづくうち、諸葛亮は過労のはてに病魔に蝕まれていく。

『演義』第百三回には、星座を観察し死期が迫ったことを直観した諸葛亮が、北斗星に祈り延命を乞う儀式を行うさまが、克明に描かれている。まず陣幕を張りめぐらし、腹心の部将姜維に、黒装束に身を固め黒旗を手にした七七(四十九人)の鎧武者を率いさせて、幕の外を守らせる。そのうえで、幕のなかにひとりこもった諸葛亮は「罡に歩し斗を踏んで(北斗七星の形に歩むこと)」、北斗星に祈る。幕のなかには、大きい灯明七箇と小さい灯明四十九箇が配置され、その真ん中に「主灯(本命灯)」が置かれている。この「主灯」が、祈祷が功を奏したかどうかを測るバロメーターになるのだ。もし祈祷期間の七日の間、主灯が消えなければ一紀(十二年)命を延ばすことができるが、消えれば死ぬしかない。

諸葛亮は昼は病軀をおして軍務を処理し、夜は幕の中で必死に祈祷した。ところが六夜目にハプニングがおこる。かねて諸葛亮と北伐の作戦で対立していた武将魏延が、無神経にヅカヅカ幕の中に踏み込んで来て、せっかくそれまで煌々と灯っていた主灯を消してしまったのだ。延命の望を断たれた諸葛亮は、死後に備えて手配りを終え、建興十三年秋八

---

<sup>376</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.162~163

月、ついにこの世を去った。<sup>377</sup>

ここに書いたように、諸葛亮は祭壇を築いて寿命を延ばす祈祷の儀式を行う行動が、実は道教的な発想にもとづくものである。仙郷を思わせる臥龍岡の住まいから『演義』に登場、奇跡をおこす魔術師として物語世界を揺り動かした諸葛亮は、退場するときも、やはりこのうえなく神秘的なムードに包まれている。

ここまで見てきたように、『演義』には、劉備の三顧の礼に感激して軍師となり、智謀のかぎりをつくして「天下三分の計」を実現させ、劉備亡き後はその信頼に答えて、暗愚な二代目劉禪を守り抜いた、誠実無比な諸葛亮像と様々な兵法を駆使して、好敵手の司馬懿を陣形比べて破って、魏への北伐に際して食糧輸送に用いられた「木牛・流馬」を発明され、神算鬼謀の大軍師諸葛亮像を表現されたうえ、風を呼び人工獣を駆使し、北斗星に呪文を唱えて宿命さえかえようとする、超自然的力をもつ魔術師としての諸葛亮のイメージのほうが、はるかに強烈なのである。それは『演義』の作者が、「諸葛亮はもともと神仙である」とする『平話』に代表される、民間芸能のなかで育まれた魔術師としての諸葛亮像を、積極的に物語世界のなかに取り込んだことを顕すものだと言えるであろう。

### (三) 井波律子の諸葛亮像の特質

井波律子氏の著述をよく精読し、また整理することによって、井波律子の諸葛亮に関する研究にある特色及びその独自の観点を、以下の如く、纏めることができる。

井波律子氏は関羽、曹操とともに「三絶」のもう一人である諸葛亮を取り上げ、彼のイメージに、強烈な物語幻想が作用していることを述べた。

具体的に言えば、井波律子氏は六朝時代の『異苑』、宋元時代の『平話』、そして『三国志演義』など書物の中、諸葛亮の初登場のシーンを取り上げて、時が経つにつれ、彼を超越的な存在を見なすことを指摘された。そして、諸葛亮の魔術師的イメージが如何にして付与されてきたか、という問題については、それが彼の抜群の科学的才能や彼の出身地と道教との関連で、生じてきたものではないかと主張された。

さらに、井波律子氏は諸葛亮の魔術師とした顔を究明するため、彼の能力を発揮する場面も取り上げて、同じエピソードにめぐって、『漢晋春秋』と『演義』の比較に通じて、『演義』は、民間流布する神秘的な諸葛亮のイメージを、史実にあわせて矯正することより、強

---

<sup>377</sup> 井波律子：『三国志演義』、岩波書店、1994年8月22日第1刷発行、2011年12月5日第16刷発行、pp.165~166。

化して物語世界に組み込んでいるところが見られる。

## 二、金文京の諸葛亮像

### (一) 史家の評価

『演義』を読んで不思議に思うことのひとつは、関羽の死に逆上して無謀な対呉戦争を始めようとする劉備を、どうして孔明は止められなかったということであろう（第八十一回）。答えは、むしろ歴史がそうであったからであるが、孔明には劉備を止める力、というよりはむしろ実績がなかったのである。歴史上の孔明はそれまで戦争をしたことがなかった。だから劉備を止められないのは当然であろう。孔明がはじめて戦争を指揮したのは、劉備の死後、南方に遠征した時である。それまで彼はずっと後方工作担当であった。『三国志』の彼の伝は、「先主外に出づれば、亮は常に成都を鎮守し、食を足らしめ兵を足らしむ」と述べる。<sup>378</sup>

歴史上の諸葛孔明について、『三国志』の撰者の陳寿は「時代にあった政策を行い、公正な政治を行った。どのように小さい善でも賞せざるはなく、どのように小さい悪でも罰せざるはなかった。多くの事柄に精通し、建前と事実が一致するか調べ、嘘偽りは歯牙にもかけなかった。みな諸葛亮を畏れつつも愛した。賞罰は明らかで公平であった。その政治の才能は管仲・蕭何に匹敵する」と最大限の評価を与えている。

しかし、政治家としては極めて有能な名宰相諸葛亮であった、戦争の準備をするのもうまいが、実戦の指揮官としてはどうであったろう。

陳寿は、「毎年のように軍隊を動かしたのに（魏への北伐が）あまり成功しなかったのは、応変の将略（臨機応変な軍略）が得意ではなかったからだろうか」とも書いており、政治家として有能であったと評しつつ、軍人としての評価については慨嘆するに留まり、やや言葉を濁した形になっている。

また、『三国志』に収録されている「諸葛氏集目録」で陳寿らは「諸葛亮は軍隊の統治には優れていたが、奇策はそれほど得意でなく、敵のほうが兵数が多かったので、魏に対する北伐は成功しなかった」と評している。公正な、しかし、冷淡な評価と言えよう。

### (二) 科学者としての孔明

前述のとおり、史実において、軍事家としての孔明はそれまで戦争をしたことがなくて、

---

<sup>378</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、p.166。

さらに将略や奇策はそれほど得意ではなかったこともわかってきた。

しかし、それはまたなんと『演義』の孔明像とへだたっていることか。『演義』の中、孔明は戦略の神様であったはずである。彼を、魯迅の言葉を借りれば、魔術師のように描いてしまった。それはなぜか。

## 1、天文観測—草船借箭、五丈原の死

戦争をするには戦略がいるが、戦略は今も昔も科学技術と密接な関係がある。ただし昔の科学は今から見れば迷信である。現代の軍事家はレーダーで敵を探すが、昔のレーダーは占いであった。かくして星占い、雲占い、風占いなどが、みな軍事技術として利用された。占いといっても、たとえば星占いであれば天文観測もやるわけであるから、科学とは表裏一体、いやむしろ科学の前身である。そしていつの時代でも科学者は戦争に奉仕し、科学は戦争によって進歩するのに変りはない。

昔の軍隊には、このような占い師としての科学者が大勢いて、重要な役割をはたしていた。世界中の神話や伝説で活躍する英雄をみても、たとえばアーサー王におけるマーリンのごとく、たいていは魔術師的な人物がその傍らにいて戦略の助言者となっているのである。とすれば戦争文学としての『演義』のなかにも、当然それが出てこなければならないであろう。ざっと見渡したところ、その役割を演じられるのは孔明以外にいそうもない。

近世の軍隊では、そのような軍事技術者はしばしば道士であった。元の雑劇をはじめ芝居の中の孔明が道士の扮装で出て来るのはそのためである。『水滸伝』では、公孫勝がこれに相当するであろう。

赤壁の戦いの時、十万本の矢を一夜で集めた孔明に感心した魯肅が、どうして霧が出るようになったのかと聞くと、孔明は、「将たるもの天文に通じず、地利を識らず、奇門を知らず、陰陽を曉らず、陣図を看ず、兵勢に明らかならざれば、これ庸才なり」とうそぶき、三日前から霧の出ることはわかっていたと自慢気に答える（第五十五回）。これを現代風に言い換えれば、科学技術の勝利ということであろう。魯迅は孔明を魔術師と評したが、魔術師こそは科学者の父であった。『演義』の孔明は、前近代における中国的科学者像の一つの投影であろう。

三国が統一されてから半世紀ほどたった東晋（317-420）の時代の人、習鑿齒の著『漢晋春秋』は、劉備、孔明らの蜀に同情的な書物で、彼らにまつわるエピソードを多く収めるが、中に次のような話がある。

孔明の死後、蜀軍はその死をかくして、わざと魏軍を攻撃するそぶりをみせたので、司馬懿はあわてて退いた。そこで蜀軍は整然と陣形を組んで退却し、斜谷に入ってからようやく喪を発表したのである。それをみた土地の人々は、「死諸葛走生仲達」（死せる諸葛、生ける仲達を走らす）ということわざをつくって、しきりに言いふらした。ある人がそれを司馬懿に告げると、彼は「生きている者は相手にできるが、死んだ者の相手は苦手だ」と弁解したという。

言うまでもなくこの話は、『演義』第一百四回、孔明の生前の計略にまんまとはまった司馬懿が、木像にだまされて逃げだすという有名な箇所原型である。ただしここでは、孔明が延命のために祈祷の法を用いたり、死後の事態を予測してさまざまな計略を部下に授けておいたりといった『演義』のやや現実ばなれした筋書はまだなく、そういうことならまあ有ってもおかしくはないといった程度の、史実の許容範囲内にとどまっている。

そして、唐初の大覚和尚が編纂した『四分律行事鈔批』という仏典には、諸葛孔明の死をめぐる次のような話が記されている。

孔明は死にのぞんで、自分の足もとに一袋の土を置き、また鏡で顔を照らすように命じた。死後、蜀軍はそのままの姿の孔明を陣中に残して退却したが、一方、魏では占い師が占ったところ、孔明は死んでいないと出た。土を踏み鏡をみているから生きているというのである。そのため魏軍は攻撃をためらい、一ヶ月後によく気が付いて、蜀の陣地に行ってみたところ、死んだ孔明がいるのみで、軍勢はとっくに退散していた。そこで時の人は、「死せる諸葛亮、生ける仲達を怖れしむ」と言ったという。

『演義』がこれら話をあつめた書物を踏まえて、孔明の死の場面で、自分の将星が墮ちるのをおしとどめ、司馬懿を欺くために、米七粒を口に入れ、脚下には明灯一盞をおくよう孔明が遺言するのである。このように、当初は単に司馬懿が孔明の死に気が付かず、それを人々が「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」とひやかしたにおそらくはすぎなかったものが、後になるほど興味全体に潤色され、ついには全く非現実的で荒唐無稽な物語になってしまったのである。<sup>379</sup>

これこそ、史書の中ではごく簡単にしか書かれていないことを、フィクションによってふくらませる方法である。その結果として、名宰相、諸葛孔明もまた、人間ばなれした魔術師に変貌させられたのは言うまでもない。

---

<sup>379</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.58~61。

## 2、心理的戦略—七擒七放

草船借箭と五丈原の終焉のエピソードのほか、孔明の科学家としての顔のもう一つの典型的なケースが孔明による孟獲の七擒七放である。

孔明の雲南への南征は、北伐のための重要なステップであり、是非とも興味深く描かねばならない話であった。現に『演義』では第八十七回から第九十一回の五回分をこの話に当てている。少ない分量ではないであろう。ところが『三国志』の「諸葛亮伝」は、これについて、「(章武)三年の春、亮は衆を率いて南征し、その秋に悉く平ぐ。また「出師表」に、五月に瀘を渡り、深く不毛に入る。」とあるのみである。<sup>380</sup>

『演義』がこの話を膨らませ、南蛮の王、孟獲が蜀に対し反乱を起こし、孔明がその平定に向かい、孟獲を七度捕らえ、七度放ち、孟獲を心服させ、蜀に対して二度と反乱を起こさないことを誓ったとあり、孔明が反乱を平定し、蜀の国都、成都へ戻ろうとした時に、孟獲は孔明を数十里先までついて行って、別れを惜しんだとある。

この南伐作戦はあくまでも、軍事制圧が目的でなく、安撫を主目的にして、南夷の叛乱の基本的な解決を狙った「攻心为上、攻城為下（心を攻めるを上策、兵を攻めるを下策）」に科学的計略を置いた遠征です。力による暴力的な反抗心を生む支配でなく、心から恭順を誓わせるための作戦ですので、孟獲を捕らえたり逃がしたりして、こちらの実力を見せつけて心服させることを狙っている。

### (三) 異なる諸葛亮像

しかしここでひとつの疑問が生まれる。天文地理に通じ、三日後の霧を予測できる孔明であれば、蜀が三国を統一できないことも当然、知っていたはずではないか。それなのになぜ劉備の求めに応じて無駄な努力をしたのであろう。答えは、その不可なるを知りてなおこれを為す、つまり不可能とは知りつつ、大義のため劉備の恩顧に報いるために、あえて一身を捧げたということで、これは特に日本人好みの忠臣、諸葛亮像である。しかしそうだとすると、だめだとわかっているなら、どこかに醒めた部分があったはずである。元代の雑劇などには、この種の醒めた孔明像がしばしば登場する。『演義』でも、三顧の礼で孔明が昼寝から目覚めて詠んだ、「大夢誰が先に覚めん、平生我れ自ら知る」という詩には、この点が示されているだろう。大夢とは漢王朝復活の夢、しかしそれが夢にすぎず、やがては覚めることを、自分は平生から知っているというのである。

<sup>380</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、p.33。

この詩は、北宋の王輔道の作とされる「漁家傲」詞に、「日月に根なく天は老いず、浮生は総べて鎖磨され了る。陌上の紅塵は常に擾擾たり。昏ては復た暁る。一場の大夢誰が先に覚めん」（『能改齋漫録』卷十七）とあるのをおそらくは踏まえている。「漁家傲」は、俗世間の功名のむなしさと隠遁への思いを述べたものである。このような目醒めて、劉備が死ぬとさっさと隠遁してしまう孔明像は、科学者、孔明から導かれた、「出師表」などとは異なるもうひとつの孔明像であった。<sup>381</sup>

#### （四）金文京の諸葛亮像の特質

金文京氏の諸葛孔明についての研究にある特色及びその独自の観点、以下の如く、纏めることができる。

##### 1、歴史研究の立場での諸葛亮評価

今まで、多くの中国人の心の中、諸葛亮は依然として全知全能の神のイメージが非常に強烈なのだ。これは『三国志演義』からもたらした影響と思われる。ここで、金文京氏は『三国志演義』ではなく、史書『三国志』やその撰者陳寿の評価を基にして、私達に諸葛亮の用兵は奇計を使えなかったという欠点を指摘している。この評価は誠に魯迅の「人物描写に至ってはすこぶる欠点がある。劉備を温厚な人格者として表現しようとしてむしろ偽善者じみているし、諸葛亮を知恵者として表現しようとしてむしろ化け物じみている」と呼応している。

##### 2、科学技術の勝利

『三国志演義』では諸葛亮の神秘的なイメージがふくらまされ、綸巾を戴き羽扇を手にして四輪車に乗り、鬼神や天候をも操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死にを知る事が出来るといったほぼ完璧な人物として描写されている。金文京氏の論説によっては、これらの実績や超人的な能力はすべて科学技術の勝利である。

例えば、赤壁の戦いするとき、十日間で十万本の矢を準備したことは孔明の知謀を示す場面として有名であるが、これは天文を観測して、勝利を収めた。また、南中征伐のとき、心理的戦略による、敵を心服させることもよく知られている。

---

<sup>381</sup> 金文京：『三国志演義の世界【増補版】』、東方書店、2010年5月25日、pp.166~168。



### 3、隠遁する諸葛亮像

金文京氏は、『演義』の中、劉備の恩顧に報いるために、あえて一身を捧げたということで、日本人好みの忠臣、諸葛亮像のほうが、目醒めて、劉備が死ぬとさっさと隠遁してしまふ、もうひとつの孔明像を提示された。まさしく現代三国研究者と自任した金文京氏の独特の解説であると言えよう。

### 三、渡辺義浩の諸葛亮像

権謀術数で天下を略奪し、権謀術数で天下を治めたのが、秦である。仁義を以て国を興し、仁義を以て国を治めたのが、周である。秦の方法で天下を奪い、周の方法で天下を治めたのが漢である。そして、権謀と仁義を取り混ぜて天下を奪おうとした、それは私が見た諸葛孔明である。

#### (一) 権謀家としての諸葛亮

##### 1、常識に沿った「天下三分の計」

『演義』の前半の主役が曹操と関羽であるならば、後半の主役は「智絶」諸葛亮である。「三国志」の物語において諸葛亮は、神とも見紛う活躍を見せる。『三国志平話』では天候を操り奇術を使う諸葛亮は、司馬懿に「人であるか、神であるか、仙人であるかを知ることができない」と評されている。「智絶」とする毛宗崗本にも、そうした諸葛亮像は受け継がれた。諸葛亮は、様々な兵法により敵を打ち破るだけではなく、「奇門遁甲」の道術を会得し、「六丁・六甲」の神兵を駆使する。『演義』の関羽像を絶賛する魯迅は、「諸葛亮は魔術師にされてしまった」と、その行き過ぎた神格化を批判している。

史実の諸葛亮は、常識人である。人が驚くような奇策を思いつくタイプではない。例えば、後世に高い評価を受けられた奇策「天下三分の計」、実はそれは常識に沿った基本戦略であるとも言えよう。

いま曹操はすでに百万の兵力を擁し、天子を差し挟んで諸侯に命令を発しています。これは正面から対等に戦える相手ではありません。孫権は江東を支配して、すでに三代を経ており、国は長江の險を持ち民はなつき、賢才が手足となっているので、これは味方とすべきです。……もし荊州と益州をともに領有し、その要害を保ち、西方の諸民族をなづけ、南方の異民族を慰撫して、外では孫権と友好

を結び、内では整った政治を行い、天下に変事が起こった際に、一人の上将に命じて荊州の軍を宛や洛陽（河南省方面）に向かわせ、将軍は自ら益州の軍勢を率いて秦川（長安を中心とした陝西省方面）に出撃すれば、民は飲食を用意して将軍を歓迎するでしょう。そうなれば、覇業は成就し、漢は復興するのです。（『三国志』諸葛亮伝）

この「草廬対」は、よく「天下三分の計」と言われるが、三分は手段であって目的ではない。曹操は強く、単独では当たれないので孫権と結び、とりあえず天下三分の形を作る。しかし、荊州と益州からそれぞれ洛陽と長安を取り、曹操を滅ぼす。その後には、言及していないが、孫権を滅ぼして漢による天下の統一を復興するのである。つまり、諸葛亮の草廬対は、漢による天下統一策なのである。

これは当時において、常識的な戦略であった。漢は、これまでに一度、王莽によって滅ぼされている。これを前漢という。光武帝劉秀は、漢の復興を唱えて黄河の北に拠点を作り、洛陽と長安を取り、蜀の公孫述を滅ぼし、天下を統一して漢を中興した。これが後漢である。それとは逆のルートになるが、華北を曹操が掌握し、長江下流域に孫権がいる以上、残った荊州と益州を拠点として、洛陽と長安を取ろうとするのは、他に選択肢が思い浮かばないほど、当たり前な戦略であった。それ以上に草廬対、後漢の国教である儒教が掲げる大原則、「聖漢」による「大一統」に忠実である。これを無視する魯肅の策が革新であるならば、草廬対は保守本流の王道であった。<sup>382</sup>

いくら常識的な戦略といえども、天下三分の計を立案したと言うことは、諸葛孔明はすぐれた戦略家であったことは確かだし、もちろん相当の知恵者であったことは間違いないであろう。この「天下三分の計」は時に応じた策略である。この計略をめぐらした諸葛孔明も当時の権謀家と言えよう。

## 2、劉備とのせめぎあい

蜀漢において荊州名士は、諸葛亮の政治基盤として、亮に抜擢・重用されて、国政の中心機関である尚書系統の官職をほぼ独占していく。それでは、諸葛亮はなぜ、自らの政治基盤として荊州名士を重用する必要があったのだろうか。陳寿の『三国志』が描く「水魚

---

<sup>382</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.167~168。

の交わり」の印象では、諸葛亮は劉備の圧倒的な信頼を受けたかにも思われる。ところが、陳寿が描いた「忠」なる宰相という諸葛亮の虚像を剥ぎ取ると、政治基盤を補強するため、権謀術数を用いて、劉備とのせめぎあいが見えてくる。

### ①法正の寵用

諸葛亮の「草廬対」は、天下三分の計ではなく、天下統一策であった。ゆえに入蜀当初、諸葛亮そして劉備にとって益州は、天下統一のための拠点の一つに過ぎず、益州を特別扱いする必要はなかった。もちろん劉備は、入蜀後、諸将に成都城内の宅地と周辺の田地を分与しようとする案を退けるなど、新領土の支配に行き届いた配慮をみせている。しかし、益州出身者を優遇して、益州に安住するための基礎を築く、といった政策は積極的には行われていない。

先主は（劉備は荊州牧のほか）また益州牧を兼任した。諸葛亮は股肱であり、法正は謀主であり、関羽・張飛・馬超は爪牙（にたとえられる武臣）であり、許靖・麋竺・簡雍は賓友（の扱いを受ける臣下）であった。および董和・黄權・李厳たちは、もと劉璋が用いていた者であり、呉壹たちはまた劉璋の姻戚であり、劉巴は（劉備が）むかしから恨みに思っていた者である。みなこれを高位につけ、その才能を発揮させた。志を持つ士で、競って忠勤しないものはなかった。（『三国志』先主伝）

劉備が益州牧となった建安十九（214）年の人材登用を称えた記録のなかに挙げられている益州出身者は、のちに曹魏に降服した黄權と、彭萊だけである。彭萊は、益州広漢の名士であり、入蜀後、劉備の寵遇を受けて治中従事に抜擢され、一時は、諸葛亮・法正と並称されるほど重用された。しかし、諸葛亮により彭萊の勢力伸張は抑え込まれた。益州出身者が優遇されたとは言い難い。

一方、諸葛亮に相次ぐ地位にしるされている法正は、司隸扶風の出身であるが、戦乱を益州に避けていた名士である。劉璋に仕えたが志を得ず、劉備の入蜀を劉璋の側から画策した。また、孟達など出身地を同じくする勢力基盤を持ち、その才能も、「諸葛亮はいつも法正の智術をすぐれたものとしていた」（『三国志』法正伝）と伝えられ、諸葛亮に充分対抗できるものがあつた。

劉備の入蜀後、法正是、「外は（蜀郡太守として）畿内を統治し、内は謀主となる」ほど劉備に寵愛され、「ほしいままに（かつて）自分を非難した者を数人殺す」ほどの専権を揮った。こうした法正の専権に対する非難が諸葛亮に寄せられても、諸葛亮は、「先主がつねづね法正を愛信していることを知」っていたので、法正の専横を抑えることができなかった。

後、劉備はさらに法正を尚書令に任命する。尚書令は、漢制の踏襲を標榜する劉備政権にとって、行政の中心となる尚書台の長官という要職であり、当時諸葛亮が就いていた軍師將軍に比べて、正当に権力を揮い得る立場である。<sup>383</sup>

こうしてみると、法正と諸葛亮とは、個人的には友好関係になかったことが分かるであろう。さらに、劉備が法正を寵用して、諸葛亮の対抗勢力を作り上げようとしたことは明白である。ここが、三顧の礼以来の諸葛亮と劉備とのせめぎあいを見ることができる。

## ②遺孤を託す

### I、肝脳 地に塗れるとも恩に報いる

三顧の礼に見られた劉備と諸葛亮とのせめぎあいは、劉備の崩御まで続いた。それが顕著に現れるものは、劉備の遺言である。ただし、『演義』はもとより、『三国志』もまた劉備の遺言を諸葛亮との厚い信頼関係の現れとして記述する。『演義』より見ていこう。

関羽の仇討ちのため呉に攻め込んだ劉備は、夷陵の戦いで陸遜に敗れ、白帝城で死の床についた。劉備は、成都から諸葛亮を呼び、あとつぎの劉禪を託す。

「朕はもう死ぬ。最期にぜひとも申しておきたいことがある」。「なにとぞお聞かせ下さります」。先生（劉備）は泣きながら言った。「君の才能は曹丕の十倍はある。必ずや天下を安んじ大事を成し遂げることができよう。もし太子（劉禪）が補佐するに値すれば輔けてほしい。しかし、その才能がなければ、君が自ら成都の主となってほしい」。孔明は聞き終わると、全身に汗を流し、手足を置くところもなくして、地にひれ伏して泣きながら応えた。「臣は、必ずや太子の股肱となって力を尽くし、忠貞の節義を全うして、死ぬまで対しをささえてまいります」。言い終わると血が流れるまで頭を床に叩きつけ続けた。先主は再び孔明を座につかせて、魯王劉永・梁王劉理をさしまねいて孔明の前に進ませ、「おまえたちは二

<sup>383</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、pp.126~128。

人とも朕の言葉を記録せよ。朕なき後、おまえたち兄弟三人（太子劉禪と魯王劉永・梁王劉理）は、みな父と思って丞相に仕えよ。決して怠ってはならぬぞ」と言うと、二人に命じて孔明に拝礼させた。二人が脆拝し終わると孔明は言った。「臣は肝腦地に塗れるとも、この御恩の万分の一にもお応えできませんまい」。(第八十五回)

劉備の遺言は、『三国志』諸葛亮伝をほぼ踏襲しているが、「臣は肝腦地に塗れるとも、この御恩の万分の一にもお応えできませんまい」という部分は、『演義』の創作である。これが入ることにより、諸葛亮が五丈原で陣没することは、劉備の遺託に応えるものであったこと、死ぬまで劉備に対して亮が「忠義」を尽くしたことが強調されていく。見事な演出と言えよう。

『演義』は、『三国志』を典拠とする史実化を進めながら、すべて史実にしてしまうのではなく、そこにわずかな虚構を加えることによって、史実の重要な部分を誇張するという手法をとっている。<sup>384</sup>

このシーンについて、陳寿は、この遺言を「その国をすべてまかせて孤（劉禪）を諸葛亮に託し、心になんお疑いももたなかったことは、まことに[君臣の至公（君臣の私心なきあり方として最高のものであり）]、[古今の盛軌（古今を通じての盛んな行い）]である」と絶賛している（『三国志』先主伝）。陳寿は、これを表現するために『諸葛氏集』を編纂し、それが司馬昭に認められて『三国志』を編纂した。陳寿の『三国志』の中核部分は、旧敵国であっても蜀漢の丞相諸葛亮は、西晋に生きる人々が学ぶべき対象となる、君主との篤い信頼関係を持っていたとする、ここの主張に置かれている。<sup>385</sup>

## II、君自ら取る可し

『演義』のもととなった劉備の遺言を鎮守は次のように伝える。「若し嗣子輔く可くんば、之を輔けよ。如し其れ不才なれば、君自ら取る可し（もし嗣子〔劉禪〕が補佐するに値すれば輔けてほしい。もしその才能がなければ、君が自ら〔君主の地位を〕取るべきである」）。後半の部分を『演義』は分かりやすく改変している。

<sup>384</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.176~177。

<sup>385</sup> 渡辺義浩：『「三国志」の政治と思想』、講談社、2012年6月、p.131。

陳寿の『三国志』諸葛亮伝は、この言葉に君臣の信頼関係を象徴させ、この後の諸葛亮の一生は、劉禪を託された信頼に応える忠で貫かれていた、と強調する。

これに対して、明末の思想家明王夫之<sup>386</sup>（王船山）は、「君自ら取る可し」を君主として出してはならない「乱命」であるという。劉禪に取って代われという命令は、実行できないからである。さらに、陳寿が称える君臣の信頼関係をも批判し、諸葛亮は関羽ほど劉備に信頼されてはいなかった、と述べている。信頼関係があれば、守れるはずもない「乱命」を出す必要がないためである。

たしかに、誰の目にも劉禪に皇帝としての才がないことは明らかであった。遺言の「如し其れ不才」より前の部分は、あまり意味を持たない。諸葛亮に対し、劉禪に代わって即位せよ、といているのも当然なのである。そのため、李厳は亮に「そろそろ九錫を受けたちどうですか」と勧めている。劉備の遺命に基づき皇帝になる準備をせよ、というのである。諸葛亮は、笑ってごまかすしかなかった。劉禪に才能がなければ自分が即位することは、劉備の命令である。かと言って、命令に従えば、亮を父と慕う劉禪を裏切り、漢の復興という志を捨てることになる。このように臣下が従うことのできない君主の命令を「乱命」と呼ぶ。<sup>387</sup>

劉備の遺言は、こうした両者のせめぎあいの結果出された「乱命」なのである。関羽・張飛のみならず、夷陵の戦いで挙兵以来の軍勢を失った劉備は、「乱命」により諸葛亮の即位に釘をさすことでしか、劉禪の未来を守れない、と考えたのであろう。

三顧の礼から法正の寵用による対抗勢力の育成までをみてくると、たしかに諸葛亮は最期まで劉備の遺児劉禪を補佐し続けた。しかし、最後の遺言には、劉備と諸葛亮との緊張関係が凝縮されていることがわかるであろう。

## （二）忠臣としての諸葛亮

蜀漢正統論の高まりとともに、忠義の士としての諸葛亮の再評価も進んだ。劉備は死にあたり、病床で諸葛亮に息子の劉禪を托し「我が子に才能なくば君が取って代われ」と遺言したと正史にある。しかしそれにも関わらずあくまで劉禪を主君として奉り、不倶戴天の敵である魏を攻め続けたことは、忠義を尽くした行為として賞賛された。

---

<sup>386</sup> 王夫之（おうふうし、万暦47年（1619年）-康熙31年（1692年））は、明末から清初にかけての思想家・儒学者。字は而農。号は薑齋・一瓢道人・船山先生。

<sup>387</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.178。

## 1、出師表

劉備に疑われたことは、諸葛亮には心外であったに違いない。それでも、漢室復興の志と誠実な人柄が、諸葛亮を忠臣とした。乱命を無視して、劉禪を全力で補佐し、国是である曹魏への北伐に向かう。その際、劉禪に捧げたものが出師の表である。古来、「忠」を代表する文とされ、「これを読んで泣かない者は不忠である」と言われた、日本でも読み継がれてきた千古の名文である。

先帝（劉備）創業未だ半ばならずして中道に崩殂せり。今天下三分し、益州疲弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり。……臣（諸葛亮）は本布衣、躬ら南陽に耕し、苟も性命を乱世に全うし、聞達を諸侯に求めず。先帝、臣の卑鄙なるを以てせず、猥りに自ら枉屈し三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに当世の事を以てす。是に由り感激し、遂に先帝に許すに駆馳を以てす。……今南方已に定まり、兵甲已に足らば、当に三軍を奨率し、北のかた中原を定むべし。庶わくは駑鈍を竭し、奸凶を攘い除き、漢室を興復し、旧都に還らん。此れ臣が先帝に報いて、陛下に忠なる所以の職分なり。……臣恩を受くるの感激に勝えず。今遠く離れるるに当たり、表に臨みて涕零ち、言う所を知らず。（『三国志』諸葛亮伝、毛宗崗本第九十一回も同じ）

諸葛亮は、出師表の中で十三回も〔先帝〕という劉備を指す言葉を用いている。劉禪に捧げたにも拘わらず、〔陛下〕という劉禪への呼びかけは六回に過ぎない。諸葛亮が、〔先帝〕を多用するのは、自らが劉備の信任を受けて、劉禪に忠を尽くしていることの確認のためである。劉備の遺言がそうした配慮を諸葛亮に必要とさせてしまったのである。<sup>388</sup>

古来名文中の名文とされており「諸葛孔明の出師の表を読み涙を墮さざれば、その人、必ず不忠」と言われてきたほど、諸葛亮の蜀に対する忠義が如実に描写されていると言われてきた。自分を登用してくれた先帝劉備に対する恩義を述べ、あわせて若き皇帝である劉禪を我が子のように諭し、自らの報恩の決意を述べた文である。これこそ、日本人の中に伝わる諸葛孔明の人間像であらうか。

---

<sup>388</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.180。

## 2、規範としての「漢」の重要性

結局、劉備の子である劉禪に君主の資質が皆無だったこともあり、諸葛亮の漢による天下統一という基本方針は、実現しなかった。第五次北伐の最中、魏の司馬懿による持久戦に苦しんだ諸葛亮は、五丈原に陣没する。それでも、諸葛亮は高い評価を受け続け、毛宗崗本では「智絶」と位置づけられるに至る。評価の高い理由は、劉備父子に恩返しするほか、諸葛亮が復興を夢見た「漢」の規範としての重要性にある。

漢は、ローマ帝国とよく比較される。ほぼ同時期に存在した同規模の古代帝国であるためだけではない。「すべての道はローマに通ず」ということばがあるように、ヨーロッパの文化はすべてローマを源流とする。同様に、中国文化の原基もまた、漢で定まった。漢とローマは、それぞれ中国とヨーロッパの「古典」古代なのである。したがって、漢の復興にすべてを賭けた諸葛亮は、中国の「古典」を守ろうとした者と位置づけられ、その評価が歴代きわめて高かった。規範としての「漢」の重要性のゆえに、漢の復興を目指した諸葛亮が評価されるのである。

### (三) 魔術物語の真偽

#### 1、借東風一七星壇に諸葛風を祭る

「智絶」諸葛亮が『演義』で用いる道術の中で、最も有名なものは、赤壁の戦いに際して東南の風を呼ぶ「借東風」である。

周瑜は、火攻めには東南の風が必要であることを知り、気が塞いで寝込んでしまった。それを心配する魯肅に孔明（諸葛亮）は、「公謹殿（周瑜）のご病気は、わたしにも直すことができます」と言う。魯肅は、直ちに孔明を伴って周瑜の見舞いに行った。見ると、周瑜は頭から蒲団をかぶって床に伏している。「わたしに一つの処方がございます。これにて都督殿（周瑜）の気も通じましょう」。「それをお教え願いたい」。孔明は紙と筆を取り寄せて、人払いをすると、密かに十六の文字を書き記した。「欲破曹公、宜用火計。万事俱備、只欠東風（曹公を破らんと欲すれば、宜しく火計を用うべし。万事俱に備われど、只東風を欠く）」。書き終わると、周瑜に渡しながら、「これが都督殿の病源でしょう」と言った。これを見て周瑜は仰天し、「なんと恐ろしい奴か。この上は実情を打ち明けてしまおう」と考え、笑いながら言った。「わたしの病源をご存知であれば、どんな薬で治すのか



を教えてください。「わたしは非才ですが、かつて異人より『奇門遁甲天書』を伝授され、風を呼び雨を降らせることができます。都督殿が東南の風をお望みなら、南屏山に台をお築きください。これは七星壇と申し、高さは九尺、三段に築き、その四方に百二十人の旗手を立たせます。わたしは、壇上において道術を行い、三日三晩、東南の大風を借りて、都督殿にお力添えをいたしましょう」。(第四十九回)

このあと、いよいよ諸葛亮が七星壇で道術を行い、風を呼んで赤壁の戦いが始まる。ただし、七星壇で行われる道術には、あまりリアリティーがない。このため、諸葛亮は季節はずれの風が吹くことを知っていた、すなわち「風を読んでいた」と説明されることが多いのであろう。

裴注には、黄蓋が曹操軍に火攻めを行った時、「東南風急（東南の風急なり）」であったと記されるが<sup>389</sup>、これは自然現象であって、諸葛亮が風を呼んだわけではない。そもそも人間が「風を呼べる」はずはない。

## 2、『奇門遁甲天書』の正体

しかし、せつかくの小説の虚構をそんなに「正しく」よんではつまらない。諸葛亮が風を呼ぶ話は、講談の中から出来上がったものなのである。『演義』の中で、諸葛亮は、『奇門遁甲天書』を伝授され、それによって「風を呼べる」と明言している。それならば、『奇門遁甲天書』を探さなければなるまい。きっと道教の経典であろう。『演義』のこの場面で、諸葛亮は道士の格好をしているからである。

『演義』がまとめられた明代には、『秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経』（『正統道蔵』所収）という道教経典があった。「遁甲」しか共通しないが、そこに記された道術を会得すると、六丁・六甲の神兵を使い、風を呼び、縮地の法<sup>390</sup>を行うことができる、と書いている。これらはすべて諸葛亮の使う道術である。それどころか、『秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経』には、この経典は諸葛亮が会得して使ったものだ、と明記された符籙（おふだ）を使えば、六丁・六甲の神兵を操ることができるほか、風・雲・雷・雨を呼び、木牛・木馬（流馬で

---

<sup>389</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.170~171。

<sup>390</sup> 地面の距離を操る術

はない) を使うことができるという。図1の「呼風符」は、風を呼ぶための符籙である。<sup>391</sup>



図1



図2

符籙を書くだけでは、風は呼べない。風を呼ぶには、まず神を呼び出す必要がある。神を呼ぶためには、「発爐」というポーズをとる。発爐とは、左手の中指を押し、神を呼ぶ動作のことである（図2参照）。発爐のあとには、結界を作って聖域を生み出さなければならない。結界を作るためには、「罡歩」<sup>392</sup>を行う。結界を作った後は、「破邪」を行い邪魔をして来る魔物を払う必要がある。破邪のためには、「叩齒」<sup>393</sup>を行う。

これで準備は完了である。あとは、呪文を唱えればよい。ただし、道教經典に多いことではあるが、『秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経』には呪文が記されていない。呪文は口伝なのである。<sup>394</sup>

### 3、兵陰陽家

ところが、毛宗崗本には、禹歩や叩齒は記されない。道術がリアリティーを欠く理由で

<sup>391</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.172。

<sup>392</sup> 罡歩は禹歩ともいい、北斗七星の形にステップを踏む足運びのことである。

<sup>393</sup> 叩齒とは、上下の歯をカチカチとかみ合わせることである。

<sup>394</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.174。

ある。元代中期の『三国志平話』から、元末明初の羅貫中がまとめた『演義』、そして完成版である清代初期の毛宗崗と、時代を下るにつれ、儒教的な歴史観に基づきながら、物語を史実に近づける作業が繰り返されて、道教の教義や道術は、小説に乗せてもらえなくなった。こうして、毛宗崗本では、諸葛亮の『奇門遁甲天書』は由来の知れない魔術の書になってしまった。

そもそも、近代以前の戦いは、すべてが合理的な判断で行われたわけではない。占いなどの呪術が、軍事と秘密に結びついていた。こうした呪術的兵法を『漢書』では、『孫子』などの「兵家」と区別して、「兵陰陽家」と呼んでいる。軍を起こす時に、その日時の吉凶を占い、天体の方角に留意し、天象・気候を観察して、鬼神の助力を得るという、きわめて呪術性の高い兵法である。

諸葛亮は、兵法書を著し、兵家としての評価も高い。諸葛亮の兵法書『便宜十六策』は、部分的に残存する。そこには、敵情を把握した後、地形に基づき戦闘を行うべきこと、軍を維持するための七つの禁止事項などが記されている。理智的な兵法と言えよう。ところが、『演義』で諸葛亮が繰り出す戦術は、ほとんどが兵陰陽家に属する兵法である。<sup>395</sup>

ここまで見てきたように、『演義』は、偽書に書かれた兵陰陽家としての諸葛亮像をも継承しながら、一方で道術の合理化に努め道教とのかかわりを少なくしていったのである。諸葛亮は「智絶」であって、彼の道術は、異人から伝授された『奇門遁甲天書』を学んだ叡智の結果として発揮される。そのため、道教の教義をそのまま小説に載せることはなかったであろう。こうして『演義』では、諸葛亮の『奇門遁甲天書』は、由来の知れない魔術の書となったのである。

#### (四) 名宰相の終焉

##### 1、秋風五丈原

「孔明が死んで夜講の入り落ち」。江戸時代の川柳である。光和七（184）年の黄巾の乱より始まる「三国志」の時代は、咸寧六（280）年の天下統一まで約百年間続く。諸葛亮が五丈原で陣没するのは、建興十二（234）年、黄巾の乱から五十年後のことである。あと半分の時代が残っているにも拘らず、全百二十回の毛宗崗本は、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」の場面を第百四回に描く。あとの五十年には、十六回分しか割り当てないのである。物語は急速に終焉に向い、虚構もめっきりと少なくなる。しっかりと作り込まれた

<sup>395</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.175。

最後の虚構は、諸葛亮の陣没場面である。作り込み方を分かりやすくするため、最後だけは『三国志』から『演義』へと物語の改変を見ていくことにしよう。

『三国志』諸葛亮伝の本文は、「諸葛亮は病氣となり、軍中に卒した。享年五十四歳であった。蜀漢の軍が撤退した後、司馬宣王（司馬懿）は諸葛亮の陣営が置かれた場所を調べ歩き、『天下の奇才』であると言った」と記す。西晋の基礎を築いた司馬懿が「天下の奇才」と評価する諸葛亮であるからこそ、『諸葛氏集』（諸葛亮の文集）を編纂していた陳寿が、司馬昭に認められて『三国志』の執筆を命じられたのである。諸葛亮の陣没は、『三国志』からすでに司馬懿の言葉で好意的に語られる。<sup>396</sup>

## 2、伝説の形成

戦いは、軍を退く時が最も難しい。後ろから攻められると全滅することもある。そのため殿軍が大事なのだが、諸葛亮の将としての優れた点は、撤兵の際に兵を損なわないところにある。北伐はすべて成功しなかったが、一度として撤兵に失敗したことはない。東晋のころには、その撤兵に伝説が生まれていた。

裴注に引かれる東晋の習鑿齒の『漢晋春秋』は、百姓（人々）の俚諺（卑近な諺）として次のような諸葛亮伝説を記録している。

（諸葛亮の死後）楊儀たちが軍勢を整えて出発すると、民は急いで司馬宣王（司馬懿）に報告したので、宣王は追撃した。姜維は楊儀に、軍旗を反し陣太鼓を打ち鳴らして、あたかも宣王に立ち向かおうとする様子を示させた。宣王は引き退き、あえて近づこうとはしなかった。そののち楊儀は隊列を組んで引き揚げ、谷に入ってから喪を發した。宣王が退却したことで、人々は諺を作り、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」とした。ある人が宣王に告げると、宣王は、「わたしは生きている者を謀ることはできるが、死んだ者を謀ることはできない」と言った。

習鑿齒の『漢晋春秋』は、晋は魏ではなく漢を受け継いだ国家であるとし、曹魏の正統を認めない。それでも、諸葛亮を追憶する人々の「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」という諺を伝えるだけではなく、魏臣ではあるが晋の開祖でもある司馬懿の反論も掲げてい

---

<sup>396</sup> 渡辺義浩:『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.194。

る。晋を正統とする東晋の史書として当然の配慮である。<sup>397</sup>

この話を見ることによって、諸葛亮の戦略戦術は極めて慎重なものになったことがわかった。しかし、撤退の巧みさは見事というしかない。北伐において、幾たびも攻勢に出ながらも勝つことは出来なかったが、圧倒的な非勢の中にあっても、国を滅ぼすことはなかった。つまり、無駄に兵を損じることを避けることには長けていたことが証明されているわけだ。

そして、元の『三国志平話』において、諸葛亮の神格化は頂点を迎える。

その夜になると恐ろしい風が吹きすさび、ふと見ると神人が立っており、「軍師（諸葛亮）がわたしを建遣わして手紙を届けさせた」と言う。司馬懿が手紙を見ると、その内容は、次のとおりであった。「わたし（諸葛亮）が死んでも、漢の天命はなお三十年ある。もし、蜀漢が滅べば、曹魏もまた滅び、孫呉がそれに次ぐ。なんじ（司馬懿）の子孫に天下を統一する者が出るであろう。しかし、もしなんじが惑って軽挙妄動すれば、禍はなんじ自身に及ぶであろう」。司馬懿は読み終わると従わない気配を見せた。すると神人は、司馬懿をどなりつけた。司馬懿は唯々諾々と言った。「軍師のご命令に従います」。こののち、司馬氏はそれぞれ辺境に向い、蜀漢と戦うことをせず、朝廷に帰っていった。（『三国志平話』巻下）

ここでの諸葛亮は、未来を予知する能力を備え、髪人を使者として司馬懿に三国の滅亡と司馬氏による統一を预言する。<sup>398</sup>

これでは名軍師、魔術師のような存在諸葛亮孔明である。神のような知謀を駆使して強大な敵軍を翻弄する姿は爽快この上ない。諸葛亮を高く描こうとする意図は分かるが、かえって荒唐無稽で空々しい。文学としての完成度は低い、と言わざるを得ない。

### 3、神から「智絶」に

これに対して、毛宗崗本では、人である諸葛亮が、死ぬ間際まで漢復興の志を捨てず、兵を損なわないように、人智の限りを尽くして、死後の準備をしたことが語られる。

---

<sup>397</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.195~196。

<sup>398</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、p.197。

司馬懿はある夜、天文を観ていると、赤色で光に角のある大きな星が、東北の方角から西南の方角に流れ、蜀漢の陣地に墜ちて、二度三度とはねあがり、殷々たる音がした。司馬懿は驚き喜んで言った。「孔明は死んだ」。司馬懿は、直ちに大軍を起こして蜀漢軍を追撃するよう伝え、陣門を走り出ようとする時に、ふとまた疑いを抱いた。孔明は六丁・六甲の法を巧みに操ることができる。いまわたしが長い間戦いに応じないので、この術を使って死んだと見せかけ、わたしを誘い出そうとしているのではないか。いまこれを追撃すれば、必ずその計略に嵌ろう。……（それでも）司馬懿は自ら軍を率いて追撃した。ある山の端を回った時、ほど遠くないところに蜀漢の軍勢が見えたので、勇躍して馬を飛ばした。そこへ、山かげから石火矢の音が響くと、どっと喊声が沸き上がり、蜀漢の軍勢が一斉に軍旗を翻して、陣太鼓を鳴らし向かって来る。木陰にひらめく中軍の大旗に一行大書された文字は「漢の丞相・武郷侯諸葛亮」とあった。司馬懿は、大いに驚き顔色を変えて目をこらすと、軍中から数十人の将が一輛の四輪車を擁して現れた。車に端座しているのは、綸巾羽扇、道袍黒帯、まぎれもない孔明その人である。司馬懿は仰天して、「孔明はまだ生きていたのか。わたしは軽々しく深追いして、孔明の計略に墮ちてしまった」と言うと、急いで馬に鞭打ち、引き返して逃げ出した。……二日が経ってから、土地の者が、「蜀漢の軍勢は谷の中に引き揚げると、哀しく泣き始め、その声は地を震わすほどでした。軍の中には白旗（弔意を表す）が掲げられています。やはり孔明は死んだのです。後詰は姜維の率いる一千騎だけで、一昨日、車に乗っていた孔明は、木像でした」と知らせてきた。司馬懿は嘆息して言った。「わたしは生きている人間を謀ることはできるが、死んだ人間を謀ることはできない」。これより、蜀の人々は「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」と言い囃すようになったのである。（第百四回）

毛宗崗本は、司馬懿が天文により諸葛亮の死を知りながらも、亮の「六丁・六甲の法」を警戒しながら追撃する、と設定することにより、木像を見て逃げ出す伏線を張る。そのうえで、追撃してきた司馬懿を姜維が迎え撃ち、諸葛亮の木像を見た司馬懿が仰天して逃げ出す様子を周到に描き、亮が生前に立てておいた計略によって、「死せる諸葛」がいかに

「生ける仲達」を走らせたのか、合理的に説明する。<sup>399</sup>

ここの諸葛孔明の姿は、神算鬼謀な魔術師ではなく、人間としての「智絶」諸葛亮である。最後の好敵手である司馬懿のイメージを確立するとともに、その死去の場面まで諸葛亮の「智絶」を描ききっているのである。

## （五）渡辺義浩の諸葛亮像の特質

三国志学会事務局長も務めた渡辺義浩氏の『三国志演義』に関する研究著作はかなり多いが、その中の二冊をよく精読し、また整理することによって、渡辺氏の諸葛亮に関する研究にある特色及びその独自の観点を、以下の如く、纏めることができる。

### 1、名軍師の真偽

前述のように、陳寿は諸葛亮の軍事家としての顔に対して、「連年軍勢を動かしながら成功しなかったのは、臨機応変の戦術が不得意だったからではないか」と評価された。渡辺氏は赤壁の戦いの中最も重要な役割を果たした最も有名な「借東風」というエピソードを解析することによって、諸葛亮の神秘的なベールを脱がせることができた。そして、諸葛亮の死に巡って、時代の経つにつれ、諸葛亮が人間から神、さらに「智絶」な軍師へ戻る経過を明らかにした。

### 2、主君と微妙な関係

古来から名文中の名文とされており「諸葛孔明の出師の表を読み涙を墮さざれば、その人、必ず不忠」と言われてきたほど、諸葛亮の蜀に対する忠義が如実に描写されていると言われてきた。しかし、渡辺義浩氏の解説を見ることによって、本当に諸葛亮が忠臣と言えるのか疑わしい。さらに、入蜀後、劉備が法正を寵用することに対して、諸葛亮も権謀術数を用いて、対抗勢力を作り上げようとしたことは明白である。確かに、諸葛亮は、「自分は、先帝・劉備がわざわざ三顧の礼を尽くした特別な存在である」と強調しすぎており、不自然であろう。まさか「諸葛亮が自らの政権を安定させるために自己正当化を図っているのではないか」と、懐疑的な意見も考えられる。

そしてなによりも、劉備と蜀のために尽くした高潔な人格は、これからも多くの人々を

---

<sup>399</sup> 渡辺義浩：『三国志 演義から正史、そして史実へ』、中央公論新社、2011年3月、pp.198~199。

魅了し続けるだろう。さらに、規範としての「漢」の重要性のゆえに、漢の復興を目指した諸葛亮が評価されるのであろう。

#### 第四節 日中近代における「三絶」評価の比較

##### 一、日本近代における「三絶」の人物像

###### (一) 日本近代における曹操の人物像

これまで、中国史上代表的な悪役である曹操に関する日本の研究著作は多く目にしたが、それらの著述をよく精読し、また整理することによって、近代日本における曹操の人物像を明らかにすることができる。

曹操といえば、中国三国時代の悪者として知られてきた。それは小説『三国志演義』を代表とする中国の民間で培われた「三国志」物語が育んできた曹操のイメージ。民間の「三国志」物語では、劉備やその部下である関羽・張飛・孔明らを善玉として活躍させる一方、曹操は彼らの前に立ちはだかる冷酷で残忍な悪玉として描かれる。そのような悪イメージに満ちた曹操像は現代にも受け継がれている。

一方で、渡辺義浩氏の論説を見ることによって、陳寿の『三国志』から見れば、曹操が悪人ではなく、軍事・政治・文学に精通し、後世へ巨大な影響を与えた偉大な人物であることが改めて分かった。確かに『三国志』における、曹操は文武両面に非凡な才能の持ち主であり、渡辺氏の観点は絶対に正しいとは言えないが、このような論説の下で、曹操に問われた罪はほぼ見えなくなって、全く新たな曹操像が改めて築き上げられたのである。これ正に彼の独創的な曹操支持論説であると言えよう。

そして、井波律子氏と金文京氏は共に曹操の悪役ぶりの極めつきとして、呂伯奢一家の惨殺を挙げている。『演義』は『三国志』を基としながらも、『世説新語』や裴松之注『三国志』などの逸話を中心として編纂される書物から取り込まれたエピソードや、作者自身の思い入れ、臆見によるフィクションが多く含まれていることを言明するうえで、曹操の奸雄としての顔は時代が下るとともに、深刻化する過程を明らかにした。

ここで、二人とも歴史の変遷を精確に洞察することを通して、「曹操は奸雄であり、英雄である」、「曹操はワルイやつであり、ツヨイやつである」、「ツヨイゆえにワルイ」などの論説が相次いで提示されている。

これらをあわせ考えるならば、日本における曹操に関する論考は、殆ど曹操を奸雄として扱わなかったというよりは、むしろ曹操を英雄に定める傾向がかなり強かったのである



う。換言すれば、当時の人には「奸」にしか見えなかったかもしれないが、近代日本における、曹操の「奸」即ち「英」であることが分かるのであろう。

この論理が近代における、曹操の評価に対する観点を転換し、曹操の悪化を雪ぎ、その積極面を力説することができる、と思う。

## (二) 近代日本における関羽の人物像

『三国志演義』の隠れ主役という関羽に関する日本の研究著作はかなり多いが、それらの著述をよく精読し、また整理することによって、近代日本における関羽の人物像を明らかにすることができる。

関羽は、中国後漢末期の将軍。蜀漢の創始者である劉備に仕え、その人並み外れた武勇や義理を重んじる人物は敵の曹操や多くの同時代人から称賛された。後漢から贈られた封号は漢寿亭侯。諡が壯繆侯だが、諡号は歴代王朝から多数贈られた。悲劇的な死を遂げたが、後世の人間に神格化され関聖帝君となり、神とされた。信義に厚い事などから、昔から商売の神として中国の人々に祭られている。今日に至る、世界各地のチャイナタウンには関帝廟があり、そこには関羽が商業の神として祀られて、華人たちの心の拠り所となっている。このような人気が集まった関羽であるが、日本における彼の素顔は一体どうなるのか。

渡辺義浩氏によれば、三国志の英雄、関羽への評価は、当初から高かったわけではない。関羽の性格面の特徴としては、自尊心が非常に高い事が挙げられる。関羽には「自信過剰な上に、部下には優しいが同格の士大夫を見下す」という悪癖があったらしい。しかし、『三国志演義』は、長い間民間で形成されてきた三国時代の物語を集大成したものである。この間、講釈師の語りや舞台のお芝居で新しいエピソードが付け加えられ、また人気のない筋立ては削られるなど、当時の人々に好まれる物語として取捨選択が行われてきた。三国志の物語や人物像の形成過程（関羽が軍神・財神に祀り上げられた理由も含む）を追うことは、当時の中国社会の人々の考えや意識を知ることにつながるかもしれない。したがって、われわれの目の前に、最初蜀の一人の武将にすぎない関羽が、時間が経つにつれ神へと昇り詰めていった。

そして、金文京氏や井波律子氏の関羽に関する研究には、関羽は、信義や義侠心に厚い武将として名高くまた『演義』での普浄の逸話などから、民衆によって様々な伝承や信仰が生まれ、信仰を高め、また後の王朝によって神格化されたことを言明した。その関羽を

祭ったところが関帝廟の始まりである。また、関羽は塩の密売に関わっていたという民間伝承があり、義に厚いとされる事から商売の神として祭られた。そのため世界中に華僑が散らばっていったときに、商売が繁盛する様にとその居住区に関帝廟を立てた。そのため世界中の中華街などで関帝廟を見ることが出来る。しかし、金文京氏から見れば、数多くの関帝廟あるいは世界中にも盛んになった関帝信仰は、本質的には日本人とは直接関係のない、したがって信仰の対象とはいえない、単なる異国趣味の域を出なかったという存在を挙げられた。

要するに、日本において、関羽を信仰する日本人は大勢じゃないと思う。関羽信仰との関係が薄い日本人は、関羽の特別扱いに違和感を覚えるのである。さらに、横浜や神戸、長崎などの中華街にある関帝廟は、ほとんどの日本人にとっては、ただ好奇心の対象、または観光スポットにすぎないであろうと考えられる。

これこそは、「正史」と「演義」あるいは中国と日本で最も落差の大きい人物関羽であろう。

### (三) 近代日本における諸葛孔明の人物像

井波律子、金文京や渡辺義浩ら三人の諸葛孔明に関する研究を詳しく分析することを通して、諸葛亮孔明の真実、虚実をいろいろな史料とともに追求することができた。日本近代における諸葛亮の人物像は以下の通り纏めておきたい。

『三国志演義』の中、孔明は軍師・参謀という枠を超え、むしろ神仙・魔術師的な活躍まで見せる超能力者として描かれる。井波律子氏は諸葛亮超力者伝説、ひいては仙人伝説が生まれるには、彼の出身地と道教との深い係りがあると説明した。さらに、諸葛亮の魔術師としての顔を究明するため、井波律子氏は『三国志演義』の中に、孔明に関するもっとも有名な事績を取り上げて、『漢晋春秋』と比較しながら、神のような諸葛亮のイメージは、史実とフィクションを混ぜ合わせ、出来上がったことを明らかにした。

これに対して、金文京氏は『演義』の中鬼神や天候を操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死にを知ることができるといったほぼ完璧な人物の事績や超人的能力はすべて科学技術の勝利であると主張した。『演義』の孔明は、前近代における中国の科学者像の一つの投影であることを示した。

さらに、金文京氏によれば、中国史上で天才軍師として名を馳せた諸葛亮であるが、それは『三国志演義』の作者、羅貫中により作り上げられた孔明像の与える影響が大きいか

らである。『三国志演義』の中で、孔明はほぼ欠点のない完璧軍師として活躍する。しかし史実における諸葛亮は、中途から劉備陣営に加わった文士であり、赤壁の戦いでも外交面以外の活躍はほとんど見られない。法正が没するまでは文臣トップですらなく、軍権を握ったのは劉備の死後のことである。「忠武侯」という諡号を与えられたにも関わらず、正史における陳寿の諸葛亮評も、制約された条件下で最大限政治能力を発揮した能吏としてのものであり、「然れども連年衆を動かし、未だ成功する能はず。蓋し応變の将略はその長ずる所に非ざるか」とあるように、その軍事的な才能は疑問視していた。

そして、諸葛孔明を「聖漢の忠臣」として高い評価を受けられたという点に対して、金文京氏は劉備に支えられ、最後まで忠義を尽くした諸葛亮のほか、目覚めて、劉備が死ぬとさっさと隠遁してしまう孔明像も提示された。

一方、渡辺義浩氏も劉備と諸葛亮の間の緊張関係を強調し、入蜀後から、劉備が死ぬまで、二人が政権をめぐるせめぎ合いが続いたことを示した。

ほとんどの事績が架空の物語であっても、劉備に疑われて、ひそかに戦ったにもかかわらず、漢室復興の志と誠実な人柄が、諸葛亮を忠臣とした。乱命を無視して、劉禅を全力で補佐し、国是である曹魏への北伐に向かった諸葛亮がもっと評価されるのであろう。

## 二、中国における「三絶」に関する研究

日本における「三国志」受容の基本を定めた吉川英治の『三国志』は、曹魏の基礎を築いた曹操と劉備に仕えた軍師の諸葛亮二大英雄として三国時代を描く。序文に、「三国志は曹操に始まって孔明に終える二大英雄の成敗争奪の跡を叙したもの」という自らの「三国志」への捉え方を吐露しているように、吉川は、曹操のスケールの大きな人間像と、諸葛亮の抜群の才智と忠誠心を描き出した。曹操と諸葛亮を中心に三国を見る、日本人の「三国志」像はここに決定づけられたのである。

吉川英治は、関羽に特別な感情を抱いて入れ込むことはなく、張飛と同列に淡々と描く。もちろん、横浜の中華街には、壮麗な関帝廟があり、いつも参拝客で賑わいを見せている。横浜だけではない。神戸・長崎といった華人の暮らす町には、関帝廟が華人社会の中心に鎮座している。しかし、関帝を信仰する日本人は少ない。関帝信仰との関係が薄い日本人は、関羽の特別扱いに違和感を覚えるのである。

これに対して、中国の「三国志」受容は、の決定版となった毛宗崗本『三国志演義』は、「奸絶」の曹操、「智絶」の諸葛亮に、「義絶」の関羽を加えた三人を物語の中心に置く。

このような人物の配置や国民文化の違いによって、中日両国における『三国志演義』の主要人物の位置づけはどのような異同があるか。

### (一) 曹操の人物像について

中国の論考を解析することによって、近代中国における曹操の人物像を明らかにすることができた。

まず、時代に経つにつれ、曹操という歴史人物の変遷過程が見られる。最初は陳寿の『三国志』の示す如く、「非常の人、超世の傑」（類稀なる才の持ち主であり、時代を超えた英雄である）と評されている。魏晉南北朝になると、小説の中曹操は残忍性・狡猾性が初めて提示される。唐に入ると、曹操の荒んだ生活も詩人の怒りを招き、彼を批判する声が止まらない。そして南宋から元の頃にはこれらの物語は書物にまとめられ、『三国志平話』と呼ばれる口語体による三国物小説が生まれた。『三国志平話』もまた、曹操は悪者として深刻化している。その後、羅貫中が三国物語をまとめ直したものが『三国志演義』で、大まかな流れは外れないものの蜀漢の陣営を正統とみなし、大衆の判官びいきの心理への訴求と儒教的脚色がなされている。その時の曹操の「奸」と「雄」の両面性が共存している。「奸」は「雄」になるため、必要な手段である。最後には、中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』の中、「奸」と「雄」はすでに共存できなくなって、曹操は正統王朝漢を乗っ取った悪人として広く一般に認識された。

こうしてみると、曹操の人物像は、異なった時代背景によって、どんどん悪化されていくことがわかるであろう。歴史の視点から、曹操のイメージは確かに曲解されるかもしれないが、芸術的に言えば、このような人物の描き出す手法には認める価値がある。

一方、『三国志演義』の影響によって悪役としての評価が定着した曹操であるが、1950年代以降に入ってから逆転し、再評価が進んでいる。特に曹操再評価を盛り上げたのは毛沢東で、彼の主導の下、曹操再評価運動が大々的に行われた。郭沫若が戯曲において曹操を肯定的に評価したのもこの頃である。曹操再評価運動につれ、歴史学界の中、曹操のポジティブなイメージを確立したことは認めざるを得ない。しかし、文学的あるいは芸術的から言えば、曹操の悪イメージはまだ生き残っている。結局、伝統的な文学や芸術作品の影響は伝統的な歴史的資料を超え、今日の「奸絶」曹操を作り上げた。唐代から今日に至る、曹操の悪イメージの育成は長い時間をかけて形成したもので、決して簡単に変わることができない。それどころが、曹操の良い面を構築する場合、伝統的な作品を書き直す必

要がある。さらに、同じように長い時間の蓄積も必要となる。

## (二) 関羽の人物像について

「中国で最もよく信仰されている神は何か」といえば、おそらく多くの人が「関帝」と答えるであろう。現に台湾や香港にいけば、あちこちで関帝廟にお目にかかるし、どこも参拝者でごったに並んでいる。

一介の武将であったにすぎない関羽が、どのようにしてかくも高き地位を占めるまでになったのか。中国において、数多くの論考は、関羽の人間から神へ変遷する所以をたどってみた。具体的な方法としては、『三国志』、『三国志演義』や『三国志平話』などの書物を精読し、中に挙げられた有名な話の比較を通じて、関羽の位置づけ及び文化的影響を明らかにすることができた。

関羽信仰の始めは唐代にさかのぼり、そして結実したのが宋代であり、明清に入ると、大流行し、現在にまで至っている。現在では関羽の事蹟は、むしろ『演義』の方が有名になってしまったようである。そのため知識人の中にも小説を史実と混同する者がある。関羽の形象もすでに小説のイメージが定着している。すなわち、赤い顔に長いひげ、赤兎馬に跨り、青龍偃月刀を使い、側には刀を持つ周倉と、義子の関平が付き従うといったものである。このような関羽信仰の形成は地方に土俗的に存在する逸話や伝承を吸収し、庶民生活の利害に合わせて民衆の願望を投影していったために広まった。

各地にそもそも初めから存在した伝説や逸話が関羽に仮託され武神や水神などの性質を帯びていき、それらが書物に記されることによって広い地域に伝播していった。仮託されたイメージが民間に浸透していくとともに、仏教や儒教などの他宗教にも関羽の持つ「義」との同一性を見出されて受け入れられていった。

日本において、異国趣味としてあまり信仰されていないことに対して、中国の関羽は義の規範として、中華民族の心に深く根を下ろした。関羽の義は、中華民族伝統的な価値観のプラス面をよく反映している。確かに、関羽に巡る事蹟の大半は虚構であることは事実ですが、このような虚構に満ちた関羽像がすでに歴史上の真の関羽像に取って代わって、彼の影響は、文学作品に限らず、宗教、民俗崇拜の範囲にも広く普及した。

## (三) 諸葛亮の人物像について

最後には、「正史」と「演義」で最も落差の大きい人物のもう一人、諸葛孔明を巡って、

中国の論考を分析して、すごし述べておきたい。

中国において、数多くの著述は正史や『演義』の比較研究を通して、諸葛孔明に関する人物像の変遷を示したものである。

正史では、孔明の扱いは、途中から劉備陣営に加わった文士であり、赤壁の戦いでも外交面以外の活躍はない。法正が没するまでは文臣トップですらなく、軍権を握ったのは劉備の死後のことと。政治家としては、本質をわきまえた傑物で、古の管仲（斉・桓公の名宰相）や蕭何（漢・劉邦の名宰相）にも劣らない大政治家である。北伐に当たって、補給や兵士の訓練などを含め、国力の増強に尽力した。木牛流馬や兵器など様々な発明し、屯田兵制度を導入し、兵士の訓練にも力を入れ国力を増強していった。こういう事は地味だが国家戦略上は非常に重要であり後方兵站が充実し、兵の練度も高い蜀軍が北伐を敢行するたびに魏は多大な出費と大軍の遠征を余儀なくさせたのである。残念ながら5次にわたり遠征を試みたが、ついに目的を達成できなかったが、これは孔明が臨機応変の才に乏しく、引き際がへただったなめと陳寿は見ている。

そして、『三国志演義』では諸葛亮のイメージがふくらまされ、綸巾を戴き羽扇を手にして四輪車に乗り、鬼神や天候をも操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死にを知る事が出来るといったほぼ完璧な人物として描写されている。

このような人物取扱いの大違いといえ、特定の時代のイデオロギーが文学創作に大きな影響を与えらると思われる。

孔明を「聖漢の忠臣」として評価したのは、南宋の朱熹である。劉備に息子・劉禪を托されたことで、劉禪を主君として奉り、不倶戴天の敵である魏を攻め続けたことは、忠義を尽くした行為として絶賛した。民間においては、孔明の軍略を讃え、神秘化している。唐代以降、寺院での俗講で、蜀の軍事行動はすべて孔明に結びつけ、軍師としてだけでなく、その知謀を際立たせるために神秘化させた。

魯迅は『中国小説史略』の中で「人物描写に至ってはすこぶる欠点がある。劉備を温厚な人格者として表現しようとしてむしろ偽善者じみているし、諸葛亮を知恵者として表現しようとしてむしろ化け物じみている」と述べるにもかかわらず、近代中国論考は殆ど『演義』の中の諸葛亮像は最も成功した人物像という観点を持っている。相当の作り話があるにもかかわらず、『三国志演義』が高い評価を受けられた。そのような失敗した英雄を将来の世代は尊敬できるように書かれたことは素晴らしいと思わないか。

『三国志』において、諸葛孔明の真の姿は、天才軍師ではなく、大政治家だった。そし

て何よりも、『三国志演義』の中に書かれた彼の劉備と蜀のために尽くした高潔な人格や敵手を玩弄する最高の知恵は、これからも多くの人々を魅了し続けるだろう。

## まとめ

以上、金文京、渡辺義浩、井波律子の『三国志演義』の「三絶」に関する論考を個別に取り上げて、其々の特色及び特色な観点を検討し、さらに中国における「三絶」の位置づけも明らかにしてきたが、この最後の一節においては、中国と日本の「三絶」に関する研究の異同を明確するうえ、如何にこのような人物評価の異同を引き起こしたのか、ということを究明していきたい。これを以て、本論の締めくくりとしたい。

### 一、関羽評価の相違

『三国志演義』の日本伝来史を回顧すれば、それが、三国志は「見るのか読むのか」と問いかけると、江戸時代は、知識人は「読むと見る」であるが、一般大衆は「見ると聞く（絵・版画・浮世絵・歌舞伎などで、特に歌舞伎芝居にはよく三国志ものが取り上げられ、好んで關羽を演じたと伝えられるのが、二代市川團十郎である）」が中心であり、明治から

昭和初期の近代でも「読むと見る」が主流（浮世絵師橋本周延の筆になる役者絵である明治十七年大判三枚続の『三国志長坂橋図』があり、明治以降も歌舞伎で三国志ものも多く上演されたこともある）であり、昭和後期から平成にかけては、「見る・読む・書く・描く・遊ぶ・語る」の多種多様なアプローチの方法が登場して来た、と言える。

更に改めて「日本人にとって三国志とは何か」と問いかけると、それは、江戸後期以後は「何でも有りの娯楽だ」と言えるだろう。娯楽であるため、日本人に対して、「関羽」という歴史人物は信仰の対象とは言えないことも言うまでもない。関羽信仰との関係が薄い日本人にとって、関帝廟もただの観光地にすぎないことも当然であろう。

## 二、曹操評価の相違

『三国志演義』の主要人物に関する論考を解析することによって、中国人の価値観を反映することができると思われる。

中華文明のコアは儒教と道教であるのに対し、日本文明のコアは神道と仏教である。儒教というのは、五常（仁、義、礼、智、信）という徳性を拡充することにより五倫（父子、君臣、夫婦、長幼、朋友）関係を維持することを教える。このため、「仁」、「義」、「信」を失った曹操が、長い間中華民族の心のそこに「悪人」に変貌させ、生きていた。

これに対して、日本ではかなり昔から『三国志演義』が普及していた。だが、日本における三国志普及に大きな役割を果たしたのとして吉川英治の「三国志」が挙げられる。吉川英治は、「三国志」を人間のドラマとして描いた日本で最初の人だった。このため、ただ悪の記号としてではなく、一人の人間として描かれた曹操は、徐々に人気を獲得していく。日本人が曹操という非常の人を受け入れた背景には、日本の戦国時代の覇者として織田信長の人気が高いことが挙げられるだろう。今でもこの二人はよく比較される。天才軍事家として西洋のナポレオン、東洋の曹操、日本の織田信長を挙げる日本人は多いらしい。さらに、日本の研究者にとって、曹操の文化的素養の面は、高い評価を受けられるべきだと主張した。

こうしてみると、文化・文明が違えば、もちろんものの見方も考え方も違う。人生観も世界観もそうだろう。

## 三、諸葛亮評価の相違

中国における孔明を「聖漢の忠臣」として評価したのは、南宋の朱熹である。劉備に息



子・劉禪を托されたことで、劉禪を主君として奉り、不倶戴天の敵である魏を攻め続けたことは、忠義を尽くした行為として絶賛した。民間においては、孔明の軍略を讃え、神秘化している。唐代以降、寺院での俗講で、蜀の軍事行動はすべて孔明に結びつけ、軍師としてだけでなく、その知謀を際立たせるために神秘化させた。諸葛孔明は、中国長い歴史の中、ずっと天才軍師あるいは忠臣として知られ、後、軍神あるいは智慧の神としてまつられることもある。このような千年超えたイメージは単なる「史書に合わない」一言で覆したことができないであろう。したがって、魯迅の批評にも拘わらず、「智絶」の諸葛孔明は英雄として高い評価を受けられ続ける。

これに対して、日本側は正史を重視し、応変の将略は上手じゃなかった欠点を挙げて、諸葛孔明の軍事家としての不足を指摘された。さらに、劉備政権とのせめぎあいを明らかにし、忠臣としての諸葛孔明への疑いを懐いたことも見られる。

中国において、『三国志』、『三国志演義』など著作の作者が当時の社会の観点から三国時代の人物を評価したに過ぎず、人物像の歪曲をしたかもしれない。長い間に彼らの時代の価値観が我々に馴染みしたが、近代では、郭沫若氏「替曹操翻案」は現在の中国へ大きな影響を与えた。彼の曹操への再評価は、歴史学界の中、曹操のポジティブなイメージを確立したことは認めざるを得ない。しかし、文学的あるいは芸術的から言えば、曹操の悪イメージはまだ生き残っている。結局、伝統的な文学や芸術作品の影響は伝統的な歴史的資料を超え、今日の「奸絶」曹操像がまだ続けている。

確かに1700年以上続いたイメージを覆したことは難しいであるが、曹操再評価をはじめ、『三国志演義』に登場する人物の歴史的、文学的に評価することができることも評価される。

さらに、『三国志演義』は現在の日本にも影響を与え続けている。その中でも、「三絶」が担っている役割は計り知れない。近年では、これら三人は『三国志』のような正史に近い生きた人間としての真の人間像がここまで人々に知られるようになってきている。

やはり『三国志』の「正史」と『演義』は分けて捉えるべきであり、歴史的真相を追究するといった観点から見た場合に、現代的な再評価の姿勢は評価され得る。

## 終章：近代日本における『三国志演義』に関する改作と研究の特色

本論において、日本近代における『三国志演義』の改作及び研究を巡って、主に『三国志演義』の人物像に主眼を置き、研究を進めてきた。前半において、吉川英治、北方謙三、陳舜臣の『三国志演義』に関する改作を個別に取り上げ、「三絶」を巡る各々の人物像及び人物形成における特殊な手法を検討してきた。また後半においては、渡辺義浩、金文京、井波律子、各々の『三国志演義』の主要人物に関する論考の特色、研究方法、特殊な観点などを忠実に見出し、日本近代の『三国志演義』の主要人物に関する研究の在り方の実像を明らかにしてきた。終章では、各章において考察してきた内容を踏まえて、近代日本における『三国志演義』の改作と研究の特色を究明する。これを以て、本論の締め括りとしたい。

### 第一節 『三国志演義』の文芸理論の再構築

## 一、特色ある構図

中国の決定版である毛宗崗本『三国志演義』の最初には、読三国志法がつけられている。『三国志演義』にどのような特徴があり、何が重要であるかに関する、毛宗崗の見解が以下に示される。

吾以为三国有三奇・可称三绝：诸葛孔明一绝也・关云长一绝也・曹操亦一绝也。历稽载籍・贤相林立・而名高万古者・莫如孔明。……——是古今来贤相中第一奇人。历稽载籍・名将如云・而绝伦超群者・莫如云长。……——是古今来名将中第一奇人。历稽载籍・奸雄接踵・而智足以揽人才而欺天下者・莫如曹操。……——是古今来奸雄中第一奇人。<sup>400</sup>

(罗贯中 著 毛宗岗 评订、『三国演義』 读三国志法)

読三国志法とは、毛宗崗本の読み方を自らが説明した部分である。『三国志演義』の読み所として、人材の豊富さを挙げている。毛宗崗は三国時代において、三人の突出した人物を「三絶」(諸葛亮・関羽・曹操)と称する。この三人が毛宗崗本『三国志演義』の主役である。一人は、優れた宰相としての諸葛孔明(智絶)、もう一人は傑出した武将であり、すでに神として信仰されていた関雲長(義絶)、そして最後の一人は古今の奸雄の中で第一の曹操(奸絶)である。ちなみに、諸葛孔明と関雲長の名は最初に提示されることもあり、姓と<sup>あざな</sup>字で表現されているが、この二人においていみなを避けているのは、毛宗崗の二人への尊重の意を示している。一方、曹操は、姓プラス名いみなで表記されているが、これは曹操を貶めるためである。つまり、毛宗崗本の読み方の特徴は、諸葛亮・関羽を宰相・將軍の「絶」として高く評価し、曹操を奸雄の「絶」として貶めていくことにある。

### (一) 物語構造の核の変化

中国の決定版である『三国志演義』は、「三絶」を物語の中心に置いて、物語を紡ぐのと違い、日本人が改作した『三国志』は捉え方を変えて、独創的な人物論を提示した。

#### 1、吉川英治『三国志』：二大英雄—曹操と諸葛亮

日本における『三国志』受容に最も大きな影響を与えたのは、吉川英治の『三国志』で

<sup>400</sup> 罗贯中 著、毛宗岗 评订、『三国演義』上、齐鲁书社、1991年1月、p.8。

ある。「智絶」の諸葛亮、「義絶」の関羽、「奸絶」の曹操の三人を中心とする『三国志演義』にたいして、吉川英治は、曹操と諸葛亮という二人の英雄を中心に『三国志』を描く。彼は、『三国志』の「篇外余録」で次のように述べている。

ひと口にいえば、三国志は曹操に始まって孔明に終わる二大英雄の成敗争奪の跡を叙したものだといふもさしつかえない。<sup>401</sup>

(吉川英治、『三国志』八 篇外余録 諸葛菜)

つまり、吉川英治の『三国志』は、曹魏の基礎を築いた曹操と劉備に仕えた軍師の諸葛亮を二大英雄として三国時代を描いている。この場合、主役の違いによって小説を二分することができる。前半部は曹操が主役として焦点が当てられ、後半部では曹操に代わって諸葛亮が一躍主役を担っていると考えることができる。

吉川英治『三国志』八冊の本を巻によって整理すると、「桃園巻」「群星巻」「草莽巻」「臣道巻」「孔明巻」「赤壁巻」「望蜀巻」「凶南巻」「出師巻」「五丈原巻」の全十巻で構成される。物語の中心は第四巻を境に諸葛亮をめぐる展開することから、吉川英治『三国志』の後半は「諸葛亮伝」とも言えるであろう。そのほか、吉川英治『三国志』は、曹操の悪役ぶりを描きながら、実は彼こそが時代を牽引した「真の英雄」であるという、曹操本来の姿を随所に描いている。

総じて、吉川英治『三国志』は戦時中に執筆された歴史小説でありながら、忠君愛国思想一色に染まらず、英雄曹操のスケールの大きな人間像と、諸葛亮の抜群の才知と比類なき忠誠心を描いた。その影響力たるや絶大で、曹操と諸葛亮を二大主役と考える日本人の『三国志』像を決定づけた。

## 2、北方謙三『三国志』：英雄曹操

北方謙三は『三国志読本』のなかで、「僕は、三国時代の中での本当の英雄というのは、曹操だったとしか思えないんだ。」<sup>402</sup>と主張している。北方謙三から見れば、曹操は『三国志演義』の中に描かれた中国の伝統的な奸雄ではなく、群雄居並ぶ三国時代で最も英雄らしい英雄である。

<sup>401</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.375。

<sup>402</sup> 北方謙三、『三国志読本』、ハルキ文庫、2002年6月18日、p.22。

曹操にとっての卑しい出自は、古い束縛から免れていたというだけでなく、もっと積極的な意味でも、彼が自分の人生を切り開いていくうえでの力となった。曹操は三国時代において、最も純粋な戦士である。群雄割拠した乱世にあって、最も果敢な戦いを見せ、まさに戦に生きた天才と呼ぶに相応しいのが曹操だ。彼の戦はいつも激しい。絶対自分に何の逃げ道を作らず、悔しい気持ちを残さないように奮戦する。たとえ失敗したとしても、次々と勇気を奮い起こすことができる。この不撓不屈の精神こそ、群雄が備えていない資質である。

そして、三国時代では、武勇だけではなくて、国を一つ作り上げるのにふさわしい資質が英雄には求められた。その時代にあっては曹操だけが突出して英雄にふさわしい資質を兼ね備えていた。歴史上から見ると、曹操は武将としてだけではなく、政治的手腕や文人としても優れた人である。彼は新興宗教に傾倒した民衆の心を引き寄せ、悪政の元凶であった官僚らを排除し、有能な人材を登用した。そして、詩を吟じては曲にのせて詠い、また自ら孫子に注釈を加え、『魏武帝註孫子』を著すなど、文化の面でも貢献した。そういう点で、群雄もはるかに劣っている。このように、曹操は様々な要素を備えていた人物であって、英雄の名に相応しい存在であることは想像に難くない。

### 3、陳舜臣『秘本三国志』：主人公とする少容

陳舜臣『秘本三国志』は単なる魏・蜀・呉、三国の争いを描くだけではなく、三国に続く第四勢力、宗教の見えざるネットワークを提示した。中国史では、中央政権が崩壊して乱世となり、思想統制が緩む時代に、ユニークな思想や宗教が生まれる傾向がある。それと同じように、仏教や道教といった宗教が中国社会に広まるのは、この三国時代からであろう。そこで、陳舜臣は小説の特権である想像力を駆使して、五斗米道の教母・少容の活動を生き生きと描きながら、実によくこの時代の相を描いている。

陳舜臣『秘本三国志』の主演は「三絶」の何れでもなく、漢中の五斗米道の首領張魯の母少容が一躍物語の核となり、物語的時間の進行と全体的な構成の大きなポイントになっている。陳舜臣の言葉によると、「三国志は異能、奇才の人物によって彩られているが、張魯の母をそのなかにいれないのは、これまでの物語作家の不明というべきではなかろうか。」<sup>403</sup>と記している。五斗米道の張衛の妻について、彼女は歴史上に存在する人物であるが、本当の名前は誰も知らない。ここに陳舜臣は、年齢三十代半ばだが信じられないくら

<sup>403</sup> 陳舜臣、『秘本三国志』一、中央公論新社、2009年3月25日、p.56。

いに若く見えるという意味で、彼女を「少容」と名付けた。このように、陳舜臣『秘本三国志』では最初から最後まで、五斗米道の教母が歴史の第三者的な立場で俯瞰的な目をもって展開される。孫堅の玉璽発見や王允の連環の計、そして曹操の青州黄巾賊鎮圧などの、主だった三国志のイベントのそこかしこに教母少容が絡んでいる。陳舜臣の視点としては、この時代に初めて中国に広まり、後の道教の元となった五斗米道や、同じくこの時代に中国に伝わってきた浮屠仏教の目を通して歴史を描くというのは非常に斬新な試みである。そもそも、動乱の時代であったことは、誰もが知るところであるが、これに当時抬頭しつつあった道教教団と仏教教団に属する人々の活動を、虚構を交えて織り込み、乱世に生きざるを得なかった人々の苦痛の姿を描き出したのは『秘本三国志』しかない。

## (二) 諸葛亮の死を物語の完結とする

『三国志』というのは、もともと三つの国が中国の支配をめぐって争った時代についての歴史書であるので、当然、晋の再統一まで続く。一般に「三国志」と言われているのは、これを元ネタにした『三国志演義』という小説である。小説といっても何百年も前に書かれたものであるが、これも全百二十回で、魏・蜀・呉三国が晋に統一されるまでが描かれている。

ただ、近代において日本人によって書かれた小説は大抵諸葛亮の死で終わる。諸葛亮が死んだ後、主人公らしき人物は存在せず、物語として成立し難いだけでなく、著作者の独自の思いも作品のなかに垣間見れる。

### 1、吉川英治『三国志』：原動力の喪失

諸葛亮を後半最大の主人公と位置づけた吉川英治『三国志』は、諸葛亮が五丈原で亡くなったときに、物語の進行がふつつり止まった。その原因は、諸葛亮の死後となると、著作者の気力も希薄となるからである。<sup>404</sup>実は諸葛亮の没後、司馬懿父子の抬頭から、呉の推移、蜀の滅亡、晋が三国を統一するまで、時代の主役的人物がおぼろげとなり、事件の輪郭も薄れていき、精彩を欠いてくる。したがって、吉川英治『三国志』は諸葛亮の死以後の物語は甚だ興趣に劣るために省略し、後書きともいえる篇外余録でわずかにあらすじをなぞるのみとしている。一方、吉川英治は、「ひと口にいえば、三国志は曹操に始まって

---

<sup>404</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.372。

孔明に終わる二大英雄の成敗争奪の跡を叙したものであるというもさしつかえない』<sup>405</sup>、というように、曹操と諸葛亮を物語の主人公として位置づけた。したがって、小説の最後に主人公の死をもってストーリーの結末を迎えるという構成は整合的であり、評価に値するものと思われる。

## 2、北方謙三『三国志』：夢の終わり

吉川英治以降に書かれた北方謙三の『三国志』も、諸葛亮の死を以て、終幕となる。前述したとおり、北方謙三が三国時代を題材にして描きたかった小説は、「夢を抱いた人々の姿」であり「夢を求める人々の姿」である。<sup>406</sup>そこにおいては、北方謙三から見れば、自分自身を生きることができた最後の三国時代のカリスマが、諸葛亮である。魏の司馬懿も英傑には違いないが、はたしてそうした意味での「夢」というものを持っていたのであろうか。蜀の姜維においても猛将には違いないが、その戦いの果てに目標となる世界の様子が浮かんでいたのであろうか。総じて、諸葛亮死後の時代には、国内を固めるや、権力争いを生き抜くというような、どこか内向きで、自分自身の意志や本心に無理を強いて生きているような人物像が目立つ。国家の存在が重くなるのに反比例して、人々の夢が次第に萎縮していき、その純粋性が失われてくる。要するに晋に統一されるまで述べることは歴史的読み物としてはおもしろいが、小説にはそれが合わない。したがって、大きな夢の象徴だった諸葛亮という人物の死をもって、北方謙三の『三国志』は終わらざるを得なかったのだ。

## 3、陳舜臣『秘本三国志』：平和な世界の実現

『諸葛孔明』の「悲風多し」のなかで、「蜀漢を強盛ならしめ、魏や東呉を併せて、天下を統一するのは、私の素志ではない。天下統一は万民の不幸になるかもしれない」<sup>407</sup>と、陳舜臣は死に臨んだ諸葛亮に言わせしめる。なぜ天下統一は万民の不幸になるのであろうか。私見によれば、二つの原因がある。一つ目は、専制君主の下では、たとえば秦の始皇帝の時代のように、不幸な統一の時代もありうるであろうと考えられること。そして二つ目としては、乱世の不幸を地上から消し去るため、天下統一されねばならないことである

---

<sup>405</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.375。

<sup>406</sup> 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、p.175。

<sup>407</sup> 陳舜臣、『諸葛孔明』下、中公文庫、1993年11月10日、p.387。

う。これは古来、動乱の世に対する一般的な通念のようでもある。だが、強引に天下統一を行えば、手に負えないほどの大動乱を招き、夥しい人命が失われる恐れがある。陳舜臣『秘本三国志』の軸となる曲調は、平和を希うところである。そのため、広すぎる天下を三つに分け、三者の勢力均衡のうえに、ひとまず三つの平和圏をつくりあげることが最善の策である。諸葛亮の眼を通してこの乱世を鎮めるとは、まさにこの手法に他ならない。それはまた、作者陳舜臣の「眼」でもあるに違いない。諸葛亮が生きる限り、天下の状況は天下三分の安定にほぼ近い。しかし、諸葛亮の死後、三国鼎立の局面が必ず破られて、天下は再び動乱の世に戻る。戦争を体験した陳舜臣の平和への渴望は言うまでもない。間もなく乱世に戻る物語の流れに直面し、陳舜臣自身はその結果を受け入れたくない気持ちがよく理解できる。したがって、陳舜臣の『秘本三国志』も、諸葛亮の死を以て完結した。

## 二、特別な創作観点

『三国志演義』は、中国の明代に書かれた、後漢末の三国時代（魏、蜀、呉）を舞台とする時代小説・通俗歴史小説である。しかし、日本の作家の目には、『三国志演義』は単なる歴史を述べる小説ではなく、長編叙事詩であり、夢を追う図であり、宗教の慈悲を貫く物語でもある。

### （一）吉川英治『三国志』：長編叙事詩

吉川英治は『三国志』の序の中で、以下のように言っている。

三国志には、詩がある。

単に龐大な治乱興亡を記述した戦記軍談の類でない所に、東洋人の血を大きく搏つ一種の諧調と音楽と色彩とがある。<sup>408</sup>

（吉川英治、『三国志』一 序）

吉川英治にとって、三国志は単なる戦記軍談の類ではなく、中に見られる人間の愛欲、道徳、宗教、また、主題たる戦争行為だとか群雄割拠などは、さながら彩られた民俗絵巻であり、壮大なる音楽に伴って演技された人類の演劇とも見られるのである。

ところでなぜ三国志には、吉川英治にとっては詩であると言えるのか。そして、詩の要

<sup>408</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.3。



素とは何であろうか。その原因は大よそ二点だと考えられる。第一に、文章の形式である。以下に例を挙げて解説する。

後漢建寧元年のころ。

今から約千七百八十年ほど前のことである。

一人の旅人があった。

……

歳の頃は二十四、五。

草むらの中に、ぼつねんと坐って、膝をかかえこんでいた。

悠久と水は行く—

微風は爽やかに鬢をなでる。

涼秋の八月だ。

そしてそこは、黄河の畔の—黄土層の低い断り岸であった。<sup>409</sup>

(吉川英治、『三国志』一 桃園の巻 黄巾賊)

以上のような黄河のほitori、劉備の初登場のシーンは、もとの『三国志演義』には一切描写されていない。形式的なから観点から見ると、文は短く、一つの節で一センテンスになる。例えば、「後漢建寧元年のころ」「一人の旅人があった」など、短い節ですぐに改行し、普通の詩のように文を続けて書く文章がある。そして、「悠久と水は行く」「微風は爽やかに鬢をなでる」「涼秋の八月だ」のように、風景や風物の描写に重点が置かれており、自然の風景などを写生的・客観的にありのままに描写する語句も多い。従って、『三国志』は叙事体で書いた小説である一方、明らかに詩の性質も備えている。吉川英治『三国志』はこの二つの形式が融合して生まれたものである。つまり、歴史上の事件や人物などを中心にうたった叙事詩である。

そして、第二に、長編叙事詩の要素と言われ、二人の主人公曹操と諸葛亮である。作者自身も「篇外余録」のなかでこのように述べている。

ひと口にいえば、三国志は曹操に始まって孔明に終わる二大英雄の成敗争奪の

---

<sup>409</sup> 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、pp.11~12。

跡を叙したものというもさしつかえない。この二人を文藝的に見るならば、曹操は詩人であり、孔明は文豪といえると思う。<sup>410</sup>

(吉川英治、『三国志』一 序)

毛宗崗本『三国志演義』では、魏・蜀・呉が晋に統一されるまで述べることに對して、吉川英治『三国志』は、曹操の登場から始まって諸葛亮の死を以て幕を閉じた。ここで曹操を「詩人」とするのは、曹操が建安文学を政治的に宣揚した文学者であるからであるということはいうまでもない。諸葛亮も北伐の際にして、前後出師の表を奉った。これこそが、諸葛亮を「文豪」と称される原因ではなかろう。さらに、私見によれば、三国時代を二つの局面に分けることができる。前半においては群雄割拠、各地で動乱が起きる時世で、後半においては天下三分の局面を迎え、動乱が鎮められる時世である。曹操の性格には、熱血且つ果敢な資質が見えるようなものがある。彼の果敢的な行動と多感な情痴において、誠に詩人らしいの顔を持っているからである。前三国時代の乱世を終結するために、そんな曹操の気質が求められていた。一方、何事にも、几帳面だったことは、諸葛亮の一性格であったように思われる。さらに、公に奉ずること謹慎、王室につくすこと忠誠、身を持つこと儉素、という三つの資質を備える諸葛亮はまるで文豪のようである。天下三分の大勢を整えた後三国時代においては、できるだけ戦争の回数を抑え、無駄に人命を失わないために、理知的に行動することが大事である。このように、曹操と諸葛亮は吉川英治『三国志』の進行役を勤める二大主役でありながら、この長編叙事詩を奏でる二大英雄であることは理解し難くない。

## (二) 北方謙三『三国志』: 夢を追う図

北方謙三によれば、この物語を題材として描きたかった小説は、夢自体の如何に関係なく「夢を抱いた人々の姿」であり「夢を追い求める人々の姿」である。<sup>411</sup>中国の歴史は、無数の国家の興亡で成り立っている。一つの国が興り、繁栄し、やがて衰微する。あるいは叛乱や侵略により国が滅び、また新たな国が興る。その過程の中には、それぞれの夢や野望を抱いたまま散っていた、数多の男達がいるはずである。これらの男達は夢を追いかけて、いつか腹を決め、命を懸けて行動した姿を描き出したのは、北方謙三の『三国志』

<sup>410</sup> 吉川英治、『三国志』八、講談社、1989年4月11日、p.375。

<sup>411</sup> 北方謙三、『三国志読本』、ハルキ文庫、2002年6月18日、p.175。

しかない。

中には、曹操のように「天下を取るというのは、万人を屈服させることだ」<sup>412</sup>と思いつつ、生きるかぎり戦い続けた男がいた。死に際に、「天下統一は、遠い夢でありましたな、殿」<sup>413</sup>という、天下統一の夢を忘れられぬ諸葛亮がいた。関羽や張飛のように「自分の出世だけを考える、つまらん武将の下で働くより、夢のあるところで働きたい。玄德様の夢を、わが夢にもできるという気がします」<sup>414</sup>という、自分が見込んだ男をとことん補佐することに生き甲斐を見つけた男もいた。劉備のように「天下を、平定したい。この国のすべてを平定して、漢王室をきちんと立て直したい」<sup>415</sup>を夢見た男がいた。孫権のように「私も、夢は持っています。兄上が平定されたところを、私が立派に治める、という夢です。それが天下ならば、天下を立派に治めてみせます」<sup>416</sup>という夢を持つ男もいた。張魯のように「そして、夢。たぶん、父が、そして間違いなく母が、抱き続けていた夢。五斗米道の国を造る夢である。」<sup>417</sup>という、親から宗教の国を作る夢を受け継いだ男もいた。もちろん、その夢が叶うことなどありえはしなかった。むしろ叶わないことのほうが多いのだ。だが一方で、夢が純粹で美しいものならば、そこにたどりつくまでにどれだけ辛い思いをしようと、夢半ばにして倒れようと、それは幸福な「生き」だったのではないかと思われる。<sup>418</sup>このために、関羽・曹操そして諸葛亮ら三人は死の直前においても少しも恐れていない。誰でも一生をかけて追いかけた夢があったのだから、安らかに永遠に眠ることができる。北方謙三『三国志』は「男と男の出会い」から始まる。劉備・関羽・張飛の出会いは言うまでもなく、劉備と曹操、呂布との間の苛烈な殺し合いですら、出会いというものの一つの形である。そしてその結果として、北方謙三は儂く美しい夢の追う図絵を描き出した。幾多の男たちが、それぞれの夢を追い求め、やがて死んでいく滅びの物語である。この美しさを「滅びの美学」とも言えよう。

### (三) 陳舜臣『秘本三国志』：宗教の慈悲を貫く物語

前にふれたように、陳舜臣『秘本三国志』の主人公は少容である。少五斗米道の教母と

412 北方謙三、『三国志』七の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.157~158。

413 北方謙三、『三国志』十三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.310。

414 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、pp.41~42。

415 北方謙三、『三国志』一の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.38。

416 北方謙三、『三国志』四の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.242。

417 北方謙三、『三国志』三の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.79。

418 北方謙三、『三国志の英傑たち』、ハルキ文庫、2006年4月18日、p.176。

して、彼女は仏教に触れる。その素晴らしさを認め、良い所を吸収しつつも少容は五斗米道独自の路線を歩む事になる。権力者と結びつくこともあるが、それは寺を建てる資金の調達など、あくまで宗教活動のために留まる。しかし、五斗米道では命の救済を重視し、現世での幸福に重きをなす。少容は戦乱の世をいち早く修復する事が先決と判断した。そのため、少容は張魯に教団を預け、自らは陳潜を連れて、旅の生活に入る事になった。彼女をはじめとする人たちは、三国時代における群雄を巡り、様々な点から考察をはじめた。

各地を渡り歩き、少容はまず曹操の事業に手を貸した。乱世を統一させる英雄の一人であるが、寿張の戦いを聞いた少容はこれ以上多くの人命が失われるのを避けるため、連合の結成を考えはじめた。五斗米道および教母・少容は、命の救済を重視したのである。これは仏教から学んだことも影響している。一日も早く乱世を終わらせるため、少容は最も賢明な曹操を選び、彼のために青州黄巾を遊説した。その後も、自分の怒りを宥めるため、青州黄巾軍を使って大虐殺を行っている曹操の行動をとめた。この30万の青州黄巾軍は乱れた天下を一つにおさめ、人民を安心立命させるための存在であると、曹操に説教した。さらに、諸葛亮の「天下三分の計」を聞き、この考え方は一日でも早く世間に穏やかな暮らしを与えたいという五斗米道の趣旨と合致していることに気づき、諸葛亮に劉備を推薦した。このようにして天下三分の幕が上がった。その後天下は三分され、戦争の頻度やその地域は限られてくる。真の平和とは呼べないが、次善の策としての三国鼎立にはまず成功したと言ってよい。しかし、その頃には、五斗米道や浮屠の教えが大陸全土に広まっていた。少容、陳潜、あるいは仏教関係者の奔走や努力の結果である。二つの教えは相争うことなく、互いに高め合いながら共存していた。そこには国境など存在しなかった。

陳舜臣の作家生活の原点の一つは、戦乱体験であった。『秘本三国志』は、小説であると同時に、近現代という時代にたいする陳舜臣の熱い思いが濃厚に反映している。近現代の激動を生き延びた陳舜臣は、時代に対して熱い思いを抱いた。なぜ近現代はこのような時代になったのか。人間はどうしたら民族や出自の壁を乗り越えて、真の平和を勝ち取ることができるのか。陳舜臣文学の底流を貫くものが、この真摯な問いかけである。『秘本三国志』にも彼の熱い思いが秘められている。陳舜臣は自分の平和への渴望を少容に託した。政局に積極的に手を伸ばし、乱世を早く終結させるため、少容は奔走するのであった。戦争を止めさせ、平和を実現する。これが少容の基本方針であり、陳舜臣の心の奥に切実に渴望しているものでもある。そのため、陳舜臣の『秘本三国志』は少容を主人公扱いし、首尾一貫した宗教の慈悲を基調とした物語を語っている。

### 三、特殊な叙述方法

#### (一) 吉川英治『三国志』：風雅の重視

『三国志』の序の中で、吉川英治自らは以下のように述べている。

私は、簡訳や抄略をあえてせずに、長編執筆に適当な新聞小説にこれを試みた。そして劉玄德とか、曹操とか関羽、張飛そのほか、主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いた。随所、原本にない辞句、会話なども、わたくしの点描である。419

つまり、吉川英治は主要人物を形づくるとき、創作を最も重視している。主要人物の容姿から見れば、「肉薄く色白く」、「髪は漆黒」、「丹唇明眸」さらに「胆量人にこえ、その眸には知謀はかり知れないものが見えた」など描写によって、美少年のような曹操像をつくりだした。全身チャームポイントで、できているような人だと思われる。そして、関羽に対して、「ひろい額」「豊かな耳朶」など知的な外見を有する塾の先生の姿を強調する一方、儒者の位置づけを合わせるため、彼に繊細な肌や静かな声も与えた。諸葛亮の容姿を見ても、「静かな眸」「細くふさいでいた睫毛」「余韻がある声」など、生き生きとした優美な諸葛亮の姿が見られる。外見だけではなく、話す声も非常に甘く、一語一語に何か香気のあるような響きがある。このような書き方から、思わず史記「留侯世家」の中で張良に関する記述を連想させる。「余以為其人計魁梧奇偉・至見其圖・狀貌如婦人好女」。すなわち、外貌も魁梧奇偉、たくましくめざましかろうと予想していたところ、その肖像を見ると、状貌は婦人好女の如くであると。吉川英治は諸葛亮を描くとき、脳のなかでは張良の姿が現れたのではないかと思われる。そのため、諸葛亮は更に優雅な女のようなようである。ストーリーの中に登場する人物に対して、外見、容姿が、人間の価値にあずかるものとも考えられる。とにかく、吉川英治の心の中で、英雄たちは優れた容姿が伴っている。

登場人物の容姿に限らず、吉川英治は主要人物が持つ風雅情趣のイメージを強調したことも窺える。曹操は普通の人間として「温雅典麗」の一面を持っている。暇な時間で、本を読んだり、詩を作ったり、また幼い子女らと他愛なく遊び戯れ、自分が好きなことだけをして、世から離れ、自分の世界に閉じる生活を楽しんでいる。関羽は塾の先生に変身し

---

419 吉川英治、『三国志』一、講談社、1989年4月11日、p.4。

で登場する。彼は劉備の最初の軍師を勤め、経・史に通暁する儒将であり、水に落ちた敵兵士を救う、「仁」という高貴な人柄を持つ武士である。諸葛亮も周瑜、郝昭や曹真に対して、死ぬまで迫る様子が見えなくなり、人道的性格を与えられ、彼の正面的なイメージを確立した。

創作としての創意は、以上のように挙げた例にすでに表れている。個人の教養、人徳の面において、最も重点的に書かれたことはあきらかであろう。総じて、吉川英治『三国志』の主要人物たちは雅やかなイメージに溢れており、日本読者の武将に対する美的観点に迎合している。

## (二) 北方謙三『三国志』：心理描写の強調

北方謙三は十年以上にわたって、肉体派のハードボイルド小説を書きつづけ、人間の肉体的な痛みと心の痛みの両面に目を向けることができる。とりわけ、その心理の描写が細かく、その分登場人物にどっぷり感情移入してしまう。

例えば、この時代に登場する英雄たちはすべて、各々に悩みを抱いている。曹操は親友であり好敵手でもある荀彧に対して、「服従するか、敵か。すべての人間を、その二つに分けてきた。荀彧だけが、どちらでもなかった。」<sup>420</sup>という、手のうちようがない状態に陥る。関羽はせっかちな性格の持ち主であり、「心の底にある、焦りに似た思いは、消えていなかった。関羽は、五十三歳になっている。劉備は、五十四歳だ。」<sup>421</sup>という、自分の年老いたことを心配し、いつも複雑な心境に落ちる。隆中の村に隠棲していた諸葛亮は、学は立つが、自分の食器も洗えない無精者として登場し、「世に出たいという思いもあった。しかし、愚かな者の下にはいたくなかった。……どこかで、心がねじ曲がった。……時々は、怨念のよような言葉を、土の中に埋めた。」<sup>422</sup>と、日々悩む。そのほか、荊州を任される以来、兄上のことをばっかり考えている関羽の劉備にもつ一筋の情、亡き母親への想いを抱いたまま成長した呂布の赤兔馬に抱く友情、乱暴に見せかける張飛が妻だけに見せる深い愛情、曹操の詠む詩に涙する許褚など、登場人物一人一人の心情の揺れ動きが丁寧に描かれており、作品を読んでいる最中に胸が熱くなることがしばしばあった。

北方謙三『三国志』は、おのおのの武将の心情、思考、思いなど、その時々々の主要人物

420 北方謙三、『三国志』八の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.237。

421 北方謙三、『三国志』九の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.57。

422 北方謙三、『三国志』六の巻、ハルキ文庫、2001年6月18日、p.96。

の胸中が徹底して詳細に描写されており、たちまち読者を夢中にさせるのである。

### (三) 陳舜臣『秘本三国志』：推理性の強調

『秘本三国志』において、陳舜臣は推理力を働かせながら物語の筋の再構築を行った。

例えば、「七擒七縦」において、南蛮の王と呼ばれる孟獲が、諸葛亮に七回捕らえることはあまりにも想像しにくい。陳舜臣の推理によると、諸葛孔明と孟獲は昔から肝胆相照らす仲であり、七度捕らえ、七度放ちことは二人の芝居であった。そして、長い間劉備はなぜ曹操に肅清されなかったかという点について、実は劉備と曹操の間で、ひそかに気脈を通じていたことが考えられる。二人は協力して英雄をつぎつぎ消していくと合意した。劉備は相手の陣営に潜り込んで、曹操と敵のようなふりをしながら、内部から相手を崩してゆくという戦略だった。これによって、白馬の戦いで、関羽が袁紹配下の猛将顔良を一刀のもとに切って落とすのも、関羽は劉備から八百長のことを打ち明けられていないが、顔良は劉備から「関羽が投降してくるからよろしく」と言ってあった。油断して無防備の顔良を襲ったから、ただ一刀で勝負がついたので、これは袁紹の勢力をそぐための劉備の計略だった、と推理する。そのほか、献帝の曹操暗殺の密詔も、「奸雄曹操打倒」のポーズをとって、劉備が袁紹の陣営から発表したもの、許都の曹操の暗殺計画の一味は、劉備を除いて一網打尽に討ちとられ、曹操側内部の反対勢力は一掃された。

こうして見ると『秘本三国志』は、さながら推理小説のようなものであり、秘密を解き明かすから「秘本」というのかしら、という感がわく。陳舜臣は『三国志』『後漢書』『資治通鑑』など史料というデータにもとづき、それを組み合わせ、照合しながら、自分の推理を交えるというのが、『秘本三国志』の独特な書き方である。陳舜臣は「推理のたのしみ」と題する文章の中で、次のように述べていた。

歴史小説というのは、たいてい史料による作者の推理と作者の虚構との混血児ではあるまいか。暴論かもしれないが、私は歴史小説もひろい意味の推理小説にふくまれる、という気がしてならない。<sup>423</sup>

つまり、この『秘本三国志』は、歴史小説であり、人間の真実をある程度描いた推理小

---

<sup>423</sup> 権田萬治、『趣味としての殺人 日本推理評論集・実技篇』、蝸牛社、1980年8月20日、p.48。

説でもある。推理小説と言え、その要素となるのは「事件」である。『秘本三国志』では、バラバラの事がらと登場人物とが一本の糸でつながり、「事件」の全容を明らかにした。登場人物の行動の裏に隠された動機及び心理的なかけひきを追求し、昔の謎が全て解けた瞬間、新たな三国志物語が出来上がった。

## 第二節 「三絶」人物像の再構成

### 一、『三国志演義』の「三絶」の人物像

毛宗崗本『三国志演義』は、三国時代における三人の突出した人物を「三絶」と称する。一人は優れた宰相としての諸葛孔明、一人は傑出した武将としての関羽、そして一人は古今に屈指の奸雄としての曹操である。なかには、諸葛亮が綸巾を戴き、羽扇を手にして、四輪車に乗り、鬼神や天候をも操り、敵の意図を全て事前に察知し、天文をもって人の生き死を知る事が出来るといった、ほぼ完璧な人物として描写されている。そして何よりも、『三国志演義』の中に書かれた彼の劉備と蜀のために尽くした高潔な人格や敵手を玩弄する最高の知恵は、高く評価すべきである。そして、『三国志演義』の関羽像と言え、蜀漢の創始者である劉備に仕え、その人並み外れて武勇や義理を重んじた彼は敵の曹操や多くの同時代人から称賛されるといったものである。関羽は非業の最期を迎えた後、まさに「神化」する。『演義』の影響でさらなる"関聖帝君"への崇拜を生み、現在も世界中の関帝廟で祀られている。最後に、『三国志演義』の世界で、曹操がもっとも憎々しげな奸雄の貌をあらわにした姿で描かれている。曹操が最大の悪役となったのは、彼が主人公たる劉備の前に立ちふさがるライバルであること、漢王朝を終わらせた篡奪者であること、そして宦官曹騰の孫という出自などに起因する。ところが1950年代以降に入ってから逆転し、再評価が進んだ。特に曹操再評価を盛り上げたのは毛沢東で、彼の主導の下、曹操を再評価する動きが盛んになった。郭沫若が戯曲において曹操を肯定的に評価したのもこの頃である。この曹操の再評価運動が進展するにつれ、歴史学界において、曹操のポジティブなイメージが確立されたことは認めざるを得ない。しかし、文学的あるいは芸術的な観点から見ると、曹操の「悪」としてのイメージはまだ生き残っている。なぜなら、そこには中国人の考え方と既定の価値観との深い関わりがあるようにと思われるからである。中国には、『尚書正義』という書物が『書経』の注釈書として存在している。その注釈の仕方の中に、人間を決定的な運命の支配下にあるとする思想が見られる。すなわち、世の中には「上知」（聖人）の存在を認めるとともに、その対立的な存在として、「下愚」（悪人）が存在する。こ



の六朝から唐の初めにかけての思考が、人は運命に支配され、考え方の範囲も規定されていることを示されている。いわゆる「決定的運命論」(天生命定論)である。

そして、吉川幸次郎の論述によれば、この主張の最初の基礎は、『論語』にある。

子曰、惟上智與下愚不移。(子曰く、惟れ上知と下愚は移らず。)

要するに、最上の智者と最下の愚者の人格は生まれつきのもので、個人の意志で変えることができない、とするものである。

子曰、性相近、習相遠。(子曰く、性は相い近き也。習いは相い遠きなり。)

子曰、中人以上、可以語上、中人以下、不可語上也。(子曰く、中人以上は、以って上を語る可き也。中人以下は、以って上を語る可からざる也。)

以上の『論語』の二条を組み合わせ見ると、「上知」と「下愚」の間に、普通の人間、すなわち「中人」があることがわかるであろう。そして、「中人」は、先天条件には近いが、後天的な習慣によって格差が生まれやすく、人格が変わることができる。<sup>424</sup>さらに、この思想を中国における『三国志演義』の人物像の受容に当てはめると、なぜ「三絶」に対する見方はこのような大きな相違があるかを説明できる。

まず、「上知」は「聖人」と同義で、絶対の善人、絶対の智者を指している。三国時代の「善」と言えば、劉備の蜀陣営である。三つの勢力の中で最も弱い存在であるにもかかわらず、漢を復興しようとする行為の根本が正しいという。そのため、中国の古典古代である「漢」をまもろうとした劉備・関羽・諸葛亮などは、「聖人」のような存在となり、高く評価され続けた。その対立として、三国時代における絶対の悪人、絶対の愚者が存在し、それは曹操である。「漢」を乗り越えようとする曹操は、正統性を無視し、自らは革命を行った。個人の善悪だけでなく、国家の権威に挑戦し、国の転覆を謀る曹操は、正にその時代屈指の「悪」という存在である。六朝から唐のはじめにかけての思考では、曹操は絶対に救済の可能性のない人物であると考えられる。

---

<sup>424</sup> 吉川幸次郎、『吉川幸次郎全集』第十巻、筑摩書房、1970年10月15日、pp.465~466。

## 二、近代日本における「三絶」の人物像

### (一) 曹操像：英雄像の確立

『三国志演義』では、劉備に対する「悪役」とされ、毛宗崗は曹操を「奸絶」として諸葛亮・関羽と並ぶ主役と位置づけ、野心的な奸賊の顔を示した。しかし、近代日本における曹操像の研究及び改作を見ると、悪役一辺倒であった曹操像が見直されて、英雄と設定されている。

近代日本における『三国志演義』に関する改作の曹操像と言えば、昭和の日本人の「三国志」像に大きな影響を与えた吉川英治『三国志』を挙げざるをえない。同書は戦時中に執筆された歴史小説でありながら、忠君愛国思想一色には染まらず、英雄曹操のスケールの大きな人間像を描いた。曹操は燃え盛る火の中から登場して、世の人々に新たな希望をもたらす。軍事家としての曹操は、詩人のような一瞬の靈感で、臨機応変の処置をとり、つねに戦争の形勢を逆転させ、勝利を収める。有能な人材にたいしては、まるで少女のような恋心を曝け出す曹操の姿も印象に残る。そのほかにも、温雅典麗、率直な性格かつ挫けない強靱な精神をもついくつかの曹操像が見られる。北方謙三の『三国志』を読み、幾つかの曹操の新しいイメージを発見することができる。彼は命を賭けて、戦い続けることに最も純粋な戦士であり、歪められた国の形を正すため、新たな国家観を持つ名君であり、同盟を結ばず、実力で万人を降服させる孤高な覇者であり、君主の関係より男との友情を重視する人物でもある。陳舜臣の『秘本三国志』では、曹操を時代の先を行く合理主義者として描きながらも、仲間と部下の死に泣くなど、感情にもろい善良な人物像としても提示された。

『三国志演義』の人物像に関する研究を見ていくと、渡辺義浩では、史書に由来する曹操の優れた面の記載を取り上げて、日本の曹操は英雄であることを強調した。若いころ許劭に「治世の能臣、乱世の奸雄」と評されているように、手段としては「奸」である場合もあったが、四百年も続いた漢を改革するため、儒教を相対化して唯才主義を掲げ、一般の農民に土地を与える屯田制を創設し、税制改革を行った。また、書・音楽など多分野に卓越し、とくに文人として「建安文学」を興し、また『孫子』は現在も曹操の注釈で読まれる。金文京においては、軍事家・政治家・文学家として曹操の「強さ」を強調し、「強い」ゆえに「悪い」という論理を提示された。井波律子では、時間の流れとともに、曹操の奸雄化の過程を明らかにし、奸雄であり、英雄である曹操像の両面性を提示した。

このように見てくると、改作においても、研究においても、日本の場合には、曹操は全

て英雄とされていた。そこで、一体なぜ日中両国における曹操像の受容がこのような大きな相違があるのか、という疑問が浮かんでくる。それは日本の場合には、『尚書正義』に書かれた「決定的な運命論」が存在しないこと。既定の枠に収まる思考スタイルや伝統的な価値観がないため、最初から曹操を「悪役」と扱うわけにはいかない。従って、日本では、曹操は腐敗を極める漢の現状を改め、強力な中央集権国家を作らなければならないという使命感を抱いた「真の改革者」であり、三国時代を駆け抜けた真の英雄に変身した。

## (二) 関羽・諸葛亮像：神格化から人格化へ

三国時代の英雄の中で、今日も中国人と最も深く関わっている者は、毛宗崗本『三国志演義』が「智絶」や「義絶」と称える諸葛亮と関羽である。一人は生きている間に三国時代随一の神仙軍師となった。もう一人は死んだ後、軍神且つ財神となり、今でも中華町に鎮座している。しかし、近代日本における諸葛亮と関羽の人物像の改作と研究を見てくると、神秘に包まれている神のようなイメージが見えなくなり、二人が人間として活躍している。

まず、近代日本における『三国志演義』に関する改作の諸葛亮像と言えば、吉川英治『三国志』の中で、赤壁戦いの時風を呼んでくる諸葛亮は繊細な心を持つ科学家になる、丞相府に閉じこもって五つの敵を撃退する諸葛亮は重厚な宰相になる。さらに、諸葛亮は周瑜、郝昭や曹真に対して、死ぬまで迫る様子が見えなくなる。その代わりに、諸葛亮に人道的性格を与えられ、彼の正面的なイメージを確立した。一方、北方謙三『三国志』における諸葛亮は、極めて人間臭い。隆中の村に隠棲していたときも、学は立つが、世に出る勇気がなく日々悩んでいる。不幸不運の戦略家として、彼は劉備の軍師となってからも、人材を見抜かず、敗北を重ね続けた。唯一の長所として、彼は知力と武力の両方を備え、新たな時代の智将とも言える。最後の陳舜臣の『秘本三国志』では、諸葛亮の外交面の素晴らしさを詳しく叙述している。とくに、諸葛亮と司馬懿の八百長の試合を丁寧に描いた。戦をしたいが、機会を得ず、戦の素人のまま死を迎えた諸葛亮の姿が印象に残っている。

そして、日本における諸葛亮の人物像に関する研究を見ていくと、渡辺義浩は諸葛孔明と劉備の間のせめぎ合いを中心として、君臣間の政権競争を示した。諸葛亮の死を巡って、時代の経つにつれ、諸葛亮が人間から神、さらに「智絶」な軍師へ戻る経過を明らかにした。金文京の諸葛孔明に関する研究には、陳寿の評を取り上げて、われわれに軍略が得意ではなかった諸葛孔明の素顔を見せた。そして、有名な戦争を解析することによって、諸

葛亮の科学者としての顔をはっきり示した。井波律子は六朝時代の『異苑』、宋元時代の『平話』、そして『三国志演義』など書物の中、諸葛亮の初登場のシーンを取り上げ、時が経つにつれて、彼を超越的な存在とみなされていることを指摘した

一方、近代日本における『三国志演義』に関する改作の関羽像と言えば、吉川英治『三国志』では、関羽の最期について、彼の両方の鬢は霜のようになり、老衰した姿を描きながら、「万事休す」を言い、戦場で石像のように動けなくなり、人間として関羽の脆弱な精神を強調する。さらに、「玉泉山に聖を顕す」と「呂蒙に憑依して、孫権を罵る」という二つの最も有名な話に対しては、リアリティーに欠くとして、削除している。北方謙三は人間としての関羽の感情世界に重点を置き、情の深い関羽を描き出した。血のつながった関興を戦場でやすやすと死なせたくないがために、武者修行で張飛のところへ行かせという関羽の親心。そして仁徳将軍劉備の名声を守るため、仁政を行い、民心を落ち着けようとする姿も、人生最大のピンチに陥り、何よりもまず劉備に安心させようとする姿も、これらすべて劉備への一筋の情の現れである。ほかにも、せっかちな性格の持ち主である関羽は、熟考するのが苦手なタイプであり、いつも劉備と張飛の忠告を受ける。『秘本三国志』の中の関羽の初登場について、「女を置いて、さっさと消え失うせろ！」と、暴言を吐いて、花嫁を奪いに現れる。「根っから品が悪い」などと描写されていて、ただのならず者として扱われている。その後も人妻貂蟬に横恋慕をすれば、死に直面して精神的崩壊するなど、世俗的な人間として描写されている。

そして、日本における関羽の人物像に関する研究について、渡辺義浩は、史書『三国志』と小説『三国志演義』の中の関羽像を取り上げて、その異同を比較しながら、時間の経過とともに変遷する関羽像及び関羽信仰の流行を明らかにした。金文京は、最初はただ蜀の名将である関羽の神へ昇進する所以を分析していた。彼から見れば、日本における関羽という歴史人物の地位とその普及状況は、中国や朝鮮と違って、信仰の対象とは言えない。中華街にある関帝廟も、ほとんどの日本人にとっては、ただの好奇心の対象にすぎないという論説を提出した。井波律子は、文学的な視点から「関羽」に関する描写を捉え、虚構に満ちた関羽の義・勇を示されている。また、神としての関羽のイメージは、長い期間にわたる民間伝承のおかげであると強調した。

このように見えてくると、改作においても、研究においても、日本の場合には、諸葛亮と関羽は極めて人間的とされていた。当然、優れた一面はそれとして温存されるが、神秘的なベールに包まれた、聖なる存在ではなかった。そもそも、『三国志演義』は、講談や語りも

のとして形成された三国志の物語を羅貫中がまとめたものである。羅貫中は、これらの物語から非現実的な部分を削り、なるべく真実の歴史に近づけようと努力した。また正統である蜀漢の義を描こうとした。このため『三国志演義』は、「七分実事、三分虚構」と言われる事実に近い歴史小説となったのである。しかし、小説である以上、そこにはフィクションが含まれる。『三国志演義』に含まれる「三分の虚構」は、殆どが蜀漢のために費やされる。とりわけ「智絶」諸葛亮の智恵と、「義絶」関羽の義、を表現するため用いられる。これに対して、近代日本における「三絶」に関する改作及び研究は、史書に重点を置きながら、不必要な怪奇性を除いた。改作においては、小説の中の多くの神秘的なエピソードに合理性のある解釈を加え、あるいは部分的な削除も行われた。さらに、主要人物の精神的な葛藤や変化に力を入れたことも窺える。研究においては、小説と史書の比較研究を通じて、諸葛亮と関羽がいかにして人から神へ変身するのかということをはっきりと示し、史料批判に基づいて三国時代の意外な真実を伝えようとする。これにより、行き過ぎた虚構は抑制されることとなり、諸葛亮と関羽は人間性を取り戻し、かつ欠点もある平凡な人間に転換されることとなった。このような歴史に近い人物像も日本の読者により受け入れやすくなり、千数百年前の戦乱の中国大陸に生命を燃焼させた人々を、現代に見事によみがえらせたのであった。

### 第三節 本論の究明したことと今後の課題

#### 一、究明したこと

『三国志演義』は、中国の明代に書かれた、後漢末・三国時代（魏、蜀、呉）を舞台とする歴史小説である。四大奇書の一つに数えられ、中国において、もっとも広く読まれた書物である。一方、日本における「三国志」の受容に、もっとも大きな影響を与えた吉川英治の『三国志』は、「国民文学」と言われ、本場の中国よりも高い評価を得ている。

しかし、なぜ吉川英治が改作した『三国志』は日本の「国民文学」と称されるのか。そして「日本文学」と言われる作品の資質とは何か。一般的には、その国で最も広く愛読されている文学、その国を代表する文学は「国民文学」と言われるべきであろう。しかし、竹内好の『国民文学論』によると、読者の相対的な数だけを目安にして、多く読まれるのが「国民文学」だという考え方は排除しなければならないと主張した。<sup>425</sup>貴族など限られた特殊の階層の要求のみでなく、国民各層の広範な欲求にこたえ、愛読されるという階級的

<sup>425</sup> 竹内好、『国民文学論』、東京大学出版会、1954年1月30日、p.86。

普遍性は、「国民文学」の基本条件の一つに過ぎない。そのうえで、作品は相当な創意や独自の解釈を書き入れなければならないということ。そして、一国の国民性または国民文化の表れたと独特の文学であるということ。作品が「国民文学」と評価されるかどうかについて、この二点は最も重要な判断基準と言えよう。

「国民文学」の定義を明らかにした後、さらに視野を広げ、吉川英治『三国志』に限らず、本論の研究対象となる近代日本における『三国志演義』の改作と研究を中心にして、日本は異国文化を受け入れている場合、どのように取舍選択するのか、そこに投影される日本的な発想を明らかにしていきたい。これを以て、日本の「三国志」のあり方を明らかにし、本論の締め括りとしたい。

### (一) 日中の国民性の相違

吉川英治『三国志』が「国民文学」と言われる理由の一つとしては、日本の国民性あるいは民族性がよく表れているという点である。毛宗崗本『三国志演義』には、「智絶」の諸葛亮、「義絶」の関羽、そして「奸絶」の曹操が登場する。中国では、六朝から唐のはじめにかけて形成された「決定的運命論」(天生命定論)という思考が存在する。そのため、「漢」をまもろうとした劉備・関羽・諸葛亮などは、「聖人」のような存在となり、高く評価され続けた。その対立として、三国時代における絶対の悪人、絶対の愚者が存在し、それは曹操である。

しかし、日本の場合には、中国と同じような既定の価値観があるわけではない。改めて「日本人にとって三国志とは何か」と問いかけると、それは、江戸後期以後は「何でも有りの娯楽だ」と言えるだろう。娯楽であるため、日本人に対して、関羽・諸葛亮という歴史人物は信仰の対象になりえないことは言うまでもない。曹操さえも長い間抱かれる「悪人」のイメージから抜け出す、文武に精通する英雄と設定される。したがって、日本の改作及び研究は歴史の真実に重点を置き、曹操の悪役ぶりを描きながら、実は彼こそが時代を牽引した「真の改革者」である、という、曹操本来の姿を随所に描いている。諸葛亮と関羽に対しても、行き過ぎた虚構は抑制されたことにより、人物の人間性を取り戻し、欠点もある平凡人に転換されることができた。このように、日本の改作は、中国の伝統的な思想の束縛から抜け出す、科学精神に満ちた新しい三国志物語と言わざるを得ない。

#### 1、人格化された諸葛亮・関羽

諸葛亮と関羽の人間性を取り戻すことは日本の改作が伝えたいことであると思われる。そのため、諸葛亮は神算鬼謀の魔術師という神のような存在から、緻密な分析と理性的な思考に長ける科学家に変わる。『三国志演義』では、諸葛亮の骨身を惜しまず勤勉の精神を提唱するが、日本の場合、彼は食器さえ洗わない「無精者」として登場し、日々悩む。ほかにも、人材を見抜けない、臨機応変な対応ができないなど欠点だらけの諸葛亮像が随所に見られる。関羽もせっかちな性格の持ち主で、いつも劉備と張飛の忠告を受ける。さらに、敗戦を喫して、戦場で石像のように動けなくなり光景もあった。ほかにも、人妻貂蟬に横恋慕をし、死に直面すると精神的崩壊する様子もなかなかみつもなかった。各版本においては、人間として関羽の脆弱な精神を強調する。以上のように、日本の改作では、キャラクターの特徴を際立つため、誇張表現を用いられる『三国志演義』の描き方から抜け出すことができ、写実主義の手法が投入され、より真実の人物像を提示しようとする。このため、諸葛亮と関羽のお高くとまった神のイメージが、欠点もある平凡人に転換されることができ、日本の読者に受け入れやすくなることができた。

## 2、曹操の名誉回復を企てる

『三国志演義』の曹操といえば、白塗りの極め付きの悪人である。しかし、日本の作家の眼から大胆な加筆を行うことにより、曹操は歴史を作り、流れを作り、その時代の英雄となった。彼は命を賭けて、戦い続けることに最も純粋な戦士であり、歪められた国の形を正すため、新たな国家観を持つ名君であり、同盟を結ばず、実力で万人を降服させる孤高な覇者であり、君主の関係より男との友情を重視する人物でもある。そのほかにも、温雅典麗、率直な性格かつ挫けない強靱な精神をもついくつかの曹操像も見られる。陳舜臣『秘本三国志』はさらに章の末尾に「作者曰く」というコメントの中で、正史『三国志』を取り上げて、曹操の汚名を雪いだ。したがって、芝居や寄席の講談の伝統から、より多く影響を受けてきた中国人の曹操像に対して、日本における曹操ファンを飛躍的に増やしたのは、吉川『三国志』から始まる改作だと思われる。日本の作家たちはしっかりした評価の目をもって、曹操をこの時代の英雄として描き、彼の名誉を回復しようとしている。

### (二) 独創性

吉川英治の『三国志』が「国民文学」と言われるもう一つの理由としては、相当の創意や独自の解釈を作品の中に書き入れることである。さらに、吉川英治『三国志』だけでは

なく、日本の改作の新しさは、中国で読まれてきた『三国志演義』の面白さを生かしつつ、現代の作家の眼から大胆な加筆を行って現代日本人にマッチした『三国志』を作り出したことにある。例えば、吉川英治『三国志』は登場人物の容姿だけではなく、人が持つ風雅情趣を描き出した。北方謙三『三国志』の人物に関する心理描写が細かく、その分登場人物にたっぷり感情移入してしまう。陳舜臣『秘本三国志』は推理力を働かせながら物語の筋の再構築を行った。このように、日本の改作は登場人物の形作りに限らず、歴史事件の経緯まで再構築し、十四世紀初頭に完成されたと見られている『三国志演義』に新しい生命をあたえて現代に甦えらせたのである。

## 1、作者の思いを取り入れた物語

日本の改作は単なる歴史小説ではない。周知のように、『三国志演義』は、中国の明代に書かれた、後漢末・三国時代（魏、蜀、呉）を舞台とする歴史小説である。日本の作者は自らの思いを小説に取り込むことで、読者に幾つかの新しい物語を呈する。曹操と諸葛亮を主人公とする吉川英治『三国志』では、まるで長編叙事詩を奏でるようだ。血の滾る男たちに惚れ込む北方謙三『三国志』では、夢を追い求める図絵を描き出した。平和への強烈な思いをあらわした陳舜臣『秘本三国志』では、宗教の慈悲を貫く物語を語った。このように、数多く日本版の『三国志』は中国の『三国志演義』の発展線上に位置するものでもあり、中国版『三国志演義』に新しい生命を与え、現代に甦らせた作品と言えよう。

## 2、諸葛亮が死んで終わるパターン

『三国志演義』は、全百二十回で、魏・蜀・呉三国が晋に統一されるまでが描かれている。これに対して、近代において日本人によって書かれた小説は大抵諸葛亮の死で終わる。その理由としては、諸葛亮が死んだ後、主人公らしき人物は存在せず、物語として成立し難いだけでなく、著作者の独自の思いも作品のなかに垣間見れる。例えば、吉川英治『三国志』は諸葛亮の死以後、創作の原動力を失い、物語も甚だ興味に劣るために省略した。北方謙三『三国志』では、三国時代において夢を追い求める最後のカリスマが、諸葛亮であると主張し、彼の死を物語の完結とする。陳舜臣『秘本三国志』の軸となる曲調は、平和を希うところである。諸葛亮の死後、三国鼎立の局面が必ず破られて、天下は再び動乱の世に戻る。したがって、陳舜臣の『秘本三国志』も、諸葛亮の死を以て幕を閉じた。



### 3、心理描写の重視

『三国志演義』は時代の要求に答えて、歴史や社会的な角度から主要人物を描写した。それに対して、日本の改作作品の注目すべきところは劇的場面と、戦争の衝突だけではない。それらがもつとも力を入れたのは主要人物の精神的な葛藤、気分の変化と言葉の運用である。日本の改作は登場人物一人一人の心情の揺れ動き、言葉の言い回し、が丁寧に描かれており、単なる講談を語る感じではなく、現代小説に近い形に生まれ変わった。そして、登場人物の心理と言語を描くことにより、彼らの精神的世界を探求することができ、以前知らなかった一面を見せている。

### 4、怪力乱神を語らず

日本の改作のもう一つの特徴は、『三国志演義』に比べて「怪力乱神」を語ることが非常に少ない点である。例えば、孫策の病床をおびやかす于吉仙人や、曹操を悩ます左慈ら、すべて亡霊の暗躍は、病人の幻覚によるものという解釈がなされている。関羽が死後、関平・周倉を従えて、玉泉山の普静のもとに亡霊を現すはなしなども、「彼の武徳と民望が、それを深く惜しみ嘆く庶民の口ぐちに醸されて、いつか神秘を加え説話をつくり、それが巻にかたられるのであろう」<sup>426</sup>という見方をとっている。赤壁の戦いにおいて、諸葛亮は東風を読んで、勝利を収めた「借東風」というエピソードが有名である。しかし、七星壇で行われる道術には、あまりリアリティーがない。改作には、「風を呼ぶ」から「風を読む」と書き直し、諸葛亮の超能力は気候変動を理解する基礎となる気象学の知識であると強調した。以上のように、日本の改作は小説中の怪力乱神を削除し、小説をよりリアルにし、日本の読者に受け入れやすくしたことは理解に難くない。

## 二、研究成果

著者は博士後期課程において、『三国志演義』に関する研究を続けながら積極的に学会に参加してきた。著者の修士論文に基づいたうえで、同研究をより深く掘り下げ、論文「日中における『三国志演義』の「三絶」評価について」を執筆し、平成27年5月17日澳門大学にて開催された「東亜漢学研討会」で口頭発表を行い、同席の識者より肯定的な意見を頂いた。とりわけ、陝西理工学院の王建科教授より高い評価をいただき、同論文をもとに一万字の中国語論文（「日本当代中国文学研究者对《三国演义》“三绝”的评价」日本近

<sup>426</sup> 吉川英治、『三国志』七、講談社、1989年4月11日、p.114。

代における『三国志演義』の人物評価について)に翻訳。陝西理工学院に投稿し、陝西理工学院学報(125期)に掲載された。

その後は日本で改作された『三国志』の精読作業を進める。それぞれの版本における描写の差異を比較し、異なる人物像や時代の変遷が人物像に与えた影響等を研究目標として、「日本における『三国志演義』の改作の研究」という課題を設定した。吉川英治の『三国志』を精読し、その中で見える曹操、関羽、諸葛亮の人物像と、中国において権威とされている毛宗崗本『三国志演義』のそれとの差異を明らかにした。その成果として、論文「吉川英治『三国志』における「三絶」の人物像について」を完成させ、2016年2月京都女子大学で開催された「東亜漢学と21世紀ルネサンス」において口頭発表を行った。同論文は後に出版された学会の論文集に収録された。同論文の発表は台湾淡江大学の周彦文教授より高い評価を得た。さらに、吉川英治『三国志』の中国語への翻訳は、今後中国の「三国志」学界を大いに裨益するところがあるというご指摘を頂いた。

### 三、今後の課題

いずれの学会も多くの先生や先学の方々と出会うことができ、学内外においても多くの先生方の御教示を得た。『三国志演義』に関する貴重なご指針を示して頂いたことで、私は今後の研究の方向性を見出すことができた。

研究が進むにつれて、『三国志演義』の改作に関する研究の未熟なところが目につくようになった。日本の改作は『三国志演義』にある120回の章の構成を切り捨て、自ら新しい章のタイトルを付け加えた。これらの再構築された各章のタイトルについて、作者はなぜこのように名付けるか、そしてどのような考えが含まれているのか、という、点に関してより深い考察が必要と思われる。

そして、日本版のもう一つの特徴として、オリジナルな登場人物が加えられている点が挙げられる。例えば、吉川英治『三国志』には、あの誇り高く、厳しくかつ優しい母親像を作り上げた。青年劉備と一時関係をもつ芙蓉娘も吉川英治の創造によるものである。北方謙三『三国志』には、爰京は曹操の侍医であった華佗の弟子として登場し、医術を磨くために各地を放浪した。ストーリー後期における狂言回しの役回りで、彼が山中に住む馬超親子に諸葛亮の死を伝えるところで物語は終わっている。陳舜臣『秘本三国志』の少容はなお物語の主人公となり、三国時代における群雄を巡り、様々な点から考察した。そのため、各改作の中に登場する独創的な人物の主要人物との関係及び物語進行中の役割も、

研究課題の一つとして、より深く考察する必要があると思います。

また、今後研究の一つとして、改作のほかにも『三国志演義』に関する数多くの翻訳が注目されているが、村上知行、小川環樹、井波律子らの訳本の異同およびそれぞれの特色を究明に焦点を当て、詳しく考証したいと考える。

最後に、「三絶」の人物像に関する研究のほかにも、書籍や版本についての研究も多く見られる。日本の『三国志演義』に関する研究の一環として、『三国志演義』はいつ日本へ伝来したのか、そして、その後の出版事業はいかなるものなのか。さらに、多様な版本は、それぞれどのような特徴をもっているのかなど、日本における『三国志演義』の受容史をより詳しく検討することも非常に意義があると思われる。以上を今後の課題として、さらに研究を進めていきたい。

## 参考文献

序章：

雑喉潤『三国志と日本人』 講談社 2002年12月

罗贯中 著 毛宗岗 评订 『三国演義』上 齐鲁书社 1991年1月

第一章：

久保天随 『三国志演義』 隆文館 1906年12月

湖南文山 『通俗三国志』上 卷之十 早稻田大学出版社 1911年5月

吉川英治 『三国志』全卷 講談社 1989年4月

内藤湖南 『内藤湖南全集』第一卷 筑摩書房 1970年9月

- 雑喉潤 『三国志と日本人』 講談社 2002年12月  
 尾崎秀樹 『伝記 吉川英治』 講談社 1974年9月  
 金文京 『三国志演義の世界【増補版】』 東京書店 2010年5月  
 渡辺義浩 『三国志 演義から正史、そして史実へ』 中央公論新社 2011年3月  
 魯迅著 中島長文訳 『中国小説史略』 平凡社東洋文庫 1997年6月  
 陳寿 撰 裴松之 注 『三国志』蜀書 新華書局 1959年12月  
 羅貫中 著 毛宗崗 評訂 『三国演義』上下 齊魯書社 1991年1月  
 邱岭 吳芳齡 『三国演义在日本』 宁夏人民出版社 2006年4月
- 第二章：
- 北方謙三 『三国志』全巻 ハルキ文庫 2001年6月  
 北方謙三 『三国志の英傑たち』 ハルキ文庫 2006年4月  
 陳寿 撰 裴松之 注 『三国志』蜀書 新華書局 1959年12月  
 羅貫中 著 毛宗崗 評訂 『三国演義』上下 齊魯書社 1991年1月
- 第三章：
- 陳舜臣 『秘本三国志』全巻 中央公論新社 2009年3月  
 陳寿 撰 裴松之 注 『三国志』蜀書 新華書局 1959年12月  
 羅貫中 著 毛宗崗 評訂 『三国演義』上下 齊魯書社 1991年1月
- 第四章：
- 金文京 『三国志演義の世界【増補版】』 東京書店 2010年5月  
 渡辺義浩 『三国志 演義から正史、そして史実へ』 中央公論新社 2011年3月  
 渡辺義浩 『関羽 神になった「三国志」の英雄』 筑摩書房 2011年10月  
 渡辺義浩 『「三国志」の政治と思想』 講談社 2012年6月  
 井波律子 『三国志演義』 岩波書店 1994年8月  
 小川環樹 『中国小説史の研究』 岩波書店 1968年11月  
 中川論 『「三国志演義」版本の研究』 汲古書院 1998年12月  
 沈伯俊 「再论曹操形象」 中华文化论坛 2007年3月  
 何文 「从『三国志』到『三国志演义』曹操人物形象流变研究」 西北大学 2007年6月

- 李凭 「曹操形象的变化」 安徽史学 2011年3月
- 王作宾 「浅说『三国志演义』中曹操形象的二重性」 科教文汇 2008年5月
- 沈伯俊 「民族文化孕育的忠义英雄-论关羽形象」 西南交通大学学报 2005年7月
- 刘嗨燕 「关羽形象与关羽崇拜的演变史论」 福建师范大学 2002年5月
- 张真 「『三国志演义』与『三国志』中关羽形象之比较」 许昌学院学报 2001年
- 沈伯俊 「诸葛亮形象三辩」 明清小说研究 2007年
- 袁思强 「论三国志演义中的诸葛亮形象」 文学教育 2007年9月
- 宁珊 「多智而近妖-论『三国志演义』中诸葛亮形象的神仙化」 网络财富·理论探讨 2009年2月
- 刘大印 「从『三国志』到『三国志演义』诸葛亮形象流变研究」 山东师范大学 2012年8月

終章：

- 権田萬治 『趣味としての殺人 日本推理評論集・実技篇』 蝸牛社 1980年8月
- 吉川幸次郎 『吉川幸次郎全集』第十卷 筑摩書房 1970年10月
- 竹内好 『国民文学論』 東京大学出版会 1954年1月
- 吉川英治 『三国志』一 講談社 1989年4月
- 吉川英治 『三国志』七 講談社 1989年4月
- 吉川英治 『三国志』八 講談社 1989年4月
- 北方謙三 『三国志』一 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』三 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』四 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』六 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』七 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』八 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』九 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志』十三 ハルキ文庫 2001年6月
- 北方謙三 『三国志の英傑たち』 ハルキ文庫 2006年4月
- 北方謙三 『三国志読本』 ハルキ文庫 2002年6月
- 陳舜臣 『秘本三国志』一 中央公論新社 2009年3月

陳舜臣 『諸葛孔明』下 中公文庫 1993年11月

羅貫中 著 毛宗崗 評訂 『三國演義』上 齊魯書社 1991年1月

陳舜臣 『秘本三國志』全卷 中央公論新社 2009年3月